
~ 美喰紳士 ~

オワタ式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～美喰紳士～

【Nコード】

N0785F

【作者名】

オワタ式

【あらすじ】

自ら考案する殺人遊戯“禁じられた遊び”を世界中で楽しむ芸術的殺人鬼にして、12人の悪魔の一人に名を連ねる魔人の知られざる誕生秘話。なぜ、彼は殺人鬼へと変貌したのか。運命さえも、彼の舌の上で踊るのか。そして現れる怪傑盗賊。彼の誕生は、果たして世界が企てた宿命だったのか。

……プロローグ……（前書き）

駄文で恐縮ですが、暇潰しにご賞味ください。

……プロローグ……

ある人殺しの話をしてあげよう。

彼が生まれてしまったのは、今から1200年ほど前　　西暦
で言えば9世紀に当たる年である。

この時代、日本では時の弘法大師“空海”が真言宗を興し、その遥か彼方のイングランドでは、当時七つに分裂していた王国が、互いを統べるための戦争が起きていた。

彼が目覚めたのは、その、血と死に塗れた戦争の最中だった。

当時のイングランドの勢力図は、中部に圧倒的な勢力を誇る“マ
ーシア王国”を筆頭に、その周囲を六つの小国が取り囲むようにし
て治まっていた。

簡単に言えば、実質的なイングランドの支配者は、このマーシア
王国だと言ってもいい。

しかし、マーシア王国のオフア王に国外追放されたエグバートが、
フランク王国（後のフランス）のカール大帝の庇護を受け、オフア
王の死後に七王国の一つ“ウェセックス王国”の王位に就いたこと
で戦争の火種は一気に点火することとなる。

エグバートは、自らをウェセックス王セルディックの末裔と称し、
マーシア王国のオフア王に允許させようとしていた。

だが、オフア王はそれを認めなかったため、エグバートは国外追
放されてカール大帝の庇護を受けるまでに陥ったのである。

そのオフア王が死んだ好機を、彼が見逃すはずがなかった。

エグバートはウェセックス王国の王位に就き、825年、最大勢

力を誇るマーシア王国と対立する。

そしてこの時。

後に、12人の魔人の一人に名を連ねる最悪の殺人鬼が、その産声を上げたのだった。

……プロローグ……（後書き）

味見はいかがでしたでしょうか。

更新は不定期になるとありますが、できるだけ早くしよつと思つています。

どうか長い目で、温かく見守ってやってください。

第一話　く宣戦布告く（前書き）

ある程度は史実になぞらえているつもりですが、設定上の不手際や間違いなどがあれば、各話を挟んで説明させていただきますので、どんどん指摘してください。

第一話　～宣戦布告～

その日、ウエセックス王国の首都“ウィンチエスター”では、国王エグバートの50回目の誕生日を祝うため、盛大な祭が行われていた。

誕生祭を大々的に祝うのは、何も王を随喜させるばかりではない。

そもそも七王国時代というが、正確には100以上の国家が乱立する群雄割拠だった。

ただし、それら一つ一つが独立しているのではなく、戦争や経済あるいは結縁上の関係から、支配する側と隷属する側とに分かれていたにすぎない。

七王国とは、そうした国家の中でも、最も代表視された勢力なのである。

この事実、そのまま互いを牽制する隣国に対する“自分たちの国はまだまだ充分な余力があるぞ”という姿勢を印象付けたい思惑が、競い合うように漂っていることを浮き彫りとしている。

なぜならば、自国の国王の誕生日を祝うだけの余力がない国は、そのまま現在の経済状況を隣国に露呈することになるからだ。

あの国は誕生祭が例年より控え目だった。もしや、経済が国庫を圧迫してはいまいか。

あの国は誕生祭をしなかった。民の生活も穏やかではない。外面

は裕福に見えても、内情は瀕死であつたか。

ならば。

こうした行事の一つにも、各国の状況を推し量る材料となつていく時代である。

その中でも特に気の抜けぬ誕生日祭に、例年以上に盛大に、しかも国王の演説まで謳われるとあつては、今年のウエセックス王国もやはり国庫は充実しているのだと諦めていた国が多かつたのも、無理からぬことだつた。

あるいは、それこそが窮鼠であるのだと考えた国もあつた。

例年よりも豪勢な祭には、大なり小なり必ず意図がある。ウエセックス王国の財政が苦境にあるからこそ、誕生日祭はあえて金をかけ、隣国の鋭気を挫く意図があるのではないかと。

しかし、事態は彼らの予想を遙かに上回つていた。

ウエセックス王国の国王が描く青写真は、彼らの希望を根本から覆す内容であつたのだ。

時刻は昼の二時を回る。

この時間に行われる予定である、例年になく国王の演説は、晴れて節目となる50歳の誕生日を迎えたからだと誰もが思つて疑わなかつたし、事実、半分はそうだつた。

首都ウィンチェスターに構えた城の門前。

大広場に集まった群衆を前に、彼 ウエセックス王国国王、エグバートが現れた。その雄大な背中を、彼は幾度となく見守り続けてきた。

清々しい空と眼下の城下町を、豁然と一望できるバルコニーに立つ一人の男。

いつものように朱色のマントを翻し、下意の喝采を一身に浴びながら、男は先ほどまで徹夜明けの雑務に追われていたとは思えぬほど快活な笑顔で手を振っている。

男 エグバート王の背中、蓋世の氣力に満ちた威風を誇らしげに見つめながら、彼は氣配なく近付いてきた宮廷魔術士長に振り返ることなく声をかけた。

「コーンウォールの戦況はいかがですか」

「お主が率いた近衛騎士団が、ウェアールどもの前線を突破してくれたおかげで、万事順調じゃ」

言いながら、囁れた声の主は足音一つ立てずに彼の隣りへと肩を並べた。

「何より、あの“蛇”が下賤なヴァイキングどもの大将を暗殺せしめたことが大きい。

南方の水軍が壊走した際にコーンウォールに強襲をかけ、本陣はすでに瓦解しておる。

大勝の報告も時間の問題じゃろって」

ウェセックス王国は、ブリテンの中でも最南部にその勢力を伸ばしていた。

特に、ウェセックス王国の西に勢力を構えるドウムニア王国コーンウォールとの軋轢は深く、現在では数年前から南部全域に出没していたヴァイキングと結託し、徹底抗戦の膠着状態に陥っていたのである。

七王国時代のブリテンでは、大きく二つの人種に分けることができる。

一つは、前ローマ時代よりブリテンに定住していたブリトン人。

そしてもう一つが、5世紀ごろにブリテン島に侵入したアングロ・サクソン人である。

ブリテンに渡ってきたアングロ・サクソン人は、先住民であったブリトン人を支配し、各地に小王国を築いていく。これが後の英国の礎となり、彼らの言葉が英語の基礎となるのだが、逆に土地を追われたブリトン人は辺境に追い詰められる結果となる。

中には降伏するブリトン人もいたが、勿論ながらドウムニアのように抵抗する者もいる。

アングロ・サクソン人は、そうした抵抗するブリトン人のことを“ウェアール（隷属者）”と呼んでいた。

ちなみに、その言葉がやがて“ウェールズ”の語源となるのだが、それはまた、別の話である。「そうか」。ならば、これで後方の憂いは消えたのだな。…我が主も、さぞお喜びになるだろう」

言葉とは裏腹に、彼の表情がわずかな翳りを帯びていることに宮

廷魔術士長は気付く。

だが、それについて老魔術士は、あえて深く言及しない。

このブリテン島でも三人しかいない“聖騎士”の称号を持つ彼スレインが、あまり好戦的な性格ではないことを知っているからであり、同時に戦場で散った同胞たちの死が、彼の心に哀悼の嘆きをもたらしているからだった。

宮廷魔術士長イングラムは、目の前で演説を始めた国王を見やる。

「今日、私は晴れて50回目の誕生日を迎えた！

こうして皆の前に立てるのも、私を慕ってくれている仲間と民に支えられているからであり、この場を借りて改めて礼を言いたい！

ありがとう！」

バルコニーの手摺に両手をつき、深く長く頭を垂れる国王の姿に、大広場はしんと静まり返った。

皆が、片言も聞き漏らすまいとして耳を傾けている。

「皆が祝い、皆が笑顔で迎えてくれたことに今、私は心から感謝している……！」

オファに追われ、一時はカール大帝の下へ亡命するまでに至ったこの身を、諸君らは温く歓迎してくれたのだ！

その私が王になった！

オファの傀儡だった先王ベルトリックは神の裁きによって地獄に墜ち、彼の子息を越えた私の即位は、単に、諸君らの民意である而今まさに実感しているところである！」

「“蛇”、ただいま帰城いたしました」

かけられた背後の声に二人が振り返ると、そこには黒衣の少年が略式に跪いていた。

身体の線は細いが、その実、贅肉を淘汰した筋肉を潜める体である。

顔立ちも、陽の下にあつては異性が視線をやるうほど整い、鮮やかな影が輪郭を際立たせて、なお美しい。

その、自らを“蛇”と名乗る少年に、直属の上司たるイングラムが口を開いた。

「蛇か。此度の任務、真に大義であつた。…して、戦況はどうか」

「ハッ。コーンウォールにおける我が軍は昨夜、ヴァイキング壊走に連動した強襲作戦を展開し、敵ドウムニア王国軍を撃破。

ならびに、ドウムニア王は我が軍の和平協定受諾を名言し、我が王国に対する無条件の全面協力を確約いたしました」

それは、事実上の降伏勧告であつた。だが、さしものドウムニア王国も自軍の総力を五分の一にまで減衰させられては、一溜まりもないというものだろう。

彼らに残された戦力は、王都守備部隊のみなのだ。

ここで降伏し、民の命を守り抜いた国王の判断は、敵ながら称賛に値する英断であると言ふべきだった。

スレインとイングラムは互いに顔を見合わせ、聖騎士は王の下へ行き、老魔術士長は蛇に向き直った。

「スレインよ。今回のお前の働きは、我らが王とこの国に多大な貢献をもたらした。」

今はしばし羽を休め、次なる任務に向けて休息を取るがいい。

そなたの姉も、お前に会いたがっておるのだからな」

「ハッ。 イングラム様、ありがとうございます」

床に視線を伏せたまま、しかしどこか喜々とした蛇の返答に、イングラムは鷹揚にして頷いた。

「お前の働きに、私も鼻が高いというもの。」

だが、次の会戦はそう遠くない。いつでも動けるよう、しっかりと準備を整えておけ」

「ハッ。…では、失礼いたします」

敬礼した少年は、そのまま通路を引き返して角を曲がる。

イングラムがその背中を見届けると、背後の声が一際、大きくなった。

「民よ！ 我が民よ！

たった今、我が下に神の意思とも言うべき天啓が届いた！

かねてより膠着していたドウムニア王国軍がついに敗退し、我らが軍門に下ったという報せである！」

イングラムは、王への報告を終えて戻ってきた聖騎士スレインに向き直った。

「ギリギリではあったが全ては予定通り、か」

スレインは頷いた。

「そして、ここからが本当の戦いとなる。中部のマーシア王国を倒さない限り、ブリテンに平和は訪れない」

「正しくは、マーシアの王宮に棲まう怪物をじゃがな。

…まったく、我が王も偉く高い理想を掲げてくれたものよ」

いつも綽々とした態度で馴染むイングラムの珍しく弱気な発言に、スレインは苦笑した。

「しかも、あの国には、聖騎士最強の“剣聖”までいる始末。お主とワシでは、ちと荷が重いわ」

王の演説が佳境に入る。それに気付いた二人は、どちらからともなくエグバート王の背中に視線を向けた。

「しかし、ブリテンはまだ戦争の闇に包まれ、ヴァイキングの略奪を招いている！

それは、罪深い過ちである！

我々は、戦争の愚かしさを全ての人に教え、語り継いでいかねばならない！」「陛下の理想は素晴らしい」

スレインがそう呟く夢物語は、しかし、自らも内に秘めていた悲願であった。

「平和な世界のため、その実現に向けて動き始めた王のため、私はいかなる弊害をも切り裂いて行かねばならぬ。

たとえばそれが…、かつての恩師であろうとも」

その確然たる覚悟に敬意を表し、イングラムは鼻を鳴らした。

「フン、ワシも端から覚悟の上じゃ。

あの魔人を倒す代償に老いばれの命一つとは、まさしく破格。

聖騎士のお主と我らが王が健在する今じゃからこそ、…今しかできぬからこそ動かねばなるまいて」

「イングラム殿…」

王が、高らかに宣言する。

「我々は、この数百年、霸王ツェアウリン以前より対立と覇権の推移を繰り返してきた！

いつ果てるやもしれぬ戦いに人々は疲弊し、豊かな緑は焼き払われた！

父を失い、母を失い、兄弟を失い、子を失い続けた、この数百年…！

その悲しみも怒りも、我々は決して忘れてはならない！

将来の我らが子らに、決して禍根を残してはならないのである！

ゆえに私は宣言する！

争いの歴史に終止符を打つため、人々が真の平和を取り戻すため、今わたしはここに、その諸悪の根源を匿うかの国、マーシア王国に對し、宣戦布告をする！」

眼下に集う民が一斉に沸騰した。

歓声と喝采が宙に轟いて熱意を流す。

王は満面の笑みを浮かべて、人々に手を降り続けている。

「陛下は、この永き戦乱のブリテンで画時代的な統一を果たそうと
している。」

あの方を、あの方の理想を、失うわけにはいかないのだ」

スレインの言葉に耳を傾けながら、イングラムは王の背を見続
けていた。

後に、アングロ・サクソン七王国の覇権を握る王の伝説が始ま
つたこの瞬間、闇が孕むその胎動の中で、密かなる悪魔は健やかに成
長していた。

しかし。

それに気付いた者は、誰一人としていなかった…。

第一話　く宣戦布告く（後書き）

更新はできる限り早くしたいと思っています。ここまで読んでいただいた方々を落胆させぬよう、精一杯がんばりますので、よろしくお願いします。

謝罪（前書き）

ここでは、本編についての誤字訂正や、設定の整理をする章です。

謝罪

第一話の四ページ目で、王宮魔術士長のイングラムが蛇に話す際、

「スレインよ」

となっていますが、正しくは、

「蛇よ」

の間違いです。

混乱させてしまったことを、深くお詫び申し上げます。

なお、この話では史実を基に、様々な設定を組み込んでいます。

魔術や聖騎士といった設定はオリジナルであり、統一した世界観の下で創作されています。

ただ、こちらの説明が分かりにくかったり、あるいはここが分からないといった声があれば、本編に挟んだ特別章で随時、ご説明させていただきますので、ご容赦ください。

中でも、この物語では魔術なるものが登場するため、そのご説明は充分ではないかもしれません。

本編をお楽しみしていただけよう、若輩者ながら努力いたしますので、どうかよろしく願います。また、とりあえず、今後の物語を分かりやすくするため、人物の名を整理させていただきます

す。

国王エグバート

本編における主役国の現国王。彼の前王はベルトリックである。

聖騎士スレイン

国王直属の第一近衛騎士団を率いる団長であり、ブリテンでも三人しかいない“聖騎士”の称号を持つ騎士の一人。年齢25歳。国王に絶対的な忠誠を誓っている。

王宮魔術士長イングラム

国王直属の第一近衛魔導団を率いる団長。歳は80だが、見た目は50代。しかし、年々、年老いて弱まる魔力に嘆いている。

蛇

イングラム直属の暗殺者の一人。歳の頃、まだ15歳の少年である。

謝罪（後書き）

それでは引き続き、本編をお楽しみください。

第二話　く姉と弟と鼠く

イングラムへの報告も終えた蛇が向かうのは、この世でただ一人の肉親となった姉が休む小部屋だった。

国王エグバートが居住する白亜の城“フィダックス城”の二階。

その一廊、奥行きのある通路を歩いた先に、姉が待つ部屋の扉がある。

しかし、その手前に見慣れた人影の姿を認めた時、蛇は任務のために緊張していた表情をようやくほぐすことができた。

扉の前にいる少年もまた、蛇に気付いたようだった。

微笑みを浮かべ、軽やかに手を上げる。

「よお。久しぶりだな、蛇。

…っしかし、なんだ。お前がこつちに戻ってきたってことは、ドウムニアとはもう決着がついたのか」

彼の名はグレッグ。

蛇と同じく、イングラム直属の暗殺者の一人であり、同年ということもあつて最も仲の良い仲間だった。

「うん、つい半日ほど前かな。

君と僕とでヴァイキングの首領を暗殺してから一時間後、第三騎士団を筆頭にして軍が総攻撃を仕掛けたろ？

元々、ここ数年でドウムニアはヴァイキングと同盟するまでに疲弊してる。

そのヴァイキングが撤退したんだ。

ドウムニアには、もう降伏の道しか残されていなかったんだよ」

首領が休むヴァイキング船に乗り込む際、蛇はグレッグとともに忍び込んでいた。

グレッグが敵兵の注意を引きつける騒ぎに乗じて、蛇が首領を暗殺。

その後、グレッグは騎士団に首尾を報告し王都へ帰還、蛇はドウムニア王国首都へと潜入したのである。

「そうか。じゃあ、調印は済んだんだな。

…となると、王女サマも連れてきたんだよね？」

蛇は小さく頷いた。

「僕が護衛役を任されたからね。そう手間はかからなかったけど」

和平協定は、ウエセックス王国の一方的に有利な条件で調印が成された。

特に、ドウムニアは反逆を封じる手段として王の一人娘がウエセックス王国への在留を強制されており、これによってドウムニア王国は、血筋の存続と引き換えにウエセックス王国の隷属国として平定されたのである。

グレッグはにやにやと意地悪く笑いながら、よからぬ企み顔になった。

「俺、会いに行ってみようかな。

ドウムニアのお姫様といえば、すっげえ可愛いつて評判だったし

40...

「ダメだよ、グレッグ。」

王女様はこのあと、国王様と謁見する予定なんだ。

僕たちが行っても取り合ってくれないと思うよ」「ちえッ。仕方ないな。

じゃあ、俺はこれから任務に行くから、また会おうぜ」

蛇は眉を顰めた。

「新しい任務かい？」

「ああ、たぶんな。」

イングラム様に呼び出されてるから、きっとマーシアとの会戦に向けた任務だろうって想像くらい、俺にだっつつくさ」

「ああ、なるほど。」

じゃあ、頑張ってね、鼠」

グレッグは、化石したが如く顔を強張らせると、次の瞬間にはひどく顔を歪めて怒り出した。

「て、
テメエ……。」

そのコードネームを俺の前で言うんじゃねええええええ!!」

グレッグは蛇に飛び掛かり、両頬を強く引っ張って弄ぶ。

蛇が解放されたのは、グレッグがイングラムに指定された時間
際だったが、その時のグレッグの表情には、すでに緊張の色は消え
去っていた。

「じゃあな」

「うん、またね」

グレッグが去った後、蛇は部屋の扉に手を掛け、静かに開けた。

姉に会うのは久しぶりだった。

前に会ったのが、ヴァイキング攻略の任務につく前であるため、半月ほど空いていることになる。

あれから小康を保っていると聞くと、やはり、部屋から出るのは禁じられている様子だった。

部屋に入ると、仄かに甘い匂いが鼻腔を掠めた。

花の匂い。

清潔感に縛り付けられた白の部屋の殺風景な様子に一つ、申し訳程度に備えられた幽けしき生命の香り。

奇しくも、それは姉を象徴しているかのようにささやかだった。

蛇は、潜入任務よりも気を配った足の運びで音を消し、窓際ちかくに横臥した寝台のそばへ歩み寄る。

そこに眠っているのは、一人の少女だった。

歳は蛇と同じだろうか。ひどく、病的なまでに肌の白い少女である。まるで、ずっと陽の光を避けて家居していたように輝く雪色だ。

った。

だが、髪はすべて抜け落ちている。そのため、外貌を気にする歳の頃を考慮して、常に帽子を被っていた。

もつとも、それを差し引いても少女は美しかった。

繊細な工芸品のように、触れれば碎けてしまいそうな脆い美。永遠には保てぬ、儚いがゆえの絶美を体現した少女であった。

少女の名はルナ。

蛇とは双子の姉であり、生まれてより不治の病に冒された、蛇が唯一心許せる家族である。

「ただいま、姉さん……」

蛇は、依然として眠ったままの姉の頬に軽く手を当て、白い額に唇を当てた。「……ん、んう……」

唇が額に触れた瞬間、少女は瞼を震わせて目覚めようとしていた。だが、伏せられた睫毛は持ち上がることなく、室内の来訪者の気配を察して、少しばかり首を巡らせるのみ。

心なしか、その表情は緊張している様子だった。

蛇は、姉に不安を抱かせぬように優しく呟いた。

「ごめん、姉さん。起こしてしまって。

僕だよ。…ヴィクターだよ」

ヴィクターと名乗った瞬間、姉の警戒はすぐに解けたようだった。

顔を綻ばせ、左頬に触れる蛇の右手に、そつと自らの左手をそえる。

「ヴィクター…？」

そつ、帰ってきてたのね。…お帰りなさい」

「うん…。ただいま、姉さん…」

ルナは身体を起こそうとしたが、無理をしてはいけなしとして、蛇がそれを制した。

「ダメだよ、姉さん。」

まだ安静にしていけないんだから、横になつてなくちゃ」
少女は申し訳なさそうに眉を顰め、閉じた視線を蛇に向けた。

「ごめんね、ヴィクター。お姉ちゃんが不甲斐ないばかりに、苦勞をかけて…」

「そんな…。僕は一度だつて、姉さんのことを負担に感じたことはないよ。」

僕たちは家族なんだ。唯一、生き残つた家族なんだから」

ルナとヴィクターの姉弟は、ブリテン島全土に広がっている数百年もの戦いの無力な犠牲者　　戦災孤児だつた。

二人の村は、ちょうどウェセックス王国とドウムニア王国とに挟まれた中間にあり、両者が激突した戦争に否応なく巻き込まれた形で壊滅したのである。

二人は当時、まだ右も左も分からぬ幼さだつた。

いつになく強張った表情で慌ただしく帰ってきた父の声。

それに応えて母は、二人を隠し戸に閉じ込め、息を潜めるように言ったことを覚えている。

当時から、姉はすでに不治の病に冒された盲目の身体であり、姉を守るのは自分しかいないとする使命感に突き動かされて、ヴィクターは母の言い付けを忠実に実行した。

外では、いつ終わるとも知れぬ激しい怒声と夥しい悲鳴が飛び交っていた。

二人が隠れていた家の扉が開いた音には、心臓が飛び出しそうなほど恐怖したものだ、結局、二人は正体不明の敵に見つかることなく生き延びたのである。

だが。

村は二人の幼い姉弟を残して全滅した。

治まった喧騒を見計らい、外の安全を祈りながら隠し戸を出たヴィクターの目に飛び込んだきたのは、変わり果てた村の姿だった。まんべんなく炎を纏う家と畑。

生理的嫌悪を撒き散らす、すえた臭い。

大地に横たわるのは、つい数十分ほど前まで、言葉を交わしていたはずの家族や隣人や友人たち。

濃く粘る赤黒い液体が地面にぬめり、村に充満する血生臭い死臭

と化してカラスを誘った。

そこはすでに死者の国だった。生ある者の気配はなく、邪悪なる者の爪痕だけを見せつけられる陰惨な惨殺空間。

その、無慈悲な悪魔の食卓に、二人は幸か不幸か生き延びたのである。

さらに幸運だったのは、村の被害を聞きつけて駆け付けたイングラムが、二人を引き取ってくれたことだった。

幼い姉弟はしばらくの間を孤児院で過ごし、やがて弟はイングラムを師とする暗殺者となり、姉は病に臥した身体を養うために城の小部屋を割り当てられたのである。

その恩は、ヴィクターにとって生涯、忘れえぬものであり、イングラムのためならば死も厭わぬ働きで奮迅できる。

直属の暗殺者の中でも最高峰を位置付けるコードネーム“蛇”をイングラムより頂いた時、少年は彼にそう言った。

そしてその思いは今でも変わらぬまま、こうして姉のそばで束の間の安らぎを享受することができるのだった。

だが、ヴィクターは、自分が暗殺者としてイングラムの下で暗躍していることを、あえて口に出していなかった。

元来より、優しい性格である。

もし自分が暗殺者として人を殺めていると知れば、その精神的衝撃は大きく、ともすれば、今まで辛うじて均衡を保ってきた身体が、

一息に負へと傾いてしまいかもしれないからだ。

家族を失った自分が、今度は名も知らぬ他人の家族を殺し続ける。それだけは、その事実だけは、決して姉に悟られてはならなかった。

「ありがとう、ヴィクター」

姉は、蕾が花開くような穏やかな声音で言った。

「でも、無理をしてはダメよ。
あなたまで身体を壊したら、私はお父様とお母様に合わせる顔がないわ」

ヴィクターは、なるべく心中を悟られぬように微笑む。

「大丈夫だよ、姉さん。」

僕には友達のグレッグもいるんだ。この前だって、仕事で

「

姉のそばにいられる時間だけが、少年を“弟”に戻してくれる。

架空の仕事場で起きた有りもしない笑い話に花を咲かせながら、蛇はその日を、姉のいる小部屋で過ごしたのだった。

第三話　～軍略会議～

国王誕生祭より二日後の朝。

ウェセックス王国首都ウィンチェスターに聳えるフィダックス城の三階に、石造りの部屋はあった。

手入れの行き届いた部屋には暖炉があり、鏡面のように磨かれたテーブルの上には、ブリテン島全域を描く地図が広げられている。

国王エグバートと、その忠臣である王宮魔術士長イングラムは、互いに向き合うように椅子に座り、目の前の地図に視線を向けていた。

どちらも貝のように口を閉ざし、真剣味を帯びた表情が無言の圧力となって会議室に満ちている。

張り詰めた緊張感は、あたかも、この会議室が戦場の真っ直中にある、本陣のよう。

その、息が詰まりそうなほど重苦しい沈黙は、王の言葉で切り裂かれた。

「マーシアを落とすため、先ずはフィッチ王国を落とすという貴公の作戦は理解した。

しかし、東の三国はどうする？

ベオルンウルフのように二面戦争を継続できるほど、我らの準備は潤沢ではないぞ」

現在のマーシア王国を統治しているのは、ベオルンウルフである。

彼は自らの名を刻んだコインを発行したことで知られているが、エグバートが注目したのは、そんな瑣末事ではない。

マーシアの情勢は、極めて不安定だ。

ブリトン人の勢力地域である西のウェールズと、東の七王国の一つであるイースト・アングリアとの二面戦争の対応に追われ、その内情は実に慌ただしい。

エグバートが宣戦布告を決意したのも、そうした背景があつてのことなのだが、それはウェセックス王国も危惧しなければならない問題点だった。

西のドウムニア王国を平定した今、憂いは北のマーシアと東の三国に絞られている。

ただし、マーシアは東西の二面戦争が足枷となっているため、エグバートが危険視しているのは東の三国にあった。

即ち。

七王国に数えられる三国である、ケント、エセックス、サセックス、この三つだ。

特に、隣接しているサセックスに背後から仕掛けられた場合、マーシアとの二面戦争に発展してしまう危険性がある。

マーシアとの戦争に全力を注ぎたいエグバートにとって、この難

問は払拭しなければならない心の澱であるのだった。

イングラムは王の不安を解くため、不器用ながら少し微笑んで見せた。

「王よ、ご安心を。」

現在、我が使いの者が三国に回り、不可侵条約を密約するために動いております。

中でも 「イングラムは直筆の条約文を書いた巻物を王に手渡した。」

エグバートが紐を解き、そこに書かれた文を目で追うのを確認すると、再び口を開く。

「サセックスは、我が国と同じく、南部海岸線より略奪行為を繰り返すヴァイキングどもの被害に四苦八苦しており、とても戦争どころでは御座いません。」

むしろ逆に、我らが不可侵を持ちかけたことで、奴等は晴れてヴァイキングどもへの対策に終始することが可能となります。

サセックスにとっても我らにとっても、これは利益ある密約と言えますでしょう」

別名ヴァイキング時代とも呼ばれる七王国時代、ブリテンの海域は軍事力の空白地帯だった。

その背景には、ブリテン海峡を交易路として押さえていたフリージア人が、勢力拡大を図ったフランク王国の侵攻によって滅ぼされたことに起因していた。

ちなみに、現在のフランク王国を統治しているのは、敬虔王ルイ

一世であり、カール大帝は十一年前に死去している。

イングラムの話を理解した王は頷き、巻物の紐を括り直した。

「さすがはイングラムよ。手回しが良いな」

「ハッ。有り難きお言葉で御座います、陛下」

「しかし、他の二国はどうだ？」

特にケント王国はマーシアに隷属しておるだろうから、そう容易くはないと思うが」

「ケント王国には、かのフランク王国よりも圧力をかけ、易々とは動けぬ按配にするのが得策かと。」

王はフランク王国との親交が深く、ブリテンを制覇した暁には友好国としての発展も見込みがあります。

かの国は、我らの提案を拒否する理由などないのです」

「では、エセックスはどうか」

「エセックスにつきましては、ブリテンの南北を分けるテムズ川の渡河点であるロンドンがあり、交通上、戦略的拠点としては申し分ありません。」

そのため、マーシアの脅威に怯えているのですが、我らがマーシアを攻略することでその憂いは消えるはず。

戦況次第では、同盟なる提案を、王みずからが会談を通じて持ちかけるのも奇策かと思われます」

「ふむ……」

エグバートはしばらくの間、しかめた思案顔になったが、やがて意を決したように頷いた。

「なるほど。つまり我々は、一貫してマーシア王国に専念できるということか」

「しかしながら、短期で決着を着けねば、他の国が軍備を整え、ヴァイキングの再来も考慮する必要があります」「……、一年だな。それ以上はマーシアが態勢を整え、我々もまた海岸線のヴァイキングに備えねばなるまい」

イングラムは、たまらず苦笑した。

「王は平然と無茶をおっしゃる。
数百年に及ぶブリテンの戦を、わずかたった一年で決着させるとは……」

くすくす、と乾いた笑い声を漏らす老魔術士長を真剣な面持ちで見つめながら、王は隔意のない心中を吐き出した。

「…あの日、お前の話を聞かされた時、我々にはもう、幾許の猶予も残されていないことに気付かされた。

…戦うしかなかるう。

誰かがやらねばならぬと言うのなら、我々が先陣をきること、皆が気付いてくれることを神に祈るだけだ」

イングラムは首を横に振った。

その表情は暗く、彼が楽天的な希望の祈りを初めから捨てていることが感じ取れた。

「無理でしような。」

私でさえ、気付いたのは偶然にすぎませぬ。

…恐るべきは、まさしくあの悪魔ですよ。

我々には、最初から神をも恐れぬあやつの所業を防ぐ術は持ちえなかったのですから。

我々ができることは、あやつを倒すこと。

それができねば、このブリテンは、文字通りの地獄に墜ちましようぞ」

王は深い溜息をついた。

「これほど真実が辛いと痛感したことはない。

…だが、嘆いていても始まらぬ。

我が息子のためにも、あの悪魔の計画を何としても止めねばならぬのだ」

イングラムは頷いた。

「そのための先駆けとして、現在、スレイン殿がフィッチ王国攻略に向けて第一・第二近衛騎士団を率いて出陣しております。

フィッチ王国はテムズ川を迂回する我々にとって、戦路上、絶对的に落とさねばならぬマーシア会戦の要。

必ずや、吉報をもたらしてくれるでしょう」

エグバートは怪訝そうに眉を顰めた。

「イングラムよ、スレインだけに任せておいて問題はないのか？

マーシアにはかの魔人に加えて、聖騎士最強の“剣聖”もある。

いかに同じ聖騎士とはいえ、どちらかと戦えば無事では済まぬのではないか？」

「いいえ、その点につきましては、どうかご安心ください。

魔人は王都から離れることは少なく、剣聖バルゼフォンも西部のウェールズ攻略に赴いているとか。

少なくとも、フィッチ王国戦で二人と戦うことはないでしょう」「
イングラムの手足とも言つべき暗殺者は、何も蛇や鼠ばかりではない。

特に、主要国に関しては、その内情を探らせるために絶えず地下に潜らせている。

今回の、マーシア王国の隷属国であるフィッチ王国攻略作戦を練る際は、とりわけ注意して二人の動向に気を配ったものだ。

ゆえに断言できる。

勿論、あの二人と相見える日はそう遠くないが、かといってそれは、今日明日の問題ではない。

「王よ」

不意に、イングラムは目を細めて呟いた。

「此度の戦が終われば、あなたは霸王となられますでしょう。
その時、我々はあなた様のおそばに仕えているかどうかは、分かりません。

しかし、これだけは言えます」

イングラムは、一拍分の時を置いて、言った。

「あなたの勇氣は、たとえ歴史に刻まれずとも、必ずやご子息に受け継がれ、ブリテンを守ることでしょう」

「イングラムよ。」

その言葉は、互いに生き残ってから、聞きたいのだが」

どちらからともなく、二人は苦笑した。

だが、イングラムの言葉は確実に王の胸の蟠りを払拭させ、脳裏の迷いの霧を振り払った。

ウェセックス王国はこの日、マーシア王国の領土に足を踏み入れ、フィッチ王国攻略に乗り出した。

聖騎士スレインを指揮官とする第一・第二近衛騎士団を主力としたウェセックス軍一万に対し、フィッチ王国軍は約二千の手勢である。

戦争とは、個人の力もさることながら、絶対的な物量も無視できない。

ゆえに、趨勢は早期に決着したかに思われたのだが、スレインは、ここで悪夢を垣間見ることとなる。

第四話　ゝ悪夢、来襲ゝ（前書き）

本当はフリガナなどを使えば読みやすいのですが……。
申し訳ありません。

第四話　ゝ悪夢、来襲ゝ

ウェセックス軍がマーシアに侵攻する際、最初に立ちはだかるのがテムズ川である。

テムズ川は、西部フィッチ王国首都グロスタシャーを源泉とし、そのまま東へ流れて、エセックス王国の首都ロンドンに辿り着く。

それゆえに、テムズ川はブリテンの南北を仕切る河川として、その進軍に関しては戦術上、特に慎重を期さねばならないのだった。

なぜならば。

通常、ウェセックス軍がテムズ川を渡るには、王都ウィンチェスターから真っ直ぐ北に進んだ先、ちょうどテムズ川中流に陣取る“ベンシングトン”という街を制圧するのが妥当である。

ここを制圧すれば、そのままテムズ川に沿って進むことで、西のフィッチ王国と東のエセックスを攻め入ることが可能となるし、何よりも補給線が無駄に伸ばすことなくマーシア王国に直進することができるからだ。

しかし、聖騎士率いるウェセックス王国軍はそのままテムズ川を西に迂回し、直接、フィッチ王国首都グロスタシャーへ電撃戦を仕掛けるため、精鋭部隊である第一・第二騎士団を密やかに進軍させていた。

これには、二つの意味があった。

一つは、エセックス王国への配慮である。

先の通り、テムズ川中流のベンシングトンを押さえれば、無駄に補給線を伸ばさずに進軍することができ、フィッチ王国への攻略も余裕をもって行うことができる。

しかしそれは同時に、東のエセックスに対しても武力的な牽制と受け取られ、不可侵を結ぶ上で、計らずも相手の警戒心を植え付けてしまう結果になりかねない怖れがあった。

となれば、他の二国もまた同様に調印に警戒し、話そのものが白紙となる可能性も出てくるのだ。

それはウエセックス軍にとって、マーシア攻略の根本が瓦解するほど致命的な悪手だった。

本来ならば、調印の報告を受けてから行すべきなのだろうが、そもそもマーシア打倒を疑問視する彼らが、そう容易く不可侵の調印を結ぶとは思えない。

マーシア攻略に対し、ウエセックス王国が本気で取り組んでいることを示すためには、あえてベンシングトン制圧を避けることで東三国の余計な警戒心を削ぎ、不可侵の調印を早期に結ばせる決意を暗に促すと同時に、敵勢力の一つを叩き潰す必要があったのである。そしてもう一つは、宣戦を布告したウエセックス軍に対し、マーシア王国が“魔人”と“剣聖”を伴って本格的に抵抗する前に、あの堅牢無比で知られるフィッチ王国を潰しておきたいという意図も込められていた。

フィッチ王国は、特に籠城戦に定評がある戦術で諸国に名を知ら

れた国だった。

そもそも、七世紀末の建国当初においては独立国として王号を有したのだが、エグバートを追放したオファの時代にはすでに従属状態と化しており、七王国にさえ列挙されぬ小国にまで落ちぶれていた。

現在でも立場は変わらないが、北にブリトン勢力のウェールズ、南に七王国の一つウェセックス王国など、強力な勢力に挟まれた彼らは、寡兵をもって大軍を迎え撃つ唯一の戦法である、籠城戦に知恵の全てを振り絞ったのである。

その分、攻城戦となれば、手勢の戦力としてはからきしだが、ひとたび防戦に徹すれば、文字通り鋼鉄の自然要塞と化して侵入者を拒絶する。

ウェセックス王国は、その防備が完全に整う前　即ち、フィッチ王国がまだ、ウェセックスの狙いがベンシングトンであるとする偽報に安堵し、油断している隙に制圧しようとしているのだった。

だが、いかに聖騎士とはいえ、この難攻不落の自然要塞を陥落せしめるのは、常套手段では難しいとする見方があった。

フィッチ王国首都グロスタシャーは、その外周のほとんどを大自然によって守られている。

北には、ボアと呼ぶ海嘯が発生することで有名な、ブリテン最長のセヴァーン川があるため、搦め手は初めから使えない。

かと思えば。

東は標高300以上の丘陵地帯コッツウォルズがあり。

さらに南には、ディーンの森と呼ばれる深い霧の迷森が広がっているため、騎馬団による突撃もできない。

最も有効的な方法は、歩兵による潜入任務であったが、それも城下町をぐるりと囲む城壁があつて地上からは難しい。

しかも、この城壁の穴たる門は、正面ただ一つしかないという徹底ぶりだ。

最初、エグバート王がイングラムのフィッチ王国攻略を提案した際、思わず頭を抱えたのも頷ける、まさしく自然要塞と呼ぶに相応しい関門であるのだった。

だが、ここを攻略しない限り、ウェセックス王国にはマーシアを撃つ術がない。

聖騎士率いるウェセックス軍は、多少の強行軍ではあつたが、電光石火で制圧せねばならなかった。フィッチ王国軍を束ねる“將軍”の地位にあるカインは、まだ人々が寝静まっているはずの深夜に目が覚めた。

首都グロスタシャーの中心部に聳え立つ城の二階に彼の執務室があるのだが、どうやらカインは、報告書やら近隣諸国の状況やらを整理している最中に、不覚にもそのまま眠りこけてしまったようだった。

しかし、彼の意識を現実に取り上げたのは、ごく自然的な覚醒の

招き手ではなかった。

「　　　いったい、何が起こつていると言つのだ…!?!?」

部屋の外から劈く、やかましい破壊音と響き渡る無数の悲鳴に、カインはただならぬ異変を嗅ぎ取り、低い呻き声を漏らした。

「ウエセックスか…?」

「　　　いや、奴らにしては早すぎる…」

カインは腰に剣を携えると、急いで執務室を出る。

通路に人の気配はなかったが、階下ではまだ、物々しい喧騒が繰り広げられていることを感じとることができた。

兵士たちの怒声。

住民たちの悲鳴。

そして聴く者に恐怖を植え付ける、正体不明の、巨大な獣じみた咆哮。

「　　　…なんだ?

　　　いったい、何が起きたというんだ…?」

混乱する思考を、強い精神力でなんとか整理する。

ウエセックス王エグバートが、マーシア王国に対し宣戦布告を突き付けたのが二日前。

そして間者の報告では、聖騎士スレイン率いる騎士団が、北のベ
ンシングトンを目指して王都を出たのが昨日だとしている。

仮に、それが偽りで、王都から直接こちらに攻め込む戦略だった
としても、昼夜兼行で馬を走らせたとして、着くのはせいぜい今日の
昼過ぎだ。

まだ半日も猶予があるこの深夜に、あたかも王都が戦場と化した
かのような騒ぎに陥るなど、決してありえぬはずであった。

「これは、いったい何事なのだ？」

不可解な状況の理解に苦しむ中、カインは、ようやく通路の曲が
り角から駆け付ける兵士の姿を認めた。

「カイン將軍！ よくぞご無事で…！」

兵士は息を切らせながらカインの前で略式に敬礼すると、すぐに
本題を切り出した。

「將軍！ ここは危険です、早くお逃げ下さい！」

「待て待て、いったい何をそんなに慌てているのだ？
いったい、ここで何が起きている？」

いつになく青褪めた顔を強張らせながら、早口に捲し立てる部下
をひとまず落ち着かせ、カインは現在の状況を説明しよう促した。
「王都は現在、大混乱に陥っています！」

突然の敵襲に防備の暇もなく門を破られ、街はすでに壊滅状態！
我々も全力を尽くしてはおりますが、このままでは…！」

カインは、思わず顔をしかめた。

やはり敵襲かと理解していながら、しかしありえぬとする思考の板挟みにあつて、頭はすでにきゅうきゅうとしているのだった。

「敵襲だと？」

バカな……！ まさか、ウエセックスがこれほどまでに早く攻めてきたとでも言うのか！？」

だが、それはあり得ない。

空を飛ぶというのなら話は別だが、それ以外の海路や陸路では、どんなに早くとも一日はかかるはずだからだ。

兵士は首を振り、声を荒げて言った。

「いいえ！ 奴等はウエセックス軍などではありません！

自分は……、自分はある……、あんなおぞましいバケモノを、見たことがありません！」

決して冗談などでない兵士の鬼気迫るように怯えた顔が、カインの思考にいいいよもって、己の理解を超越した“何か”が起きているのだと悟った。

だが、その“何か”をさらに聞き出そうとした時、今しがた兵士が現れた曲がり角から、今度は吠え立てる二匹の犬が現れたのである。

舌を垂らし、涎を撒き散らす犬は、しかしカイン達に明確な殺意

を抱いて全力で駆けてきた。

「う、うわぁッぁぁ！」

兵士は振り返りざま、慌てて剣を振りかぶったが遅かった。

犬は上段に振りかぶった兵士の、隙だらけとなった喉に噛み付き、しきりに首を振って致命的なダメージを与えていく。

悲鳴も出せなくなった兵士は薄れいく意識の中で力の限り犬を振り払おうとしたが、もう片割れの犬が股間に狙いを定め、男性器ごと噛み千切ってそれを吐き捨てた。

兵士は全身をびくんびくんと痙攣させて崩れ落ちる。

犬は、その亡骸を踏み付けながら、次の目標たるカインに向かって睨みを利かせた。

「…なるほど。」

確かに、このブリテンにはおらぬ、おぞましい畜生だな」

犬は、この闇夜から切り取ったように黒かった。

研ぎ澄まされた牙も、鋭利な爪も、全身さえも通路の明かりに照らされてくつきりと昏い。

大型犬ほどもある体格は、人を威圧するのに十分な迫力があり、ウウウ、と喉奥を鳴らせて威嚇する眼は、狩猟に長けた血の色をしてあまりに不吉だった。

それは、少なくとも、カインは知らぬ生物であつた。しかし、この程度で身を諒めるほど、カインは臆病者ではない。

さすがに聖騎士とまでは言えないが、小国とはいえ一国の軍を任された“將軍”の地位を戴く男である。

正体不明とはいえ、たかが犬ごときに遅れを取るほどヤワな鍛え方はしていなかった。

カインは相手の出方を窺いながら腰の剣を抜き、眼光に鋭さを宿らせる。

「お前たちの飼い主を聞き出したいが、畜生に語る舌はなかるう。我が剣を薄汚い獣の血で汚すのはいささか忍びないが…、部下の仇だ。」

早々に目の前から消えてもらうぞ…！」

先に仕掛けたのはカインだった。

地を這うように駆け、部下の屍に立つ獣を横一文字に斬り伏せる。

片割れの黒犬は仲間が倒されて一度だけ吠え、すかさず男に迫ろうとしたが、カインは横一閃の斬撃そのままの勢いで剣を投擲し、残った黒犬の口から喉を貫かせて絶命させた。

動物とは、攻撃となれば最高の身体能力を発揮するが、いざ防御となれば、驚くほど無能である。

カインは姿勢を正し、放った剣を抜いて、獣の血糊を振り払う。

その時、奇妙な現象がカインの目に飛び込んできた。

先ほど斬り伏せたはずの獣がいつの間にか影も形も消えて、いなくなってしまったのである。

それは、普通の生命体であればあり得ない現象だ。

「こいつら…、いったい…!？」

内心の動揺を抑え切れぬまま、階下で激しく響いていたはずの悲鳴や破壊が、何時しか途絶えていることに気付いた。

自分が行かねば、部下のみならず、街の住民や王さえも殺されてしまう。

カインは急いで通路を駆け抜け、階段を下りていく。

カインが辿り着いたのは、城の入口にあたる広間だった。

王の意向で絢爛に飾られた広間は、よくパーティーに利用されていたことを思い出す。

だが、その、きらびやかだったはずの広間は、その名残も破壊し尽くされて、豪華な面影を失っていた。

磨かれた床は夥しい数の兵士の死体で埋め尽され、血生臭い死臭が漂っている。

壁はいたる所がヒビ入り、階段の一部のくり抜かれた穴の中には、押し潰されたように花開くドス黒い血飛沫が見て取れた。

天井に吊るされた亡骸は頭をすっぱりと壁に埋めて力なく、まれに、頭部だけが激突していて脳漿が滴り落ちる。

“そこはすでに死者の国だった”

カインは、たまらず嘔吐した。これほどまでに……、これほどまでに悪意が暴れた殺戮の現場を、彼は見たことがなかったのだ。

それは、明らかに人がもたらした破壊ではありえなかった。

壁に刻まれた、巨大な爪痕。

今もぐちゃぐちゃ、と“何か”を喰っている異形のバケモノ。

“生ある者の気配はなく”

そんな者がいれば、とうに喰われている。

“邪悪なる者の爪痕だけを見せつける陰惨な惨殺空間”

だからこそ、ソレと出会ってしまった者は、例外なく贄となる。

床に吐瀉物を吐き尽くしたカインは、眩暈に狭窄した重々しい視界をゆっくりと上げ、広間の中央に超然と君臨する、その悪魔を見上げた。

本能すらもひれ伏す、神々しいバケモノ。

理解も常識も、ありとあらゆる全てがひれ伏す禍々しいバケモノ。

悪魔の右腕が、緩やかに天を衝く。

ソレの存在を認めた時、無力なる者カインは、この世の終わりを
覚悟し
……。

第五話　く王都の黄昏　前編く

聖騎士たちがフィッチ王国首都グロスタシャーに辿り着いたのは、予定よりも大幅に遅れ、鮮やかな琥珀色の空に少しずつ宵闇が迫っていた頃だった。

聖騎士は進軍先を首都南部に広がる“ディーン森”に選んだのだが、深部に進むにつれて濃度を高めていく霧と、幻聴や幻覚、さらには発狂者まで出始めた部隊の混乱を鎮めるために、貴重な時間を割かねばならなかったのである。

結果から言えば、それらの原因は森の中枢にて密かに建造された、フィッチ王国軍の魔導砦にすべてのカラクリがあった。

人工的に生み出した霧に恐怖喚起の“呪術”を施し、さらに幻惑効果を重複させることで、肉体ではなく精神に過度な負担を強制させる魔術。

それこそが、通称“迷いの森”とも呼ばれるディーン森の正体であり、堅牢を誇るフィッチ王国軍の前線防衛網であった。

しかしスレインは、第二魔導兵団の助力もあつて無事に魔導砦を攻略し、部隊が本格的な混乱を極める前に、被害を未然に食い止めたのである。

だが、これによってさらなる問題が浮上した。

部隊の被害としては、このまま首都を攻めるに躊躇うほど深刻ではないのだが、敵襲を確認した魔導砦の兵士たちが、スレインが砦

に攻め込むと同時に、ウェセックスの来襲を首都へ連絡したようなのである。

これは致命的だった。

聖騎士たちの強襲作戦は失敗し、敵はすでに籠城戦に向けた準備を着々と整えているはず。

ましてや相手の指揮官が、名将の一人に数えられるカイン將軍とあれば、これはもう、たとえ聖騎士と言えど迂闊には手を出すことができない難敵なのである。

残された作戦は、正門一点突破。

だが、それはカインを相手にする上ではあまりにも愚策すぎたため、聖騎士は難攻不落の敵本陣を攻略する起死回生の一手を閃くべく、粘り絡みつく系の如き思索に没頭せざるをえなかったのだった。

だが、聖騎士の無理難題を解決したのは、首都の様子を探らせに出した斥候の思いもよらぬ報告だった。

“首都壊滅”

思わず我が耳を疑うような報せに、スレインは最初、苦衷を察した部下たちが企んだ冗談ではないかと思った。

しかし、斥候の困惑に極まった表情と一貫した報告に業を煮やし、自らが城壁の前に相對した時、聖騎士は目の前の光景に、思わず絶句した。スレインは、同行者に騎士二名と魔術士一名を選出し、瓦礫と化した被災地のような按配を見せる首都に足を踏み入れた。

暗澹とした闇色の雲が低く垂れ込み、雨の気配独特の水気を含む風が、聖騎士が着装する銀色の鎧を軽く撫でる。

道行く者はいない。

生活感を匂わせる民家も原形を留めていない。

物音一つしない、奇妙なまでに沈黙する街全体が、異質に澱む大気を孕んでいる。

あたかも、夜の世界が敵意をもって聖騎士一行を凝視しているかのようだった。

王都としての賑わいどころか、すでに“街”としての体裁すら失われている。

首都グロスタシャーは、見渡す限りが廃墟だった。

人ひとりいないが、壁や地面には明らかに戦闘が行われた痕跡であろっ血痕が残されている。

民家の外観は激しく損なわれ、その内装を醜悪に露出させて陰鬱な雰囲気醸し出す様は、踊り食いされた肉のカケラのように。

街を歩く一行の足取りは重く、周囲を窺いながらの探索は、踏み締める一歩分ずつ沈鬱な表情になって神経が緊張していくようだった。

無慈悲に転がる日常の残骸の中を進み、さらに奥へと歩む。

聖騎士一行の他にも、六名前後の小隊を複数編成し、街の調査に派遣させているのだが、彼らもまたスレインたちと同様の不安に苛まれているに違いなかった。

「スレイン様…」

「いったい、ここで何が起きたのでしょうか…？」

仲間の一人が、蟠る心中の不安を吐き出すように呟いた。

「分からん…」

「分からんが、しかし…フィッチ王国も、これは予想外だったようだ…、見る」

聖騎士が指差したのは、今にも崩れ落ちそうな民家の前に転がる一振りの剣だった。

この時代では特に珍しくもなく、各国の一般兵士に永く普及している剣である。

「兵の剣が落ちているということは、少なくとも、ここで激しい戦闘が行われたようだ。」

「…だが、敵は誰だ？」

「それは我々ではないことは確かだが、かといって、この時期にフィッチ王国に攻め込む者など、我ら以外には考えつかないが…」

「この破壊は、やはり何らかの魔術を用いたのでしょうか…？」

「ふむ…」

スレインは顎に手を当て、少し思索する。

“魔術”とは、何らかのカラクリを用いて人々を楽しませる“奇術”のことではない。

文字通り“魔力を操る術”なのである。魔術は、大きく分けて七種類に分別される。

“精霊魔術”
“神聖魔術”
“ルーン魔術”
“死霊魔術”
“暗黒魔術”
“古咒魔術”
“結界魔術”

この中でも、特に多数の魔術士が適応した魔術は“精霊魔術”であり、一般的に想像される魔術と言えばこれに該当する。

精霊魔術をさらに分類すると四種類に分けることができる。

“火”系統魔術
“水”系統魔術
“地”系統魔術
“風”系統魔術

原則的に多くの術者の場合、一人につき一つの系統に秀でていることが多い。

これはその人間の本質的な適応であり、ある意味では、先天的な

才能の道筋だとも言えるだろう。

勿論、努力次第で他の系統魔術も覚えられなくはないが、自分に適応した系統魔術以外の修練は困難を極め、諦める者がほとんどだと聞く。

それは、水と油を同じ割合で混合させた液体を造るに等しい行為だと、かつてのイングラムがそう苦笑したのをスレインは思い出した。

だが、仮にそのイングラムをもってしても、この大破壊の爪痕を残すことは難しいだろうと聖騎士は思う。

まるで巨大な雷が幾本も天より降り注いで暴れ回ったかのような被爆地の様相を呈している首都の有り様は、魔術を駆使したとて、とても現実的ではないように思えたのだ。

スレインは、思案する脳裏の予測そのままを口にした。

「これは…そう…、どちらかと言えば、何か巨大な物体が暴れたような痕跡だが…。

しかし、首都を壊滅させるような化け物など、まるで伝説に伝え聞くドラゴンか、あるいはサイクロプスぐらいしか知らぬ。

だが、そのような幻想種族が実体化した話は聞いたことがないし、第一、イングラム殿が不可能だと言っていた。

…ならば、これはやはり何らかの魔術による破壊なのだろうか？」

出口の見えない思考の迷路を止め、スレインは溜息をつく。

その時、民家の陰からようやく男の話し声が聞こえてきた。

「なァ…、一つ訊きたいんだけどよォ…。」

神様ツて、この世にいると思うかい…？」

泥酔したようにフラフラと歩み寄る男は、どこかの浮浪者だろうか。

髪は乱れ、服は所々が破けている。

げっそりと細る顔に生氣は失せ、瞳は血走って赤黒い。

服の裂け目から、妊婦のように突き出た腹が、男の異常性を高めていた。「誰だ貴様ツ！　そこに止まれ！」

同行する騎士が一人、先頭に躍り出て剣を男に突き付ける。

だが、男は意に介した風でもなく言葉を繋げた。

「皆が叫んでたんだよォ…。神様ァ、神様ァ、ツてねェ…。」

みィんな、必死こいて叫んでたのにねェ…、く、くぶきユぶきユぶふ…。」

何がおかしいのか、男は突然わらい始めた。

妙に癪に触る笑い声だったが、スレインは仲間の剣を下げさせ、奇怪に破壊された首都の経緯を尋ねてみることにした。

「何が起きたのか、だツてェ…？」

騎士様ともあろう方が、私のような下賤者に何が起きたのかと尋

ねるなんてエ…、ぐ、ぐふきユぶきユくき…」

しばらく笑うと、男は勝ち誇ったように口元を歪ませ、囁くように呟いた。

「ああ…、心配しなくても、チャアアんと見てたよオ…。

俺はア、路地裏で見てたんだア…、ムシャムシャガブリ、ムシャムシャガブリ、ツてねエ…」

男は芝居じみた動きで“何か”にがぶりつく真似をしては、何度も何度も満足げに“何か”を咀嚼する。

それは、見ていて苛立ちを覚えるのと同時に、この男が何か、良くないモノに憑かれているのでは、と不安にさせる動作だった。

「くユきユきヤ…。

神様はねエ、喰われちまツたのさア…。

泣いて跪こうが、赤子を差し出そうが、剣で抵抗しようが…、オんなものはゼエんぶ無ウ駄。

奴ア…、神様も世界も、何もかもを喰べちまうんだからなア…！
くきヤきヤきヤきヤ、きヤーきヤきヤきヤきヤきヤ…！」

男の笑い声は、いよいよヒステリックなまでに高まって街に響き渡った。

もはや正気を失った男から得られるものはないと、スレイン達はその場を立ち去ろうとした。

「なんだよオ、俺の話はまだ終わってねエぞオ…！」

スレインは返事をするのも億劫だったが、着いてこられるのも迷惑だと考えて、仕方なく振り返った。

「お前の戯言に付き合う道理はない。

どうしても言うのなら、次はもっと面白い話を考えたまえ」

「な、なにイイ…!？」

男は顔を歪ませ、苛立たしげに地団駄を踏んだ。

「て、てめエ…!

セツかく俺様が親切にも話してやがるのに、なァんだその態度はア…!？」

そんなに騎士様はエライのかア!？」

そんなに貴族達はエライのかア!？」

クソツタレエ…、お前らなんて、みんな喰われちまえばいいんだ

…!」 腹を抱えて、男の顔が醜悪に歪む。

その時、どこからか悲鳴とも嬌声とも取れる叫び声が四方から飛び交った。

「ス、スレイン様…!

や、奴の腹を見てください…!」

仲間の狼狽した声に促されて、聖騎士は男の腹を改めて見る。

「うつ…!？」

こ、これは…!？」

スレインが驚くのも無理はない。

男の腹には、今にも飛び出しそうなほどくつきりと浮かび上がる何者かの輪郭が見て取れたのだ。

思えば、男は全体的に痩せこけている。

それが脂肪でないのなら、男は何か良くないモノに精神的に憑かれているのではなく、何か良くないモノを肉体的に宿しているのではないか。

「死ねしねシネ死ねしネシね死ねしねシネ死ねしネシね死ねしねシネ死ねしネシね死ねしねシネ死ねしネシね……」

男は呪詛の言葉を吐きながら、ひどく苦しそうに腹を抱えている。

腹に蠢くモノはいよいよ活性化し、皮膚がその輪郭を浮き立たせて激しく蠢動し始めた。

騎士と魔術士はすでに臨戦態勢。

スレインもまた、腰の剣を抜いて目を細める。

その剣には、特殊な紋様が彫られていた。

音素文字　　俗にルーン文字と呼ばれる、その紋様自体に神秘を宿した魔導剣である。

男は膝から崩れ落ち、懇願するように一行を見上げた。

その瞳は、一瞬、正気を取り戻していたように、見えた。

「だ…、ダズゲデエ！」

その瞬間、限界まで膨れ上がった男の腹部が、パン、と乾いた音とともに破裂し、中から一行めがけて、黒い何かが飛び出してきた。虚を突いた、鮮やかな奇襲。

矢の速度で襲いかかる黒い物体は、無防備に立ち尽くす一行を狙いに定めて牙を向く。

反応するのは困難だ。

事前に来ると分かっている、それが回避も防御できぬ人外の速度で迫るなら、人間の反射神経では到底おいつけないのは当然。

コンマの死が、鎧もない魔術士に逼迫する ！

だが、それを。

「遅いな」

スレインは、その黒を完璧なタイミングで迎撃した。

爆散した腹部から飛び出す異形が、先頭の騎士二人の間を潜り、自分の目の前を通過しようとしたその動きを完全に把握した上で、首を一太刀で斬り落としたのである。

魔術士は異形の血を頭から被り、ヒイイ、と呻いたが、それが自分の血ではないと分かると、すぐにローブを使って拭い始めた。頭を失った異形は、その宿主だった男と同時に倒れた。

どちらも夥しい量の血を噴出させ、自身が横たわる大地に鮮やかな朱い池を作る。

剣に滴る異形の血を払って腰に納めると、スレインは改めて小柄の怪物を見やった。

全身を漆黒に塗り固めた、犬、のように見える。

だが、犬と決定的に一線を画すのは、その不吉な赤を彩る瞳と、四肢の人間じみた指にあった。

獣であつて、獣よりも人間に近いモノ。

それは、スレインが見たこともない生命体だった。

「スレイン様…！」

「ご無事ですか！？」

戸惑う騎士に一瞥し、スレインは頷いた。

「ああ、問題ない。

…だがどうやら、コレがフィッチ王国を襲い、壊滅させた張本人であるようだな。

…尤も、コレが普通の野生でありえない以上、必ず飼い主がいるはずなのだが…」

恐らくは、首都の中央　見上げれば常に視界に屹立する、あの城に飼い主がいるのだろつと思われた。

スレインは一行に向き直る。

「お前たちは本隊と合流し、この街の制圧に当たれ。

私は中央の城に赴き、異常がないか調べてくるとしよう」

「ハッ！」

スレインは遠ざかる彼らの背中が消えるまで見届けると、王国の中枢たる城に向かって足を向けた。

道中、先の犬と戦闘している部隊や、あるいは群れを成して襲いかかってきた黒犬もいたが、聖騎士はその度に魔導剣を振るって撃退し、その数は現時点で10を数える。

どうやら、街には大量の黒犬が溢れ返っていて、腹を空かせながら部隊を襲っているようだった。

本隊投入の判断は正しかったのだと、スレインは改めて安堵する。

しかし、この黒犬を手配した飼い主を倒さなければ、フィッチ王国の二の舞いを踏む結果に至りかねない。

マーシア王国に向けて後方に憂いを残すわけにはいかない以上、ここは今のうちに叩き潰しておく必要があるのだった。

「とはいえ、そう易々とは倒されてくれないだろうが…。

さて、鬼が出るか蛇が出るか…。

いずれにせよ、陛下の脅威は駆逐するのが我が使命。

敵ならば叩き潰す…それだけのことだ」

辿り着いた城の正門。

ここだけが冷えた空気に包まれていて、栗立つ肌が緊張感を研ぎ澄ましていく。

開扉した正門の先、優にパーティーを開催できそうなほどの広間の中央階段に、男 カイン将軍が待っていた。

第六話 王都の黄昏 後編（前書き）

今回は、少し長めの14ページとなっております。

本当なら半分ずつ分けても良かったのですが、それだと中途半端に区切ってしまうため、結局は一話分にまとめてしまいました。

これからも、また今回のように一話が長くなってしまうこともあるでしょうが、どうか生暖かい目で見守っていただけますよう、よろしく願います。

第六話　く王都の黄昏　後編く

正門は内側に開かれた。

広間に続く通路には、白い石が堂々と連なっている。

その表面にはやはり大量の血が付着していて、見る者に生理的嫌悪を催させた。

折れた剣もあれば、持ち主がいなくなってしまった剣も落ちている。

それらはあたかも、スレインを奥へと導く案内者のようだった。

歩くたびに擦れる鎧の音が、奥に潜む静かなる敵との遭遇を予感させる。

緊張感を研ぎ澄ましながら長い通路を歩いた先に、かつての栄華を記憶する広間が侘しく佇んでいた。

玄関の意味合いも込める広間の面積は、余裕をもって広く保たれている。

正面の壁を大階段が上がっていて、中二階から左右に分かれる様式だ。

男は、その踊り場にいた。

聖騎士と同じく銀の鎧。

握る剣の煌めきが、殺気の閃光となって網膜に映る。

白晢の美貌を持ち、文武に秀でた才をもって、わずか25歳で“將軍”の地位を戴く者。

二人は互いを見据えたまま、永い沈黙に思い出を巡らせる。

口を開いたのは、フィッチ王国が誇る守護騎士カイン將軍だった。

「久しぶりだな、スレイン卿。

こうして直に会うのも三年ぶりか。

…いやはや、時が経つのも存外に早いものなのだな」

聖騎士は静かに頷いた。

「できることなら、あなたとは、このような形で会いたくはなかった。

…無粋な話だが、あなたとは、一人の騎士として正々堂々と決着をつけたかった」

カインは苦笑した。

「我らの決着ならば、三年前のあの日についている。

かつてブリテンに君臨し、我らが祖のアングロ・サクソンをバトン山の戦いで退けた伝説の騎士王アーサー・ペンドラゴン…。

彼に伝説の聖剣を譲った湖の乙女の前で、我らは聖騎士の称号を勝ち取るべく戦い、貴公が残った。

その事実は今更かわらんよ」

二人が出会ったのは、ブリテン最強の代名詞とも言える最高位の称号“聖騎士”を選出する“湖の試練”の時だった。

そもそも聖騎士とは、かつてのブリテンに君臨していた騎士王の忠実なる騎士ランスロットに由来する。彼はニミュエと言う前任者の湖の乙女に育てられ、名を“湖の騎士”とも呼ばれるようになるのだが、現在の湖の乙女ヴィヴィアンは、このブリテン島に暗躍する危機を打破するため、自らの力を分け与えるに相応しい騎士を選抜していた。

ヴィヴィアンに選ばれた騎士たちが、何時、何処で、どのような試練を受けるのかは不明である。

だが三年前、二人は選ばれた。

そして最終試練の日、無呼吸状態における騎士百人抜き戦いでスレインが勝ち残り、カインが倒れたのである。

カインは唇の端を吊り上げ、スレインを見た。

「あの時、貴公は最後まで膝を折ることなく戦い抜いた。

だが、私は無様にも倒れ、聖騎士の資格を失ってしまったのだ。

…そう、私はまさしく敗北者だった。

全てを失った私と、全てを手に入れた貴公の立場が、それを何よりも雄弁に語っているではないか…。

…クツクツ、これ以上の優劣をつける決着はなكارウ」

カインの眼が狂気の色を宿していく様に気圧され、スレインは慌てて口を開いた。

「それは違うぞ、カイン卿。

聖騎士の戦いは我らにとって、あくまでも通過点にすぎぬはず。最終試練の前日、我らは確かに誓い合った。

戦乱に荒れるブリテンを、いつか必ず平和にしてみせると。

あの時、私にそう言ってくれたのは、他ならぬ貴公ではなかったか！？

… いったい、ここで何が起きたのだ？

どのような悪意が、貴公の瞳をそこまで翳らせたのだ？

答えよ！ カイン！」

スレインの投げ掛けた言葉を斬り捨てるように、カインは剣を振るって眼を細めた。

それは、紛うことなき殺意となつて広間を駆け抜け、スレインを射抜く。

「その答えを聞きたければ、私を倒せ。

貴公がヴィヴィアンより授かった力と。

私があやつより授かった力。

どちらが強いのか、ここで我らの雌雄を決し、証明するとしよう…

！」

助走もなく、カインはわずかに膝を曲げて撓めた瞬発力だけで天井まで跳躍した。

スレインの頭上、見上げる彼に向かって、カインは天井を床に見立てて踏み込み、さらに速度を増して聖騎士に滑空する。

それは隼のように鋭く、しかし人間の質量を秘めた破壊力を伴って迅い。

剣を突き立てた一点突破の貫通力が、鉄をも貫く矢となってスレインに襲いかかる。」　　クッ！」

スレインは後方に飛び退いた。

元より、頭上から高速で飛来する攻撃を防ぐ手段は皆無に等しい。ましてや、それがピンポイントを狙い撃つ突きであるならば、防御よりも回避に専念するのが上策である。

カインの雷光の如き突きが床に落ちた。

そこはコンマ一秒前までスレインが立っていた場所。

穿たれた床が塵と埃に塗れた煙を上げ、その中に隠れた騎士が嬉しそうに笑う。

「さすがは聖騎士…」

そうでなければ面白くないな…！」

スレインの二の句も待たず、カインは再び聖騎士の懐へ踏み込んだ。

塵煙からの、黒犬を一瞬にして葬った横一閃の斬り払い。

並の兵士なら、斬られた後で自分が攻撃されたことに気付くほどの迅さだ。

が、これにスレインは反応していた。

剣を縦にしてカインの踏み込みを受け止め、金属がかち合う高い音が広間に幽かな残響を残して響く。

「なぜだ！？

なぜ我らが戦わねばならない！？

貴公が言ったあやつとは、あの魔人のことであろう！

ならば、奴は我ら共通の敵だ！

「ここで、我らが戦う理由などないのだ！」

どちらも押し負けぬ鏖競り合いを経て、互いの距離がゼロになる。

「何を今更！」

貴公はフィツチ王国に攻め込んできたのであろう！

ならば、私は敵だ！

倒さねばならぬ敵なのだ！

甘い希望にすぎりつき、あわよくば無傷で私を懐柔しようなどという魂胆が通用するとも思ったか！」

カインの剛剣がスレインの剣を弾き、両者は互いに間合いを取った。

「バカな！」

我々は決して、民を巻き込むような真似はしない！

貴公も知っているだろう！

この街の惨状を！

この理不尽な無差別破壊を許しているのか！？

貴公を慕い、散っていった部下や民も、今のあなたの姿を見てどれほど嘆いているのか！」

カインが動き出すと同時に、今度はスレインも疾走した。

互いに触れ合う制空権。

隙を見せれば即必殺に繋がる死の間合いの中で、二人の騎士がち合う剣のハーモニーを奏でていく。

空を斬り裂き、宙を貫き、大気を唸らせる凄まじい攻防戦。

荒れ果てた広間に二人、壮絶であるがゆえに美を醸し出す両者の剣の軌跡が、煌めく残像となって高速に展開されていた。

紛れもなく二人の技量は互角だった。だが、攻撃を仕掛けているのは専らカインの方であつた。そもそも、上下左右の多角的な剣撃は、実際に相対すれば目で追うことも難しい。

それがカインによつて高速で襲いかかるなら尚更、視認することにも困難を極めて、勝負はすぐさま決着するはずだった。

相手が、聖騎士でなければ。

スレインは息つく暇もないカインの猛攻を精確に捉えた上で、紙一重の太刀捌きをもつて躲し続けていた。

相手の踏み込み度合いや速度、更には本当の気迫と偽りの殺気を全て見極め、かつ最も効率的な摺り足をもつて初めて成る防戦である。

「そつだ！

私は守れなかった！

民も部下も、王でさえも！

私は何一つとして守り通すことができなかったのだ！

華々しい貴公には分からぬだろう！

どれほど崇高な理想を掲げても、それを実現せしめる力がなければ所詮は空中楼阁！

圧倒的な暴力に屈する正義など、存在する価値もなければ意義もないのだよ！

スレイン……！」

カインは攻撃のリズムを崩さぬまま、スレインに語りかけた。

これほどの斬撃を仕掛けておきながら、未だ息を乱した様子のないその体力は、やはり尋常ではない。

雄叫びを上げるカインの剛剣が、再び聖騎士を弾いた。

スレインはカインの剛剣による衝撃を利用して間合いを取り、再度カインを説得しようと顔を上げて、ぎくりと表情を強張らせる。

「高き天蓋より在り

深き混沌より在り

永き黄昏より在り

暗き深淵より在り

」

ここにきて、スレインは思い出した。

カインは騎士としての技量もさることながら、その実、魔術にも深い造詣を持つ“魔導騎士”であるのだと。

「汝、灼き尽くす者よ。

世界の理より居出て、我が敵を焼滅せん！」

カインの適性は確か、“火”系統の精霊魔術だったはず。

しかし、この詠唱と並々ならぬ魔力量を見る限りでは、まるで“魔法”の領域

！

「させるか！」

だが、スレインの踏み込みは後一步遅かった。

世界に働きかけるカインの言霊が最後まで紡がれる。

「“猛き万物の火精霊”（サラマन्दール）」

カインの足下に魔導陣が浮かび上がる。

赤色の五芒星が輝き、戦慄する大気の震動に呼応するように、ソレはスレインの前に現れた。精霊魔術の根幹は、世界に満ちる活

力はすべて、四系統に分かれた四大精霊が生み出す活力であるのだとする思想に定義されている。

即ち、四大精霊の各活力は概ね均衡を保つように絶えず循環され、世界を養う活力源として大気に満ちているとする考え方であった。

例えば、夏の海辺で一日を通して最も活性化している精霊は水であるが、昼間、太陽が盛んに活動している時は火が次いで、夜間、静かな大気に満ちる時は風が次ぐというように。

時間と場所によって千差万別に精霊の活力バランスは異なるものの、世界全体を通して見た場合、各精霊の活力バランスは四等分に保たれているのである。

ゆえに、この青き星は活力が枯渇することなく、健やかな環境を維持できているのだと。

多くの魔術士が精霊魔術に適応しているのも、このように自然元素の影響を常に受けているからであり、自らもそれらを手放してはもはや生活できぬほどにまで日常に浸透しているからだった。

カインもまた、確かに精霊魔術士であった。

それも、局所的な破壊力であれば最大を誇る、攻撃型の火系統精霊魔術士である。

だが今、彼が操って見せた魔術は、ともすれば魔法域に達するほどの高難易度魔術 俗に“奥義”と呼ばれる神秘の発現であるのだった。

魔導陣から人型をした火焰が現れる。

一つ一つは掌サイズほどに小さいが、合計で三つ、トカゲのような顔をした異形がカインの周囲に漂っていた。

精霊魔術奥義

“精霊召喚”

各属性系統の概念を深奥まで理解し、かつ各精霊と契約を交わした上で初めて使用可能とされる神秘だ。

だがそれは同時に、最も魔法に近い魔術の一つとされていることから、魔術士の間でも“奥義”として最高難易度の魔術の一つに区分されている。

なぜなら、奥義の名にも記されている通り、それは“召喚”

“神秘”の力である魔術ではなく、“奇蹟”の力たる魔法の一つ“召喚魔法”に最も近い魔術であるからだ。

しかし、それが魔法でない理由は、四大精霊が目には見えぬだけで絶えず、世界に存在しているからである。

砂漠にも、大気圏にも、海中にも、山奥にも。

ゆえに正確には召喚ではなく、召還と呼ぶべきなのだが、精霊は人類よりも高位存在であるため、あえて召喚と呼ぶようにしているのだった。「これが私の力だ、スレイン」

一体一体が強大な力を持つサラマンダー三体を従えながら、カインは言葉を紡ぐ。

「この程度の力を破れぬようであれば、その源泉たるあの魔人を倒すことなど夢のまた夢……！」

ましてや、平和という理想郷など、初めから貴公らの夢物語と消えて当然だ。

伝説の聖剣に護られた騎士王でさえ、ついに実現できなかったその悲願……。

貴公の信じる理想が正しければ、そしてそれを、この世界が真に望んでいるのなら、この程度の逆境を見事、我が前で乗り越えて見せよ！

スレイン！」

カインが命令を下すまでもなく、サラマンダーはスレインを標的にして一斉に攻撃を展開した。

「くっ、カイン……！」

前方から飛来する火球を剣で斬り落とし、しかし更に襲いかかる雨のような火球を高速のステップで躲し、あるいはやはり斬り払いながら一足飛びで後退する。

「後ろを取られたぞ！」

「……！」

壁伝いに移動したカインの奇襲に、スレインは辛うじて反応した。だが、カインの攻撃を防ぐだけの踏み込みも浅く、太刀捌きのみ
の一時凌ぎでしかなかった。

背後の殺気。

サラマンダーの突進を避けようと右に飛ぶやいなや、さらなる火焰弾の追撃がスレインを襲う。

この炎の雨は、ついに防ぐことができなかった。顔と胴体のみを守る最低限の防御姿勢をもって火球をやりすごすが、肩や脚、腕などの細部に被弾し、その衝撃と熱気が聖騎士を襲う。

ヴィヴィアンより譲り受けた、精霊魔術にある程度の耐性を持つ聖銀の鎧がなければ、すでに火球によって火ダルマと化していただろう。

スレインは火球の勢いに押されて壁際に追い込まれた。

左右から急速に接近するサラマンダーの突進にただ防御したまま、不意に肌が栗立つ上空の殺気に顔を上げる。

「遅いッ！」

天井を踏み抜くほどに撓めた、カイン最速の雷光牙突。

必殺を謳う好敵手の王手はそのままスレインに直撃し、背の壁をも砕いて塵煙を巻き上げる。

人影を飲み込む塵煙から現れたのは、カインだった。

「…手応えはあった」

そう呟いたカインの表情は、しかしどこか哀しそうだった。

「我が必殺の一撃を受けて、無事に済めば沽券に関わるが…。
しかしさりとて呆気ない…」

呆気ないものだ…」カインは、一人の騎士としてスレインを親友と認めていた。

同じくヴィヴィアンの試練を受ける者、互いの技量や理想が同じであったことが、二人を結びつけたのかもしれない。

カインは、互いを最大の好敵手として切磋琢磨しながら、一瞬の油断が死を招く“湖の試練”を幾度も潜り抜いたことを、今でも昨日のことにように思い出せた。

当時は苛酷としか言い様のない日々であったとしても、こうして思い返してみれば、それは紛れもなく輝かしい思い出に相違なかった。

全力で。

ただひたすら、親友とともに前だけを向いていられた時間。

それは誇りだった。

たとえ夢破れたとしても、その記憶だけは確かな事実として生涯を誇るに値する思い出だったのだ。

嬉しかった。

一つ一つの試練を越える度に、自分が一皮も二皮も剥けて成長したのだと実感する、充実した毎日が嬉しかった。

だが、真の悪夢を前にした時、カインの誇りは音を立てて崩壊した。

勝てるわけがないと。

有無を言わせぬ圧倒的な暴力に、成す術もなく王都が蹂躪されていく様を、彼はただ無表情で見つめるしかできなかったのである。

それは、絶息しそうなまでの無力感だった。

今までの努力の日々を笑い飛ばしてやりたいほどの絶望と空虚感が、カインを支配した。

誇り高き騎士道も。

輝かしき夢も理想も。

アレの前では、砂で造り上げた王国のように、気紛れな台風で消えてしまうモノであったのだ。

カインは、全てを棄ててでも力を欲した。

何者をも寄せ付けぬ、圧倒的な力を欲した。

力がなければ理想は実現できない。

子供の涙も、厳かな天変地異の前では無意味であるように。

カインは、力こそが全てだとして悪魔に魂を売り渡したのである。

力こそ正義。

力があれば、正義も悪もコインの裏表のようにクルクル回る。

この世は弱肉強食。

ならばカインは、強者として世界に君臨することを選んだ。

力がなければ何も守れぬと言っのなら、誇りなど何の役にも立たない精神論でしかないのだ。

…それを、証明してほしかった。

それが間違いであることを、証明してほしかったのに…！

「さらばだ、スレイン卿…」

カインが背を向けた。 その時だった。

「…、貴公は、とことん哀れだ 」

聞き間違えようのない親友の声に、カインが素早く振り返る。

徐々に薄れゆく塵煙の奥に、剣を床に下ろして支えとしながら、濃い輪郭を形作る人影がゆらりと立ち上がる。

「 力が一人で担うモノだと、いつたい誰が決めたのだ？

元より我らは、身の丈ほどの責任と力しか担えぬ弱者。

ゆえに人は知恵を得、手を取り合って共存することを選んだのだ。
そのための家族。

そのための国家。

力で奪い合うなら畜生でもできる。

家族を守るだけならば畜生でもできる。

しかし、名も知らぬ他人に手を差し延べることができるのは、人

間以外にはしまい！

それすらも忘れてしまえば、人間はもはや畜生にも劣るのだぞ！
カイン……！」

聖騎士の強烈な太刀が一閃、塵煙を切り裂いて吹き飛ばした。

カインの雷光牙突は聖銀の鎧を貫いていたが、スレインは身体を捻ることで急所を外し、致命傷を避けたのだった。

スレインの眼に、今まで以上の強い光が宿っていた。

「この程度の逆境を乗り越えて見せろ、と言ったな……。

ならば、もはや私は語るまい。

元より、我ら騎士は剣によって意志を語る者。

……いいだろう。

ヴィヴィアンより託されし力、その目でしかと見るがいい！」

その時、聖騎士が地に突き刺した剣に異変が生じ始めた。

剣に刻まれた四つのルーン文字のうち、一つが光り輝いて、剣とスレインを螺旋状に包んでいく。

緑色の光はやがて宙に解け、後には元通り、何ら変わった様子のない剣とスレインとが残されていた。

カインは呆気にとられたように茫然と立ち尽くし、次第に何も変化がないと悟ると、猛々しく目を細めた。

「貴公の言う力とは、よもや光を操って見せただけの子供騙しか。

……私もつくづくナメられたものだな。

もついい。

貴公に期待した私がバカだったただけか。

…もはや、私は何も問うまい。
灰燼と帰して早々に無へと帰るがいい！」

サラマンダー三体が同時に動き、未だ動きを止めたままの聖騎士に向かって高速度で接近したかと思うと、突如として彼らの体が木っ端微塵に破裂した。細分化された火焰は、一つ一つが意志を持つように散開し、そのままスレインに強襲する。

これぞ、実体をもたぬ精霊の真骨頂。

霊体でありながら、魔術によって仮の肉体を得た精霊たちは自らの意志で体を細分化させ、それぞれが独立した動きでもって敵を攻撃することができた。

これにより、精霊一体で約一千の敵を同時攻撃することが可能となり、戦場では環境を破壊することなく、敵兵を全滅させることができるのだった。

これが、魔法に最も近い魔術としてもさることながら、この精霊召喚が“奥義”と位置付けられる所以である。

精霊が存在する間、術者は魔力を消費し続けるのだが、逆に魔力に余裕があれば、精霊は大多数同時攻撃に加えて、通常の物理攻撃を無効化し、火属性魔術を吸収する肉体を備えて術者の敵を葬るのだ。

それが三体　合計三千もの自立火焰弾が、負傷する聖騎士に向かって飛来した。
防ぐ手段はない。

四方八方から高速で展開する小型火球は、頭から腕、胴体に脚、

頭上と背中へと襲いかかる。

全火球の動きを捉えることは不可能に近い。

スレインの生命は、ここで途絶したかに思われた。

しかしカインは、己の脳裏に思い描いた未来が覆されていくのを
まざまざと見せつけられた。

まず一発目が着弾したその刹那、スレインの身体が陽炎のように
揺らめいて消えた。

不可思議な現象に目を丸くするカインは、次いで襲いかかる無数の
火焰弾をことごとく躲していく聖騎士の超人的な動きを目の当た
りにする。

火球と火球のわずかな隙間を通り抜け、あるいは切り裂いて“道”
を作る。

それぞれが独立した変則的な動きで敵を翻弄する火焰弾は、術者
であるカインですら見切りようがないのだが、スレインは火球と火
球の間隙を縫って突き進んでいくのだ。

それは、人間ではまず到達不可能な領域の身体能力であった。
降り注ぐ雨の中を一滴の雫も浴びることなく走る動作に近かった
が、それが敵意をもって自在に襲いかかるなら、これはもう足掻く
だけ無駄だと誰もが思うところである。

しかし、スレインはその常識を越えて、逆に数千もの数に及ぶ火
焰弾を翻弄しつつあった。

ただの一発も直撃を許さず、聖銀の鎧に掠めさせて被害を最小限
に留める。

カインは、そのあり得べかざる超人の名を叫んだ。「スレイイ

イン！」

カインは剣を構えた。

だが、スレインは残像を残して目まぐるしく動き、その実体を捉えるのは至難である。

途端、何かカインの左を通過した、ように感じた。

それは一陣の風であったのかもしれない。

しかし、ドサツ、と小さな物音が足下から聞こえ、左半身の奇妙な空虚感に違和感を覚えて首を巡らせた時、彼は初めて己が身を襲った聖騎士の斬撃を理解した。

左腕が、肩から先にかけてバツサリと断ち斬られていた。

カインがそう認識したのと同時に夥しい出血が始まり、サラマンダーが二体も消滅する。

残ったサラマンダーは再びトカゲめいた姿を取り戻してカインの傷口に自らの体を押し当て、その熱で出血を焼いて止めたが、それを最後の仕事として別次元の精霊界に帰還した。

「これが、私の力だ

」

背後から聞こえる声に導かれて、誇り高き親友に向き直る。

そこには、悠然と立つ聖騎士の姿があった。

「　　ヴィヴィアンより託されたこの剣は、名を“四大元素の祝福”（ルーンブレイド）という。

これには四大精霊に応じた各属性に適合する四つのルーンがあったな、今、解放して見せたのは地のルーンだ

」

健やかな成長を促す、大地の精霊の力。

それは魔導剣の硬度を大幅に高めると同時に、持ち主の身体能力を数倍に向上させる効果をもたらした。

「このルーンは、身体増強型の大型魔術と同じ効果を持つていてな。」

持続時間は少ないが、魔術を使えない私には鬼に金棒というわけだ。」

運動神経伝達物質の速度上昇と、イオンチャネルの誘電率向上、さらには受容体の信号回収の超効率化によって、五感そのものを常時の三倍以上にまで引き上げ、さらには全身の筋肉に、その五感に見合った瞬発力と耐久力を与えるのである。

ただし、その代償として魔力を大量に消費するうえ、持続時間は三分足らずといった欠点を持つが、それゆえにこの魔術効果を得た人間は、まさしく神速の動作を可能とした超人と化す。

「この剣には、ヴィヴィアン殿の切なる願いが込められている。」

私がこの剣を持つ限り、その想いに応える義務があるのだ。」

ゆえに、その大型魔術の名を“三分間の英雄”（インスタント・ヒーロー）

魔導剣ルーンブレイドに付与された“地”の神秘であつた。しかし、その力は無限ではない。

いかにヴィヴィアンの魔力が強大とはいえ、世界が定めた魔導の絶対法則“大前提の原則”からは逃れられないのだ。

神秘の力、魔術。
奇蹟の力、魔法。

その二つを総称して“魔導”と言うのだが、それは無から有を生み出す業ではない。

そもそも、魔力とは、人間で言えば第二生命エネルギーのことを指す。

例えば、人間の生命維持に絶対に必要不可欠な血液や臓器が第一生命エネルギーであるならば。

第二生命エネルギーとは、日々の感情変化や食事といった、その人間を取り巻く環境から養われる“活力”なのである。

この活力を、先天的な概念才能である“魔力器”によって魔力へと濃縮変換できる者が、魔導を使う資格を有するのだった。

そして魔導は、事象に残留する魔力が尽きた瞬間に、あらゆる効果を失うのである。

これが、魔導における絶対的法則　　即ち、“大前提の原則”である。

カインの精霊召喚も然り、左腕を斬り落とされた分の活力がごっそりと奪われたがゆえにサラマンダーが二体も一息に消滅し、残る一体も維持できぬほどにまで消費してしまったのである。

ゆえに、これは魔導剣ルーンブレイドにも当てはまる。

この絶対的法則を補うため、ルーンブレイド最大の特徴がある。

伝説の騎士王アーサー・ペンドラゴンの強力な助言者、マーリン・アンブロジウスをも幽閉せしめた湖の乙女、ヴィヴィアンが最初から創成した魔導剣には、周囲の空間から四大精霊の活力を少量ながら取り入れる能力を秘めていた。

これによって魔導剣の力は、たとえ魔力器を持たぬ凡人であろうと使用可能とする強力な宝具だったが、しかし一度に使用可能な力は一つ限りと限定されている。

なぜなら、各四種類の強力な効果は、消費する魔力こそ等しいが、その消費魔力と、周囲の活力を吸収する剣の最大魔力保管量もまた同等であるからだ。

さらに、一度消費した魔力を再度使用可能にするまでに必要な待機時間は、約一週間と永い。

これは、一度に膨大な活力を取り入れてしまえば、周囲の精霊バランスを崩しかねない上に、所有者にも甚大な影響を与えてしまうかもしれないからであり、ゆえにルーンブレイドは、おいそれと容易く使える代物ではない、切り札なのであった。カインの傷は致命的だった。

このまますぐに治療すれば命は助かるだろうが、それは最初から彼に許された選択肢にない。

左腕を失った肩の傷口に当てた右手を放し、地に落ちた剣を握る。聖騎士を見上げる顔には、背水であるがゆえの凄味を帯びていた。

「カイン卿、もう勝負はついた。

これ以上の戦いは無意味だ。

我らの敵は魔人ただ一人。

それが分からぬ貴公ではあるまい…！」

蒼白となった表情には夥しい脂汗が吹き出していて、それが、カインの死期が近いことを物語っていた。

スレインはもはや、聖騎士としてではなく、ウェセックス軍の司令官としてでもなく、ただ一人の親友として説得する。

「なぜだ…！？

いったい何が貴公をそこまで駆り立てるのだ？

奴に肩入れする理由など、貴公にはないはずだ…！」

「…これは、貴公のためなのだ、スレイン卿…」

「私の、ため…？」

「そうだ。

貴公がアレを見て絶望せぬうちに、私の手で殺しておきたかった。そうすれば、お前は私のように、悪魔の呪いを受けることはないのだから…」

「か、カイン卿…。

そ、その腕は…」

スレインは、斬り裂いたはずのカインの左肩口から、蛇がのたうち回るように蠢く膨大な細胞を見て取った。

人間ではまず再生不可能なはずの左腕が、時間をかけて再生しようとしている。

カインは剣を構えて猛々しく踏み込んだ。
まだルーンの力を宿すスレインの目には、その体感速度はスローモーションのようであったが、しかし反撃をためらって防ぐに留まった。

「私は奴に殺され、そして改造された。

その結果、私は力を得たのだが、しかし代償として“人間”を辞めてしまったのだ。

…いつの間にか、辞めさせられてしまったのだ。
起き上がってしまったのだ。

あのまま死んでいたら、どれほど楽だったことか。
あのまま人として死ねたなら、どれほど楽だったか。
本物の悪魔の前では、神も手を差し延べてはくれない。

物語の主人公なら、その時に誰かが助けてくれるのだろう。

…だが、それはほんの一握りの幸運者だけだ。

人でなくなった私は、今度は人から狙われる立場になった。

誰も助けてくれない。

誰も救ってくれない。

誰も恵んでくれない。

…私は、神に見捨てられたのだ…」 カインの剣は明らかに力が弱まっていたが、剣撃を受け止めるスレインの手にはしかし、これまで以上の重みを体感していた。

「カイン卿…」

言葉にならない彼の無念が、太刀筋に込められて果てしなく重く感じられた。

「私には、最初から選択肢などなかったのだ。
ならばせめて、私の手で貴公を殺し、奴の魔の手から遠ざけるか。

それとも。

貴公の手で、まだ私が人間のカタチをしているうちに……」

突如として右から迫る鞭のような剛腕がスレインを襲い、右手で受けて直撃を防いだ。

反動を利用して間合いを取り、再び開いた両者の距離は五メートル。

「カイン卿……」

やはりあなたも、何かに寄生されていたのか……」

カインの左腕は、まさに蛇の如き長さで鞭のしなやかさを宿して、床すれすれに垂れ下がっていた。

再生するたびに、人であることをカタチから失っていく呪われた存在。

それが、魔人に殺された有能な死者の末路であるのだった。

「……来い、スレイン卿。」

私の寄生体は心臓に宿っている。

そこを貫けば、私はもはや再生することなく死ぬだろう。

……迷うな。

最期に貴公に会えて、私は本当に嬉しかったのだから」

「……カイン……！」

カインが最期を望んで最速に踏み込む。

寄生体の右腕が、別の意志を持つかのように忙しく宙に泳ぐ。

「私がまだ、人であるうちに……！」

三メートル。

スレインは、齒の奥をぎりぎりとはみ合わせて、それでも最善を
“思考” 錯誤する。

「私は、人間でありたいのだ…！」

二メートル。

カインの痛切なる想いが、広間に反響した。

「 斬れ…！」

斬れエ！

臆病者オオオ…！」

「 おおおおおオオオオ ……！！！」

一メートル。

二人は互いに雄叫びを上げて、剣を閃かせた。

文字通り、死力を尽くしたカイン渾身の上段斬り落としを。

スレインは半身で躲し、そのまま右腕を突き出して親友の心の臓
に剣を突き刺した。

騎士の咆哮は、静寂の中に解けて消えた。

「ごふッ、と吐血したカインは、しかしどこか満足げに微笑んでいた。

「…ありがとう、我が、親友よ…」

剣から、親友の硬直していた体が、緩やかに弛緩したのが伝わってきた。

スレインはもはや意識を亡くした親友の亡骸を抱き抱え、密やかに泣いた。

「…私は…」

私は、それでも…」

天井を仰いで、叫ぶ。

「お前を殺したくはなかったんだアア！！」

陰惨な魔人の犠牲者を前に、スレインが率いるウエセックス王国軍はその日、フィッチ王国首都グロスタシャーを制圧したのだった。

第六話 王都の黄昏 後編（後書き）

ご愛読していただき、本当にありがとうございます！

読者さまのおかげで、総読ページ数が千を超えました！

これからも精一杯頑張って投稿していきますので、どうかよろしくお願ひします！

第七話　　魔人は密かに笑う

当時のウェールズは、ブリテン島の西部に勢力を伸ばすケルト系小部族国家が乱立する、一種の地方名だった。

南部のドウムニア王国と同じく、マーシア王国を筆頭に栄えたアングロ・サクソン人の支配から必死に抵抗する者たちの集まりで構成されているため、その確執は時を経てあまりに深い。

特にウェールズは、隣接した国がマーシア王国のみであったため、両者の軋轢は想像以上に長い冷戦にもつれ込むまでに至っている。

マーシア王国の全盛期であったオフア王の時代　　当時の780年ごろ、オフア王はウェールズ地方とマーシア王国との間に、歴史的偉業とも言える建築物を建造した。

それは現在のイングランドとウェールズの国境線をも画定するほどで、かのフランク王国カール大帝も同様の城壁建築計画を企ていたが、断念したほどのものである。

ゆえに、その名は“オフアの防壁”と呼ばれている。

これは、マーシア王国より更に北部に存在する七王国の最後の一つ“ノーサンブリア”と、更にその北部に広がるスコットランドとの境界線に利用されている“ハドリアヌスの長城”に勝るとも劣らぬとされ、ウェールズの侵攻を防ぐ防波堤の役割を担っていた。

そのため、マーシア王国はウェールズとの永い戦争において、比較的少数の兵で領土を守ることができ、かつ、東部のイースト・ア

ングリアとの戦いに戦力を集めることができたのである。

しかし、それは一年前までの話だった。

ウェールズにおいて新しく誕生した、三人目の聖騎士の存在。

それが、マーシアがウェールズにも本腰を上げねばならなくなつた最大の要因であり、剣聖バールゼフォンが赴かざるを得ない理由でもあるのだった。

聖騎士は、同じ聖騎士でなければ倒せない。

たった一人で一騎当千の活躍を担う、戦場の怪物“聖騎士”たちの圧倒的な実力は、同じ聖騎士でなければ太刀打ちできないと言われるほどだ。

従って、聖騎士同士の戦争は必然と苛烈を極める。

特に、同じ時代に三人もの聖騎士が誕生することは極めて稀であるため、その睨み合いだけでも各国の戦力バランスを維持できるほどであった。

しかし二人は、両国の内情が足枷となっていて、互いの実力を最大限に発揮できぬまま、現在は冷戦にも似た睨み合いに終始していた。マーシアの内情は、一見すると潤沢に見える。

東西の二面戦争で疲弊しているはずの軍備や低下するはずの民意を損なうことなく維持できているのは、自分たちが未だ優勢であるとする情報操作と、軍力の象徴たる“剣聖”の健在、そして忘れられぬオファ王の栄光がその背景にある。

無論、それを裏付けるかのように勝利をもたらす剣聖の神懸かり的な働きがあつたのだが、逆に言えば、彼の間離れした活躍があればこそ兵の士気を維持できているとも言えなくはない。

二面戦争下において、隷属国である北部ノーサンブリアの叛乱をわずか二年で制圧し、さらに北部のスコットランドからの侵攻を壊滅的な打撃を与えて退けたとされる武勲は、まさしく聖騎士最強と誉れ高い“剣聖”の異名を持つに相応しい。

それゆえに彼の存在こそが、民意と兵力の危ない綱渡りを何とか保っている要であり、現マーシア王ベオルンウルフからも絶対の信頼を寄せられているのである。

しかし。

その実情に目を向けたなら、マーシア王国の逼迫した内政外交が浮き彫りとなってくる。

マーシアの傀儡だったウエセックス王国前国王ベルトリックが死亡した事実は、二面戦争で疲弊した国力を補う上納の多くを失うことを意味していた。

本来ならば、ウエセックスの次王にはベルトリックの子息が選ばれるはずであったが、当時のフランク国王カール大帝やローマ教会の意向が強く働いた結果、現国王エグバートが即位したのである。

これによって、マーシアの隷属国は北部ノーサンブリア王国と、東部のケント王国に絞られた形となり、両国から送られる上納資源によって、辛うじて内政を維持できているに過ぎなかった。

加えて現マーシア国王ベオルンウルフは精力的な好戦派であり、和平外交よりも征服支配に重視していたため、各国との交流は愚かにも眼下に見た物腰で進めており、なかなか進展することはなかったのだった。

そのために、看過すべからざる問題を両脇に抱え、さらに南部より宣戦を布告したウエセックスがフィッチ王国を制圧したとの報せを受けたベオルンウルフは、現在ウエルズ攻略に赴いている剣聖バールゼフォンを早急に呼び戻したのであった。マーシア王国を統べる現国王ベオルンウルフより、ウエセックス軍のフィッチ王国制圧が告げられた瞬間、バールゼフォンはわずかに眉を顰めた。

マーシア王国の中心に聳える“シルヴァネール城”、その巨大な白亜の王城の中層に位置する玉座の間。

あからさまな侮蔑と非難の視線を送る国王に跪きながら、しかし剣聖には寸毫の動揺さえもない。

歳は60代半ばか。

歳相応の白髪を後ろに流し、整った口元の髭も白いが、それらが実に男性的な魅力を醸し出している。

聖騎士の証である“聖銀の鎧”に隠された肉体は屈強で、無数の死線を潜り抜けた熟練の精鋭のみが持つ、研ぎ澄まされた刃の如き鋭い目が印象的であった。

ベオルンウルフは、目の前で微動だにせず言葉を待つ剣聖に、湧き上がる苛立ちを抑えながら言葉を繋げた。

「この時期に、よもやウエセックスまでもが参戦するなど百害あって一利なし、…あつて良い事態では断じてないな。

閑却しておけぬ北の問題がようやく片付いた今、やっと小煩い西のウエアールどもを叩き潰そうと腰を上げたは良いが、次は南ときている。

これは、我が国がナメられている証ではないか？」

国王が苛立ちを隠し切れぬ様子で小刻みに足拍子を踏む音を聞きながら、剣聖は静かに次の言葉を待つ。

「これほどの屈辱、我が国が始まって以来の失態であるぞ…！」

表層のみで物事を計りたがる愚昧な他の七王国どもが勝手に士気を上げるなど、面白くもなければ笑い話にもならんわ！

奴等…、まさか我が国に衰微の兆しありとても思い込むやもしれぬぞ…！

バルゼフォン！

貴公はこの失態をどう挽回するつもりだ？」

「恐れながら陛下

」

バルゼフォンは、王を不必要に不安がらせぬよう、ゆつくりと顔を上げた。

「フィッチ王国は建国以来、難攻不落として諸国に名を馳せた、堅牢なる自然要塞でございます。

聞けば、ウエセックスが我が国に宣戦布告をしたのが一週間ほど前のこと。

いかに聖騎士が指揮を取ろうと、かの国をこの短期間に陥落させることは困難。

ならば、フィッチ王国は我が国と袂を分かち、ウエセックスに寝返ったとも言えるかと。

なぜなら、フィッチ軍を束ねるカイン將軍は南の聖騎士スレイン

卿と親交が深い。

かねてより計画された宣戦布告である可能性がございます」「なんだと……？

ならば、フィッチ王国が我が国を裏切ったとでも申すか」

「でなければ、これほどの早期決着は不可能です。

そもそも、かの国は籠城戦をこそ武器とし、これまでも数多くのヴァイキングを退けた実績を誇ります。

間者を放とうにも、王都に入る新参者が現れた時点でカイン將軍自らが身分証明に直面するほどの慎重ぶり。

仮に、私がウェセックスの立場でも、グロスタシャーを陥落するには最低でも一ヶ月の猶予を必要とします」

「う、む……」

ベオルンウルフは少し逡巡してみせたが、すぐに顔を上げた。

「だが、それがどうしたと言うのだ？

むしろ、フィッチ王国がウェセックスについたとなれば、これは我が国にとって相当の痛手であるぞ。

それとも、三国を同時に相手取る自信が貴公にあると申すのか」

「いいえ。

我が国の国力と軍事力は、現状を維持するのに精一杯です。

ましてや三国を同時にとなれば、国民感情は一気に厭戦へと傾き、他国に付け入る隙を与えることとなるでしょう」

「ならば、どうすると言うのだ？」

「簡単なことです。

まずは東のイースト・アングリアと和平を結び、次いで西のウェールズと不可侵協定を結びます。

イースト・アングリアは度重なる我が軍との衝突で幾度も敗退し、その国力は疲弊する一方。

今回の和平によって、下降を辿る国力の回復に重視することができそうです。

また、西のウェールズも、昨年に現れた三人目の聖騎士によって士気は高まっていますが、所詮かれらは常に自らを至高と考える絶対君主たちが集う土地。

しかも我が軍はウェールズの王国の一つである“ポウイス”を陥落しており、どの国に対しても進軍を可能としている状況です。

あの聖騎士ならば、この不可侵協定を利用し、各国の連携を確固たるものとするべく必ず動きます。

我らは、その間に軍備を再編成し、南のウェセックスを迎え討てば

「ならぬ！」

颶風の如き王の一喝であった。

剥き出しの怒気がそのまま迸り、玉座の間を駆けて剣聖に突き刺さる。「そのようなヌルイ言を訊くために貴殿を呼び戻したのではないわ！」

我が国に齒向かう敵をすべて殺し尽くし、そして生き延びて繁栄してこそ、このブリテンの支配者たりえるのだ！

かつて、かの騎士王も我らがアングロ・サクソンを皆殺しにしてブリテンを守り抜いたように、我らもまた敵を皆殺しにすべきであるう！」

「陛下……！」

敵は一国ではないのです。

ましてや三方向からともなれば
「

「おやおや。

聖騎士最強を謳う剣聖ともあろう者が、まさか王の御前で弱音を吐こうとは
「

突如として、その声は玉座の間に響いた。

雷に撃たれたように狼狽する王と。

さらに眉間に皺を寄せて玉座の横に視線を刺す剣聖。

それは周囲の空気を直接振動させて奏でる“風”系統の初級精霊魔術であつたが、二人はそれを知らなかった。

「さしもの剣聖も、老いて博愛主義に鞍替えでもしたのでし
ようか？ バールゼフォン卿？」

玉座の裏側に据えられた二つの燭台に炎が灯り、闇に包まれていた空間を照らし出す。

何が起きたのか、王と剣聖はすぐに理解していた。

バールゼフォンが生まれる前、ベオルンウルフが生まれる前、さらに溯れば、マーシア王国建国よりも遙かな昔から、すでにこのブリテンに存在していたとされる闇の落とし子が今、忽然とそこに姿を現したのである。

しかし直前まで、玉座の裏側には誰もいなかったことを、視覚に頼らず第三者の気配を探っていた剣聖は確信している。

五感を研ぎ澄ませた自分に気付かせることなく、現れただけで戦慄を撒き散らす理不尽な存在にバルゼフォンはすぐさま立ち上がり、何時でも抜剣できるように姿勢を正した。

この怪異に剣聖が反応するよりも早く、魔人の目が細く開かれる。

真円に磨かれた黒曜石の冷たい光のように、何の感情も表さぬ瞳。

それはバルゼフォンの闘気を含ませた視線を飄々と受け流しながら、口元にひどく邪悪な笑みを浮かべて肩を竦めて見せた。

外貌だけを見る限り、魔人はまだ、どことなくあどけなさを残した、少なく見積もっても二十歳前後の青年であった。

「現れたか…」

この国に巣くう悪鬼め…！」

静かな殺気が剣聖から放たれた。国王は悲鳴を漏らして傍らの魔人に縋り付いたが、当の本人は剣聖の声の圧を柳枝の如くに受け流した。

「やれやれ、ずいぶんとせっかちですね、剣聖殿は…」

そう慌てなくとも、隙あらば何時でもこの首を斬り落として良いのですよ…？」

…ふふふふふ…」

多分に嘲りを含ませた微笑に、ベオルンウルフは両者の緊張感に居心地悪くなつて、合いの手を入れた。

「な、ならば、そなたは何か名案があるとでも申すのか？
ヴェンツェル殿…」

ヴェンツェルと呼ばれた若き魔人は、仰々しく頷いて見せる。
ただ彼が立っているだけでも大気が重く、まるで光も届かぬ深海
の重力になおさら墜ちていくような威圧感がそこにあった。

「陛下の思想は大変に素晴らしく、私もその意志に応え、微力ながらお手伝いをさせていただきたく存じます」

「おおッ！
それは頼もしい！」

ベオルンウルフは喜々として破顔したが、バールゼフォンはすぐにその真意を計るべく思索する。

「しかしその前に一つ、剣聖殿の的外れな推理を訂正しておかねばなりません」

「なに？」

「剣聖殿は先ほど、フィッチ王国がウエセックス王国と款を通じ、我が国と干戈を交えるつもりだとおっしゃっていましたね？」

「……………」

魔人の意図が判らず、バールゼフォンは沈黙に徹して次の言葉を待つ。

ヴェンツェルは、そんな彼の仕草一つ一つを舐めるように見つめ

ながら、充分に間を置いて口を開いた。

「残念ですが、フィッチ王国はウェセックス王国と志をともにしたわけではありません。」

むしろ逆。

フィッチ王国の必死の抵抗も虚しく、王都グロスタシャーは、聖騎士率いるウェセックス軍に壊滅させられてしまったのですよ」

「バカな!？」

「これは事実です。」

あなたがかつて、剣術指南をした一番弟子が、何の罪もない民をも殺し尽くして街を破壊したのですから…フフ」

途端、二人の中の緊張感が膨れ上がったかに思えた。

しかし、殺気の暴風は刹那にも満たず霧散し、剣聖は忌々しく魔人を見上げた。

「…ヴェンツェル…。」

貴様、何を企んでいる…!」

「別に何も。」

私はただ、陛下の夢を実現させようと尽力する忠実な僕ですよ。

…ふふふ…」「し、しかしだな。

ヴェンツェル殿の言う通り、本当にウェセックス軍がフィッチ王国を陥落したとなれば、これはもう一刻の猶予も許されんぞ!」

ヴェンツェルは頷いた。

「陛下の言う通りです。」

幸い、南の聖騎士がかの地で犯した悪虐非道の行いは国民感情を高め、王は大手を振って迎え撃つことができるでしょう。

しかしながら、我が国はすでに二面戦争中であり、南にまで割くほどの戦力はない…。

剣聖殿も、そうお考えなのでしょう？」

「……………」

「しかし、ご安心ください。」

東西の侵攻に関しては防戦に徹し、私が直接に指揮を取りましよう。

…そうですね。

剣聖殿に送る兵は二万ほどとなりましょうか。

この兵力ならば、ウェセックスと対等に戦えるでしょう？」

「それでは、東西を守る戦力が一万もない！

易々と国境を突破させるつもりか！」

「まさか。」

マーシアへは誰一人として入れませんよ。

ですから、剣聖殿は安心して、師弟対決に汗を流してくださいませ…ククククク」

「貴様…！」

並の兵士なら怯えて竦むほどの視線がパールゼフォンから魔人に向けられる。

ヴェンツェルの隣に座るベオルンウルフですら、次の瞬間には自

らの首が宙を飛ぶ幻覚が鮮明に目に映るほどであった。

「おお、怖い、怖いですねえ…。」

少しでも目を外せば、すぐにでも剣を振るいそうだ…フフ」

沈黙が、無数の針山となって肌を貫くようだった。

呼吸するにもためらうほど重苦しい静寂はしかし、王の声で唐突に破られた。

「止せ、バルゼフォン卿。」

ヴェンツェル殿は我が国にとって大切な存在だ。

マーシアがここまで勢力を広げてこられたのも、ひとえに、ヴェンツェル殿の助力あってこそなのだぞ」

「陛下、こやつは魔人。」

いつ寝首をかかれるか

「

「今はそれどころでもなかるう！

ヴェンツェル殿が東西を引き受けてくれると言っただ。

バルゼフォン卿。

そなたは南部より侵攻する、ウェセックス王国軍を撃破することに専念しろ！

…間違っても、昔の弟子だからといって手心を加えるような真似はするなよ」

「…御意」

最後に、薄く笑う魔人を一瞥し、剣聖は玉座の間を後にした。

その背中を、魔人はさも楽しげに見つめていた。

第八話　～四面楚歌の英雄～

マーシア王国の象徴たる王城、シルヴァネール城。

その三階、玉座の間からそう遠くない位置に、聖騎士最強と名高い剣聖の執務室はあった。

書庫とも見紛うほどに夥しい本を納めた本棚を背景に佇む、重厚感ある光沢を放つ木製の事務机。

永らく沈黙だけが漂っていたその部屋は、急遽として帰還した主が再び腰を落着けたことで、ようやく横溢する生氣を取り戻していた。

バルゼフォンは事務机の椅子に腰を下ろし、深い溜息をつく。

頑なに戦争を固持する王の強硬姿勢には、あの魔人が絶対的な後ろ盾として君臨しているからに他ならない。

そもそも、魔人ヴェンツェルがマーシアに参入した背景には、彼が自ら覇者オファ王へ接触したことが発端であるようだった。

西のウェールズに対抗する絶対的防衛線“オファの防塁”を創設できたのも魔人の暗躍があったとされ、永年の宿敵だったノーサンブリアを屈服させたのもヴェンツェルの功績があつてこそだと言われている。

両者の間にどのような話し合いが行われたのかについては、当事者の一人がすでに死去している時点で知る術はなくなったのだが、

フランク王国との対等外交をもって全アングロ・サクソン人の王を名乗ったオファ王の威光には絶えず、あの恐るべき魔人が陰で支えていたことは確かな事実だ。

現に、こうして魔人が健在である以上、その事実は疑いようもなかった。

彼の外見があまりに若すぎる、という不可解な事実を除けば、であるが。

「やはり、あの魔人を倒さぬ限り、王の姿勢は変わらぬか…」

その時、扉が軽くノックされた。

剣聖が入室の許可を相手に伝えたと、その人物は滑らかな動作で扉を開け、丁寧に礼をする。

「パールゼフォン様、失礼します」

入室したのは、凜とした美貌に輝く若い女性だった。

初見であれば、思わず息を呑むほどに整った繊細な容貌である。

艶やかに映える髪、白絹のように滑らかな肌。

高く細い鼻梁と理想的なフォルムを持つ唇が、驚くほど完璧に調和されていて見る者を魅きつける。

彼女の名はエリス。

パールゼフォンが深く信頼する副官にして、優秀な魔導騎士の一人であった。エリスは持ってきた飲み物をパールゼフォンの机に置くと、やや疲れた気振りを見せる彼を心配そうに見つめた。

「バルゼフォン様…。

毎度のことながら、心中、お察し致します」

エリスの心遣いに、剣聖は一口ほど飲んで自嘲気味に笑った。

「最初からわかっていたことだ…。

あの魔人がいる限り、王は考えを改めぬ。

…しかし…」

それでも、三面戦争は最悪だった。

東西の戦いはあくまでも隷属国からの上納物資があればこそ辛うじて可能な戦である。

東には防戦を基本とした戦術でもって兵力を維持させ、その間に西の聖騎士を早期に倒すことでウェールズの戦意を一気に削ぐつもりだったのだが、それよりも早くウェセックスが宣戦を布告したのが悔やまれた。

しかし、ウェセックスの宣戦布告そのものはバルゼフォンとしても予期していたことだった。

敵視していたオファ王が死に、去年に誕生した聖騎士がウェールズ連合軍を率いてマーシアに攻めてきた好機を見逃すはずはない。

その関門がドウムニアであつたのだが、まさか、これほど早期にヴァイキングを退かせるとは思わなかったのである。

「…まあいい。それよりも報告を聞こうか」

はい、とエリスは頷いた。

「東のイースト・アングリアは現在も国境警備に力を入れており、内政に従事しています。」

これは我々が消極的な姿勢で前線を維持しているためであり、以前として我が国に侵攻する気配はありません。

西のウェールズについても同様です。

バルゼフォン様が帰還なされたことで、我が軍は一度ポウイスに前線を後退させたのですが、それを機に、かの聖騎士も前線から姿を消している模様です。

どうやら、ウェールズ内における各国の連携強化に向けて動いているようですが、まだ詳細な情報は不明です」

「そうか…。」

引き続き、西には警戒してくれ。アレは、スレインよりも危険な存在だ」

「分かりました。」

…それとフィッチ王国の件ですが、どうやら魔人が言っていたことは本当のようです」

「街が壊滅的な打撃を受けている、と？」

「グロスタシャーに向かった密偵は国王直属の暗部が数名ですから、裏付けとしては確かかと。」

…ただ、街の破壊が、ウェセックス軍が侵攻した後か、その前かについては、まだ不明ですが…」「ウェセックスがグロスタシャーを壊滅させて得られるメリットは存在しない。

…第三の勢力、ということとは？」

「ヴァイキングであれば、ウェセックスがドウムニア王国と交戦していた際にヴァイキング総指揮官の殺害に成功しており、彼らは一時撤退を余儀なくされております。」

そのため、現在では目立った動きがなく、態勢を立て直している
と予想されます。」

また、フィッチ王国と隣接していたウェールズ側も同様。

我が軍との睨み合いの最中に、わざわざ戦力を割くような愚策は
しないはずです」

「この時期、フィッチを攻め込むとすれば、もはやウェセックスし
か存在しないが…、気になるな。」

魔人は、城にずっといたのか？」

「はい。」

監視させている密偵によれば、魔人はこの一週間、城からは一歩
も出ていないと」

パールゼフォンは怪訝な面持ちとなって、目を細めた。

「…解せんな。」

街一つを壊滅させる力など、見過ごすわけにはいかんが…。

まずは犯人を突き止めねばならぬか」

「引き続き、調査に当たらせてます」

「頼む。」

もし、それがヴェンツェルの仕業であつたなら、ヴィヴィアン殿
に相談せねばなるまい」

エリスは神妙な面持ちで疑問を口にした。

「湖の乙女、ヴィヴィアン…。」

かつて、ブリテンに君臨した騎士王の助言者を幽閉したと言われる人ですね…？

あの方は、今なにをしていらっしゃるのでしょうか？」

「ヴィヴィアン殿は、魔人の結界を抑えておるのだ。

そのせいで身動きが取れず、我ら聖騎士に想いを託したのだ。

…尤も、三人が三人とも、互いを牽制し合う形となってしまうたわけだが…」

そう言つて薄く笑うパールゼフォンの気持ちは、エリスに痛いほど伝わってきた。

今は国同士で争っている場合ではないのだが、それを説明したところで証拠立てるものは何もない。

仮にパールゼフォンが魔人の暗殺に成功したとしても、功績だけを言うなら、ヴェンツェルはマーシア王国の英雄である。

最悪の場合、国家反逆罪となつて死刑になる可能性があり、もしそうなつてしまった場合、もはやマーシアには周囲を取り巻く三国の脅威を打破する力がない。

ゆえにパールゼフォンは、戦争を早期に終結させた上で魔人を倒さねばならなかったが、そのための問題はまさしく山積みであるのだった。「パールゼフォン様…」

エリスは何かを言おうとしたが、複雑な表情で言い止めた。

「…では、次にウェセックス王国軍の動向についてご報告いたします」

剣聖が頷くのを見てから、エリスは言葉を繋げた。

「聖騎士を指揮官とする第一・第二騎士団および第二魔導兵団で構成された主力の一万は、王都グロスタシャーを陥落後、同王国内のウスターシャー、バスを制圧し、事実上フィッチ王国を征服しました。」

現在は王都グロスタシャーに戦力を集めてはいますが、街の大破壊によって城壁ともども激しく損傷しているため、城壁の復旧作業に当たっている模様です」

「当然だな。」

グロスタシャーは天然要塞だ。
多少の時間をかけてでも外壁を修復させる価値はある」

「また、ウェセックス王都には第二騎士団および第一魔導兵団の約五千が在留しており、ドウムニア王国の王女も、かの王城で身柄を拘束されているようです」

「第一魔導兵団…、イングラムの部隊だな。
…なるほど。」

よほど魔人による王都の奇襲を警戒していると見える」

「ウェセックスは、我が国に宣戦を布告した際、東の三国に不可侵条約の密約を持ち掛けています。」

これはケント王国からの情報なのですが、どうやら、かの国にはフランク王国からも圧力をかけられているようですな。

迂闊には身動きができない状況にあるようです」

「だろうな。」

ドウムニアを平定した今、我が国を攻めるうえで懸念すべきは、東から挟撃をかけられることだ。

撤退したヴァイキングに怯える必要がない以上、地盤を固めずに攻勢へと打って出るのは無謀を通り越して自殺行為だ」

「しかしながら、グロスタシャーの惨劇を聞きつけたエセックス、サセックスの両国は、まだ密約を受け入れるか決めかねているようです。」

これらのことから、ウェセックスは進軍に難しい立場にあり、復旧作業に従事していると思われます」

「テムズ川のベンシングトンはどうした？」

「まだ我が国の勢力下に置かれています。」

ウェセックスは東に対する武力的な圧力を配慮して、あえて制圧に乗り気でないようですが、我が国への侵攻を考えるとそれも時間の問題かと」

「ふむ……」

バールゼフォンは口元に手を当てて思案する。 こちらの兵力は二万。

対するウェセックスの兵力は、スレイン率いる主力が一万、そしてイングラム率いる後衛が五千ときている。

兵力で言えばこちらがわずかに有利だが、東西にも敵を抱えている以上、下手に兵力を消耗させることはできない。

戦いはウエセックスだけでは終わらないのだ。

しかし、だからといって、スレインやイングラムを相手にすると
なると、これは余力を残して勝つことは難しい。

イングラムと言えば、長年ウエセックスを支えてきた智略とその
魔力をして名があり、剣術指南をしていた頃から才能のあったスレ
インは湖の試練を経て、さらに実力に磨きをかけたはずである。

いかに剣聖と云えど、油断や慢心をもって挑めば、敗北は免れぬ
難敵であるのは明白であった。

しかしながら、バールゼフォンは己の肩書きである“剣聖”に毛
ほども頓着していない。

そもそも、バールゼフォンの思考にあるのは真実だけである。

戦争に善悪は存在しない。

犬の死体も人間の死体も、基本的には同じであると彼は考えてい
る。

いかなり価値観も美意識も、絶対的な“死”を前にすれば、その
者の本性が剥き出しとなって簡単に逆転することを彼は知っている。

自分が生きるということは、他人を殺すこと。

勿論、これは極論の一つにすぎない。

しかし、これもまた厳然たる事実であり、彼が他者の死を冷徹に
見届け続けた結果に至った、生の本質の一つであるのだった。

ただし、彼は身勝手な殺人肯定者でもない。

彼は聖騎士とはいえ、戦争において多くの人間の命を奪ってきた。それが仕事であり、そして自分と仲間と国が生きるための行為であるからだ。

しかしその一方で、自分の命を晒したうえで、自分の信じる生の原理に忠実であろうとする生き方が介在する。

即ち、殺人を肯定する負の生き方を貫くには、それに相応しい正の生き方を自分がしなければならぬという厳しい自己規定があるのだ。

今までに無数の人間の命を奪っていながらも、それが心に一点の影も落としていない剣聖の心の在り方は、万人とは一線を画す、超現実に存在するものであった。

そしてそれは、より客観的な事実を捉えるうえで重要なアイデンティティでもある。自分の能力と相手の能力とを見極め、分析し、あらゆる思考や努力を重ねて勝算を極限まで高めていく。

そこには剣聖であるがゆえの驕りも、いかなる相手に対する侮りもありはしない。

どのような状況に置かれても、彼の目は真実だけを捉え、そしてただ生きるために彼はすべてを賭ける。

生きてきたすべてと、これから生きるであろうすべてを。

長く感じられた剣聖の思案は、しかし実際には数秒程度のものであった。

バールゼフォンは俯いていた顔を上げ、じっと待つエリスに目を

向ける。

「厳しい戦いはいつものことだが、今回の作戦はお前の成否にかか
ることとなる。」

… やってくれるな？」

「ハッ。」

この命、すべてはバールゼフォン様のために」

問われるまでもないと言わんばかりに、エリスは一切の躊躇もせ
ずに断言した。

「ありがとう、エリス。」

では、まず作戦の概要だが…」

かつての弟子が相手であるというのに気負いの一つもないバール
ゼフォンの姿勢に改めて心奪われながら、エリスは一つ一つ噛んで
含めるように説明する剣聖の言葉に耳を傾けていた。

第九話　く友達く

ウェセックス王が居住する王城“フィダックス城”には、その三階に小さいながらも、手入れの行き届いた庭園が存在する。

これは、執務の疲労を少しでも緩和するためにイングラムが設けさせた申し訳程度の自然であつたが、城から出られぬ事情を持つ人間たちにとっては、ささやかな憩いの場として親しまれていた。

東三国への密約交渉の任を終えたグレッグは、久方振りの休日にヴィクターの姉であるルナを連れて、庭園に息抜きにきていた。

「ッ、かあゝ！」

やつぱりこう、花に囲まれてると空気が違うよな。

いや、花よりも綺麗な人がいるからこそ、味わいも格別に深まるってヤツかね」

両手をめいっぱい広げて深呼吸を繰り返したグレッグは、後ろの腰掛けに座る少女に向き直る。

「ルナちゃんも、あんな部屋に閉じこもりつきりじゃあ、気も滅入るでしょ？」

ルナと呼ばれた少女は、少しだけ微笑んだ。

「そんなことは、ないかな。

あの部屋も、昼は陽の光が暖かくて、気持ちがいいし、夜は、ちよつぷり心細いけど、二人が作ったくれた、木のお人形があるから、大丈夫だよ」

「オワチャ〜！」

あれ、まだ持ってたんだ？

恥ッずかしいなア」

ヴィクターとグレッグは、以前、あの小部屋で一人きりのルナに對して、少しでも寂しさを紛らわせようと、彼女の誕生日に木彫りで作った人形をプレゼントしたことがある。

ヴィクターは、手先が器用なこともあつてそれなりに人型をした木彫りを作れたのだが、不器用なグレッグは指先を乱雑に切り付けながら四苦八苦して、ようやく人に見えなくもない木彫りを完成させたのだ。

元々、芸術などにはてんで無関心だったグレッグである。

料理の店を出すことが夢だったヴィクターと違って、他人のために一から工作したのも初めてなら、その処女作を意中の人に手渡すなど、到底かんがえられぬことであつた。

幸い、と言つては本人に失礼極まりないが、それでも明らかに歪な木彫り人形を、ルナが実際に見ることができないというのは、彼にとって本当に溜飲が下がる思いである。

「もちろんだよ。

二人からもらった人形は、私の大切な宝物…。

ありがとうグレッグ」

不意打ちの感謝の言葉に赤面しながら、グレッグは狼狽する心臓を必死に落ち着かせた。「え？ あ、いやア…、そんな、感謝され

るほどのモンじゃないからなア…、あ、アハハ…」

照れ隠しの笑いでごまかしながら、グレッグは言葉を繋げた。

「それよりも、ホントに良かったのか？」

そりゃあ、誘ったのは俺だけどさ、ルナちゃんの身体が第一なんだから、無理しなくていいんだぜ？」

ルナはにつこりと微笑んで、首を振った。

「ううん、大丈夫。」

今日は、身体の調子がいいから、誘ってくれて、嬉しかったの。安心して。

辛くなったら、その時は、ちゃんと知らせるから」

「分かった。」

…けど、随分と難儀な身体だよな。

ヴィクターがいない時に限って、身体の調子が良いんだからさ。たまにはあいつだって、ルナちゃんと一緒に、こーゆートコでのんびりしたいだろうに」

この時、グレッグは庭園の外側を囲む手摺の向こう側に広がる景色を眺めていて気付かなかったのだが、ルナの表情はゾツとするほどに凍り付いていた。

しかし、グレッグが再び振り返った時、その表情は崩れていた。

「…仕方ないのよ。」

私たちは、運が悪かったの。

世の中、どうしようもないことは、本当に、どうしようもないか

ら…」

「ま、そりゃそうだ。

俺なんか、西に行ったり東に行ったりで、ホントに大忙し。

こないだの仕事なんて、手紙とどけるだけで東の三国を巡り巡って、結局、相手がいないときたもんだ。

…あー、他に就職先みつからねえかなア…」

ルナは微笑んだ。

「配送屋さんも、大変なのね…。

ヴィクターも、今はどこかに、出かけているのよね…?」

「あいつなら、今頃はフィッチ王国に行ってるはずだぜ。

どうやら、俺たち男衆は他人のラブレターに縁があるみたいでね」

ルナは、破顔した。

「ふふ。

そんなこと、ないわ。

あなただって、ヴィクターだって、見つけようと思えば、きっといい女性が、見つかるもの」

「…そうだな。

少なくとも、俺の女神はやっと笑ってくれたし、今はその答えで良しとするか」

首を傾げる愛らしい少女に呵々と笑ってごまかすと、グレッグは不意に騒がしくなった庭園の入口へと目を向けた。

「もういいでしょ！」

逃げたくても逃げられないんだから、監視したって意味ないじゃない！」「そうはいきません。

我々は、お客人である貴女様の安全を護るためにいるのです。

これは王の御下命であり、我々は職務を全うするため、貴女様のお側を離れるわけには
「

「あー、もうッ！」

その言葉は聞き飽きたわよッ！」

入口の前に姿を現したのは、まだ年の頃十七・八といった若い女であつた。

ドレスからすらりと伸びた肢体、長い髪をたなびかせて声を荒げる表情もまた、グレッグの目には見目麗しく見えた。

どうやら、彼女は護衛の任務に就く騎士二人を相手に、癪癪を起こしているようだった。

「グレッグ、何か、あつたの…？」

入口近くの喧騒に気付いたルナが、怪訝そうに尋ねた。

「どうやら、王女様は今日もご機嫌ナナメみたいだな。

…ま、自分の国に攻め込んできた敵国の本拠地で捕虜となつてんだ。

誰だって良い気分で過ごせるわけがないわな」

彼女の名はジュリア。

かつて、ウェセックス王国と激戦を繰り広げたドウムニア王国の

王女である。

「私にだって、たまには外で一人になりたい時があるわ！
あなたたちも騎士なら、そんな女心の一つくらい汲んでくれたっていいじゃない！」

「そ、そうは申されましても、こればかりは、何とも」

困惑して口ごもる騎士たちの態度に苛立ちを募らせた様子のリアは、ふと、グレッグたちの視線に気付いた。

庭園に足を踏み入れ、そのままグレッグたちの前に立ち止まると、腰に手を当てて、その瑞々しい唇を尖らせた。

「…ちょっと、なに見てるのよ。
私は見世物じゃないんだけど」

グレッグは、慌てて跪いた。

「王女様、大変失礼を致しました。
ただ、こちら騒ぎが気になりましたがゆえ、どうか、お許し下さい」

「も、申し訳ありません、王女様。
ご無礼を、お許しください あッ」

ルナもまた、慌てて腰掛けから立ち上がろうとしたが、足の踏ん張りが利かずに膝から崩れ落ちそうになった。

しかし、グレッグが寸前で支えたおかげで怪我もなく、事なきを

得た。

ジュリアは、釈然としない様子ながらも、一応は納得してくれたようだった。

「…まあいいわ。

ところであなたたち、ここで何をしてるの？

お邪魔だったら、失礼するけど」「いえ、とんでもありません

」

口を開いたのは、ルナの方だった。

「今日は、身体の調子が、良かったものですから、私が願いをして、ここに連れてきて、もらったのです…」

「身体の調子…？

…そう言えば貴女、ずっと目を閉じているけど、もしかして目が見えないの？」

ルナは恐縮そうに、すみません、と応えた。

グレッグは、ルナを援護するように付け足した。

「彼女は、生まれつき身体が病に冒されているのです。

そのせいで、この王城どころか、部屋から出ることも難しく…。それで私が無理やり彼女を連れ出したのです」

互いに底い合う二人の話を聞きながら、ジュリアは少し面伏せた。

「…そう。

「ごめんなさいね、余計なことを訊いて」

「いいえ、もう、慣れていきますから…」

「隣、いいかしら？」

「あ、はい、どうぞ」

ジュリアはルナの横に腰を下ろした。

護衛の騎士は、周囲を窺いながら庭園を調べていく。

「あなた、お名前は？」

「私は、ルナ、と申します」

「そう、ルナ…」

良い名前ね。

私はジュリア。

お互い不自由な身の上同士、仲良くしましょ」

「え、あ、あの…」

ルナは、少し困惑した表情を浮かべた。

「あら、敵国の王女とは、お友達になれないのかしら？」

ルナは、慌てて首を振った。

「い、いえ、そんなことは…」

…ただ、私のような平民が、王女様と、お友達になるなんて、とても恐れ多い、ことですから…」

ジュリアは苦笑した。

「そんなことは気にしなくていいわ。

ここじゃあ、私の肩書きなんてただの飾り。

ただ、王家の血筋を守るために差し出された、生贄なんだから。

…それに…」

ジュリアは、少し遠い目をして、言った。

「あの国でも、私には、友達と呼べる人なんて、一人もいなかった

…」

「王女様…」

ジュリアは少し目を瞑ると、少し微笑んでルナに向き直った。

「だからね、あなたとはお友達になりたいの。

普通に女の子の話をして、普通の女の子として遊びたいの。

…私は、貴女の前でだけは、女の子としていたいなのよ」

「」

「それに、貴女はきつと嘘をつかない。

痛みを知っている人は、すごく優しい顔をしてるって、ばあやが言ってたわ。

…それはきつと、貴女のことなのよ」「そんな…！」

…私は、そんな、大それた人間じゃあ、ありません…」

ジュリアは苦笑した。

「私もよ、ルナ。」

王女なんて肩書きはあるけど、私も一人の人間なの。
ただの女の子なのよ。

だから、私たちはある意味、似た者同士だと思わない?」

「王女様…」

「王女なんてよして。」

私のことは、ジュリアでいいわ」

「えッ…!？」

あ、いや、あの、でも…、それは、…」

「別にいいじゃない、名前くらい。」

ほら、世界は、ほんの少しの勇気で変わるものよ」

困惑ながら俯いたルナは、しかし時間を置いて意を決したのか、
面伏せていた顔を上げてジュリアに振り向いた。

「あ、あの…。」

それじゃあ、…ジュリア、さん…、よ、よろしくお願いします…」

「こちらこそ、よろしくね、ルナ」

「良かったですね、王女様、ルナちゃん」

二人は、グレッグに顔を向き直した。

「ありがとうございます」

「あら、あなた、まだいたの？
少しは空気を読んでほしいものだわ」

グレッグは、ちよっぴり切なくなった。

「いや、あの…せめて、私もお仲間に入れていただけると嬉しいのですが…」

「ジュリアさん…、グレッグは」

「ああ、はいはい、分かってるわよ。

ま、ヴィットーリオじゃないのは残念だけど、ここはあなたでもいいわ。

よろしくね、グレッグ」

「ありがとうございます、王女様」

グレッグは略式に礼をした。

しかし、どことなく嫌な予感がして、グレッグはあえて尋ねてみることにした。

「ところで、ヴィットーリオとは…？
こちらにいる方なのですか？」

ああ、とジュリアは少し微笑んだ。

「ヴィットーリオは、私をこの城まで護衛してくれた男の子のこと

よ。

いつか白馬の王子様が私を連れ去ってくれないかと星に願ってたんだけどね。

でも、すごくカッコいいのよ、彼。

白馬でもないし、王子様でもないけど、あれはきっと運命に違いないわ……！」

おもむろに立ち上がっては感慨深げに両手を胸に合わせるジュリアに、ルナは微笑んだ。

「女の子の夢ですよ、ジュリアさん」

「でも、なかなか見つからないのよね、彼……」

ここにいると思うんだけどなア……」 そりゃそうだ、とグレッグは心の中で呟く。

ヴィクター。

ヴィットーリオ。

道中、王女に名を尋ねられた蛇が、危うく本名を口走りそうになって機転を利かせた偽名に違いないのだから、この世に存在しない人物を捜したところで見つかるはずもない。

直接、本人と会ってしまうような事故が起きればそれまでだが、まさか王女と自分の姉が意気投合してしまうなんて事態は、さすがのヴィクターも予想外にあるはずだった。

しかし、なるほど。

ヴィクターがすんなりと、このおてんば王女を護送できた背景に

は、誰あろう王女自身の恋心にあつたとは。

グレッグは心の中で、今は遠く離れたヴィクターの波乱万丈な未来を想像して、笑いを堪えるのに一苦労したのだった。

第十話　手向けの花は慎ましく

グロスタシャーの一廓に、その霊園はあった。

本来なら、遺骸を平棺に入れて土葬するのだが、黒犬の苗床として街を彷徨っていた人間たちの数があまりに膨大であったため、墓穴を一つにして、まとめて埋葬することとなったのである。

本来なら、そのまま火葬とされても戦時中なら仕方がなかった。

元より、黒犬に寄生されていた人間は優に百を超えており、各人の素性を把握することは困難を極めたからだ。

しかしスレインは、それら死者のすべてをまとめて埋葬することで、せめて彼らが、人間として葬られたことを力タチでだけでも示したかったのである。

それは、あるいは、恣意的な自己満足であつたのかもしれない。

だが、親友は人間としての死を切に願い、彼の剣で散っていった。

ならば、魔人の哀れな犠牲者すべてを人間として埋葬することで、スレインは自分なりの哀悼の意を表したのである。

「すまない、カイン…」。

本当なら、もう少し花を集めたかったのだが、生憎と、この辺りでは、こんな小さな花しか見つけれなかったんだ。

…許してくれ…」

最後の言葉は、果たして何に対してであつたのか。

指先にほんの少し力を入れただけでも簡単に折れてしまいそうな花を一輪、わずかに盛り上がった土の上にそつと置く。

黄色の花冠を咲かせた花卉が、思い出したように吹く微風に揺らいで哀愁のアクセントを添えた。

「貴公の仇は、私が必ず討つてみせる。

だから今はまだ、思い出の中で笑っていてくれないか……」

勿論、応えはない。

静寂の向こう側に幻想するそれは生と死の境界線であり、此岸と彼岸を隔てる三途によって、とうに接点を失っている。

死者は土葬され、自然の一部に還ることで生者のために滅びゆく。

そうして両者は、血縁的にも地縁的にも、霊的にも命脈を構え、生者は死者のために祈り、死者は生者のために完結する。

死は信仰に似ている。

いつもと変わらぬ通り道の暗闇に意味もなく怯えてしまう時、人は不意に物の怪を思い出して足早に前を向くように。

それが絶対不変であるがゆえに畏れ敬い、間違つてもそこから死者が蘇らぬよう、起き上がらぬように丁重に屠るのだ。

ならば、墓は祈りの象徴であるのかもしれない。」「ス

レイン様」

背後の気配に、しかし聖騎士は振り返ることなく応える。

「その声は、蛇か。
何用だ」

「イングラム様より預かった、書簡をお持ちしました」

スレインは蛇より書簡を受け取り、内容を確認する。

それは、今後の動向が記された作戦指令書であった。

フィッチ王国を陥落した以上、マーシアは必ず動く。

それが魔人であるのか、それとも剣聖であるのかは不明だが、どちらにせよ強敵であることに変わりはなく、ここから先はスレインとイングラムが合流して部隊を指揮する必要があった。

しかし、ウエセックス王都ウィンチェスターを北上した先に存在するテムズ川中流の街ベンシングトンが、未だマーシア王国の支配下にあるため、イングラムは、このベンシングトンを陥落してから合流することである。

この街を制圧すれば、マーシア側からの王都直進を避けることができる、こちら側は攻略において補給線を確保することができる。

ゆえに、ベンシングトンを陥落させることはウエセックスにとって非常に旨味がある戦略的価値を持つが、先の聖騎士進軍においてベンシングトンを避けたのは、不可侵条約を背景とした東三国に余

計な圧力をかけたくなかったからだった。

それは、難攻不落たるフィッチ王国を陥落させることで密約を決意させることができると踏んでいたのだが、そのフィッチ王都グロスタシャーが壊滅的惨状に陥り、しかもその様子が三国に知れ渡っているため、むしろ密約の締結に難色を示した按配であるのだと言う。

その結果、ウェセックスは東にも警戒しなくなっただが、密約の提案と同時に各国の状況を調べさせた様子では、どうやらウェセックスへの挟撃を画策できるほど内情は潤沢でなかった。

そのため、イングラムは多少のリスクはあるものの、このままベシンングトンに陥落し、スレインと合流することで本格的なマーシア攻略に向けて準備を整えようとしているのだった。

だが、イングラムからの情報によれば、何も悲観的な報告ばかりではなかった。

マーシアの東、イースト・アングリア王国が、ウェセックスの動きと連動した共闘作戦を展開する案を受諾したのである。

これによって、マーシアは南と東から同時攻撃を受けることとなり、勝率は飛躍的に高まる見通しであるのだった。「……なるほど。さすがはイングラム殿だ。」

この手回しの良さには感服する」

スレインは、こと戦の作戦であれば引けを取るつもりはなかったが、このようなブリテン全体の動きを見通した上での戦略には、長

命にして博識たるイングラムには及ばなかった。

元々、スレインとイングラムとでは役割が違う。

スレインが戦場の花であるのなら、イングラムは戦争の花だ。

そして、だからこそ、二人は無意味な確執もなく互いの力を十二分に発揮できていると言えるのだが。

「では、私はこれで失礼いたします」

早々に身を引こうとした蛇を、スレインが制した。

「待て。」

蛇よ、お前はこの書簡を届けるためにわざわざ来たのか？
確か、蛇のコードネームは暗部の中でも特に優秀な者に与えられると聞いていたが…、だとすれば、他にも任務があるはずだ」

蛇は再び跪いた。

「さすがはスレイン様、鋭きご慧眼に改めて敬服いたしました」

一拍おいて、蛇は言葉を繋げた。

「私はこれよりウェールズに赴き、対マーシアとの戦に備えた共同作戦を提案するべく、ダヴェッド王国を訪問する予定でございます。敵の敵は、少なくとも利害が一致する以上は、敵ではないとおっしゃっておられました。

即ち、東西南による、三国同時攻撃。

これがイングラム様の真の狙いでございます」

「ふむ…」

スレインは険しい顔で思案する。

「ダヴェッド王国と言えば、昨年に三人目の聖騎士が誕生した地であつたな。

…なるほど。

確かに、聖騎士が二人も揃えば魔人を倒す勝算も見えてくる。

だが、かの地はウェアールどもが集まる連合国だ。

そう易々と共闘を受け入れるとは思えんが…」

ダヴェッド王国は、ウェールズでも最西端に位置する国であり、その歴史は古い。

中でも、かの国には、“ケルトの秘宝”と呼ばれる財宝が眠ると言われ、周辺諸国から虎視眈々と領土を狙われているのだった。

そして昨年に誕生した聖騎士の出現により、ウェールズ内の勢力バランスは大きく崩れ始めた。

対マーシアにおいて、一時的な連合軍を形成しているとはいえ、その内情は誰が至高王となるかの権力争いである。

そして連合軍を率いる将が失態を晒した場合、むしろ喜々としてその将が所属する国の責を問うのが常であつた。言わば、彼らは互いに互いの足を引っ張り合いながら、しかし自らを連合国の中でも最大の王となるべく、互いに牽制し合っているのである。

連合軍を形成しているのも、ブリテンに侵入した憎々しいアング

ロ・サクソン人による支配から抵抗するためという、絶対的に妥協しなければならぬ一線からであり、それがなければ今にも互いの国に侵攻しようと息巻く者たちが大半なのだ。

現在、連合軍総指揮官である三人目の聖騎士も、そうした悪しき慣習を孕んだ王たちの睨みがあつて思うような作戦行動が取れずに後手後手に回っているのだが、それでも剣聖を相手にウェールズを守りきった手腕は、さすがに見事な非凡の発露であると言えるだろう。

イングラムはそこに目をつけ、打倒魔人を名目に掲げることによって聖騎士に共同作戦を提案し、ウェールズ連合軍の協力を得ようと試みているのだった。

「無論、交渉が難航することは想定内でございます。
ただ、我々にはウェールズに対する敵意がないことを明確に伝え、マーシアとの戦いにおいて、三巴となるような按配にすることだけは是が非でも避けなければならない、と話されておりました」

「確かに、我々の存在自体を快く思わぬウェールズからすれば、互いに潰し合う我々の脾腹を突いて漁夫の利を得んとする考えもできるだろう。

ウェールズの聖騎士がいかなる人物かは知らぬが、御師様の攻勢を防ぎきった者だ。

できるならば協力は得たいところだが、…やはり難しいだろうな」

蛇は頷いた。

「そのため、万が一にもウェールズ側の捕虜となって本国の情報を漏洩されてはならぬため、私一人の単独任務として任された次第で

「ごじます」

スレインは、得心いったように微笑んだ。

「そうであつたか。…しかし、単独任務とはまた困難な仕事だな。…どうやら、お前はつくづく最難度の任務に縁があるようだ。

しかし、それだけイングラム殿に期待されているということの裏返しでもある。

…頑張れよ」

「ハッ。それでは、失礼いたします」

蛇は略式に敬礼をして踵を返した。

スレインは再び墓に向き直り、思い出の親友に微笑んでみせた。

「カイン…」

貴公は死すとも、その志は私が受け継いで実現してみせる。

見守っていてくれ…、我が親友よ…」 弔いの風が、スレインの髪をさつと撫でた。

墓前の厳粛な静寂に思い出を乗せて、聖騎士は改めて、打倒魔人に向けた覚悟を決める。

あのような悲劇を繰り返させぬためにも、聖騎士は、たとえ刺し違えても魔人を討つ決意を固めたのだった。

第十一話 く静かなる闇 前編く（前書き）

やってしまいました…。

二話連続投稿です。

今回では、部隊間の戦争ということもあり、少しばかり特殊な書き方をしているため、それを邪道だと思われる方もいらっしゃるかもしれません。

あるいは、パソコンでお読みいただいている読者の方々も見づらくなってしまうかもしれません。

それらを重々承知したうえで、まずはここで謝罪いたします。

しかし、より戦場における部隊間の緊張感をお伝えするための苦肉の策であることを、どうかお許し下さい。

今後も、目まぐるしい視点転換がある場合は、こうした方法を使っていくかもしれませんが、予め、ご理解のほど、よろしくお願い致します。

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございます。

では、引き続き、本編をお楽しみください。

第十一話 く静かなる闇 前編く

グロスタシャー陥落より、二週間後。

難攻不落で知られるフィッチ王国を陥落したウェセックス軍に対し、マーシア王国軍の指揮を一任された剣聖バルゼフォン卿は、ついに軍を南下させた。

剣聖が率いるマーシア王国軍二万に対し、グロスタシャーに駐留していたスレイン率いるウェセックス王国軍一万は東へと出陣し、本国から北上するイングラム元帥指揮下の援軍を孤立化させぬために行動を開始する。

イングラム率いる部隊は五千という少数であるため、スレイン率いる主力に合流の一時断念の伝令を送り、当初の予定通り、テムズ川中流の街ベンシングトンを陥落することで防備を整え、マーシア王国軍に対する防衛線を構築した。

西にスレイン、南にイングラムと挟まれたバルゼフォンは、これらウェセックス軍の動きに対して自らも軍を二分化し、自身率いる本隊一万は西のスレインへ、そして副官エリス率いる別動隊一万を南のイングラムの部隊へと進軍させようとしていた。

その一方、時を同じくして、ウェセックス軍との共闘姿勢を示していた東のイースト・アングリア王国は、剣聖バルゼフォン率いる二万の主力が出陣した情報を受けると同時に行動を開始し、マー

シア王国との国境線に聳えるリュジット砦へと進軍した。

マーシア軍の支配下にあるリュジット砦には、兵力がわずか二千ほどしか存在しておらず、対するイースト・アングリア王国は温存していた一万の主力を、若くして將軍に抜擢された騎士セレスに一任し、砦の攻略に向けて動き出したのである。

しかし、その砦前には捕虜となっていた自軍の兵士たちが無残な姿となって、しかも生きたまま十字架に張り付けられており、意気軒昂と出陣した彼らの士気を、その怨嗟と絶望の呻き声によって削ぎ落としたのである。

等間隔に並べられた、合計百にも及ぶ十字架に進軍を躊躇うイースト・アングリア王国軍の前に現れたのは、自ら東西に対する防戦を買って出た男、魔人ヴェンツェルその人であった。

『マーシア王国軍』

マーシア王国軍は、丘陵地帯コッツウォルズにて進軍を一時的に止めた。

ここから西に行けば、聖騎士スレイン率いるウェセックス王国軍の主力一萬が。

そして南に下れば、ベンシングトンを制圧した智将イングラム率いる五千の軍と遭遇することになる。

つまり、剣聖たちが今いるこの地点は、ちょうど双方にとっての中間に位置しているのだった。

それゆえに、バールゼフォンとエリスは当初の作戦通り、ここから軍を二分化して進軍するうえでの最終的な打ち合わせをしていた。

「では、バールゼフォン様。

私は予定通り、ここから南に向かいます」

エリスの言葉に、剣聖は頷いた。

「こちらは釘付けにしておく。

だが、無理はするな。

お前が倒れれば、私は最も信頼する部下を失うことになる。

それだけは、さすがの私も我慢できぬからな」

「バールゼフォン様……」

エリスは、艶のある婀娜な瞳でまじまじと剣聖を見返すと、次の瞬間には己の感情を厳然と律した凜々しき騎士の表情を浮かべた。

「……では、行ってまいります。

必ずや、成功をバールゼフォン様に！」

遠ざかるエリスの背中を見届けた後、バールゼフォンはこれから交戦することとなる、かつての一番弟子のことを思い出して西の方向を見やった。

「……さて、スレインよ。お前が湖の試練に招かれて久しく会っていないかったが、その間に成長したお前の実力、ゆっくりと見せてもらおうぞ……！」

剣聖は、不敵に微笑んだ。

『ウエセックス王国軍 聖騎士スレイン』

聖騎士スレイン率いるウエセックス王国軍の主力一万は、丘陵地帯コッツウォルズの西側に部隊を待機させていた。

このまま敵マーシア王国軍が南に向かうようであれば後方から挟撃を仕掛け、あるいは部隊を分けてこちらに進軍するようであれば、そのまま迎え討つといった按配である。

状況を把握するため待機していたスレインのもとに、偵察に向かった兵士が帰還した。

「報告いたします。」

敵は一万ずつの二手に分かれ進軍しています」

「そうか…。」

それで、敵大將がいる本隊はどちらに向かっているのだ？」

「北東からこちらに進軍する部隊に、聖騎士パールゼフォン卿の姿がありました。」

おそらくそれが本隊かと…」

「御師様、か…」

スレインは厳しく眉を顰めたが、偵察兵はそのまま更に報告事項を告げる。

「イングラム元帥が駐留するベンシングトンに向かう部隊は、將軍の副官が指揮しているものと思われます」

「分かった。」

お前はゆつくり休むがいい」

「ハッ。失礼します」

偵察兵の姿が消え、スレインは再び思案する。

幸いにも、今スレインが待機しているこの地点は、まだフィッチ王国の国境線近くである。

そのため、自然要塞として知られる地形効果を得られることができ、戦においては守りに易く攻めるに難い。

今をもつてして思えば、先にこの地点を押さえられたのは幸運だったと言えるだろう。

しかし、南に侵攻した一万の敵別動隊もまた、脅威である。

いかにイングラム元帥が指揮しているとはいえ、兵力は二倍の差があるのだ。

ベンシングトンにおける防備をいかに固めるかが重要であったが、ほとんど防戦に徹した戦術しか取れぬはずである。

仮にイングラムが敗れた場合、王都はその無力な姿を晒して容易く陥落してしまうだろう。

ゆえに、スレインはその前に、何としても剣聖パールゼフォン率いる本隊を破らねばならなかった。

「御師様…」

…今はただ、正々堂々と討ち貫くのみ…！」

聖騎士最強と名高い剣聖パールゼフォンを迎え討つため、スレインは早速、部隊展開における参謀本部を仮設して作戦を練り始めた。

『ウエセックス王国軍 イングラム元帥』

王宮魔術士長イングラムは、南下を始めた敵マーシア王国軍の動きを察知して進軍を止め、ベISINGTONを防衛拠点として部隊を展開した。

偵察の報告により、敵マーシア王国軍は部隊を二手に分けて進軍を再開しており、こちらには一万の部隊が近付いてきていることを把握している。

しかし、さしものイングラムも二倍の兵力差に対して、見通しの良く動き易い丘陵地帯コツウオルズで応戦する愚策は避け、王都に進軍するうえで避けては通れぬテムズ川中流の街を拠点に防戦する構えを見せていた。

なぜなら、ここベISINGTON以外にテムズ川を横断する橋はまだ建設されておらず、迂回するにしても、西のスレインと遭遇するか、あるいは東のエセックス王国内に侵犯するかの二者択一に限られてしまうからだ。

逆を言えば、ここを守りきらなければ、王都ウィンチエスターはその無防備な姿をさらけ出すことになる。

イングラムに許された戦術は、相手の攻撃を防ぎ留めたうえで機を見て攻勢に転じ、敵別動隊を撃破することだった。

イングラムは、街中に設けた指令室にて一人、思案に没頭していた。

マーシア王国軍が南下したことで、ここベンシングトンの制圧には防衛線という名目で、東三国に必要な以上の警戒心を与えることはなくなった。

しかし、聖騎士スレイン率いる主力部隊が、噂に名高い剣聖バールゼフォン指揮下の本隊と交戦する以上、援軍は望みが薄い。

それどころか、逆に主力が壊滅してしまうことだってあり得るのだ。

従って、イングラムは手持ちの戦力だけで敵別動隊を撃破する必要があったのだが、二倍もの戦力差では多少の策を用いたところで微々たるもの。

ゆえに彼の部隊は、非常に苦しい立場にあると言えるのだった。

「じゃが…」

少数には少数なりの戦い方があるというものを、見せてやるわ」

脳裏に思い描く戦術を幾通りも展開させては取捨選択し、老魔術士長は来たるべき交戦に向けて伝令を呼び出した。

『イースト・アングリア王国軍』

最初、セレス將軍はそれを、巨大な棒が何かに吊るされた、小さな松明だと思った。

ウエセックス王国軍との共闘作戦を受け入れた彼は、マーシア王都から剣聖率いる二万の主力が南下したと聞かやいなや、すぐさま虎の子の主力を率いてリユジット砦に進軍した。

マーシア王国軍の二万という軍勢に加え、剣聖すら出払っているのであれば、いかに魔人がいるとはいえ王都を陥落せしめるのは容易いことだと踏んだのだ。

そもそも、魔人は本当に存在するのか、という疑問が彼にあった。

戦場で指揮を取るのは常にバルゼフォンばかりであったし、魔人の姿を見たという目撃者さえも捜せど捜せど一人もいやしない。

ならば、マーシア王国軍は魔人という幻想を利用することで実在しない闇の異形を敵国に思い込ませ、恐怖心を煽っているのではないかと彼は考えていたのだ。

元々、何百年も生存する人間など、魔術を駆使したとて非現実的すぎて実に馬鹿馬鹿しい。

ゆえに、真に恐怖すべきは実在する剣聖の方であり、この世に存在しない魔人などはおとぎ話にも劣る、国家による陳腐な捏造にすぎないのだと。

そのため、リュジット砦前に等間隔に連なる、数百にも及ぶ空中の火の群れを見た時、彼は冷静に、それを松明だと推察したのである。

そしてそれは、半分は正しかった。

闇夜の宙に浮かぶ怪火は、確かに松明の火であった。

通常よりも小さく、二つで一組とした松明が百本、リュジット砦の目の前で連なっているのである。

だが、その柱となっていたのは、彼らイースト・アングリア王国軍に所属し敵国に囚われた捕虜たちであったのだ。

かつて、古の聖人が処された磔刑にも似た、十字架の群れ。

釘ではなく、左右の突端に広げられた両の掌を貫く二つの松明が、明々と闇を照らしている。

しかし、松明が照らしたのは何も、闇ばかりではなかった。

十字架の頭上には、明確にイースト・アングリア王国軍を指し示す旗が掲げられていた。

それが、彼らがかつて剣聖を相手に奮戦していた自軍の兵士であることを悟らせる要因になったのだが、その真下に呻く彼らの顔を見た瞬間、セレス將軍は思わず低い声を上げた。彼らの顔は、前頭部から顎下までにかけて、雑に皮が剥がされていて、肉が醜く剥き出していた。

その血塗られた顔の周囲には蠅が集り、蚊柱が立って、見る者に不吉な嫌悪感と吐き気を催す。

瞳を失った眼窩には一片の光もない闇が巢を張っていて、すべての歯が抜けた喉奥から盲目の悲痛が絞り出されて鼓膜を呪う。

男女を問わず全裸に剥かれた体の腹部は異常に盛り上がり、頭部から滴り落ちる血糊が粘り付いていた。

その非道な惨劇を目撃者し、悲鳴を上げる部下たちの動揺を、セレスは將軍としての意地と誇りにかけて抑え込む。

魔人の仕業だ、と誰かが言った。

再び波紋のように広がり始めた動揺が、ざわざわと部隊を侵蝕する。

次いで、クスクス、と笑い声が聞こえた。

すぐ耳元で囁くように、しかし実際には、どこにも声の主はなく。

それゆえに、兵士たちの動揺はいよいよもって深刻化し、恐怖と不安に駆られた悲鳴に部隊が汚染されていく。

混乱を鎮めようと、セレスが一時的に軍を後退させようとした、その時だった。

闇に映える白の輪郭。

含み笑いの声音を妖しく響かせる唇に、絶望を孕んだ視線を注ぐ
狂気の瞳。

一枚の薄い暗幕からゆらりと覗くように現れたのは、若い男。

見ればまだ、セレスと同じ二十歳前後の青年だが。

然れども、全身に漂う魔性の存在感が、とうに幻想めいた非人間的な違和感を宿らせる。

セレスは、ごくろ、と息を呑んだ。

その魔性は、未だにクスクスと嘲笑っている。

「お、お前が噂の魔人か…！」

半ば喘ぐように絞り出した声に、魔人は仰々しく頭を垂れた。

「お初にお目にかかります、セレス將軍殿。
私の名はヴェンツェルと申します。」

そう、伝説にも迷信にも身を潜めた私を、あなたがた人間
は、魔人とも呼びますがね…」

そう言って、魔人は再び歪に口元を微笑ませたのだった。

第十二話　く運命の出会い

海岸線にほど近い小さな丘の緩やかな斜面に、一人の少女が蹲っていた。

歳の頃は十二ほどだろうか。

髪は背に向かって長く伸び、何度も布を当てた粗末な衣服から覗く肢体は、どう見ても他の同世代の子供たちより痩せ細って見える。

しかしながら、彼女に脆弱な雰囲気はなかった。

少女は地面にこびりつく短い草を摘み、また立ち上がっては、同じようなめばしい草を摘んで、手慣れた動作で編み籠に集めていく。

少女のそばには、同じく腰を屈めた老婆が編み籠を動かしながら草を摘んでいたが、しばらくすると手を休め、深い溜息をついた。

皺だらけの顔に苦渋の表情を浮かべたその様子は、もはや個人の力だけでは補い切れぬ深刻な悩みを抱えていることが窺い知れる。

「この辺りもそろそろ尽きてきおったな…。

しかし、この量じゃととても皆に配る分が作れぬ…」

老婆は口惜しそうに呟く。

彼女は薬草師であったが、このブリテンにおける戦も年々厳しくなって怪我人も多く、大地はひどく荒らされてしまった。

現在、彼女が抱えている患者の数は百人にも上るが、対する薬草

の数は在庫もとうに枯渇して、毎日に必要な分さえもろくに支給することができない状態である。

ましてや、村がこれ以上の難民を受け入れるようになれば尚更、今後は命を落とす者も続出するだろう。

そしてそれは、すでにそう遠くない未来にまで近付きつつあった。

「オババ、はい、これ」

いつの間にか近付いてきていた少女から編み籠を手渡され、老婆は微笑む。

「ありがとう、フレア。お前は優しい娘だねえ」

そう言って老婆に頭を撫でられ、フレアと呼ばれた少女は嬉しうに破顔した。

老いた自分は、まだいい。

怪我や病魔に蝕まれた患者たちの世話で慢性的な疲労にある老婆は、実際の年齢以上に皺が刻まれていたが、それでもそれなりに充分な寿命を生きたと思っている。

勿論、己の命が続く限り患者を助けるつもりではあるが、皆とともに冥土へ旅立つことになろうとも不満はなかった。

しかし、フレアのような子供が病に冒され、尽きた薬草を待ち続けて命を落とすということは、あまりに残酷ではないか。

そうでなければ、これから先、いったいどのような夢や希望を抱けば良いと言うのだろう。そんな老婆の沈み込む思いを余所に、フレアはふと顔を上げた。

「オババ…、何か、嫌な予感がするよ…」

その可愛らしい端正な顔立ちを、ひどく緊張した様子で辺りをキョロキョロと見回している。

「む…、黒犬かの…？」

「ううん、たぶん違うと思うけど…、でも、すごく怖い…」

フレアは、危険に対する勘が非常に鋭い。

そのため、遠出で薬草を採りに出かける者にとっては非常に頼りになる存在であったが、危険が迫る度に、いつもは澁刺と活発な少女が怯えながら自分にすがりつく様を見ると、やはり不憫にも思う。

こんな子供の助けを必要とするほど、村の均衡は負に傾いているのだ。

老婆のなるべく優しく安心させるよう、丁寧に頭を撫でてあげた。

「よしよし。それじゃあ、少し早いが村に帰ろうかの。皆が待っておる」

「うん」

心から安心したように喜々と応えたフレアは、斜面を下りて街道

に下り立つと、自作の鼻歌を交えて歩き出した。

街道の左側には、見晴らしのよい海が広がる断崖となっている。

老婆はやや後ろから、その様子を微笑ましく見つめていた。

と、フレアが足を止めた。

次いでぺたんと尻餅をつき、空に向かって人指し指を指しながら、酸素を求めて水面に接する魚のように口をパクパクと喘がせる。

老婆も、ソレを見た。

だが、それはこの世のものではあり得ない異形であった。

まさしく、塔のように巨大な人間である。

本来あるはずの二つの瞳の代わりに、左右のこめかみにまで届く大きな一つ眼が二人を凝視していた。

その、顔半分を占める単眼の下には、同様に大きく裂けた口が歪に開いており、噛み砕くのではなく擂り潰すような臼型の歯がびっしりと並んでいる。

遙か見上げるほどに巨大な背丈は強烈な威圧感と圧迫感を放ち、みっしりと詰めた筋肉の鎧が、相当の質量を秘めた破壊を好む性質であることを窺わせた。

それは、現実には存在しないはずの怪物。

あくまでも、伝説上の架空でしかなかったはずの怪物。

ギリシア神話に登場し、地獄に身を墮落させた伝説の巨人。

サイクロプス。

それが今、二つの獲物を前に歓喜の咆哮を上げた時、二人はあまりの恐怖に体を萎縮させ、一種の金縛り状態に陥ってしまったのである。その、圧倒的な死を体現する巨人の右腕が、大気を唸らせて振り上がる。

標的をフレアに狙い定め、鉄鎚の如き握り拳に力が撓められていく。

自分の脈拍が一息に跳ね上がり、鼓膜にまではつきりと響く胸の乱調を聞きながら、死を意識するフレアの視界が涙で滲んだ。

がちがちと歯の根を震わせ、サイクロプスが人外の叫びを迸らせながらその腕を振り下ろした瞬間、少女は反射的に目を瞑る。

近くで、何かが爆発したかのような轟音が響いた。

痛みのない浮遊感を訝しく感じたフレアがおそろおそろ目を開けると、驚くほど近くに見知らぬ少年の顔が映り、思わず息を止めて刮目する。

信じ難いほど美しい容貌だった。

稀代の彫刻家が何年もかけて彫り上げたような、しかしどこなくあどけなさを残した端正な顔立ち。

九死に一生を得たフレアは、自分がその少年に抱き抱えられていることを悟ったが、同時に、自分のすぐ隣りには今にも泣きそうな表情をして微笑む薬草師の姿も見えた。

少年は彼女を下ろすと、以前として圧倒的な死の迫力を放出するサイクロプスにナイフを構えて向き直る。

「お二人は急いで逃げて下さい！　ここは僕が引き受けます！」

少年の声はしかし、鬼気迫る険しい顔で吐き捨てられた。

彼自身、その存在自体が己の常識を打ち崩す怪物との予期せぬ遭遇に狼狽し、内なる恐怖と不安を必死に抑え込んでいる、そんな表情であつた。

「しかし、お主は　　」

「僕のことは構わずに！　さあ早く！」

「…すまぬ。すぐに応援を呼んでくるからの！」

老婆は、お兄ちゃん、と叫ぶフレアの手を強引に引いて、その場を立ち去っていった。

伝説の巨人を前に、まるで心許無いナイフを逆手に構えながら、少年は決死の表情で怪物を見上げる。

互いに敵として相手を認識した瞬間、サイクロプスは、その鈍重そつな巨体からは想像もできぬほど迅い拳撃を横薙ぎに繰り出した。

少年　　ヴィクターはそれを紙一重で後方に躲し、その手首を切断せんとナイフを閃かせたが、尋常ならざる硬質の筋肉が刃の侵入を許さず、薄皮一枚を裂いたところで、逆にナイフの刃が欠けて

弾き返された。「なッ…!？」

これもまた予想外の事態に目を見張るヴィクターをそのまま、巨人は裏拳の按配で押し出すように彼の身体を容易く吹き飛ばす。

その凄まじい重圧に内臓が軋められ、あまりの勢いに危うく断崖の海岸線に落ちそうになったが、ヴィクターは大地にナイフを突き立てて速度を止め、断崖への落下を辛うじて防ぐ。

「なんて奴だ…。筋肉の密度があまりに高すぎて、刃がまるで通らない…!」

あるいは、そもそもが別次元の生物であるため、この世界の生物とは一線を画した肉体構造であるからなのか。

しかし、いかに筋肉の鎧に身を固めていようと、鍛えようのない柔弱な喉を切り裂けば致命傷となるのは間違いないはずだった。

しかしそのためには、あの暴風のような拳撃をかいくぐり、その懷まで入り込まなければならぬ。

「くっ…! だけど、こいつをこのままにはしておけない…!」

間合いを計り、隙を見て高速接近したヴィクターにさらなる連撃が襲いかかる。

右と左、あるいは両手で構えた上段から、さらには両足で踏み付けるように。

その一撃一撃は、まるで城壁を破壊するために用いられる破城鎚

以上の破壊力を秘めていた。

巨拳を躲すたびに突風が吹き荒れ、身体がそれだけで吹き飛ばされそうになる。

街道はすでに、サイクロプスの攻撃によって、手足の型を乱雑に烙印された被災地の様相を呈している。

たった一撃だけでも直撃すれば即死は免れぬ拳撃を矢継ぎ早に繰り出す巨人は、しかし知能はそう高くないようなのが幸いした。

単調な攻撃の一边倒を繰り返す甲高い咆哮に最初は怖気もあつたが、冷静に相手の動きを観察すれば全身の動作そのものは鈍重で、ただ目の前の敵を殺戮することを考えて闇雲に攻撃しているにすぎない。

ヴィクターの身体能力をもってすれば、次なる攻撃の前兆さえ見逃さなければ、躲すこと自体は難しくはなかった。

長大な戦斧にも似た迫力をもって迫る右の横薙ぎに反応し、少年は宙に跳ぶ。

だが、ヴィクターはその跳躍の着地点を巨人が繰り出した左腕に定め、そのまま上腕部まで一気に駆け上がると、必殺を見出した喉元めがけて渾身を込めて踏み込む。「これなら　！」

速度に乗せて切断力を相乗させたナイフの煌めきは、ヴィクターの予想通りにサイクロプスの喉を切り裂き、一文字の切り口から夥しい鮮血が噴出する。

「やつ !?」

だが、空中の無防備な姿勢にあるヴィクターに、致命傷を受けたはずの巨人が右の平手を放つ。

内臓がそのまま背中を破裂させて飛び出しそうな、凄まじい衝撃であつた。

辺りを飛び交う小煩い蠅を叩き落とすが如き一撃に、ヴィクターの身体は大地に叩き付けられ、何度ももんどりを打っては激しく転がった。

身体はようやく断崖間際で落ち着いたが、全身が絶えず電撃に苛まれているかのような麻痺と鈍痛が追い討ちをかけ、立ち上がることも困難なダメージに絶望する。

それでも衝撃の瞬間、身体を逸らして最小限にダメージを抑えていればこそ、この程度で済んだのだ。

だが、朦朧とするヴィクターの視界に、さらなる衝撃が展開されていた。

渾身の一刀によって切り裂いたばかりの傷口はすでに出血が止まっておき、しかも喉にはつくりと開いたそれが、みるみるうちに塞がろうとしているのである。

これには、さすがのヴィクターも開いた口が塞がらぬといった様子で、啞然と見つめるしかなかった。

通常、あらゆる生命体は負った傷を自分で恢復することができ

自己治癒能力がある。

さすがに根元から失われるような四肢の再生などは不可能だが、骨折や切り傷などには時間をかけて、新たな細胞を作ることですす修復するのである。

サイクロプスの場合、この自己治癒能力が桁外れに高く、即死以外のダメージであればすぐさま回復せしめることができるため、ヴィクターは、その自己治癒能力を上回る攻撃でもって当たらなければならなかったのだった。

そしてサイクロプスは憤慨している。

己の肉体を一度ならず二度までも傷つけた少年を、その息の根を完全に止めるまで許すことはできない。

怒りに猛る巨大な影の接近に死神の幻想を重ねながら、ヴィクターは不可止の死を覚悟した。

「くそ…、こんなところで、僕は…、…ごめん…、…姉さん…」

巨人は両手を重ね、上段に振りかぶる。

その様子を臆気な視界で捉えながら、ヴィクターは何とか身体を仰向けにして、空を見た。 どうせ死ぬのなら、遥か遠い地で自分の帰りを待つ姉と繋がる、蒼天の空を見ながら死にたかった。

サイクロプスは、無慈悲に剛腕を振り下ろす。

ズン、と大地が揺らぐような衝撃音。

.....。

.....。

.....？

緩やかに目を閉じて死を待っていたヴィクターはしかし、不気味に長い沈黙の時間に耐え兼ねて、静かに目を開けた。

空が、昏い。

否。

それは巨人の拳が、寸前で止められていたがゆえに陽の光を遮ることで生じた影であった。

しかし、ヴィクターの目は、もう一つの不可解な影の姿を捉えていた。

黄金の太陽と見紛うほどに清らかな、宙に煌めく短い金の髪。

身に纏う銀色の鎧が、煌々と輝いて美しい。

その人影が、両手に剣を添えて、巨人の拳を受け止めていた。

「なるほど。伝説に聞く通りの怪力だな」

フルートの音色を思わせる、爽やかで滑舌の良い女性の声だった。

その人物は顔をわずかに傾けて、背後にいるヴィクターに視線を送る。

巨人の拳の輪郭に沿う昏い影とは対照的に、抜けるように白い肌。流麗な睫毛に彩られた切れ長の瞳は青色で、凜然と結ぶ唇は、あたかも桜桃のように瑞々しい。

「大丈夫か？ …待っている、すぐに終わらせる」

そう呟くやいなや、その女性は剣を閃かせて、受け止めていた巨人の拳を弾き返した。

サイクロプスは瀕死の獲物を前に邪魔をされたせいか、怒りの咆哮を上げて謎の騎士に左右と拳撃を繰り出すが、彼女は涼しげな表情でいとも容易く巨人の両拳を切り裂いて迎撃する。

ヴィクターですらダメージを与えられなかった巨人の体に斬撃の傷跡を刻んだ騎士は、しかし再生しようとする一瞬の隙を突いて神速に踏み込み、彼我の間合いを瞬時に詰めた。

「確かに、力は凄まじい」

サイクロプスの一つ眼が、驚愕と困惑に見開かれた。

女騎士の姿を見失ったことで生じた全身の緊張が、筋肉を致命的に硬直させる。

「だが、…」

彼女は巨人の股を潜り抜け、その背中を、まるで巨木の幹を駆け昇るが如き動作で垂直に駆け抜け、着いた肩から跳躍して脳天から一閃、サイクロプスの心中線をそのまま両断した。巨人の動きが止まった。

凍り付いたように停止した体は、時間差で緩やかに左右に乖離し、血飛沫を上げながら崩れ落ちた。

ヴィクターはその中央、至高の芸術品を思わせる美しい両刃剣に付着したサイクロプスの血糊を滑らかに振り払い、腰の鞘にするりと収めた美麗の女騎士の姿を見た。

「ただ、それだけのことだ」

そう吐き捨てるように呟くと、彼女は悠然と歩を進めてヴィクターの傍らに歩み寄り、彼の身体の傷を一瞥してそのまま右手を差し出した。

「身体の傷は、大したことはないようだな。
…骨折もないとは、素晴らしい受け身だ。
立ち上がるか？」

「あ、はい…」

ヴィクターは彼女の手を取って立ち上がると、軽く会釈した。

まだ痺れや痛みは残っていたが、それでも動けないほどではなかった。

「すみません。助けて頂いて、ありがとうございます」

「気にするな。お礼を言うのは私の方だ。

君があゝの怪物の注意を引きつけてくれたおかげで助かった、とあの二人が言っていた。

…改めて、礼を言わせてくれ」

「あの二人…？」

ふと、あのサイクロプスに襲われていた少女と老婆のことを思い出した。

「いえ、子供が危険に晒されているのを、黙って見過ごす訳にはいきませんから。

…それでも、こんなザマですけど」

そう自嘲気味にヴィクターが笑うと、彼女もまた微笑した。

改めて見れば、彼女はまだ十代後半の年頃に見える。

しかし、その若すぎる超人騎士は、ウェセックス王国が誇る最強の騎士スレインと同じ聖銀の鎧を身に纏っていた。

「君は優しいのだな。

…それに腕も立つようだ。

安心しろ、君は強い。

それは私が保証する」

「ありがとうございます」

まさか、とヴィクターは無意識に、彼女に向けて訝しげな視線を

送っていた。

その気配を察したのか、彼女は、ああ、と向き直った。

「そういえば、まだ私の名を言っていなかったな。

私は聖騎士アセルス。

ちょうど、すぐ近くに私の村がある。

君に助けてもらったあの二人もそこにいる。

彼女らも、やはり直に君にお礼を言いたいそうだからな、ぜひ来てくれないか」

やはり、とヴィクターは思った。彼女こそが、史上初となる女性
の聖騎士。

ダヴェッド王国の代表者にして、ブリトン人最後の希望の星と言われている、ウェールズ連合軍の総指揮官なのだと。

彼女の言う村とは、しかしヴィクターの目から見れば、とうに村としての機能を失った、ただの集落のようにしか映らなかった。

切り崩した木を寄せ集めて簡単に接合しただけの、ただ、ないよりはマシだとして雨風を凌ぐ程度の小屋ばかりがそこかしこに建てられている。

動き回っている村人たちに男衆の姿はあまりなく、老人や子供が圧倒的に多かった。

そして、誰もがぼろ切れのような衣服を纏い、裸足のまま各小屋に出入りする。

村の空気は、重苦しく澱んでいた。

そこに錆び付いた鉄のような血の臭い、肉が爛れ腐ったような悪臭が入り交じり、何とも言えぬ圧迫感が生理的な嫌悪を催す。

それは、村全体に満たされた、濃密な死の気配だった。

「こつちだ」

アセルスに先導され、ヴィクターは慌てて後を追った。

途中、最も近付いた小屋からは、今にも消え入りそうな呻き声や乾いた警戒、そして弱々しくも苦痛を訴える悲鳴が漏れ聞こえたが、おそらくはどの小屋からか、そうした沈痛な声が聞こえてくるだろうと彼は察した。

「驚いただろう」

そんな彼の心中が顔に出ていたのだろう。

ヴィクターが素直に頷いたのを見て取って、アセルスは少しだけ微笑んだ。

「それでも、まだマシになったほうだ。

システムが出来上がるまでは皆が手一杯で右往左往していてな、昔はもつと酷かった」

彼女たちの村は元々、数百年にも及ぶブリテンの戦により見捨てられた重病人や戦災孤児、寿命の尽きかけた老人などが集まって、一年ほど前に形作られた集まりが発端だった。

そこに薬草師の老婆なども寄り集まり、弱者たちの村が形としてだけできたのだが、それは食料や医薬の備蓄を切り詰めながらの危うい均衡の上に成り立つ状態である。

そして彼らは、弱者であるがゆえに同じ弱者たる難民を無条件に受け入れる。

それが、最底辺の環境で必死に生き延びようとする彼らの誇りであつたし、自分たちもまた助けられたがゆえに他の弱者を助けようと心に誓った絆であるからだ。

だが、その夢に現実が追いつかない。難民を受け入れれば受け入れるほど、村の負担はますます増していく。

村にいる誰もが弱者だからこそ難民を拒絶せず、しかし弱者だからこそ村の寿命は互いに助け合う身の重さで押し潰されようとしているのだった。

そうした背景までをヴィクターが知る由はなかったが、それでもこの村が、異質な事情を抱えた瀕死の状態であることを肌で感じ取っていた。

村の奥に進むと、他の小屋よりは頑丈そうな造りをした、しかし小汚い木造の小屋に辿り着いた。

「ここは…?」

「私の家だ。二人もここで待っている…そう言って聞かなくてな」

そう微笑してアセルスが扉を開けると、ある程度の広さを持つ居間に直接つながっていた。

その中央、粗雑な円卓を囲む椅子に老婆が座っていて、その周りを少女が忙しなく歩き回っていた。

二人は、玄関に立つ聖騎士と少年に振り向くと、途端に安堵の表情を浮かべた。

「お兄ちゃん!」

愛らしい小柄な少女は、すぐさまヴィクターに走り寄って抱き付いた。

「良かった! 無事だったんだね!」

「うん、アセルスさんに助けてもらってね」

ゆっくりと椅子から立ち上がった老婆もまた、ヴィクターのそばに歩み寄った。

「そうかそうか、間に合ってよかったわい」

「はい、おかげで命拾いしました。ありがとうございます」

満面の笑みで何度も頷く老婆に対し、ヴィクターは軽く頭を下げ

た。

代わって、奥の椅子にはアセルスが腰かけた。

「だが、ギリギリだったよ。」

あと一秒でも遅ければ、彼は押し花になっていた」

小さな円卓に置かれた水差しを少量、杯に注いで、彼女はそのまま美しいフォルムを持つ唇に流し込む。

「お兄ちゃん、助けてくれてありがとう！」

「ワシからも礼をいわせておくれ。
本当に助かったわい」

「いいえ、当然のことをしたまです。
…しかし、あんな怪物がいるようじゃあ、外出は避けた方が賢明ですね」

「いいや、あんな化け物は初めてじゃよ。
尤も、黒犬とて厄介には変わりないがの」

水を飲んで一息、落ち着いたアセルスが老婆に顔を向けた。

「オババ、私はその少年と話がある。
少し、二人きりにしてくれないか」

オババと呼ばれた老婆は、彼女の、言外の意図を感じ取った様子でゆっくりと頷いた。「分かった。」

…ほれ、フレア。お姉ちゃんもああ言っておることじゃし、ワシ

「さも仕事に戻るとしよう」

「うん！ それじゃあ、またね、お兄ちゃん！」

「うん、またね」

扉が完全に閉じるまで手を振るフレアの姿が消えたのを見届けて、ヴィクターは聖騎士に向き直る。

「そこに座るといい。」

…と言っても、あまり持て成しはできないが」

アセルスが示したのは、ちょうど真向かいに位置する椅子だった。

「いいえ、…失礼します」

ヴィクターは、これもまた雑な手作り感の漂う木製の椅子に腰を下ろし、アセルスが注いだ杯を手渡されて、眼前の円卓に置いた。

先に口を開いたのは、アセルスの方だった。

「さて…、私はあまり駆け引きというのが好きじゃない。

早速、本題に入らせてもらうぞ」

射抜くような鋭い視線が、嘘偽りを拒絶する無言の圧力となってヴィクターに警告する。

「…君は、ウエセックスから来た人間だな」

息を呑む、その気配でアセルスは察したようだった。

この時期、東西の国がマーシアと敵対関係にある今、この村の現状に驚くのは異国の人間であるし、それがどの国から来た人間であるのかは簡単に範囲を絞られる。

「そうか。」

「…それで、要求は降伏か、それとも不可侵か、…いや、…、同盟か」

一瞬にして素姓と目的を看破されたヴィクターは、内なる動揺を全力で押さえ付けながら、すぐさま虎穴に飛び込むほどの決意を固めて口を開いた。

「はい。イングラム様は、西のウェールズ連合軍と東のイースト・アングリア王国軍、そしてウェセックス王国軍での、マーシアに対する三国同時攻撃を提案させていただくべく、代表として密かに私がこちらに伺った次第でございます」

ヴィクターの言葉を一言一句と漏らさずに耳を澄ましながら、聖騎士は瞬き一つなく異国の少年に真っ直ぐな視線を注いでいた。

仮に、今ここで必要なことを語らず、嘘を混ぜた真実を話したなら、彼女の慧眼はすぐにそれを見破って自分に愛想を尽かし、密約の提案にも興味を失うだろう。

「こちらが、その旨を記した書簡でございます」

円卓に書簡を置く、その動作の最中にも視線を逸らすことなく、ゆえに喉がごくりと動いて唾液が嚥下されていく音を明瞭に聞き、額にじわりと汗が吹き出し始める。聖騎士はしばらくヴィクター

の様子を窺った後、ようやく書簡に目をやり、手に取って中を開いた。

喉がひどく乾く。

だが、目の前の杯すら遠く感じ、手を伸ばすにも躊躇するほど緊張していた。

アセルスが書簡に目を配る最中にも摩耗していく胆力をなお絞り、懸命に無表情を装いながら、ヴィクターはヴァイキング暗殺任務にも感じたことのない極限の緊張状態に身体が研ぎ澄まされていることを実感する。

「…君の名前は？」

唐突に、まるで予想外だった質問を受け、ヴィクターは目を丸くした。

「君の名前だ。まさか知らぬわけでもないだろう？」

君が私の名を知っているのに、私が君の名を知らぬというのは存外に不公平ではないだろうか」

「あ…」

そう言えば、まだ名乗っていなかったことを思い出し、問われるまで気付かなかった自分の至らなさと無礼を、彼女が抱いた手痛い減点材料として猛省する。

「申し遅れました。

私はヴィクターと申します。

自己紹介が遅れてしまい、大変失礼を致しました」

改めて非礼を詫び、時間をかけて頭を下げる。

今、ヴィクターに求められていることは、決して偽りを吐くことなく、誠意ある態度で臨むことであつた。

ゆっくりと顔を上げると、アセルスは意外にも首を振つた。

「それは君の仮面だ。

格式張った物言いは君自身を殺し、不相応に釣り上げた自分を演じてしまう。

それでは、君の良さが台無しだ」

緩やかに、極限まで高められた緊張感が静かに沈静化していくのをヴィクターは感じた。

それは少なくとも、アセルスが自分に対する警戒を、ある程度まで引き下げてくれたことに起因しているのだろうと思われた。

「だが…、残念ながら、この提案は受け入れられない」

丁寧に書簡を円卓に戻した様を見て、今度は背中の汗がじつとりと滲み出た。

気付かぬうちに、また無礼を働いたのではないかと不安になる。

心の奥底までよみ解きそうなアセルスの視線に気圧されながらも、ヴィクターは疑問を口にした。

「…この書簡には、マーシアを制圧した際の分割割譲までを明記しております。

どの国にとっても旨味ある話だと思いますが、なぜ…？」

「理由は三つある」

聖騎士は滔々と言葉を繋げた。「一つ目は、我々があくまでも連合軍だということだ。

確かに私は軍を任されてはいるが、それは各国から無条件で兵を借りているにすぎない。

従って、どのような作戦行動にも各国の王たちに了解を得ねばならず、そして彼らが、アングロ・サクソン人である君たちからの提案に首を縦に振るとは思えない」

そう言うアセルス自身は、人種に対しての拘りがない様子だった。

「二つ目は、私が君の主であるイングラム殿を一切、信用していないからだ。

なぜなら、彼は夢を見ていないからな」

眉を顰めて首を傾げたヴィクターを尻目に、彼女は言葉を続けた。

「三つ目は…、失礼だが、よほど幸運の女神が気紛れを起こさぬ限り、ウエセックス王国は敗北するからだよ、ヴィクター」

「え…！？」

「すでに剣聖パールゼフォン卿率いる二万が、南に向かって王都を出発した。

確か、南の聖騎士殿がグロスタシャーにしていると聞くが、ならばそ

ろそろ交戦していてもおかしくない頃合だ。

…あの男は手強い。

私はウェセックスに恨みはないが、彼と対等に渡り合える人間はほとんどいないんだ。

南は負けるだろう」

そう言つて、アセルスは再び杯を口に添えて水を飲む。

だが、ヴィクターは、すでにマーシア王国が動いていたという事実が混乱していた。

「…マーシアが、すでに動いていたのですか」

「なんだ、知らなかったのか？」

彼らが南に戦力を集めたおかげで、ポウイスの兵も激減したが…、君も見ただろう、あの伝説の怪物を。

さすがに、あのように強力なモンスターが現れることは稀だが、ウェールズでは近年、黒犬による被害が深刻化していてな。

なかなか思ふような作戦行動が取れないんだ」

彼女の言葉は謎だらけであつたが、それ以上に本国のことが気掛かりだつた。

そして、王都に残してきた姉のこともまた。

勿論、彼女の言葉を鵜呑みにするつもりはなかったし、ましてや王都が戦場になるようなことは想像もできないが、それでも募る焦燥感是唯一の家族の不幸を予感させずにはいらなかった。

「…気になるようだな。」

大切なモノを守ろうとする、強い意志の力を感じる。

…どうやら、君には自分の命よりも大切なモノがあるようだ」

それは穏やかな、優しくとさえ感じられる声音だった。自分とそう変わらぬ年頃の少女であるというのに、全身から迸る桁違いの精気が、アセルスという聖騎士の存在感を強烈に際立たせている。

「申し訳ありません。

私は…、僕は、国に戻らなければ」

アセルスは、期待に違わぬ稀少な芸術品を前にしたように、満足げに微笑んで頷いた。

「君は、そうでなくてはな。

…提案は呑めないが、だからといって、我々がウエセックスに攻め込むことはないだろう。

そう、イングラム殿に伝えてくれればいい」

「分かりました。…それでは、失礼します」

立ち上がり、扉に手をかけて出て行こうとするヴィクターを、その寸前でアセルスが声をかけて引き止めた。

「忠告だ。イングラム殿には気をつける。

彼は君と違って躊躇しない。

…それが、夢を見ないということだ」

やはり理解に苦しむ言葉に会釈して、ヴィクターは小屋を後にした。

想像以上に緊張していたのか、自分でもびっくりするほど汗ばんだ衣服の肌触りに、冷たい汗の名残がいつまでも残っていた。

第十三話 く静かなる闇 中編く（前書き）

無計画に定評があるオワタ式です。

そろそろ風邪を引いても仕事の鬼な友人Y氏に『お前アホだろ』と本気で罵られそうで怖いのですが…。

今回は物語前半部の転換期フラグということもあって、またまたやってしまいました。

一話でまさかの30ページ超え！

うう…、本当にすみません…。

力を入れる話では、どうしても長くなってしまう傾向にあるように…、こんなオワタ式で良ければ、どうか最後まで応援していただけると本当に嬉しいです！

皆さんの期待を裏切らぬよう、頑張って更新していきますね！

では、長くなっしまいましたですが、引き続き本編をお楽しみください。

第十三話　く静かなる闇　中編く

聖騎士スレインと剣聖バルゼフォン。

両国を代表する主力部隊は、丘陵地帯コッツウォルズにて、ついに衝突した。

しかし、両者は互いに拮抗した兵力であるため、無意味な消耗戦となる真正面からの総力戦は避け、互いの出方を窺う消極的な牽制の繰り返しとなっていた。

聖騎士スレインは、剣聖のらしくない消極的な戦い方に不審を募らせながらも、相手が相手であるがゆえに今一歩、畏の可能性を考慮して攻勢を踏み留めていた。

その頃、ベンシングトンを防衛拠点としたイングラムの部隊も、副官エリスの部隊と交戦状態に入っていた。

エリスの部隊一万に対し、イングラムの部隊は五千と二倍の兵力差ではあったが、イングラムの徹底した防衛戦術と伏兵戦術により、事態は膠着。

どちらも決定打を欠いたまま、戦況は緩やかに長期戦の様相を呈した、かに思われた。

しかし。

突如として王都に撤退したイングラムの伝令から、その旨を受けたスレインは、同時に一気に攻勢へと転じた剣聖の猛攻を受けて後退。

城壁の修復作業に着手はしていたものの、まだ実用段階にまで至っていないグロスタシャーで籠城するのは愚策と判断。

グロスタシャーを放棄した聖騎士スレインと、進軍を開始した剣聖バールゼフォンは、迷いの森ディーンへと戦場を移すこととなったのである。

一方、十字架による恐慌が部隊に浸透してしまったイースト・アングリア王国軍は、セレス将軍による指示の下、リュジット砦への攻撃を一時中断し、後退。

セレス将軍は、魔人ヴェンツェルの提案によって急遽、互いの接見の場を設け、多くの兵士に囲まれながらも席に向かい合うこととなった。

初めて会う魔人の意図を探りながら、非人道的な拷問を受けた捕虜の速やかな返還を求める強気なセレスに対し、ヴェンツェルはあっさりとそれを承諾。

無事に捕虜を取り戻したセレスは、接見の場において隙だらけの魔人を暗殺する好機を、密やかに窺っていたのであった。

『ウエセックス王国軍 聖騎士スレイン』

スレインたちが今いる地点は、コッツウォルズ丘陵の西側
現在では“製塩業者の丘”と呼ばれている、急斜面が込み入った場
所である。

ここでは騎馬による突撃が行えず、定石となる配置としては、弓
兵および魔術兵が後方援護をしつつ、歩兵によって前線を維持する
といった按配である。

しかも周囲に対して見通しが良いために、強力な戦術である伏兵
が使えず、攻勢を仕掛ける側としては非常に頭を抱える地形である
のだった。

現在は双方ともに拮抗した兵力であることを自明としているため、
愚かな消耗戦となる真正面からの衝突は避け、互いの出方を窺いな
がらの睨み合いとなっていた。

「スレイン様、やはり敵の動きは不気味です。
こちらが動けば退きますが、逆にこちらが退こうとすると再び攻
撃を仕掛けてきます」

「…そうか、分かった。
下がっていいぞ」

「ハッ。失礼します」

踵を返した偵察兵からの報告に、スレインは眉を顰めた。

先刻から剣聖が仕掛けているのは、およそ戦術とは思えぬ武力接
触だった。

まるで自陣の懐深くまで誘き寄せんとする意図を剥き出しにしたそれは、時間稼ぎと見るには攻撃的であり、かといって精力的に攻撃を仕掛けてくるような気配でもない。

無論、聖騎士最強と謳われる人物が聊爾を繰り返すはずもないのだから、それはやはりこちらの部隊を一網打尽とすべく練られた罠である可能性が濃厚であったが、そもそもが怪奇的な行動である以上、成功するとは思えない。

ましてや、相手はかつての弟子である自分なのだ。

最初から軽んじて挑発に乗るはずもなく、焦燥感に任せて軍を動かすこともありえない。

それは、師である剣聖が一番よく知っているはずなのに。

「だからこそ、迂闊には手を出せないのだが…」

あるいは、それをこそ囿として、他に何らかの策を講じているのではないか、とスレインは睨んでいる。

だが、部隊を回り込ませようにも、この地形では周囲の状況が容易に窺い知ることができるし、元々が急斜面で構成された丘陵である以上、こちらの本陣を急襲することもできないのだ。ならば、これはただの時間稼ぎではないかという考えもできるのだが、果たして何を待っているのかと言われれば答えることは難しい。

とはいえ、防衛戦に適した地形をあえて放棄し、一気呵成に攻め込もうとするには時期尚早であるようにも思われた。

確かに、南のイングラム率いる部隊は長期戦となれば形勢不利になるのは明白だが、だからといって短期決戦の総力戦に持ち込めば主力の被害もまた跳ね上がる。

通常、部隊同士の戦争では二割の損害が出た時点で大敗となる。

なぜなら、一万で実行可能な作戦を八千で維持するのは困難であるため、立案した作戦行動が兵力不足により実行不可能となった時点でその作戦はすでに失敗であり、即ち大敗であるからだ。

南の援軍として駆け付けたは良いが、今回の敵を退けたとしても今後の部隊行動に支障をきたせば、もはやマーシア王国を攻めるところではなくなってしまう。

それゆえに今、スレインは慎重に慎重を期した判断を求められているのだった。

「畏か、時間稼ぎか、どちらも正しいのか、どちらも間違っているのか…」

ならばいつそのこと、翩翻とひるがえる旗を掲げたここを囿とし、自分をもあえて囿として部隊を回り込ませ、敵軍の脾腹を突くか。

それともここは森まで部隊を後退させ、グロスタシャーに伏兵を潜ませたうえで敵を懷まで誘い出し、挟撃するか。

どちらも危険な策だが、このまま手を拱いているわけにもいかない。

「くそ…。どうする…。どうするのだ、スレイン…！」

身動きのできない自問に頭を悩ませながら、手に汗握る緊張感がスレインを苦境に追い込んでいく。

少しの判断ミスが部下の命を奪い、彼らの家族を悲嘆させ、更には国を貶めることとなる聖騎士同士の戦争に、彼は今、改めて威信を背負う象徴の重圧感に苛まれているのだった。

『ウエセックス王国軍 イングラム元帥』

ベンシングトンは、元はウエセックスとマーシアとが、両国を隔てるテムズ川を利用して国境線を見張るために設けた前線施設のよなものだった。

しかし、マーシアの傀儡であった前王ベルトリックの計らいによってテムズ川を跨ぐ橋を完成させ、両国の交流を図り、いつしか街としての体裁を形作るまでに至ったのである。

この街は、その中心部を横切るようにテムズ川が流れており、そこに橋を設けて、小さな監視塔を中心に、両岸の民家や商店が立ち並びといった按配なのだった。

イングラムは、前哨戦での勝利によって得た束の間の時間を、その橋の上で水面を眺めながら過ごしていた。

北側の入口付近に椅子や樽、箱や家具などの様々な障害物を乱雑に並べ、その物陰から射手が斥候に合わせて後退しながら弓を引く。

その後、弓兵は街中に撤退し、第一魔導兵团と弓部隊に援護された第三騎士団の三分の一が入口を固め、騎士団の残り三分の二が左右に回り込んで敵斥候を伏撃する。

斥候を叩くメリットは豊富だ。

その後続部隊は敵を警戒して進軍速度を落とすこととなり、その結果、イングラムは多少の時間稼ぎに加えて、次の策を整えることができるからだ。

そして、ここまでは波乱もなく順調に事を進ませることができたのだが、斥候を潰したとはいえ、敵は数百程度の被害にすぎない。

次はまだ一万近くも残る後続部隊を相手にしなければならず、それには部隊の全兵力を動員しても足りないのだ。

次の策は、戦術と呼ぶには心細いものだった。

障害物に火を放ち、避ける位置に落とし穴を用意する。

入口は先と同じく騎士団に任せ、後方より魔術兵と弓兵が支援。

しかしながら数で押し切られることを考慮に入れ、様子を見てウエセックス側の岸まで後退し、橋を挟んで膠着とするのである。

さすがに橋頭堡までは設置できそうにないが、最終手段として橋を落とすことも厭わない。

だが、できることなら橋を落とす策は使いたくはなかった。

なぜなら、この戦術には致命的なデメリットが生じるからである。

仮に橋を落とした場合、運よく敵を引きつけたとしても、せいぜい数百程度の被害に留まり、しかも南へと進軍不可となった敵はそのまま剣聖の部隊と合流するはずだからだ。つまり、聖騎士スレインの部隊一万であるのに対し、剣聖バルゼフォンの部隊は一気に二万近くにまで膨れ上がってしまい、両者の作戦行動において甚大な影響を及ぼす羽目になるのだ。

しかも、こちらがスレインの部隊と合流する時間は、テムズ川をディーンの森経由で迂回しなければならぬため、敵が剣聖の部隊と合流するよりも遥かに遅い。

こうした事情が重なれば、スレインの部隊が大敗を喫する可能性も高まるため、橋を落とす策はなるべく使用を避けたいところなのだった。

イングラムは、緩やかに流れる川を覗く。

ここが両軍の睨み合いとなる地点となるのは、おそらく時間の問題だった。

最悪の場合、ここが戦場と化して橋を落とす可能性もあるが、スレインを孤立化させるような戦術は最後まで取っておくべきだろう。

その時、後ろから駆け付ける兵の気配を感じ取り、イングラムは振り返った。

「イングラム様。

「ご命令どおり、落とし穴の設置を完了いたしました」

伝令の報告に、イングラムはようやく、心持ちながらも微笑した。

「そうか、やってくれたか。…ご苦労じゃった」

「いえ、後続部隊の到着が思ったよりも遅かったのが幸いしました。これで、ある程度は敵の数を減らせるかもしれませんね」

イングラムは頷いた。

「うむ。…じゃが、ここから先は神のみぞ知る運否天賦の御手に委ねるしかあるまいがな」

「しかし、それにしても敵は遅いですね。

イングラム様の見立てでは、もう少し早く到着するはずだったのですが、やつらはまだ、少し距離が開いた場所で進軍していると偵察が話しておりました」

「それだけ伏兵を警戒し、慎重に進んでいるということじゃろうな。どうやら敵の指揮官は、石橋を叩いて渡る人間のようにゃ」

そう言ってイングラムが橋桁の手摺を叩いて見せると、伝令は愛想笑いを浮かべた。

と、そこで伝令は何かに気付いたのか、ふと橋桁から身を乗り出して川を見やった。

「上流から草や葉が流れてきていますね…。
嵐でも近付いてきているのでしょうか…?」

イングラムも同じように水面を見たが、先ほどはなかったはずの雑草や葉が、上流から下流に向かって確かに流れていた。「うん…？ …いや、空を見る限りでは蒼天じゃな。

あのような小さな雑草であれば、いかな強風が吹こうと受け流すじやろつて」

「では、誰かのイタズラですね」

イングラムは呵々と笑った。

「ここより上流には街もないのじゃぞ？

この程度の些細なイタズラをしたところで、気に留めるのはワシらぐらいの」

そこでイングラムは気付いた。

もし強力な台風レベルの風が吹き付けた場合、巨木が薙ぎ倒されることはよくある話だが、そうした強風でも、こんな小さな雑草は案外としぶとく大地に根を張って生きるもの。

ならば、今このテムズ川に流れる雑草の群れは何か。

これらがある程度の距離が離れた地点から流れ着いたことは誰にでもわかることだ。

従って、この雑草を川に流した張本人は、イングラムたちが発見する数十分ほど前にそれを実行したと考えられる。

しかし見たところ、雑草は毒作用のあるものではないようであったし、単なるイタズラと見るには早計すぎる。

イングラムは、さらに身を乗り出して橋脚を見やると、その下部が黒く変色しているのが見て取れた。

その部分は、長時間、水に接触していた橋脚部分が変色したものであり、それが肉眼で見えることは即ち、現在では水位がかなり下がっていることを意味している。

「しまった！ 上流からか！ ぬかったわ…！」

あまり見ることもないイングラムの怒気に狼狽しながらも、伝令兵はおそるおそると顔を覗かせる。

「あの、イングラム様…、何か…？」

イングラムはすぐに伝令に向き直った。

「急ぎスレインに伝えよ！ 我らは橋を落とし、即刻、王都へ帰還するとな！」

「えッ…！？

し、しかし、それでは後続部隊が…！
スレイン様が孤立してしまいます！」

「それは困じゃ！

敵は斥候も後続も困として別動隊を編成し、引き潮で浅くなった上流地点からテムズ川を横断したのじゃ！

そやつらは今頃、王都に向かって直進しておるじゃろっ！」

そのため、踏み付けた靴底の雑草が川によって洗い流され、下流

であるこの街に流れ着いたのだろう。そしてそれは、すでに相当数の敵兵がテムズ川を渡ったことを意味しているのだった。

「なッ……!？」

では、敵の狙いは初めから王都であつたと!」

イングラムは頷いた。

「そうでなければ説明がつかぬ! ええい、今は一分一秒が惜しい! 急ぎ早馬を走らせよ!

スレインには合わせる顔もないが、王を殺させるわけにもいかんのじゃからな!」

「ハッ!」

伝令は逼迫した状況を理解し、すぐさま走り去っていく。

「くっ、さすがは剣聖じゃな。

華々しい戦よりも中身ある作戦を取ったか。

…じゃが、さすがに王を殺させはせぬぞ」

完全に裏をかかれた盲点を憎々しげに噛み締めながら、イングラムはスレインの無事を切に願うことしかできない自分の至らなさを恥じた。

しかし、仮に気付いていたところで、二倍もの兵力差がある以上はベンシングトンから割く余力などなかったこともまた事実。

老魔術士長は、せめて王を守りきる責務を果たすことで、後々の非難を存分に浴びようと決意したのだった。

『マールシア王国軍 剣聖バルゼフォン』

バルゼフォンは、自陣の中でも一際高い丘のうえで腕を組み、広々と開いた前方を見つめていた。

スレインの好地点と違って、バルゼフォンが陣取る地形は比較的、勾配の緩やかな見晴らしの良い丘陵である。

そのため、最初から防戦には不向きであり、攻勢しようにも相手の陣地は圧倒的な地形効果で防御力に優れているために、こちらの兵の消耗率が高い。

従って、もし本格的に戦うとすれば対等な地形条件で攻勢を仕掛けたい剣聖は、ゆえに前線で小規模の威嚇誘導を実施したのだが、勿論、この威嚇には効果を期待していない。

元より、一定の機が訪れるまで無理に攻め込む必要のない彼は、この誘導伏撃を隠れ蓑とした別の策が成功までの間、スレインの注意を今作戦の最大の罠である自分に向けさせる必要があったからだ。

別の策 即ち、南に進軍した一万のうち、エリス率いる二千の少数部隊で暗々裏にテムズ川を渡り、ウェセックス王都ウィンチエスターへと急襲する今作戦の本懐である。

テムズ川は、その潮汐によって水位や潮流が著しく変化すること知られている。

普段であれば人一人を飲み込むにも容易い深さだが、下流になれ

ば引き潮によって、水位が成人の腰間ほどにまで下がるため、当然、イングラムも下流付近の潮汐には警戒を抱いていたはずだった。

ならば。

もし、それとは真逆に、上流においてそうしたポイントがあったならば、どうか。

これは数十年前、テムズ川が一度、氾濫したために偶然にも発見された希少な地点であったが、パールゼフォンはそこに今作戦の必勝を見出だしたのである。

これは、まだスレインが幼い頃、イングラムが現国王エグバートの即位に躍起となっていた時期であるため、二人が知らなかったのも無理からぬことだと剣聖は踏んでいた。

「これを見破れば、スレインは私が思っていたよりも成長したことになるが…。

果たして勝利の女神はどちらに手を差し延べたのか…」

パールゼフォンは静かに目を閉じ、厳格な姿勢でもって報告を待ち続けた。

これの成否によって、彼が次に取る行動が決定するのだ。

必要以上に緊張感を高めず、しかし無駄に気を緩めずに、剣聖は細胞の一つ一つを励起させて瞑想する。その時、彼はこちらに駆け寄る人の気配を精確に捉えた。

エリスより遣わされた伝令兵は、こちらが声をかけるよりも早く

向き直る剣聖に一瞬だけ瞠目したが、すぐさま走り寄って跪いた。

「報告します。」

エリスさま率いる別動隊二千はテムズ川踏破に成功、予定通り、そのまま王都へ南下することです」

それは、バールゼフォンの策が九分九厘、成功したことを意味していた。

「そうか。連中、見事に陽動に引っ掛かってくれたな……」

剣聖は更なる人の気配を察して目をやると、今度はおそらく、ベシンングトンにて南下に行き詰まった残り八千の部隊からの伝令が走ってくるのが見えた。

「報告します。」

敵はベシンングトンの橋を落とし、撤退を始めました。

これにより、当初の作戦通り、バールゼフォン様と合流する予定でございます」

剣聖は頷いた。

「よくやってくれた」

そう言って、再びエリスの伝令兵に振り返る。

「お前はこれより我が指揮下に入れ。」

前方の敵部隊に総攻撃をかけるため、皆に作戦準備を心得させよ」

伝令兵は立ち上がり敬礼すると、そのまま走り去っていった。

バルゼフォンは残った伝令兵に顔を向けた。

「お前は部隊に戻り、敵の側面を突くように伝えろ。

敵の指揮官の注意が完全に向くよう、私も出陣する」

「ハッ！」

伝令兵は慣れた動作で略式に礼をした後、すぐさま踵を返して立ち去っていった。

バルゼフォンは、見えぬはずの一番弟子に語りかける。

「スレイン、次があれば憶えておくがいい。

聖騎士とは、敵を釣る最大の餌なのだ、ということを」

厳しく眉を顰める剣聖の目は、はっきりと、遠く離れた聖騎士スレインを捉えていたのだった。

『ウエセックス王国軍 聖騎士スレイン』

スレインは、小競り合いの治まった前線の謎を訝しげに思索していたが、慌てて駆け寄ってくる伝令兵の狼狽した様子に、刹那の時間が凍りつくような嫌な予感がした。

「スレイン様、敵が攻勢に打って出ました！

前線には聖騎士バルゼフォン卿の姿もッ！」

「なにッ……!？」

このタイミングでか…！？」

目立った動きのない敵軍に対し、そろそろこちらから仕掛けようかと伝令を送ろうとした矢先の敵襲である。

さらに前線に剣聖がいるということは、敵軍が必勝の策をもってして動いたということ。

だが、謎だらけの小競り合いを繰り返しての突然の襲撃は、やはり何らかの機を窺っていたと見るべきだろう。

「分かった、私も前線に出る。各部隊に」

「スレイン様ッ！」

別の伝令が切羽詰まった様子で駆け寄り、スレインは不穏な気配を察した。

「どうした？」

「た、大変です！」

テムズ川に沿って進軍したと見られる敵援軍が、南東より侵入してきました！」

スレインは思わず瞠目した。

本国からの援軍を待っていたというなら、それは北東からのはず。

それがなぜ、わざわざ南東から回り込んできたのか。

「敵の数は？」

「約八千ほどです！」

現在、すでに前線が接触しておりますが、奇襲によって虚を突かれ、苦戦しております！」

「八千だと…？」

どうということだ？

敵は二万以上もこちらに戦力を割いてきたというのか？」

それは、常識的に考えて、まずありえない事態だった。

ただでさえ二方面の敵国に対して国境警備を万全にせねばならぬ慌ただしい時期に、二万という兵力で南下すること自体が極めて異例である。

ここからさらに八千も援軍を送れば、国境警備に必ず穴が開き、易々と敵の進軍を許すこととなるのは明白白白。

つまり、これは本国からの援軍ではあつてならない部隊なのだった。

「スレイン様、ご指示を！」

一万八千の部隊を相手に状況は極めて不利であるが、かといって後退すれば、イングラムの部隊が孤立してしまう。

もしイングラムが敗れた場合、もはやここからでは王都まで戻るに時間がかかりすぎる。

ゆえにここは、絶対に負けられぬ防衛線であるのだった。

が。「スレイン様！」

「またか…！ 今度は何だ！？」

二度あることは三度あるというが、さしものスレインも声を荒げずにはいらなかった。

三人目の伝令兵はスレインの前で跪いた。

「イングラム様のご指示により、ご報告に参りました！」

敵の別部隊が引き潮で浅くなった上流地点よりテムズ川を渡り、王都へ進軍中であるとのこと！

そのため、イングラム様は街の橋を落として増援を防ぎ、部隊を率いて至急、王都へ撤退するとのことですよ！」

「なッ！？

テムズ川を渡ったと…！？ …くっ、そういうことか…！

ならば、八千の部隊はベンシングトンに向かった部隊なのだな？」

「ハッ！」

スレインはようやく得心いったが、しかしまんまと敵の策に嵌まった自分を殴り付けてやりたかった。

だが、今はそんな悠長に事を構えるわけにはいかない。

急いで指示を出さねば、被害は広まる一方なのだ。

「よく知らせてくれた！ 感謝する！」

一拍の間を置いてから口を開いた。

「全部隊に告げる！」

これより我らは南西、ディーンの森まで後退する！

第一騎士団は私とともに剣聖の部隊を！

第二騎士団は南東より侵攻する敵部隊に防戦しつつ後退させる！

また、第二魔導兵団については一足早く全力で森まで後退させ、
フィッチ王国の遺産である隠し魔導砦を起動させるのだ！

戦場はディーンの森に移る」

「ハッ！」

三人の伝令はそれぞれの役目をもって三方に散っていった。

残ったスレインは、やや誇らしげな面持ちで、しかしどこか悔し
そうな表情をしていた。

「御師様、私はまだ、負けたとは思っていませんよ」

次の瞬間、彼は駆けていた。

己の戦場、相対するべき敵を打破するため、スレインは迷いを払
拭して走る。

かつての師、剣聖パールゼフォンとの戦いは、すぐそこまで迫っ
ていた。

『ウエセックス王国 フィダックス城』

三人は、初めて出逢ったこの庭園で待ち合わせをするのが、すでに暗黙の了解となっていた。

勿論、それはルナの体調によって大きく左右される交友の時間ではあったが、ジュリアはそれならそれだと部屋にまで押し付けてきたこともあって、二人の仲は親密と呼べるまでに育まれた。

元々、不治の病により交友関係も制限されていたルナにとっても、初めての女友達である。

尽きぬことのない話題は、しかし安定のない天気のようにコロコロと変わるものの、それが女の子の会話なのだろうと、グレッグは相槌ばかりをうちながらそう思った。

「それでヴィクターは、いろんな場所を、転々としているみたい、なんだけど…」

たまに怪我をして、帰ってくることもあるから…、私、すごく心配なんです」

「ふーん…」。

あなたも大変ね、忙しい弟さんを持つて。

…まあ、誰かさんみたいに失業中じゃないみたいだし、汗を流して働くのはいいいことだわ」

「いや、ですからね…、俺は別にクビにされたわけじゃなくてですね…」

ジュリアは微笑しながら、グレッグに振り向いた。

「ホントかしら？」

あなた、最近は毎日のようにルナと一緒にじゃない。
ほくら、別に責めたりしないから、正直に白状なさいよ」

グレッグは、拗ねた子供のように口を尖らせて腕を組む。

「違います。

俺はヴィクターと違って優等生ですからね、辺境なんかには飛ばされずに、こうして王都でのんびりできるんですよ」

そう言って、グレッグは誇らしげに胸を張ったが、ジュリアの胡散臭そうな視線に気圧されて徐々に徐々に視線を逸らすと、最後には、すみません、と小さく呟いた。

ルナは、心配そうに首を上げた。

「本当なの？ グレッグ…」

そう言えば、前に新しい就職先が、なんて言ってたけど…。
もしかして、臍首にされたの…？」

グレッグは半ば自棄になりながら、全力で否定した。

「だから違うってば！

俺はたまたま王都勤務が長く続いてるだけだって！
…ったく。

だいたい、俺がそんな甲斐性無しには見えないだろ？」

「……………」

「……………」

「……いや、あの…。」

せめて、どこでもいいから突っ込んでくれないと、俺、寂しいんですけど」

堪えきれず、少女二人は破顔した。「ごめんごめん。そこまで言うなら、可哀想だから信じてあげるわよ」

グレッグは肩を竦めた。

「ま、別にいいんですけどね。お二人が笑ってくれるなら、どーぞどーぞ笑い者を演じてみせますよ〜ッだ」

ジュリアは呵々と笑う。

「ほらほら、イジけないの。将来はルナを楽にさせるんだって、張り切ってる最中だもんね〜」

「え…?」

「ちょ…! 王女様ツ!? 今のは不意打ちすぎますって!」

「あら、いいじゃない。」

この際だから、本人に直接、言ってみたら?」

「い、言えるわけないでしょ! なに考えてるんですかツ!?」

「面白い事」

「人の恋路を弄ばないでくださいッ！」

理解が追いつかずに首を傾げるルナを引き合いに出されては堪らぬと、グレッグはジュリアの一方的な口撃に赤面しながら背を向けた。

その時、やけに慌ただしく庭園の入口に顔を出した、同じ暗殺者仲間の姿を捉えた。

男もまたグレッグを見つけると、すぐに怒鳴り声を上げた。

「グレッグ！　こんなところで何をしている！」

少し距離が離れているため、グレッグも必然と声を張り上げる。

「蜘蛛か！　俺は休憩中のはずだ！　ここへは来るなと言っておいただろう！」

現在、グレッグが担当している任務は王の護衛である。

二十四時間、たとえ王が眠っていようと二人一組で護衛するのが彼の仕事だった。

蜘蛛は、そのグレッグの護衛任務に当てられたパートナーであったが、しかし、彼の鬼気迫る表情はグレッグを痛烈に睨み付けている。

それが、単なる酔狂でグレッグに声をかけたのではないことを言外に示していた。

「お前こそ、なにを呑気にしてるんだ！

マーシアの連中が門を突破してるんだぞ！」

『えッ！？』

三人は同時に驚きの声を上げた。

グレッグは、信じられぬとばかりに瞠目して声を荒げる。

「そんなバカな！

スレイン卿やイングラム様が突破されたのか！？」

「わからん！ なにせ突然だったんだ！

守備部隊の連中が奮戦してるが、敵の奇襲に押されて危うい状況だ！

お前も早く戻れ！」

「分かった！ すぐに行く！」

蜘蛛が立ち去ると、グレッグは不安そうに表情を曇らせる二人に向き直った。「悪い、少し用事ができた。

二人は早く部屋に戻ったほうがいい」

入口から、来たぞ、と怒鳴る声が聞こえた。

「あなた大丈夫なの？」

「王女様、男には、命を賭してでも守り抜かねばならない大切なモノがあるんです。」

大丈夫、俺は死にませんよ」

「グレッグ…」

「ルナちゃんも、まずは自分の安全を確保してから、祈ってくれ。その方が、俺も安心できる」

ルナは小さく頷いた。

「それじゃあ、行ってくる。」

王女様、ルナちゃんをよろしく願います」

「あなたなんか言われなくても守るわよ。大事な友達なんだから」

グレッグは苦笑すると、すぐさま庭園を後にした。

ジュリアはルナの手を自分の肩に回し、小さく溜息をついた。

「…男ってバカね。」

置き去りにされて心配する身のことを考えたことがあるのかしら？」

「ジュリアさん…」

「だから、私たちも戦うの。」

グレッグが帰ってくる場所を守る戦いをね。

さあ、行きましょ。

そうじゃないと、彼が安心できないみたいだし」

「…はい」

なんだかんだと言っても、ジュリアという少女は強い、とルナは感じた。

それは心の強さ。

生まれついてより王女であることを義務付けられたがゆえの責任感と、一人の女の子として持つ彼女なりの価値観が、清濁併せ持つジュリアの芯の強さを形成しているのだとルナは思う。

それは同時に、生まれついてより他人に依存する生活を強制された自分とは、やはり一線を描くものであったこともまた、感じていたのだが…。

ルナはジュリアに支えられながら立ち上がると、安定しない足取りで庭園を出る。

通路は左右に分かれているが、辺りにはすでに、無数の足音と激しい怒声、そして金属が鋭くかち合う音が響いている。

途端、左の通路の角から剣を持った兵士が飛び出し、ジュリアはひつ、と悲鳴を漏らしたが、兵士は目もくれずに二人の前を通り過ぎていった。

「ジュリアさん、どうかしました…？」

ルナが怪訝そうに尋ねるので、ジュリアは溜息を漏らした。

「そつえば、ルナは目が見えないのよね。
今だけは、それが羨ましいわ」

首を傾げるルナを支え、ジュリアは先ほどの兵士が飛び出してきた左の通路に向かって歩を進めた。通路そのものは、それほど長くはない。

せいぜいが五十メートルほどだったが、敵軍の来襲によって背筋がちりちりと焼かれるような緊張感が、ルナに合わせた歩みもあって、実際の距離以上に長く感じられた。

一步一步、曲がり角に近付くたびに剣を持った敵兵が現れやしないかとジュリアは不安で堪らなかったが、しかし友達を守るという意志によって弱気ではダメだと強く念じ、震える足を進ませていく。

それは、ルナも同じだった。

むしろ目が見えない分、耳に響く喧騒が恐怖を増長させて、永遠の暗闇に興じる不協和音が胸の鼓動を際限なく高鳴らせた。

元々が平均より低い体力しかない彼女は、この、底無しの混沌が真下に広がる極薄の刃の上を歩くが如き緊張感に苛まれ、不安に胸が押し潰されそうになる。

右へと鉤状に曲がった通路を突き当たって道なりに進むと、ほどなくしてようやく二階に下りる階段まで辿り着いたが、その時にはもう、ルナは肩で息をするまでに体力を消耗してしまっていた。

「大丈夫？ ルナ」

「は、はい、大丈夫、です…」

そうは言つものの、安定しない呼吸から、苦しそうに顔を歪めているのは明らかだった。

「この階段を下りれば、あなたの部屋は目と鼻の先にあるわ。それまでは、頑張つて…！」

弱々しいながらも、しっかりと頷いて見せたルナに微笑み、ジュリアは再び彼女に肩を回して歩こうとした。

その時、階段から急に駆け上がってきた兵士が勢いよくルナとぶつかり、身体を病に蝕まれた少女は紙礫のように吹き飛ばされる。

「あうッ…！？」

ルナは壁にしこたま後頭部を打ち付け、ただでさえ苦痛に苛まれた疼痛がこの衝撃によって怒り狂ったように起き上がり、力の限り暴れ始めた。

「頭が…！ 頭が…！ 割れる…！」

「ルナ！ 大丈夫！？」

ジュリアの声すら、頭痛に阻まれて聞こえていない様子だった。

「ダメ…！ 解ける…！ ああ…！ 頭が…！」

起き上がるどころか、辺りを憚らずのた打ち回る彼女の様子にどうすることもできないジュリアは、いたぞ、と階下に呼びかける無神経な兵士をねめつけた。

「アンタたち！　なんて事をしてくれたのよ！　彼女は病人なのよ！？」　ジュリアの剣幕に気圧されたのか、兵士はばつが悪そうに狼狽したが、そのまま彼女の前に跪いて頭を垂れる。

「申し訳ありません、王女様。

我々はマーシア王国軍バルゼフォン將軍麾下の者でございます。ご友人に対するご無礼のほどは後ほど責任を。

今は將軍の命により、貴女様を保護し、速やかに城を脱出するよう申し付けられておりますゆえ、どうかお急ぎください」

「　　え…！？」

ジュリアは、予想だにしない言葉の羅列に一時は理解が追いつかなかったが、すぐに頭の靄を振り払って意識を切り替えると、激しく否定した。

「あなた何を言っているの！？

私はウェセックスとの間で締結された条約に従ってここにいますよ！？

私がいなくなれば、本国が危うくなる！

そんなこと、できるわけないでしょ！？」

「お叱りはごもつともでございます。

しかし、すでにドウムニア王国とは共闘作戦における密約を交わしており、すでに三千の兵を引き連れてこちらに進軍しております。あとは貴女様の安全を確保できたなら、彼らは敗北の屈辱と汚名を晴らすべく、満を持して蛮勇を振るうでしょう。

さあ、お急ぎください」

そんな、と後退るジュリアはひどく困惑した。

確かに、先の戦争によって兵力を著しく消耗させられ、反攻の意志すら抱けぬ状態にまで追い込まれた本国ではあったが、マーシア王国軍と連動した作戦行動を展開すれば勝機を見出だせると踏んだのも、無理からぬ起死回生の一手である。

現にどのような手段を講じてかは不明だが、マーシア王国軍は王城にまで攻め入り、その王手は決定的とも言えるほどだ。

そこにどのような話し合いが行われたかについてはさすがに知る由もないが、ウェセックス領土の分割支配となれば条件としては申し分ない。

…、ジュリアは、苦い決断を迫られていた。

それも、どう考えても自分一人の意志だけでは到底変えられぬ、運命の選択を。

「ううあ…！ あ…！ 頭が…！ ああ…！」

呻くルナの悲痛を耳にしながら、ジュリアは泣いてしまいたかった。

だが、泣けなかった。

泣いてはならなかった。

自分は王女なのだ。

自分には、自国民を守る義務と、幸福を平等に分け与える使命が

ある。

それが王女であるがゆえの前提。それが、自分が生まれ生きていく上で定められた、不変の宿命なのだから。

下唇を噛み切り、仄かに血が浮き出したことにも気付かぬまま、ジュリアは意を決して顔を上げた。

そこにはもう、一人の女の子としてのジュリアは存在しない。

存在しては、なかった。

「分かったわ。

けど、彼女をこのままにはしておけない。

あなたと接触したせいで、ひどく痛がってる。

早く医者に見せないと……！」

「分かりました。

では、私が背負いますので、王女様は私の後に着いてきてください。……ああ、応援もきてくれました」

ジュリアが振り返ると、階下から急いで駆け上がってきた複数の兵士たちが現れた。

彼らはジュリアに略式的ではあるが敬礼すると、すぐに事情を知る兵士と素早く疎通して先導する。

「では王女様、急ぎましょう！」

「え、ええ……」

後ろ髪を引っ張られる思いで、ジュリアは兵士に護衛されながら王城を脱出する。

一人の女の子でいられた、不幸せな幸福の時間に感謝を込めて、さようなら…。

彼女は、一時の夢に浸っていた王城へ、ついに振り返ることはなかったのだった。

『同時刻　フィダックス城　玉座の間』

玉座の間は、喧々囂々たる雄叫びと、甲高い剣の悲鳴が入り交じる戦場と化していた。

優に百人は入る程度の面積を誇る玉座の間は、その半ばほどに少しばかりの段差があり、その先に王と妃が座する玉座がある。

エグバート王は、その玉座を障害物として上手く利用しながら、聖騎士スレインとのかかり稽古で鍛えられた勘を頼りに襲いかかる敵兵を迎撃していた。

その周囲には、次々と攻め入る敵を食い止める警備兵が十人と、護衛の任務に就く暗殺者、蜘蛛の姿があった。

「行け行け！　標的は目の前だ！　殺せ！」

「何としても食い止めるぞ！　恐れるな！　陛下を守れ！」

もう何人の敵を斬ったのか、蜘蛛は覚えていない。

エグバート王もそこまでの余裕はすでになく、死角を消しながら、息つく暇もなく入れ替わる敵を相手取るのに精一杯だった。

気合を放つ敵兵の剣を辛うじて防ぎ止め、力任せに弾き返して斬り伏せる。

いつ終わるとも知れぬ命の削り合いは、一太刀ごとに神経を摩耗させて、殺人という意識を麻痺させていた。

「陛下、ご無事ですか」

つい今し方、敵兵を殺して近付いてきた蜘蛛の言葉に、エグバートは鷹揚にして頷いた。

「しかし、これではキリがないな。

味方はまだ来ぬか？」

「今、イングラム様の部隊がこちらに駆け付けております。それまでは、何としてでも我々がお守りいたします」

イングラムの放った早馬が到着したのは数分前のことだ。

尤も、全部隊が王都に戻るには少なく見積もってもあと三十分かかるのだが、それでも長い長い攻防戦に光が差したのは確かだった。

蜘蛛は、再び手の空いた敵兵を見つけると迎撃に赴いた。

しかしそれはフェイク。

エグバートは、いつの間にか背後にまで迫っていた美貌の女騎士を見て瞠目した。

味方ではありえない彼女の殺意を前に、エグバートは胸の前に剣を構える。

「何者だ」

若い女である。

歳は二十半ばか。

蛾眉に彩られた瞳は凜と輝き、鎧から見せる手足や柳腰がなお美しく、見る者を魅了する。

すらりと剣を抜く動作の間にも一縷の隙もなく、しかし豹のように鋭い剣気を漲らせて、彼女は口を開いた。「私はマーシア王国軍バールゼフォン將軍麾下の副官、エリス。

エグバート王、その首もらい受ける…！」

最後の一言と、エリスが踏み込んだのは同時だった。

虚を突かれ、元より歴然とした力の差にあったエグバートでは、その速度に反応することさえ至難の業。

バネのように撓めた瞬発力が、あたかも猫科の肉食獣めいた速度まで臨界し、互いの間合いを刹那に詰める。

「もらった…！」

防御も回避もできぬ、大気を切り裂く剣撃がエグバートめがけて

放たれた。

あつという間に詰め寄せられたエグバートは身体を硬直させ、振り下ろされる剣の軌跡を間近で捉えた。

「陛下ッ！」

蜘蛛がかけた言葉も虚しく、エリスの剛剣がエグバートの前頭部に接触する　　！

その、刹那。

一際、甲高い金属の衝突音が鳴り響き、わずかに眉を顰めるエリスの前に、ナイフを持つグレッグが現れた。

「させねえよ……！」

必殺の剣撃を止められ、エリスはすぐに間合いを取った。

「グレッグ、遅いぞ！」

ここでようやく応戦していた敵兵を倒し、蜘蛛が合流する。

「悪いな、真の主人公は見せ場を心得てんだよ」

「ふん……！」

先ほどまで女とくっちゃべっていた軟派者の言う台詞ではないな」

グレッグは、むっ、と口を尖らせた。

「いいだろ、別に。」

間に合わないモノを間に合わせるのも主人公の務めさ」

「では、その主人公とやらに今から大活躍してもらおうか」

「や、できれば手伝って。こいつ、他の雑兵と違って別格だ」

暗殺者の中でも腕に覚えのある精鋭二人を前に、しかしエリスは油断も慢心もない冷やややかな視線を注いでいる。

「話は済んだ？」

貴方たちと違って、私は忙しいの。

できれば、そこをどいてほしいんだけど」

エリスの挑発的な誘い文句に、グレッグはあえて応えた。

「だったら、俺たちを倒すしかねえな」

「ふん、ヘラヘラして殺られるなよ？」

「ヘッ、どっちが…！」

その瞬間、二人は一斉に駆けた。

蜘蛛が左、グレッグが右に展開する左右同時攻撃。

いかなる超人でも、一度に取れる行動は一度のみ。

人間という身体機能の死角を突いた二人の連携は、まさに鼠の如き素早さと蜘蛛の冷酷さを秘めてエリスに襲いかかる。だが、そ

れは相手が動かなければの話だ。

二人が動いたその時、エリスもまた敵の陣形を瓦解するべく颯爽と踏み込んだ。

閃く二刃の軌跡。

グレッグのナイフを鋭い剣撃で弾き、さらに後方から接近する蜘蛛のナイフを、初撃の太刀筋を利用して軌道修正し、受け止める。

「なッ…!？」

驚愕に見開かれる蜘蛛を足蹴に吹き飛ばし、次いで死角から飛び出したグレッグに向かって剣を閃かせる。

「チィッ…!」

グレッグは舌打ちを鳴らすが、上体を低くすることで横薙ぎの斬撃を辛うじて躲す。

そのままエリスの懷に飛び込み、鮮やかなナイフ捌きをもって連撃を繰り出すものの、それらすべてをことごとく迎撃する女騎士の技量が遥か上をいく。

「こいつ…! 本当に手強い…!」

しかしながら、エリスもまた、グレッグや蜘蛛の技量に心の中で舌を巻いていた。

だが、特別訓練相手として手合わせの機会が多い彼女の身体には、

悪夢のような超斬撃を繰り出す剣聖との戦闘経験が染み付いている。

確かに二人の速度と技術は水準を遥か上回るものの、それでも判断を誤らなければ、冷静に対応できるレベルにすぎなかった。

「だが、これは躲せまいッ……！」

上半身のバネを利用して連撃を仕掛けるグレッグにエリスの注意が引きつけられた刹那、吹き飛ばされていた蜘蛛は壁を蹴って、矢の速度で女騎士の背後に飛来する。

これには、さすがのエリスも剣による迎撃は不可能であった。

目の前の少年が繰り出す猛撃のすべては、いずれも致命の急所を狙い定めた精確無比の必殺である。

それが、彼らがイングラムに求められた必須の技量であり、ゆえに彼らは信頼される暗殺者の一員に選ばれたのだ。

言わば、イングラム麾下の暗殺者とはそれ即ち、ウェセックス王国が誇るダークナイトに他ならない。

その暗殺者の中でも、三指に数えられる少年の全霊を込めた連撃に、さしものエリスも視線を切ることができない。

ゆえに、なればこそ。

無数のダースと見紛うほど鮮やかなナイフ捌きを見せるグレッグを囿に、蜘蛛の見えざる閃光が女騎士に命中する。

正しくは、する、はずだった。

「天翔ける氷狼”（ライカンズ・ブルー）」

必殺を確信した二人の暗殺者は、今度こそ驚愕した。エリスの背に蜘蛛のナイフが貫く寸前、彼の体は物理法則を無視して突然、横方に吹き飛ばされた。

否、吹き飛ばされたのではない。

何も存在しなかったはずの空中から何の前触れもなく、全身をクリスタルのような結晶で構成された獣が現れ、彼の身体に覆い被さったのである。

「蜘蛛！」

予期せぬ妨害に、グレッグは思わず彼に呼び掛けたが、すぐにそれを、強敵を前に自ら晒してしまった致命的な失態と悟る。

「遅い……！」

グレッグの連撃が止まった刹那、エリスはここぞとばかりに当身を入れて彼を吹き飛ばした。

人体最弱の急所である鳩尾に当てられた強烈な肩当てに、グレッグは胃が握り潰されそうな圧迫感を抱いたまま壁に激突する。

「ぐうあ！？」

「グレッグ……！」

仲間の窮地を前に一刻も早く駆け付けてやりたい気持ちを、しかし神秘の獣に文字通り身体ごと押さえ込まれ、蜘蛛は身動きが取れない。

ふらりと定まらぬ足腰で何とか膝を屈するのを踏み留めたグレッグだったが、ピタリと喉元に突き付けられたエリスの剣先に不動を命令され、そうでなくても全身を走る激痛に表情を険しくした。

「クソ……！ アンタ、魔導騎士かよ……！？」

憎々しげに問い掛けるグレッグの言葉に、彼女はあくまでも冷やかな目で若き暗殺者を見据えた。

「応える義務はないわ。

尤も、貴方がそう思ったのなら、きっとそうなのでしょうね」

最悪だ、とグレッグは己が浅はかさを呪った。

蜘蛛を押さえ込む氷の獣といい、事前に呪文詠唱を済ませた上で背後の死角を補完する技量といい、彼女が魔導騎士の中でもかなり高いレベルに位置する使い手であることは明らかである。

魔導騎士 その名の通り、魔導を操ることができる騎士は、

それだけで兵士百人分の働きをこなすと言われている。

しかも、彼女が操って見せた魔術は、精霊魔術における“水”系統の大型魔術。

未知の戦力を秘めた敵の能力を推し量ることもせず、勝利を焦つ

たことが今のピンチを招いてしまったのだとグレッグは後悔した。

火系統魔術が、空気中の酸素を精霊の活力だとすると、それを継続して燃やす火種が術者の魔力であるならば。

水系統魔術は、空気中の湿度に大きく左右され、その水の状態を術者の魔力によって変質させる魔術である。水の気体状態は、俗に水蒸気と呼ばれている。

これは通常、大気中にほぼ必ずある程度の割合を持って存在し、基本的に沸点以下の温度でも気化しているため、人は空気中の水蒸気量のことを湿度と呼ぶ。

空に浮かぶ雲は、この水蒸気が凝縮されて液体になるか、凝固されて固体になった時に形作られるのだが、これは空気中に安定できる水蒸気量を越えたがために起きた、不安定な過飽和状態となっているからだ。

エリスの水系大型魔術“天翔ける氷狼”は、こうした、空気中に含まれる水蒸気をかき集めて凝固させ、本能レベルでの操作を可能とした氷の獣を生み出す術なのである。

氷狼と直結した本能とは即ち、生存本能のことを指している。

あらゆる生命体にとっての最優先本能とも言うべきそれは、まさしく狼を象って主人に害を及ぼす敵を迎撃する。

しかも、この氷の獣は自らの意思によって身体を、液体・固体・気体へと変質させることができ、必要に応じて変態することができた。

そのうえ周囲に豊富な水の供給があれば再生は容易く、まさに主を護衛する絶対の守護者として敵に立ちはだかるのである。

ただし、このように複雑な性質を持つため、神秘によって一度に生み出す獣は一体が限界であり、他の魔術は使用不可、さらに奥義と位置づけられる精霊召喚に負けず劣らずの魔力消費量を覚悟しなければならず、術者にとってもリスクの高い持続型魔術であることを念頭に入れておかなければならなかったが。

剣先が喉元に触れている、その鋭い冷たさに薄皮一枚を隔てた死を感じながら、グレッグは眼前の女魔導騎士の隙を虎視眈々と窺っていた。

しかし、寸毫ほどの油断も隙もない彼女から虚を見出だすのは容易ではなく、少しでも判断を誤れば喉元の剣が首筋を貫くのは火を見るよりも明らかだった。

エリスは、そんな諦めの悪い少年の一挙手一投足に気を配りながら、口を開いた。

「この世に言い残したことはあるかしら。

…なければ…、一足先に地獄へ送ってあげる」

「へっ…、それ、完全に悪役の台詞だぜ？」

「戦争に善も悪もない。

…そして、戦争を終わらせることができるのはルールではなく、勝利か敗北かの、結末だけよ」

「いや」

少年は、不敵にほくそ笑む。「愛だけが、戦争を終わらせることができるのさ」

最後の一言を聞き届ける寸前、エリスは背後からの殺気に気付いた。

「ぬうおおお！」

「くッ！」

エグバート王の渾身の一振りが放たれる。

エリスは電光の速さで向き直り、王の剣撃を精確に捉えて受け止めた。

その直後、背後の少年が迫る気配を感じた。

「おおりゃあああ！」

「なッ ！？」

エグバートの剣撃から一秒と経たずに繰り出されたグレッグの突進は、王の気迫に振り向かざるを得なかったエリスの腰間にナイフの刀身を深く突き刺す。

突如として走る焼け付くような痛みと裂かれた肉の感触に、初めて苦痛の表情を浮かべた副官はしかし、すぐさま王の剣を薙ぎ払い、背後のグレッグに蹴りを入れて吹き飛ばし、二人から距離を取るべ

く後方に跳躍した。

蜘蛛に覆い被さっていた氷狼は主の危機を察知してエリスの傍らに戻り、ようやく自由を取り戻した暗殺者もまた、王とグレッグに合流する。

両者の間合いは、玉座の間中央に段差を持つ階段を隔てた位置で睨み合っていた。

「陛下、援護していただき、感謝の言葉ありません」

辛うじて繋ぎ止めた命の救世主たるエグバートに、彼は敵を見据えながら会釈した。

「よい。お前が倒れれば、私が殺されていた。

あれは、まさしく賭けだったよ」

グレッグは、視界の片隅でじりじりと忍び寄る王の姿に気付いていた。

だが、自分が王を見やればエリスはその不可解な視線の先をすぐに辿るべく感覚を研ぎ澄まし、背後のエグバートを感じするだろう。

それを防ぐためには、何としても自分に注意を引きつけておかなばならず、グレッグはあえて敵に悪態をついて見せたのだった。

それは、彼本来のキャラクターというものが、エリスの鋭い目を巧みに誤魔化した隠れ蓑となったのかもしれないが、今回はそれが上手く機能したと言えるだろう。

「だが、あれは厄介だぞ。」

マスタークラスの魔導技術を持つ騎士に加えて、精霊レベルの能力を備えた幻獣が相手なら、棄てる覚悟で挑まねば勝機はない」

蜘蛛の言葉は正しい。

そもそもが、エリスの技量は二人より優れている上、魔導技術に關しても造詣が深い。

ましてや、その隣には彼女が生み出した氷狼が三人を威嚇しているのである。魔術の具現化とも言うべき神秘の力は、その難易度に応じて四種類に分類されている。

初歩魔術 各魔術系統の骨格を成す、最も基本的な神秘の力。魔導に目覚めた半熟の魔術士たちの前に立ちはだかる、最初の試練でもある。

中級魔術 一般的に魔術士と呼ばれる者たちが身に着けた神秘の力。

このレベルに應ずる魔術を操る者が、ようやく一人前の魔術士と呼ばれるようになる。

大型魔術 俗にマスタークラスと呼ばれる、魔術士の中でも一流の天才たちが自在に行使用する神秘の力。

この領域に足を踏み入れた魔術士は、強大な魔力の所有によって老化が著しく低下し、永ければ最大でも百五十年近く生存することができる。

“奥義” 各魔術における最高峰の超神秘の力。

これらは奇蹟の力である“魔法”に負けず劣らずの絶大な威力を

誇ると言われるが、その領域に到達するのは数えるほどしか存在しない。

エリスはこれらの内、大型魔術に位置付けられる幻獣を生み出して見せた。

元々、使い魔ではない純粋な戦闘用の獣を瞬時に生み出す魔術はマスタークラスにしか操れぬため、蜘蛛はエリスの魔導技術をすぐに把握することができたのだが、それは彼らの状況が、以前として窮地にあることを示していた。

グレッグの突進はエリスにダメージを与えたが、それは致命傷ではない。

彼女はグレッグの気配を瞬時に嗅ぎ取り、防ぐは間に合わぬと判断するやいなや、すぐに身体をずらして急所への命中を躲したのである。

憎々しく射殺すが如き強烈な殺気の視線を浴びせかける女魔導騎士は、しかし手負いの獅子となっても三人に襲いかかるのは明らかだった。

生半可に与えた負傷が災いし、もはや彼女は一縷の隙もなく攻勢に転ずるだろう。

そう覚悟して身構える三人に対し、エリスは再び無言の殺気を迸らせて剣を強く握り、踏み込みのタイミングを窺う。

「陛下はここで、我らが奴を引き受けます」

蜘蛛の言に、エグバートは神妙な面持ちとなった。

「大丈夫か？　彼女は手強いぞ」

「我らのことよりも、どうか、ご自身の身を守り抜いてください。
おっしゃった通り、彼女を相手にしては、エグバート様の援護ま
でとても気が回りません」

グレッグの言葉に、エグバートはやや逡巡してから頷いた。氷
狼を従えるエリスと、王を護衛する暗殺者二人が駆けたのは、ほぼ
同時のタイミングだった。

二人は氷狼の変則的な動きから苦戦を強いられていたが、互いの
役割を柔軟に割譲し合いながらの連携で、エリスの猛攻を防ぎ続け
る。

手負いであることをまったく感じさせぬ、むしろ鬼気迫る迫力に
威力を相乗させた凄絶な剣撃だった。

一刀を受け止めるにも全身の骨格が響くほどの凄まじい衝撃に、
蜘蛛とグレッグは氷狼への注意も相俟って、その体力を砂時計のよ
うに滑り落とされていく。

だが、体力に余裕がないのはエリスも同じだった。

氷狼へ半永久的に供給する魔力の消費に加え、グレッグの一撃に
よって負傷した刺傷は深く、このまま動き続ければ、いずれは出血
多量で行動不能となるのは明白である。

これは早急に手当てを受けねばならなかったが、その前にはどう

しても、目前にまで近付いた敵王の首を打ち取らなければならなかった。

密かに慕う剣聖から託された作戦の本懐を果たすべく、エリスは一振りごとにごつそりと奪われる体力を気迫のみで補いながら、しかし攻防戦はどちらも決め手ない混戦と化していく。

両者とも一歩も譲らぬ攻防戦は、傍目から見れば互角に映る。

縦横無尽に宙を駆ける氷狼が二人の暗殺者を翻弄し、その隙をエリスが巧みに突くかという寸前で、蜘蛛とグレッグは、ほとんど目も合わせずに互いの死角を消し合う間合いを維持してエリスの奇襲に対応する。

激しく打ち鳴らされる金属の悲鳴が、高速で展開される両者の戦いの激しさを物語る。

だが、蜘蛛とグレッグの心中や、実は冷静ではなかった。

二人は、まるで反撃の暇もなく襲いかかる幻獣とエリスの猛攻を防ぐだけで全力を尽くしていた。

攻勢に転ずる機会は、思考の間も与えず踏み込む敵の剣撃によって切り替えられ、あるいは急襲する氷狼の冷たい顎や爪が霧散させる。

二人は、防戦に徹して機を窺っていたのではなく、防戦に全神経を集中させなければ全く歯が立たない窮地だったのである。

不幸中の幸いであるのは、彼らの目的が敵の撃破ではなく、あく

までも王の命を守り抜く、この一点にあることだ。

放っておいても出血多量で体力を著しく削られ続けるエリスと違い、二人は防戦だけでも目的を果たすことができる。従って、グレッグと蜘蛛には極限の緊張状態にあるとはいえ、敵を倒さねばならぬという焦燥感はない。

だが、エリスは違う。

彼女に託された任務は王の殺害である。

ゆえに、エリスは隙あらば多少の無茶をしようとも王に急襲する構えを見せていたが、それを眼前の暗殺者たちが巧みにかき消す。

ならば氷狼を、と言いたいところではあるが、手負いで動きが鈍りつつある今の状態では、この二人を同時に相手取るのは難しいのだ。

よって、エリスはまず目の前の二人を叩くことに意識を集中していたが、しかし彼らも、そこはやはり王の護衛を任された暗殺者である。

自分たちの実力が劣ると悟るやいなや、互いに死角を補い合う巧妙な連携で防戦に徹し、時間に追い詰められる自分を凌ごうとしている。

そうエリスは推察したが、それが自分にとって最悪の戦術であることに変わりはなく、ただ時間だけが冷酷に過ぎていくばかりだった。

両者は、再び距離を取った。

互いに肩で息をしながら、しかし毛ほどにも気を緩めることなく、眼前の強敵に睨みを利かせる。

息遣いは荒く、特にエリスには大粒の汗が端正な頬に滑り落ちていた。

その時、思わぬ闖入者がエリスの傍らに駆け寄ってきた。

「エリス様！」

それは、彼女の部隊に属する伝令兵だった。

エリスは、凄腕の暗殺者二人を前に視線を切ることなく、跪いた伝令兵に多少、声を荒げて応える。

「敵部隊が王都に近付きつつあります！」

敵兵の数はおよそ五千ほど……！ おそらくは、ベンシングトンに駐留していた部隊かと！」

それを聞いた瞬間、エリスは苦虫を噛み潰したように顔を歪め、逆に、エグバートら三人は心中ながら希望を見出だした。

「くっ……！ 時間切れか……！ 思ったよりも早いわね……！」

「作戦通り、すでに部隊は例のポイントへ後退しつつあります！」

エリス様も、どうか早くお退きください！」

敵国の王を前に、むぎむぎ撤退しなければならぬ齒痒さに苛立ち

を抑えながら、エリスは頷いた。

「よし、全部隊に徹底させろ！　これより我らは北西に後退する！」

「ハッ！」

伝令兵はすぐさま走り去り、エリスは剣を前に構えながら、じりじりと後退する。「おっと、このまま逃がすわけにはいかねえな……！」

後退しようとするエリスとは対照的に、蜘蛛とグレッグがじりじりと前進する。

「その通りだ。大人しく縛につけば、命だけは助けてやるぞ」

蜘蛛の、多分に挑発を含んだ言葉を、エリスは一蹴した。

「命拾いしたわね、エグバート王……！
だけど、次に会う時は容赦はしない……！」

エリスは踵を返し、玉座の間から走り去る。

「待て！」

二人は慌てて追いかけようとしたが、玉座の間の入口を氷狼が陣取り、安易には進ませてくれなかった。

「くそっ……！　このバカ犬……！」

喉の奥を唸らせて威嚇する氷狼はしかし、玉座の間に慌ただしく

入ってきた兵と入れ違うように姿をかき消した。

おそらくは気体となって主の元へと去ったのだろう。

再び二人は追いかけようとしたが、しかし入ってきた伝令兵が、ひどく狼狽した表情でエグバート王の元へ駆け寄ったため、二人は伝令兵へと向き直る。

「た、大変です！」

西より、ドウムニア王国軍が、こちらに進軍しております！」

エグバートは、心底ホツとしたように安堵の表情を浮かべた。

「助かった！ 援軍か！？」

「い、いえ…、それが、我が国に和平の証として在留していたジュリア王女が王都を脱出した模様で…、これはどう考えても、マーシアの動きに合わせた進軍としか…！」

「な、なんだと！？

それは誠か！？」

青褪めた顔で目を丸くした王と同様に、グレッグは、全身から水分が抜け落ちるように血の気が引いていくのを感じた。

『イースト・アングリア王国軍』

リュジット砦より東に位置する平野で、イースト・アングリア王国軍は野営地を築いていた。

細い幹を柱に見立てて薄い布を張った程度の、しかし多少の雨風ではビクともしない天幕の群れが、外柵の内側に連なっている。

その一郭、慌ただしい喧騒とともに人の入れ替わりが激しい天幕が、数ヶ所に渡って設けられていた。

最前線用に設置された簡易型の治療所である。

それは前線で傷ついた友軍に応急手当を施すための必要不可欠な施設であり、主に軍医や治癒魔術に長けた魔導兵らによって構成されている。

彼らは戦闘力こそないが、こうした後方支援による尽力が軍の活躍に一役を担う重要な存在であることは言うまでもない。

しかし、まだ本格的な戦闘に至っておらぬはずの、本来ならまだ暫くの余裕をもって世間話にでも戯れているであろう彼らは今、その強力な御手によって仲間を冥土に連れ行こうとする死神と懸命に戦っていた。

リユジット砦の前に、まさしく見せしめのために張り付けられた十字架の捕虜たちが、次々と運び込まれているのである。

捕虜たちの外貌は陰惨を極めた。

顔の皮膚が乱雑に剥がされ、放置されている間に無数の虫に襲われたのだろう、醜く浮き出た肉は虫食い穴のように、あるいは刺されて腫れ上がっている。

眼球はとうにない。

妊婦のように盛り上がった腹部は男女ともに見受けられ、それが想像を絶する水責めに苛まれたことが窺い知れる。

両手の甲には松明が貫いていた空洞が風を通し、神経や血肉を撫でて激痛を走らせ、身の毛もよだつ呪われた苦痛のオーケストラが、彼らの焼け付いた喉から絞り出されていく。

これでは、生きている方が地獄である。

もし、イースト・アングリア王国軍の進軍が後一日でも遅ければ、彼らはその二十四時間分、たつぷりと苦しみ続けなければならない。

生きていると言うよりも、魔人によって生かされていた彼らの心臓は、十字架より下ろされた時点で急速に弱々しくなり、手当ての甲斐なく息絶えていく。

一人、また一人と死神に連れ去られた仲間たちは、そうして最後の一人の死を確認して全滅したのだった。

その訃報は当然、將軍セレスの下へといち早く届けられた。その治療所より捕虜全滅の報告任務を受けた伝令が向かった先は、この野営地の中央に設営された大振りな指揮官用の天幕である。

「失礼します。セレス將軍へ、ご報告に参りました」

その若き將軍が待機している帷幕の中に足を踏み入れた時、伝令は思わず身震いするほどの緊張感に息を呑んだ。

天幕の内部は、三又槍のような燭台に灯された火の光で満たされていた。

左右の幕際にはそれぞれ三人ずつ、合計六名の衛兵が直立不動の姿勢で待機していたが、彼らは明らかに事の成り行き次第ではいつでも抜剣できるよう心構えしていることが窺い知れる。

その衛兵に見守られながら、あるいは一挙一動を監視されながら、二人の男が椅子に腰掛けて、中央の机を挟み真正面に相対していた。

一人は、勿論ながら伝令もよく知る男である。

数年前、武勇に優れた前任者の将軍が剣聖の副官と交戦した際に深手を負い、そのまま病に倒れてしまったのだが、その将軍の副官だったのがセレスだ。

彼は、元々が大貴族の家系に生まれ育ったために国王との社交機会も多く親交があり、そこに前任の将軍から推薦状を頂いたため、晴れて軍部最高の地位である将軍の座に拔擢されたのである。

セレスは苛立たしげに眉を顰めていた。

王国軍一万の野営地に単身で乗り込み、その大本営とも言える将軍の帷幕にて悠然と腰を下ろす男の存在そのものが、彼の神経を逆撫でしているのだと伝令兵は理解する。

入口に立つ伝令兵からはその背中しか見えなかったが、しかしそれでも、この男が噂に名高い魔人だとは到底、思えなかった。

邪悪な気配も、剣呑な殺気もない。

その後ろ姿は伝令さえもが拍子抜けするほど平凡であつたし、身に着けている衣服もそれなりに高級そうには見えるが、ただそれだけだ。

伝令が入口に入つて思わず緊張したのも、將軍から息詰まるような敵意が、そもそも隠すつもりもなく発散されているからだつた。

セレスは睨みを利かせた視線そのままを伝令に向け、顎をしゃくつて傍に来るように促すと、伝令兵は細心の注意を払つて歩み寄り、捕虜全滅の意を彼に伝えた。

報告を受けたセレスは一瞬、目を見張つたが、すぐに内なる動揺を抑えて伝令を下がらせる。

伝令兵が辞去して暫しの逡巡のあと、セレスは口を開いた。

「今し方、連絡があつた。貴様が拷問した捕虜たちは全員、無念にも息を引き取つたそうだ」

セレスの口から訃報が告げられた瞬間、ざわり、と幕際に待機する護衛たちの動揺が波紋となつて静寂の空間に一石を投じた。

しかしながら、肝要だつたヴェンツェルの反応に変化はなく、それゆえにセレスの苛立ちはますますもって膨らんでいく。

その様子を他人事のように愉しげに見つめながら、魔人は芝居がかった素振りで驚いて見せた。

「それはそれは、誠にお気の毒に……。心から、お悔やみを申し上げます」

慇懃無礼なヴェンツェルの言葉を最後まで聞くまでもなく、セレスの目が一瞬にして殺意の光を宿した怒気を孕む。

「貴様ツ、何と白々しくもそのような言葉が吐けるな！

彼らを死に追いやったのは他ならぬ貴様であろう！

この罪は断じて償いきれるものではない！

王の裁可を仰ぐまでもなく、今ここで私が死刑を執行することもできるのだぞ、魔人…！」

一触即発の緊張感はしかし、魔人を毛ほども揺るがせはしなかった。

「フッフ、貴方も意外とせっかちでいらつしやる…。

貴方のように聡明な方であれば、この私を利用して王国の内情を聞き出すのだとし、あえて私の誘いに応じて招き入れたものだと思っていましたか…？」

「ふん、無論だ！

しかし、たかが情報を聞き出す程度であれば、何も貴様が五体満足でいる必要はない！

…なに、我らは寛大であるがゆえに殺しはせぬよ…、…尤も、生かもしないがな…！」

魔人は口に手を当てて、含み笑いを漏らした。

「フッフ、恐ろしや恐ろしや…。

私の命は今まさに、貴方の手によって生殺与奪を決定付けられる運命にあるのですね…、フッフッフ…」

「そうだ。」

貴様がマーシアの内情をすべて吐露し、リュジット砦の防衛戦力を無力化するというのなら、その命だけは永遠に鎖に繋ぎ留めておいてやるぞ」

「フフ、随分と荒々しい將軍でいらつしやる…。」

思わず親しみを感じてしまいましたよ…、クッククッククック

…」

小馬鹿にするような魔人の嘲笑が、怒髪天を衝くセレスの感情をついに爆発させた。

「下劣極まりない貴様と一緒にするな！ 虫酸が走るわ！

… ええい、もはや我慢ならぬ！

この男の首を斬り棄てて、犬にでも喰わせてしまえ！」 セレスの命に短い言葉で応じた六人の衛兵は一斉に剣を抜き、そのうちの二人が左右に詰めて魔人の両肩を掴み、椅子を下がらせて強引に跪かせた。

首を前に突き出させたその姿はまさしく、罪人が斬首に処される死刑執行の直前の光景そのものであった。

セレスは、不気味にも無抵抗を続ける魔人の様子に釈然としない蟠りを感じてはいたが、それ以上に、この男の下卑た笑い声をもう聞かなくて済むのかと思うと、途端に得意満面な笑みを浮かべて、ヴェンツェルとやらの惨めな姿を後世の笑い話として残してやりたい気持ちになった。

眼前に跪く魔人に対し、彼は椅子から立ち上がると、腰に手を当てて悠々と歩み寄る。

「さて、魔人よ。」

その存在すら赦されぬ貴様の所業は八つ裂きにしても飽き足らぬものだが、私は慈悲深いのでな。

最期を飾る言葉ぐらいは訊いてやろう」

無論、命を助けてくれと懇願しようが、許すつもりなど更々なかった。

むしろ、とことん惨めな姿を自ら晒け出せてやってから、最高に無様な死に方を処してやるつもりである。

しかし。

「ふむ…。そういえば、セレス將軍。」

貴方はつい先ほど、犬がどうかおっしゃっておられましたね？」

セレスが耳にしたのは、場違いなほど予想だになかった言葉だった。

「…なに？」

眉を顰めて訝しく思案する彼を余所に、魔人は言葉を繋げる。

「犬は素晴らしい動物だと思いますか？」

古来より、犬は人間にとって掛け替えのないパートナーであり、種族の垣根を越えたその関係は、まさしく魔術のように神秘的な親しみを感じさせてくれる存在です」

それは歴史が証明している。

戦争では、古代ギリシャの時代に実在した武装する戦闘犬や、第二次世界大戦時には防毒マスクを被って活躍した軍用犬の姿が確認されている。

また、生活面でも、寒さに強く持久力のある犬ぞりで親しみの深いハスキー犬や、身体障害者補助犬法に則って現代社会の実生活に活躍する、盲導犬・聴導犬・介助犬が存在する。

神秘的とされる不思議な能力も垣間見せる時があり、一度も訪れたことのない土地を真冬の山脈を自力で踏破して主人を捜し当てる感応追跡などが、その代表例であろう。尚、これは余談ではあるが、犬の祖先の原型である狼についても、実は彼らが人を襲ったという事例は皆無に等しく、そのほとんどは人間の作り話や家畜の被害、そして童話の影響による先入観の恐怖が濃いと言われているのである。

「犬は主人に褒められたり、愛撫されたい、ただそれだけのために忠誠を誓うのです。」

心と心で繋がったその関係はとても美しく、それは貴方がたとはまるで一線を画すものだとは思いませんか…？

…そう、低俗な褒美と取るにも足らぬ名譽のために偽りの忠誠を平然と誓う、愚かで醜い国家のイヌたち…クツクツクツクツ…」

あまりのことに、セレス將軍は反論することも忘れて絶句した。

まさか、このような状況下で、これほどの悪態をつくとは思っても寄らなかったのである。

度を越した死の恐怖で気が触れてしまい、卑しくも畜生と人間を

同等と見るなど、愚の骨頂をすら通り越して虚仮にされたとは思えないのだ。

しかし、それはそれで激しい怒りが再燃した。

捕虜を皆殺しにし、気狂いの人間が部下の前で自分を侮辱する暴言を吐くそれは、屈辱以外の何物でもない。

「貴様ツ…！ 構わん！ さつさと斬り棄ててしまえ！」

「ハッ！」

上段に剣を構えた兵士が、その手に握る柄に力を込め、ついに振り下ろそうとしたその瞬間 帷幕の外から騒々しい悲鳴が聞こえてきた。

魔人は密かに嘲笑う。

「そこで、私個人から貴方がたに犬をプレゼントしようと思いましたがね…。」

どうぞイヌ同士、存分に戯れてくださいませ」

「…なに？」

「失礼します！ 將軍、大変です！」

ひどく荒れた喧騒に狼狽するセレスと衛兵は、しかし天幕に青褪めた顔で駆けてきた伝令に振り向いた。

「この騒ぎは何事だ！」

「そ、それが…、治療所に運び込まれた捕虜たちの腹部から突如として黒い犬が現れ、我が軍の野営地で暴れています！」

「黒い犬だと！？ …それで被害は！？」

「軍医と治癒魔導兵のほとんどが重傷または死亡し、さらには他の兵にまで襲いかかって　　うわぁッ！？」

横から飛び掛かる黒犬に喉を噛み付かれ、伝令兵はすぐに絶命した。

衛兵たちは魔人のことも忘れて入口に向き直り、黒犬の奇襲に対応するべく剣を構え直す。その中央、ほんのわずかな数秒だけ目を離れたその隙に、魔人はゆっくりと立ち上がる。

「さて、もうお遊びにも飽きたな…」。

名残惜しいが、そろそろ幕引きとするか」

全身から横溢する魔力に周囲の空間を歪ませ、セレスと衛兵の視界に映る魔人の姿が陽炎のように揺らめく。

そこにはもはや、先ほどまでのように無抵抗に興じていた男の矮小に見えていた気配は微塵もない。

魔人の口元が真つ白な犬歯を剥き出しにして、悪魔的に歪むと同時に、妖気とも邪気とも言つべき圧倒的な魔性が爆発的に膨れ上がる。

この瞬間、周囲で剣を構えて魔人を囲んでいた衛兵たちの身体が

一斉に炎上した。

詠唱も何もない、ただ内に秘めていた魔力をほんの少しばかり解放しただけの一撃である。

ただの戯れ程度に放出された膨大な魔力が衛兵に直撃し、その圧倒的な質量に耐えられず発火した彼らは、両手を空に翳して悲鳴を上げる。

だが、彼らはすぐに死ぬことを赦されない。

脳が熱せられ、内臓が焙られ、神経が焼かれ、細胞が燃え、息絶えて完全な焼死体となるその瞬間まで、彼らは地面をのた打ち回り、あるいは上半身を必死に振り乱して気狂いながら、想像を絶する苦痛をたつぷりと味わい続けたのである。

そして セレスは恐怖に身体が竦み、満足に呼吸もできない金縛りにあっていた。

今すぐにも帷幕から逃げ出したい衝動に駆られた身体は、しかしどれほど力を込めても動いてくれない。

理解できない異常な事態に混乱を極めた視界の中で、淡々と焼け焦げていく仲間たちの臭いに吐き気を催しながら、セレスは己の背後に回った魔人の掌が優しく肩に触れたことを、全身に電流が走るように痛感した。

顔すら自由の利かぬ將軍は、耳元で囁くように語りかける魔人の妖しい声に震え上がる。

「フフフ、そんなに怖がることはないだろう…？
斬って棄ててしまえるような男の手など、身震いするほどおぞましいものでもあるまいに…、フフフフ…」

何故、この男を殺せると思い上がってしまったのだろう。

何故、自分の浅はかな言動を固辞してしまったのだろう。

セレスは確信する。

この男は人間に非ず、そして人間は誰もこの男に勝てやしない。

ゆえに、彼はこう呼ばれている。

魔人、と。 これほどの魔性。

これほどの魔力。

これほどの残虐性。

頼む…、助けてくれ…、ああ誰でもいい…、おお神よ…、早くこの悪夢から目が覚めてくれ…。

「フフフ…」

静かなる嘲笑が耳元に囁かれ、逃避しかけた意識が無慈悲に現実へと引き戻されると同時に、左耳に“何か”が張って蠢くように侵入しようとする不快な動きを正確に感じた。

「大丈夫、怖がらなくていい。これは君にとって、むしろ僥倖となるべき儀式なんだ。

…そう、私と君との密やかな力の契約さ」

静かなる闇は語る。

「どうやら君には魔導の資質がないみたいだから、その分、肉体機能を増大させてあげよう。

…なに、別に痛くも痒くもない。

君は今日から超人に生まれ変わり、私の新しいイヌとなるんだ。

…これはすごく光栄なことさ」

助けてたすけてタスケテ…！

「ただ、その代わりに君の理性が失われてしまうんだが…、まあ、これは些細な代償だな。

…元より、悪魔との契約には代償が付き物さ。

…フッフッフ…」

左耳に侵入した異物が鼓膜を突き破り、脳へと移動し始める。

魔人の言う通り、痛みはない。

しかし、自分の頭の中で“何か”が蠢く不愉快な感覚に怖気が走り、それでも身動きできず悲鳴も上げられぬ自分に、血の涙を流して絶望する。

「おめでとう。 たった今この瞬間より君は黒騎士となって、遙か昏い夜の帳に暗躍する闇の眷属の仲間入りを果たしたのだ。

…フフ、これからの活躍に期待しているよ、私の可愛いイヌたち…
…ツクツクツクツクツ…
…アッハハハハハハ、ア…ッハハハハハハハッ！」

ヴェンツェルの高らかな哄笑を最後に、イースト・アングリア王国軍最高司令官、セレス将軍は、その人格を形成していた意識を完全に失ったのだった。

第十四話 静かなる闇 後編（前書き）

年末が近づいてやたらと忙しい中、電車内でケータイがぶっ壊れるという、仕事もケータイもオワタ式です。

すごく間が開いてしまって、本当にすみません。

三年間お世話になったケータイが、この度はついに夢半ばにて殉職されてしまったので、休日を利用して新しいケータイを買いに行きました。

三万もしました。

すごく…大きい…です…。

もう、ボタンを押す度にバキバキ鳴ってたので、仕方ないっちゃ仕方ないんですけど。

いつでもマルチバッドエンド状態ってやつですね、わかります。

でも三万はキツイ…。

とまあ、こんな感じでだいぶ慌ただしくなってますので、更新の方はいつもよりかなり遅れるかもしれませんので、先んじてお詫び致します。

なるべく空いた時間を見つけてメモっていきますんで、がんばりますですよ！

それでは、長くなりましたが、引き続き本編をお楽しみください。

第十四話　く静かなる闇　後編く

魔人ヴェンツェルにより黒騎士に変貌したセレス將軍は、捕虜に寄生した黒犬とともに野営地を破壊した。

この大混乱で、およそ一千人もの死傷者を出したイースト・アングリア王国軍は、ついにただの一度もマーシア王国軍と交戦することなく敗走する。

黒騎士セレスの叛逆によって有能な指揮官を失い、さらには捕虜への悪逆たる拷問と、黒犬のおぞましき誕生の瞬間を目の当たりにした兵士たちの恐怖と動揺が、恐るべき魔人の悪名を国内に広める結果に至ったイースト・アングリア王国は、事実上、マーシアへの進軍が不可能な状況へと追い込まれた。

これにより、イースト・アングリア王国軍は同時攻撃作戦から身を引き、戦場の舞台はウェセックス王国軍とマーシア王国軍との一騎討ちに絞られることとなったのである。

一方、エリスは別動隊二千を率いて王都急襲に成功するものの、あと一步のところまで駆け付けたイングラム率いる五千の部隊が背後に迫るため、後退を余儀なくされる。

しかし、それすらも逆睹していた剣聖の作戦に従い、エリスはデーンの森の目前に部隊を駐留させ、聖騎士スレインの部隊を完全に孤立化させると同時に、その生命線である補給線を封鎖することに成功。

イングラムは、窮地にあるスレインと一刻も早く合流したかったが、西より突如として叛旗を翻したドウムニア王国軍の参戦により、エリスの部隊とともに王都を囲まれ、その動きを封じ込まれる。

前門の剣聖、後門の副官に挟まれた絶体絶命のスレインは、魔導砦を起動させて剣聖バルゼフォンの急追を辛うじて躲すも、依然として窮境にあることは変わらず、呪霧の結界を破られるのも時間の問題となっていた。

機略に富む剣聖の鬼手によって剣が峰に立たされ、難局の打開に苦慮するウエセックス王国軍。

九仞の功を一簣に欠くまいと、剣聖の圧倒的な戦術を背景に追撃の手を緩めぬマーシア王国軍。

そして、かつての旧怨を晴らそうと、捲土重来を期してマーシアに助勢するドウムニア王国軍。

もはや、ウエセックス王国軍の逆転は絶望的だと思われた、まさにその時、幸運の女神は、その気紛れな御手を翻したのだった。

『イースト・アングリア王国軍 野営地』

叛逆の指揮官が誕生した帷幕から姿を現わしたのは、その全身を黒曜石のように鈍い輝きを放つ漆黒の鎧で覆った、禍々しい存在感

を纏う一人の騎士だった。

いや、それを騎士と呼ぶには、あまりにも奇異な風貌である。

頭部を保護する兜には、おそらく髪を模ったと見られる刺々しい突起が後ろに流れるように固められていて、鬼の形相を彫り抜く人面には、これもまた禍々しく歪む口元に無数の牙が鋭利に映える。

鎧は、あたかもそれ自体が漆黒の筋肉であるかのように騎士の屈強な体にぴったりとフィットしていて、黒騎士の不吉な佇まいをさらにおぞましく呪った。

それはまるで、無数の怨念を丹念に塗り固めて、膨大な呪詛を幾重にも丁寧丁寧に編み込んだかのような、それ自体が一種の呪いとして成立するほどの“負”を帯びた黒鎧だった。

もし仮に、並の人間がこの鎧を着装しようものなら、手に触れたその瞬間に指から腕へと全身が腐蝕していき、ものの数秒足らずで発狂しながら命を落とすだろう。

その、濃縮された呪怨の黒鎧を身に纏う黒騎士は、魔人が捕虜に潜めた黒犬の伏撃に混乱を極める野営地の惨状を、しかし無感動に見つめていた。

光の粉を塗す赤い光があちこちの天幕に燃え広がり、大地を颯爽と舐める黒い獣が、それでも逃げ惑う兵士たちに向かって襲いかかっている。

最初こそ事態の収拾に躍起となっていた彼らであったが、いつまで経っても指示を出さぬ將軍の失踪と、黒犬が優先的に各天幕内の

燭台を倒して火勢を一気に広めたことで、今ではもう、連絡を回す余裕すらなく壊走しているのだった。

黒騎士の正面には一面、すでに火が入っている。

巨大な炬火と化した天幕からは、すでに火の臭気どころか黒煙そのものが黙々と吐き出されて野営地に蔓延り、その火勢をさらに煽る風が時折、哀愁に翳る火の粉を大地に降らせていく。

しかしながら、この惨状は終わりではなく、一つの始まりにすぎない。

運命の騎士王誕生よりも前から密かに進行してきた計画の、即ち、緩やかに加速し始めたブリテンの破滅を予兆する暗雲が文字通り、今まさに野営地を埋め尽くす炬火の黒煙によって形作られようとしているのである。

漆黒の修羅が、地獄の炎の中を行く。

かつての部下だった兵士たちの屍を無関心に踏み付け、悲鳴に満たされた野営地の中心に立つ黒騎士は己が目の前に、辛うじて難を逃れたのだろう、立ち止まり肩で息をする若い兵士の姿を見つけた。

恐怖に顔を歪めながら、しきりに後ろを振り返る兵士は、そうして自分を見やる修羅に気付く。

「　　ッ！？　う、うわああッ！」

今まで自分を追いかけていた黒犬など比べ物にもならぬ邪悪な気配に息を呑み、さらなる恐怖に凍り付いた表情をそのままに、彼は

悪魔の化身めいた姿形の黒騎士から少しでも遠ざかるべく、もうさほど力も入らなくなった足に再び喝を入れて走ろうとする。

しかし次の瞬間、彼は前方の堅い障害物に顔をぶつけ、一歩分だけ後退った。

痛む鼻頭を押さえ、障害物など何も置いていないはずの道先に訝しむ兵士は、すぐ目の前に人型を切り取る不気味な闇の姿を捉えた。

帷幕のそばに見えた、少なく見積もっても十メートルは離れていたはずの黒騎士が、そこにいる。

「なッ！？　なんで…ッ！？」

しかし、それは本来、あり得ぬはずだった。

邪悪な騎士の姿を見て逃げ出そうとしたその瞬間から、わずか一秒も経たずに音もなく自分の背後に回るなど、どのような超人であっても不可能なはずである。

だが、この黒騎士はその常識の向こう側に超越し、実際に眼前で君臨して見せている。

途端、兵士は尋常ならざる膂力で黒騎士に顔を掴まれ、ふわりと浮き上がる足場の浮遊感に驚愕し、そして同時に走る怖気に身体を硬直させる。

「た、頼む…！　助けてく　……」

死の恐怖で竦み、強張る身体を震わせながらも懸命に救いを懇願

する兵士に対し、片手で無造作に彼を持ち上げる黒騎士は、わずかの躊躇いもなく男の頭部を握り潰した。

鈍く砕けた頭蓋骨の音、ぐしゃり、と一息に脱力した兵士の身体が、支えの頭部を失って大地に頽れる。

剥き出しの頸椎を覗かせる首元から血の噴水が溢れ、横たわる地面にむっとする血臭を放つ赤池を生み出すと、その死臭を嗅ぎ取った黒犬が鼻を鳴らして死体に近付き、それを貪り始める。

沈黙の修羅は、まるで一瞥もなく彼の死体を踏み付けて、炎と人外が群がる地獄の奥へと一步を踏み出した。

『マールシア王国軍 副官エリス』

この先、デインの森において聖騎士スレイン卿が率いるウェセックス王国軍一万の主力が駐留しているとの知らせを受けたエリスは、その手前に位置する街道にて進軍を止め、部隊を待機させていた。

簡単な野営地なら設置できそうな按配の地形ではあるものの、その準備も満足に持ってきていない強行軍のため、王都から無事に脱出した兵士たちは仕方なく街道の木々を背に、あるいは地面に胡座をかいて、それぞれが思い思いに身体を休めている。

エリスは、その中でも一際目立つ巨木の下で俯せ、城内にて交戦した際に負傷した傷を癒すべく、医術に心得のある女性の治癒魔導

兵に手当てを任せていた。

怪我や事故で大量出血が起きた場合、まずは血液性ショックを避けるために迅速な止血が必要であるため、治癒魔導兵は清潔な布を傷口に当てて、まずは直接的な圧迫による血腹の止血を行う。

血液性ショックとは、血液または血液の水分が大量に失われ、血圧が急激に下がる時のショック状態のことであり、怪我をした際にはまず気をつけなければならない生体反応である。

しかし、その受傷から一時間近くは経過しており、その出血量はおよそ数百ミリリットルであると彼女は推測していたが、損傷の程度から直接圧迫止血による劇的な止血効果は期待できそうにないため、次に治癒魔術を施し、本人の自己治癒能力の強化を図ることにした。

治癒魔術とは聞こえはいいが、要は“地”系統魔術による肉体機能の強化であり、やはり通常の限界再生能力を超えた傷は恢復することができぬため、その神秘はあくまでも再生速度を上昇させる程度にすぎない。

しかし、この治癒魔術によって活性化した、人間の肉体に本来備わる賦活システムが、エリスの傷口にて行われる細胞構築を少しずつ速めていく。

充血した目が緩やかに白を取り戻し、頬を伝う脂汗が静かに引いていくのを感じながら、エリスは次に選択するべき部隊行動を思案する。

剣聖パールゼフォンより託された王都急襲任務の目的は、二つあ

った。

一つは、フィダックス城に在留するドウムニア王国の王女ジュリアの身柄の安全を確保し、その後の速やかな王都脱出に助勢することである。

これは、南下前より交わされた密約において取り決められた条件の一つであり、そうでなくても半ば人質としての意味合いも含めて王城に囚われている王女を取り戻さない限り、ドウムニアはウエセックス王国に対して叛旗を翻すことができないからだ。

従って、もし王女奪還が不可能あるいは失敗した場合、敵地の中心部で完全に部隊を孤立化させてしまうエリスにとって、この任務は絶対に失敗の許されぬ勘所であるのだった。

逆に、二つ目の任務であるエグバート殺害については、勿論ながら成功に越したことはないが、かといって絶対に成功させなければならぬというわけでもない。

無論、エグバートが死亡した時点でマーシアの勝利が決定するのだが、失敗してもジュリア王女さえ健在であれば、ドウムニア王国軍の助勢を得ることができ、拮抗した戦力で王都を包囲してイングラムを封じ込めることができるからだ。

さらに言えば、エリスの部隊が北西に移動することによって、王都から聖騎士スレインへと伸びる補給線を絶つことができ、剣聖バールゼフォン率いる主力部隊の勝利はますます決定的となるのである。

つまり、エリスは自分の部隊をこの地域一帯に置くだけで、聖騎

士スレインの主力を苦しめると同時に、イングラムの部隊を足止めすることができたのだった。

それゆえ、やはり部隊は現状維持のまま待機するべきだ、とエリスは結論付けた。

「エリス様。とりあえず、応急処置は完了いたしました」

「ありがとう。…ええ、随分と楽になったわ」

俯せていた身体を巨木に背を預ける姿勢に直し、両手を握り開いては、その動作の一つ一つから伝わる身体の調子確かめていく。

王都急襲戦において行使した“天翔ける氷狼”によって大量の魔力を失い、刺傷によるダメージからの活力低下も相俟って、現状の魔力ではせいぜい、中級魔術を二・三発分しか使えない。

しかも傷口を塞いだとはいえ、再び激しい運動をすれば再出血も考慮に入れなければならず、各部隊の動向次第で激変する、この予断を許さぬ状況にある今では、次の戦闘が自分の限界であると彼女は思う。

確かに、ここまではバールゼフォンが立案した作戦通りであるが、戦場とは常に千変万化する、予測不可能な事象の塊である。

まさか、ここから逆転できる策など皆無に等しいだろうとは思っているものの、どのような相手でも油断は許されない。

多少は鈍りつつあるものの、それでも許容範囲内だとして満足した身体の具合を確かめ、エリスは立ち上がった治癒魔導兵に向かっ

て顔を上げた。

「伝令兵に、警戒態勢のまま待機させるよう各部隊に連絡を回せと。
…それと、食塩水を持ってきて頂戴」

応急処置として、食塩水を血液の代わりに輸血する方法は実在する。

血液の成分と酷似する海水を四分の一にまで薄めると、体液に限りなく近い濃度が得られるため、第二次世界大戦中のヨーロッパ戦線で輸血が間に合わない兵士らは、この方法を用いて緊急時の代用血液としたのである。

「ハッ。…しかし、ご無理は」

「ええ、分かってるわ。

…これは、あくまでも用心よ。相手の動き次第で情勢は変化する。だから、相手が敗北を認めるまで油断は禁物なのよ」

「分かりました。…では、失礼いたします」

略式に敬礼し、立ち去る治癒魔導兵の背中を見届けた後、エリスは小さな溜息をつく。

本来なら、エグバートを殺害した時点で、このような憂いを思案するまでもなく戦争を終わらせることができたはずだった。

それがあの時、グレッグと呼ばれていた若い暗殺者をすぐに殺していれば、いや、それ以前に、王と対峙した時に初めから氷狼を使っていれば、王都急襲が完全な形で成功したに違いなかった

はずなのに。

「…バカか、私は。」

過去に囚われて現在を逃避しようなどと知れたら、パールゼフォン様に笑われてしまう…」

孤児だった自分を拾ってくれたばかりか、何の見返りも求めずに養ってくれた剣聖の存在は、エリスにとってまさしく父のようであり、そして理想の男性像そのものであった。

その彼の役に立ちたいと願ってスレインとともに修行に明け暮れた多年の努力が結実し、今ではその右腕として全幅の信頼を置かれているのだ。

この身の全てはパールゼフォンのためにある。

無様な失態を晒して落胆させてはならぬと、エリスは酷使した身体に一息の休息を与えるべく、再び瞑想する。

『ウエセックス王国軍 イングラム元帥』

ウエセックス王都ウィンチェスターは、周囲を囲む城壁に東西南北へと通じる門を構え、その内部に城下町を広めた按配となっている。

城下町は、正八角形をなぞる城壁に合わせて六区画に分かれており、その中心に国王エグバートが居住する王城が聳えていた。

王都を急襲した少数の敵部隊と入れ替わるように入城を果たしたイングラムだったが、現在はその城下町に指揮官用の連絡拠点を仮設し、敵の再侵攻に備えるべく戦力を北と西の門に集中させ、細緻な兵の配置に気を配っていた。

連絡拠点と言えどそう大したものではなく、各所に配置した兵の情報を記し、あるいは王都周辺の地形を記したパピルスを並べる机を設けただけの粗末なものにすぎない。

慌ただしく出入りする伝令兵に指示を飛ばし、その都度に細部の情報を更新しながら、しかしイングラムは敵の再侵攻はまずないと予測している。

なぜなら、意味がないからだ。

蜘蛛の報告によれば、敵マーシア王国軍はドウムニア王国の王女ジュリアを連れて王都を脱出したらしく、ならば両国が事前に款を通じて、ウェセックスに攻撃を仕掛けてきたことは明らかである。

二重の策とは即ち、王の殺害と、ジュリア王女の奪還に他ならない。

国王エグバートの殺害に成功すれば、その時点でマーシアの勝利は決定的となるが、現にこうして失敗した場合、敵の急襲部隊が最も危惧しなければならないのは王都撤退戦における、こちら側からの追撃である。

元々、急襲部隊はテムズ川を越えての強行軍であるため、初めから補給線を失う覚悟で王都に侵攻しなければならない。

そして失敗した場合、撤退しようにも敵地で完全に孤立化する彼らは結局、スレインとイングラムの部隊に挟まれて壊滅に至るのは必然である。

これを防ぐ役割が、あのドウムニア王国軍だ。

剣聖は、急襲部隊が王の殺害に失敗した時の保険も考慮し、おそらくは南下する以前にドウムニア王国と密約を交わし、王女ジュリアと引き換えに共闘作戦の参加を提案してそれを承諾させた。

この密約によって、王都急襲は二重の意味を持つようになり、たとえ王の殺害に失敗したとしても王女ジュリアが安全に引き渡された時点でドウムニアが参戦するならば、まさに予想外の伏兵として、こちらは追撃を断念せざるを得なくなる。

北西マーシア王国軍が約二千。
西ドウムニア王国軍が約三千。

だが剣聖は、これに更なる策を含ませていた。

急襲部隊が北西に部隊を移動させることによって、王都から伸びていた聖騎士スレインへの補給線を断ち、主力の弱体化を図る策である。

ただでさえ剣聖という強敵を相手に、しかも二倍近い兵力差で交戦しなければならぬスレインは、その上さらに補給線をも断たれることで時間にも追われ、半ば炙り出しの絶望的な状況に追い込まれてしまっている。

これを打開するには、やはり北西の急襲部隊を撃破する必要があるが、そこにドウムニア王国軍という別部隊が西に展開する以上、下手に進軍すれば手薄になった王都を再び攻撃するのは明白。

しかしながら、敵に時間を与えてはならない。

これらを踏まえた上でイングラムに求められている策はただ一点、北西と西の敵部隊を退けて、聖騎士スレインの主力部隊と速やかに合流することである。

連絡拠点にて、ある程度の伝令を送り終えたイングラムは、こちらに駆け寄る蜘蛛の姿を捉えた。

蜘蛛は略式に敬礼すると、素早く跪いた。

「イングラム様のご指示通り、一千ほどかき集めて参りました。これにより、いつでも出陣できます」

己が手塩にかけて育て上げた暗殺者の明るい声に、彼は幾分か安堵した表情で頷く。

「そうか、よくやってくれた。…して、鼠はどうか？」

「彼ならば、もうそろそろ、ご報告に姿を見せても良い頃だと思われますが…」

そう自信なさげに蜘蛛が言葉を濁した時、その遙か後方から連絡拠点に走ってくる人影をイングラムは見た。

グレッグもまた略式に敬礼すると跪いたが、その曇った表情から、

満足な結果には達し得なかったことが窺える。

「申し訳ありません、イングラム様。

ご指示通り、何とかかき集めては参りましたが、それでも五百ほどが限界でありました」

やはりか、とイングラムは渋面を作る。

元々、マーシア王国とは交戦の機会が少なかったがため、数が少ないのは仕方がないとも言えるのだが、今回ばかりはそれが裏目にでてしまった。

これでは作戦遂行は難しく、別の策を考えねばならぬとして、イングラムは二人を下がらせようとする。

しかし、先に口を開いたのはグレッグだった。

「イングラム様…！」

どうか、私に西の敵部隊への奇襲を任せて頂きたいですッ！」

「なに？」

予想外の嘆願に少し驚いた表情を見せるイングラムであったが、しかし作戦のリスクを考えると、とても認可できる代物ではない。

「お前の気持ちはよく分かる。ワシとて、裏切り者のドウムニアを許すことはできん。

…じゃが、この策は使えぬよ。下手をすれば、五百が丸ごと全滅してしまうのじゃからな。

それは、今の我々にとってあまりに痛いダメージじゃ」

「ッ、……」

直属の上官に白紙を明言され、苦々しく言葉を飲み込むグレッグを横目で見やる蜘蛛は、暫しの逡巡のあと、イングラムに対して初めて意見を言上した。

「…イングラム様。陛下の温情を平気で踏み躪った裏切り者のドウムニアに臍を噛む思いを味わったのは、我ら二人だけではありませんせぬ。

ここで奴らに一泡を吹かせる思いは皆が同じでございます。どうか、我らに出陣の許可を頂きとうございます…！」

「蜘蛛…」

そこに、己の心中を掬しての配慮があることをグレッグはすでに理解している。

冷静沈着にして、イングラムに絶対の忠誠を誓う彼が自ら意見を言上するなど初めて見る光景であったが、驚きを隠せぬグレッグに、蜘蛛は少しばかり微笑んで見せた。

「勘違いするな。俺にだって誇りはあるんだ。

裏切り者を前に辛酸を舐めたままでは、我らの名に傷が付く」

「…ありがとう、蜘蛛」

「そう思つなら、必ず借りを返してやれ。…俺の分までな」

「ああ、勿論だ！

…イングラム様。どうか出陣のご命令をッ！」

両腕を組み、深く瞑想するイングラムは、ほどなくしてようやく決意を固めた様子だった。

緩やかに見開いた瞳には鋭い光が宿り、首を垂れる二人に向けて重い口を開く。

「今回の策は非常に厳しいものだ。…特にグレッグ、お前の部隊は苦戦を強いられることとなる。

…それでも、やってくれるか」

「ハッ。勿論でございます、イングラム様ッ！」

「では、イングラム様…！」

二人の期待に満ちた目が素早くイングラムを見上げ、彼は鷹揚にして頷いた。

「うむ。お前たちの士気がそれほどに高ければ、この作戦も必ずや成功に導いてくれると信じておる。

奇襲と引き際のタイミングを見誤らぬよう、心してかれ」

「ハッ！」

鼠と蜘蛛が短く応えんとすぐさま立ち上がり、イングラムに敬礼した後に、部隊準備を整えるべくその場を急ぎ後にする。

イングラムは、その後ろ姿にウェセックス王国の明るい未来を見たような気がした。

「あの二人も随分と成長したものじゃ。

…尤も、ここに蛇がいれば万全を期することができるのじゃが、それは仕方あるまいか。

…さて、ならば、わしのタイミングは

二人の奇襲は、反撃の狼煙を上げるための楔にすぎない。

しかし、彼らの活躍なくして、ウェセックス王国がこの絶体絶命の血路を開く突破口を作ることができないのも事実だ。

世界が望む未来が、果たしてウェセックス王国の行く末にあるのか、それともマーシア王国の行く末にあるのか、イングラムは、この作戦にブリテンの未来を委ねる決意をした。

『マーシア王国軍 剣聖バルゼフォン』

ベンシングトンへと南下した八千の部隊と合流し、聖騎士スレインの主力部隊に決河の勢いで攻め込んだ剣聖バルゼフォンは、元フィッチ王国王都グロスチャーの南にまで進軍したものの、その先に広がる迷いの森ディーンに発生した濃密な霧のせいで、思わぬ足止めを強いられていた。

ディーン森は、フィッチ王国とウェセックス王国とを分断する国境線に樹木が密集した森林地帯であり、そこに街道を設けることで、現在のベンシングトンができるまでの間、南北の主要な交通路として確立された場所である。

だが、部隊同士での戦場となれば、森林戦は攻撃側が圧倒的に不利となる。

まず注目すべきは、機動力の低下だ。

多くの植物が自生する森林地帯では隊形を維持しながらの移動が難しく、樹木の幹や葉が障害物となって視界が悪くなり、互いの距離感が掴みにくく、指揮系統の円滑な連絡が困難になる。

従って、森林特有の地形から行軍速度を落とさざるを得ない攻撃陣はしかし、多くの樹木から偽装を容易くする敵の伏兵にも注意しなければならず、奇襲を受けた際の迅速な反撃が非常に難しいのが第一の特徴である。

次に注意すべきは、兵種の運用だ。

森林地帯は基本的に、地形の移動力低下から騎馬は不利であり、視界が悪く兵が密集しやすい部隊行動上から、魔導兵も敵弓兵の伏撃に狙われやすくなる。

それゆえに森林戦では歩兵が主軸となって部隊行動を展開するのが定石であるのだが、当然ながら街道に沿った進軍は愚策であるため、獣道に仕掛けられた敵の罠を解除しながらの進軍に体力の消耗が激しく、そこに極度の戦闘ストレスが重なる場合が多い。

これによって、進軍中は常に四方から敵の奇襲を警戒しなければならぬ緊張感と、思い出したように作動する敵の罠の緊迫感、そして障害物が乱立する地形から消耗しやすい体力と士気の低下、これが第二の特徴である。

そして、通称“迷いの森”とも呼ばれるディーンの森特有の現象が、今現在、剣聖が指揮する約一万八千もの主力部隊を足止めしているのだった。

迷いの森に続く入口の前で腕を組み、瞑想するバールゼフォンの下へ、不自然なほど森の内部に立ち込めている濃霧の調査に向かわせた魔導兵が、その報告のために帰還した。

「バールゼフォン様。

ご指示通り、これはやはり人為的に調整された呪霧による、巨大な結界であると判明いたしました」

予想通りの報告に、バールゼフォンは眉を顰めた。

「結界か。…ならば、その元となる霊源地があるはずだ。範囲は絞られそうか」

「現在、魔導兵が総出で逆探知を試みております。…しかし、相手側からの妨害もあり、まだ場所の特定には至っておらず、もう少し時間がかかるかと…」

「仕方あるまい。まさか、迷いの森の正体が、その全域を覆ってしまえるほどの結界だったとはな…」

さすがの私も、これは予想外だった」

そう言つて、剣聖は再び森を見やる。

「だが、背水の策としては上出来だ。時間を稼ぐ目的であれば、これほど効果的な策はなкаろう。」

橋を落とされた今、王都に南下できるルートはここだけだ」

「では、早急に場所を突き止めるべく、逆探知を急がせます」

バールゼフォンが頷いたのを見て取って、魔導兵はすぐに踵を返した。

「さて、どうやらスレインは徹底抗戦の構えか。
…ならば、エリスは王の暗殺に失敗したな」

無論、彼女には失敗時の作戦行動も告げてある。

エリスの部隊に補給線を断たれたスレインは、だからこそ森の結界で時間を稼ぎ、この難局を打開する方法を思案しているはず。

断っておくが、スレインが呪霧を利用して王都側へ後退するのは愚策だ。

なぜなら、エリスにはベンシングトンに避難できるルートがあり、ドウムニアが本国への撤退を可能とする以上、両部隊を壊滅させることはできず、結局は王都で籠城するしかないからだ。

そうなれば事は容易いが、逆に、バールゼフォンが最も危惧しているのは、結局はブリトン人であるドウムニア王国の介在である。

一時的に利害が一致し、共闘を結んだとはいえ、その親交は浅く、最初からアングロ・サクソン人を敵視している彼らの疑念を刺激するような事態が起きたなら、あるいは彼らが愚挙に走るかもしれないからだ。

剣聖は再び瞑想し、最悪の事態を想定しての部隊行動を脳裏に具案化し始めた。

『ウエセックス王国軍 聖騎士スレイン』

霧は、基本的に空に浮かぶ雲と同様に、飽和状態にある水蒸気から発生する。

元々、ブリテン島は海洋性気候にあるために湿度が高くなる傾向があり、水系統魔術の使いやすい土地柄と言えるのだが、かつてのフィッチ王国はそこに目をつけ、森林に人工的な霧を発生させると同時に古咒魔術を付与させ、ディーンの森を満たす濃霧に感覚遮断の呪詛を付け加えたのである。

幻覚症状をもたらすために必要な準備は、実はさほど大掛かりなものではない。

通常は精神的な苦痛から苛まれる“病”の類ではあるものの、たとえ健常者であっても、外部からの刺激が極端に少ない場合即ち“感覚遮断”に近い状態にある場合に幻覚症状は現れ始めるのである。

例えば、軽い目隠しや耳栓をされた人間が、延々と続く暗闇だけの部屋に一人きりで何ヶ月も放置されたとする。

この時、光も音もない、つまりは外部からの刺激をほとんど受けない状態にある人間は、しかし刺激を求めて自分から刺激を作り出

そうとする働きをし始めるのである。

これは独り言などが代表例だが、そこからさらに症状が重くなると、いわゆる幻覚を生み出すのだ。

しかもこの場合、思考能力も著しく低下しているために簡単な計算や単純な運動もできなくなってしまう可能性があり、このことから、外部からの刺激が人間にとっていかに重要で大切かを理解することができるだろう。

ゆえに、その中級古咒魔術の名を“隠匿する鮮やかな抱擁”（ブラック・アイソレーション）

ディーンの森の南西部に建造された隠し魔導砦は、この水系魔術による濃霧と、古咒魔術による感覚遮断を行使するための準備をほぼ完璧に整え、しかもそれらの神秘を円滑に発現するための魔導陣を二つ、地下に敷設しているのだった。

巨大な石材で組み立てられ、森林の外観に偽装するべく無数の植物を外壁に繁茂させた、まさに緑の砦と呼ぶべき拠点に聖騎士スレインはいた。

彼は目を閉じ、森の静寂に倣うように瞑想している。

現在の状況は、もはや絶望的だった。

北には剣聖パールゼフォン率いる約一万八千の主力部隊が陣形を構えており、さらには、テムズ川を渡ったマーシア王国軍の約二千が森を抜けた南東を陣取っている。

これにより、スレインは南東からの奇襲にも備えて戦力を割かねばならず、北に八千、南東に一千、そして重傷兵を含めた一千を皆に待機させた按配としてあるのだった。

さらに言えば、偵察兵からの報告により、予想外の叛乱を起こしたドウムニア王国軍も南東に部隊を展開しているため、イングラムの部隊と合流することもできずに補給線まで断たれている始末。

完全に孤立し、時間が経てば経つほど弱体化する主力の現状では、このデーンの森をこそ最終防衛ラインとして剣聖が率いる敵主力部隊を撃破しなくてはならなかった。

しかし。

兵力差が二倍近くも開いている一方で、頼みの綱は皆の呪霧による一時凌ぎしかなく、王都側に撤退する愚策など選択しようものなら、相手は嬉々として攻勢に転ずるだろう。

幸い、森林戦は大部隊同士の交戦に適さぬ地形であるため、進軍経路も容易に的を絞ることができ、そこに呪霧を利用して多くの罠を仕掛けておくことができるが、これも所詮は微々たる策にすぎない。

聖騎士スレインに求められている策は、一つ。

呪霧を発生させる魔導砦を死守した上で、剣聖パールゼフォンを打ち破ること。

ここが最大の正念場となるが、逆転の可能性は残されている、しかし予断を許さぬ状況もまた続く今の時点では、大部隊の侵攻を森

林の地形と呪霧で遅々とさせ、その間に敵大将である剣聖パールゼフォンを強襲し、討ち取らなければ勝機はない。

問題はタイミングだ。

敵軍の侵攻に応じて臨機応変に部隊を立ち回らせねばならぬ以上、スレインが直接に指揮を執る必要があるため、そう容易く本陣を抜けることができない。

何しろ、相手は自分とイングラムを同時に手玉に取った、あの剣聖だ。

今も呪霧に逆探知をかけて魔導砦の位置特定に躍起となっているであろう剣聖が、しかし真っ直ぐに砦に向かってくるだけとは限らないからだ。

閉じていた目を緩やかに開け、スレインは樹上に広がるオレンジの黄昏を見上げた。

「カイン……。どうか、私に力を貸してくれ……」

ディーンの森にたゆたう嵐の前の静寂に、部隊の緊張感が密やかな息遣いとなって聞こえてくるようだった。

今は亡き親友に空漠とした不安を呟いて、聖騎士は決然と前を見据えた。

ウェセックス王都ウィンチェスターの西部に広がる広野にて野営地を設けたドウムニア王国軍は、依然として警戒態勢にはあるものの、それでも情勢の優位に勘案して北のマーシア王国軍と同様、部隊待機の策を採っていた。

両部隊が拮抗した兵力でもって王都のイングラムを包囲している以上、聖騎士スレインの主力部隊は孤立し、補給線も断たれて極めて不安定な状態である。

従って、無理に攻城して兵力を消耗するよりも、時間が経てば経つほど弱体化する聖騎士の部隊を剣聖バルゼフォン卿に撃破させることで、ただの一兵たりとも被害なく漁夫の利を得るのが最上の策であることは言うまでもないことだからだ。

無数の天幕が並ぶ野営地の中心に設営された帷幕の中、ドウムニア王国軍を率いる将軍ゼノスを前に、しかしジュリアは何とも形容し難い複雑な表情を浮かべて面伏せていた。

王都脱出に尽力してくれたマーシア王国軍の兵士と衝突したルナ様子は、ジュリアでさえ唇を噛み締めるほど痛烈なものだった。

ほとんど錯乱状態にあると言ってもいいほどに取り乱した彼女の様子はもはや尋常ではなく、ここ本陣にて同行していた軍医に症状を診てもらったものの原因は不明。

そもそも、ここまで進軍速度を重視して部隊編成をしていたドウムニア王国軍にとって、医薬の備蓄もそれほど整っていなかったため、最前線の野営地にいるよりは、とジュリアは仕方なくルナを

本国に送り、絶対安静にして様子を見るということしかできなかったのである。

揺らめく燭台の火を横目で見つめながら水を摂る沈鬱な面持ちのジュリアに対し、ゼノス將軍はしかし、安易に声をかけるに躊躇っていた。

いつもは気が強く、常に胸を張って毅然とした姿勢を心掛けている王女が、今では帷幕の中に自分しかないこともあってか、珍しく弱気な表情を見せている。

それには、ともに連れてきたルナという謎の少女の身を案じてのことだと思うのだが、しかしなぜ、王女がそこまで彼女のことを心配しているのがゼノスには理解できなかった。

敵国の王城から脱出し、本国の明るい未来を想像して、本当なら歡喜に燥いでもおかしくないはずなのに…。

暗い顔をして塞ぎ込む王女に堪え切れず、ゼノスはようやく声をかけることにした。

「ジュリア様。お気持ちは分かりますが、そろそろ本国へ戻るべきかと。」

…いかに我らが優勢とは言え、ここは最前線です。敵が攻めて来た場合、ジュリア様に危険が及ぶ可能性もありますから」

「ええ、…そうね。」

…でも、もう暫くは一人にして頂戴。…自分なりに整理したいの」

「…ハッ」

王女にそう言われては引き下がるしかなく、ゼノン將軍は渋々といった様子で帷幕から出ていく。

一人きりになった帷幕の中で、ジュリアは溜息をつく。

錯乱したルナのことと気がかりだったが、それと同じくウェセックス王国と袂を分かった本国のことまた、彼女の動揺を誘った。

確かに本国の未来を思えば、あのままウェセックス王国の植民地となるよりも、マーシア王国軍に協力して危殆に瀕するウェセックス王国を分割支配したほうがいいのは誰でも理解できる話だ。

…そう、これはドウムニアにとって、まさしく天啓である。

この機会を逃せば、再び統治を取り戻すまで時間がかかるのは誰の目にも明らかであるのだし、そもそもヴァイキングが再侵攻に乗り出したとて、以前と同じように協力してくれるかどうか分からない。

ジュリアにとって、王国の存続は大前提だ。

伝説の騎士王アーサー・ペンドラゴンより代々続く、このブリトン人最大の王国を絶やすわけにはいかず、そのためにジュリアは自らの身を差し出してまで徹底抗戦を唱えた父を説得し、存続のために王国を守り抜いたのである。

だからこそ、マーシア王国軍の提案に乗り、その作戦を成功させるべく軍を進軍させたことは理解できる。

「…理解は、できるわよ…。…私だって、もう子供じゃないわ…。…、もう、子供じゃないもの…。…」

小杯に注がれた水面を緩やかに傾けながら、ジュリアはそこに映し出された自分の翳る顔を見て、自嘲気味に笑う。

「…そうよね。もう、何もかもが手遅れだもの。

私たちは叛旗を翻した。…思い出は、懐かしむだけにしておけばいいのよ…。…」

言い聞かせるように、あの優しかった場所を名残惜しむ自分を心の奥に無理やり閉じ込める。

そう言えば結局、ヴィットーリオには逢えなかったなと、場違いなことを思い出して苦笑した。

その時、妙に騒がしくなった帷幕の外の様子に首を上げると、ジュリアの名を呼びながら戻ってきたゼノン將軍の狼狽した顔が目映った。

よく見れば、彼は複数の衛兵を連れている様子だった。

「將軍、いったい急にどうしたの…?」

「ジュリア様ツ！ 敵襲です！ 外は危険ですので、どうかこのまま帷幕にてお待ちをツ！」

「敵襲ですって!?!」

ジュリアは、ひどく困惑した表情でゼノンを見据えた。

「じゃあ、相手はウエセックスの部隊なのね？」

「い、いえ、それが」

途端に口ごもる將軍の煮え切らない態度はしかし、すぐに意を決した様子で言葉を繋ぐ。

「敵は、マーシア王国軍です。軍旗を翻し、我々を裏切って攻撃を仕掛けてきた模様です…！」

「マーシアが!？」

とても信じられぬ、とばかりにジュリアは喫驚する。

「そんなまさか!？」

だって、密約を持ちかけてきたのは、あのバールゼフォン卿なのでしょう!？」

あの人が裏切るだなんて真似をするとは思えないわ!」

「しかし、これは事実です! マーシア王国軍の旗を掲げ、その鎧に身を固めた部隊が我が軍の野営地を強襲しているのですッ!

ですから、今は」

「大人しく、殺されてくれよ…!」

それは、突如として帷幕に侵入した影のようだった。

肌が粟立つ殺気にゼノン將軍が振り返ると同時に、同行していた二人の衛兵が声も上げられずに頽れる。

マーシア王国軍の紋章を刻む鎧を着た、しかし見るからに若い少年がそこにいた。

冷たい殺気を放つ鋭く細めた瞳が、ゼノン將軍と、その奥で息を呑むジュリアを捉えて放さない。

「貴様ツ！ この裏切り者めツ！」

驚くほど長大な巨剣を抜くゼノン將軍の威圧を受け、少年もまた剣を構えて迎撃の姿勢を取る。

途端、雄々しく踏み込んだゼノンの剣を、少年が辛うじて防いだ。

ゼノン將軍は、並外れた巨漢である。

巨岩から彫り上げたような太い筋肉を束ね、その内に秘められた威厳で、帷幕が一回り縮んだような錯覚を起こす。

一本気で真面目な性格の彼は、どちらかと言えば繊細な剣技よりも、先天的に恵まれた臂力から生み出される剛剣によって、受け止める剣ごと敵を斬り伏せるタイプの騎士だ。

その自慢の剣撃を、比べれば二回りも身体の線が細い少年兵が、剣を断ち切られることなく防いだのを見て、ゼノンは驚いた。

しかしながら、少年兵は反撃もできぬほどの衝撃が剣から身体に伝播し、ただの一撃でこつそりと奪われたスタミナに狼狽していた。

よくぞ剣が碎けなかったものだと思ひ感嘆する思いであつたが、

これほどの斬撃はそう長く耐えきれるものではない。

ならば、この男の攻撃は防ぐよりも躲した方がいいのだと考えたのも、無理からぬことである。

「チツ、このバカ力…！ だつたら…！」

少年兵はすぐに横に飛び退くと、軽快なステップで距離を取る。

だが。

それは、この男を前にして愚策でしかない。

「ふん、小賢しい…！ 死ねイ！」

先の攻撃など兎戯にも等しい、空を斬る音さえも悲鳴に聞こえる凄まじい一撃だった。

「なッ！？」

裂帛の気合いとともに、ゼノンの剣撃速度が爆発的に上昇し、初撃の速度とのあまりの落差に身体への反応が追いつかない少年は、しかし剣を構えて何とか直撃を防ぐものの、その威力を相殺できずに剣の刀身を粉微塵に砕かれて、机を下敷きに吹き飛ばされる。

「ガ　　ッ、ハッ…！？」

打撲による背の鈍痛と、両腕の尋常ならざる痺れが、少年の顔に苦痛の色を刻む。

「グ…ッ、このッ、化け物め…ッ！」

悠然と歩み寄るゼノンを前に危機を感じ、折れた剣を棄ててナイフを構えるも頼りなく、自分の反射神経を上回る攻撃速度を備えた敵を前に、その表情は実に険しい。

追い詰めた敵の、しかしまだ諦める様子のない構えに、ゼノンは目を細めて口を開く。

「ほう…、多少は骨があるようだ。…が、無謀と勇気を履き違える者の末路は、いつの世も残酷なものだ」

「待つて！ ゼノン！」

自慢の大剣を閃かせんとした手前、王女からの思わぬ合いの手に驚いて、ゼノンは僅かに首を巡らせるだけで答えた。

「ジュリア様、お待ちください。すぐにこやつを」

「いいえ、その必要はないわ。…すぐに部隊を撤退させましょう」

その言葉に、ゼノンと少年が同時に驚く。

「ジュリア様、しかし、それは…！」

「マーシアが私たちを裏切った以上、王都の包囲網は一気に崩れたわ。

彼らの愚行のおかげで、ウェセックスが反撃の拳に出るのも時間の問題。ここは部隊を後退させて態勢を立て直さないと、最悪の場合、全滅の可能性もあるわ。

…そうだったら、目も当てられない」

「で、ですが、この状況下で我々に攻撃を仕掛けてくるのはあまりに不可解です…！」

ここはもう暫く様子を見たほうが良いのでは…！」

ジュリアは首を振る。

「私たちの兵力は、王都でかき集めた三千が限界…。それも、ろくに錬磨もしていない民兵がほとんどを占めているのよ…？」

当初の作戦が瓦解した以上、もう私たちには自力でウエセックスと戦う以外、方法がないわ」

ゼノンは苦々しく表情を歪めると、その隙に距離を取って態勢を立て直す敵少年兵を睨みつける。

「貴様、運が良かったな…！ …ジュリア様、では、早くここから脱出いたしましょう。」

僭越ながら、私がお守りいたします」

「え、ええ…」

堂々たる恰幅の將軍に護衛され、王女は帷幕から出ていこうとする。

しかし入口のところでふと立ち止まり、まだナイフを構えたままの少年兵に振り向いた。

「さようなら。せっかく王都で人質を用意してあげていたのに、貴方たちが裏切ったせいで無駄になったわ」

その言葉に少年が瞠目すると、一瞬だけ怒気に顔を歪めそうになったが、王女の哀しそうな瞳を見てハッとする。

「それじゃあ。…また会う時は、覚悟しなさい」

それだけを呟いて、ジュリアはゼノン將軍とともに帷幕を後にした。

そこに入れ替わるように、今度は部隊の兵士が少年の下へと駆けつける。

「まずいぞ、グレッグ！ 被害が五十を超えそうだ…！」

グレッグと呼ばれた少年兵が、舌打ちを鳴らして顔を向ける。

「ここが限界だな…！」

分かった、すぐに退くぞ！」

「ああ！ お前も早く戻れ！」

兵士が帷幕から立ち去り、グレッグは一人ぐちる。

「…ジュリアなら、俺だということに気付いていたはずなのに、なぜ…？」

それに人質って、まさか…？」

王女が残した言葉の意味を正しく理解していながら、それでも一部の矛盾した言動に納得のいかないグレッグは、しかしすぐに頭を切り替えて帷幕を出る。

首尾は上々だと安堵するものの…。

『同時刻　マーシア王国軍　副官エリス』

ドウムニア王国軍の旗を掲げた約一千の部隊から突然の奇襲を受け、副官エリス率いる約二千のマーシア王国軍は混乱を極めていた。

襲いかかる敵兵の剣を弾き返し、心の臓を鎧ごと貫く。

さらに後方から振り下ろされる剣を受け止め、これも右に弾いて斬り伏せる。

部隊の混乱を鎮めるべく、早急に敵の意図を皆に伝えたいエリスではあったが、この混乱の最中に部隊の奥にまで敵が侵攻してきているとあつてはそれも難しく、苦虫を噛み潰したように表情を歪めていた。

さらに続く敵兵を迎撃しながら、一人、また一人と仲間に加わり、ようやく部隊の中心地に戻った頃には、すでに混戦を深めた激戦の様相を呈する戦場と化していた。

「エリス様ッ！」

彼女に気付いた下士官が、慌てて駆け寄った。

「状況報告を」

「ハッ。ドウムニア王国軍より奇襲を受け、部隊はすでに二割の被害を出しております。」

敵勢は約一千ほどですが、まさかドウムニアが裏切るとは思わずに、ここまでの侵入を許してしまいました…」

エリスは首を振る。

「いいえ、この情勢で彼らが裏切るとは考えられないわ。」

無意味な叛逆で二方面に敵を作るだなんて、愚策を通り越して無能よ。」

…だから、これはおそらく、ウェセックスの連中だわ」

その言葉を聞いた瞬間、下士官は度肝を抜かれたように目を丸くした。

「まさか…！ では、ウェセックスは我々の装備を鹵獲した部隊を編成し、我々とドウムニアとの間に亀裂を走らせようと画策している…！？」

「ええ、おそらくね。」

ドウムニア王国軍に偽装したウェセックスの部隊が私たちを強襲したのと同時に、南のドウムニアも我々マーシアに偽装したウェセックス軍の奇襲を受けているはずだわ。」

…そうでなければ、この作戦は意味がないもの」

七王国時代の戦争は、実に三百年以上にも永きに渡って繰り返されてきた。

その間、あらゆる国家が対立し、戦争をしたものだが、この時に

敵の装備を鹵獲して自軍の軍備を補う方法は当然の戦略であつたし、今回の策はそれを利用したものだとしてエリスは見抜く。

ただし、永く戦争していたドウムニアと違って、マーシアとは前王の時代もあつて鹵獲していた装備は少ないはずだとエリスは考えている。

「そ、それでは…！？」

「慌てないで。これはウエセックスにとつても苦肉の策にすぎないわ。」

むしろ、この両部隊を撃破すれば王都の再攻略も容易くなる。
まずは
「

「 エリス様ッ！ た、大変です！」

ひどく狼狽した様子で駆け寄る伝令兵に、エリスは向き直る。

「 どうした？」

「我が軍の旗を掲げた謎の部隊がドウムニア王国軍に強襲をかけ、混乱したドウムニアが撤退を始めました！」

「 な ツ！？ 」

これには、さすがのエリスも動揺を隠せぬ様子で喫驚した。

拮抗した戦力で王都の部隊を封じ込めているからこそ、剣聖バーゼルゼフォン率いる主力部隊が、聖騎士スレインの主力部隊を相手に圧倒的優勢を保っていられるのだ。

それを自ら手放すような浅はかな愚挙に出れば、王都のイングラムは起死回生の進軍を始め、聖騎士の主力と合流を図るのは火を見るよりも明らかであるはずなのに。

「そんなバカなッ!？」

この状況で撤退すれば、自分たちが危うくなるだけ…!まさか、ドウムニアがこの程度のことも見抜けない愚か者だったなんて…!」

「エリス様、ご指示を…ッ!」

ドウムニアが撤退を始めた今、部隊をここに留まらせるのは自殺行為である。

南に割いた敵強襲部隊の数は不明だが、彼らが撤退したなら王都のイングラムは必ず動き出し、主力への補給線を断つこちらへ進軍することはまず間違いない。

その上、こちらの部隊は二千の少数であり、切り札たる三千の兵力を構えていたドウムニアが前線から退いた今、イングラムの五千がこちらに集中するのは時間の問題であるのだ。

「くっ…! 仕方ないわ、全部隊に伝令を!

ディーンの森に部隊を進軍させ、聖騎士スレインの主力を挟撃する!

上手くいけば、バールゼフォン様の部隊と合流できるかもしれな
いわ…!」

「ハッ!」

伝令兵が走り去ると、エリスは再び疼き始めた腰の傷口に手を当てて、眉を顰めた。

更なる伝令兵がひどく困惑した表情でこちらに駆け寄ってきている。

おそらくは、敵後続の本隊が来たのだと、彼女は推測した。

『ウエセックス王国軍 聖騎士スレイン』

剣聖バールゼフォンが再び動き始めたことで、迷いの森デインは両軍の激突に火花散る激戦の舞台となった。

北の入口より、南西の隠し魔導砦に向かって直進する部隊一万三千に対し、スレインは予定通り、北に展開させていた八千の部隊を率いて出陣する。

スレイン側にとって最大の強みは、魔導砦より森全域に散布される呪霧の幻惑効果が敵兵のみを弱体化させることだ。

呪霧の効果は基本的に敵味方を区別するため、精神的な負担が通常の森林戦より遥かに重く、さらに視界の悪化に伴って部隊間の連携も難しくなり、ゆえに各個撃破しやすくなる。

しかも時刻は黄昏をすぎて、宵の口。

途徹もなく長く感じた二日間の戦いの終着点が、ここディーンの森で辿り着こうとしているのを感じながら、聖騎士スレインは自らが先陣を切ることで部隊の士気を上げ、次から次へと湧き出てくる敵兵を疾風迅雷の如くに切り裂いていく。

銀色の鎧を身に纏う、美しい高速の怪物。

その圧倒的な剛毅を止められる者は皆無に等しく、ゆえに一騎当千と言われる彼らは同じ聖騎士でなければ太刀打ちできない。

敵が視界に聖騎士の姿を捉えたその瞬間には、起き上がる大地に顔をしかたま打ち付けて、そこで初めて己が身を襲ったスレインの斬撃に気付く。

分隊ごと 約十人前後 に区分けした敵部隊をことごとく壊滅させながら、スレインは絶対防衛線を維持するべく次の敵部隊に奇襲する。

しかし、彼の獅子奮迅とした活躍も、それは局地的な話でしかない。

大局的に見れば、戦略面で常に先手を取ること自在に戦場を操って見せた最強の聖騎士バルゼフォンが圧倒的に有利なのだ。

自分の注意を巧みに引きつけ、イングラムをも欺いてテムズ川を渡り王都を急襲、さらにはドウムニアを味方につけて補給線を断ち、自軍を孤立化させるまでの一連の作戦行動には、一縷の隙もない見事な手腕だったと認めざるを得ない。

逆転の可能性は、ただ一つ。

剣聖パールゼフォンを倒し、指揮系統が破壊された敵主力部隊を各個撃破することだ。

数えて十になる敵分隊を壊滅させ、ひとまずは落ち着いた前線の状況を把握するべく、スレインは魔導砦に戻ることにした。

すでに数多くの罠を使い切り、それでも敵の優勢は依然として揺るぎない現状では、やはり呪霧に頼った防衛戦に終始する他にない。

ただし、呪霧の効果はすぐに発揮するわけではなく、少なくとも一時間ほど経過してから本格的に精神を破壊するため、それまでは何としても敵の攻勢を防ぎ、魔導砦を死守しなければならなかった。

スレインは、敵の撃破において優先順位をつけることで、兵力差を埋める戦術を採っていた。

森林戦において最も重要視しなければならないのは情報の伝達即ち、伝令の確保である。

各部隊の連携を繋ぐ生命線とも言うべき連絡網は、これが停止した瞬間に連携がスムーズに行えず、しかも情報も滞るために指示の詳細が把握できなくなる。

そのため、スレインは敵の連絡拠点を見つけ次第、これを優先的に壊滅させ、敵の動きを一時的にせよ遅速化させる方法を選んだ。

本来なら拠点を利用し、敵の各部隊に偽報を流したいところではあったが、補給線を断たれて時間にも追い詰められている自分たちにとって、そこまでの余力はない。

代わりに、第二に優先させた目標の撃破を心得させた。

敵分隊長および下士官の撃破である。

当然だが、それぞれの分隊に所属する兵士は、それを統率する指揮官の指示によって作戦を実行する。

現地にて柔軟な対応を思考する指揮官の命令が兵士たちの連携を強化させ、行動力を高めるのだが、逆に指揮官が戦死あるいは戦線を離脱した場合、部隊は簡単に分断され、一時的な後退を余儀なくされる。

部隊を全滅させるよりも、一人に狙いを定めて奇襲を仕掛けた方が効率が良いのは当たり前であり、スレインは二倍近い兵力差を埋めるための窮余の策をこれに当たらせたのだった。

魔導砦に帰還したスレインは、その入口に仮設した連絡拠点で慌ただしく指示を飛ばす参謀役の敬礼に片手を上げて制し、すぐに現状報告を促した。

「ハッ。」

現在、敵は二方面から進軍しており、直進する一万三千と、東に迂回する五千の部隊を迎撃しております。

また、負傷兵は三百名近く、そのうち重傷者の二十名を確認し、砦に搬送させて手当てさせています」

「まだ呪霧の効果が現れていないとはいえ、視界の悪化だけでも敵の侵攻を大幅に遅らせているようだな」

ディーンの森に散布された呪霧の影響は、敵勢力以外にもたらされる。

これは古咒魔術の特徴ともいふべき神秘の発露であり、事前に呪詛を行使する対象を術者が選別し、任意に神秘を発現することができるのだが、その分、常時より消費する魔力が増え、本格的に効果が現れるまでの待機時間が長くなるといった欠点を持つ。

尤も、さすがに濃霧そのものは精霊魔術の神秘であるために敵味方の両方に視覚的妨害が影響するものの、それでも十分な恩恵がもたらされていると言って良かった。

「はい。そのおかげで、まだ軽微な被害で前線を維持しておりますが、後続の本隊と接触すれば激戦は避けられないかと思われます」

スレインは口に手を当てて思索する。

「まだ前線にバルゼフォン卿が現れていないのが幸運だな…」

…しかし、この総力戦で分けた北と東の部隊のうち、どちらかに潜んでいるのは間違いない。

…果たしてそれが、突破か迂回かのどちらかということだが…」

「まだ前線でバルゼフォン卿の姿を見たという報告は受けておりません。」

さすがに前線を維持するだけで精一杯というのが本音でありますから、そこまでの余裕はすでに我が軍には…」

「分かっている。」

問題は、向こうが仕掛けてくる方角と、そのタイミングだ。

考えられるのはやはり東からだ…、難しいな」

眉間に皺を寄せてスレインが呟いた、まさにその時に、起きてはならないことが起きた。

ディーンの森を覆い尽くす呪霧の結界が嘘のように晴れていき、重苦しかった空気が、元の静寂な気配に戻っていく。

悪い夢でも見ているようだ。

今、目の前で起きている事態を把握できず、ただ瞠目して周囲を窺うことしかできない聖騎士が口を開く。

「な、何が起きたんだ!？」

「わ、分かりません! これは、砦の結界が破られたとしか…!」

「バカな!？ 魔導陣を用いた強力な結界だぞ! こんな短時間で外部から破れるはずが」

「ならば、内部から破れば良いだけのことだ」

渋い声質を秘めて投げかけられたその言葉に、スレインは息を呑んで戦慄する。

自分の背後から吹き付ける風はどこか生温かく、しかも仄かに香るは、鉄を含む血の臭い。

彼はすでに看破している。

背後にいる人物が、いつたい誰であるのかを。

一切の魔術を使わずに、己が持つ天賦の才を、ただ絶え間ない努力によってのみ鍛え抜いた、生きながらにして伝説を体現する者。

ただ一人、武の神域に到達した最強の騎士。

躊躇いもなく剣を抜く聖騎士が振り返る。

「後方の守りを固めておくことは戦闘の鉄則だと教えていたはずだが…、基本を忘れると、こうして足元を掬われる」

砦の開いた入口に超然と君臨する男は、やはり記憶に懐かしい師の姿と寸分変わらずにスレインを見据えている。

銀髪を後ろに流した精悍な顔立ち。

冷たい光を湛えた、朝露に濡れた刃のような瞳が圧倒的な剛毅を宿して異質な存在感を放つ。

どれほどの資質を、どれほどの鍛練によって研摩すれば完成に至るのか、完璧に調和の成された肉体はまさしく、その生涯を武に捧げた人間のみに与えられる武神のそれである。

その、人類が到達し得る究極に限りなく近い男が今、脱力した二刀流の構えでスレインと対峙する。

「御師様…！ いったい、どうやって…！？」

その男の名をこそ、人は剣聖バルゼフォンと呼ぶ。

最大勢力を誇るマーシア王国軍の最高司令官にして、聖騎士最強と謳われる男である。

「それがお前の限界だ、スレイン。…尤も、私に無防備な背中を剥き出しにしていた時点ですでに一度死んでいるお前には、もはや答える必要もないのだがな」

スレインはぐつと唇を噛み締める。

他の兵士たちも、剣聖と呼ばれる伝説を目の当たりにして狼狽し、すぐさま剣を構えるが、その腰は滑稽なほど引けて無様に震えている。

そんな彼らの様子をまるで意に介さずに、バールゼフォンは呟く。

「…そろそろか」

「スレイン様ッ！」

剣聖の言葉と、伝令兵が駆けつけてきたのは、ほぼ同時だった。

伝令はスレインに近づくと、すぐに報告する。

「北と東からの同時攻撃です！」

呪霧が晴れたことを機に一齐に攻撃が再開されました！

ご指示を ツ！？」

彼もまた、砦の入口に立つバールゼフォンの姿に気付いたようだった。

目を見開き、慌てて剣を抜こうとして地面に落とし拾い上げ、震える腕で頼りなく剣を構える。

険しい表情を崩さずに、スレインが叫んだ。

「お前たちは前線に行け！　ここから先に退くわけにはいかないッ！　何とか防戦に徹し、敵の攻勢を防ぐんだ！」

「は、ハッ！」

そう応えて、兵士たちはすぐさま走り去っていく。

残された二人の師弟は、互いを油断なく見つめたまま微動だにしない。

誰にも気づかれることなく砦の内部に侵入し、地下の魔導陣で呪霧を生み出していた百人の魔術士を剣聖は倒した。

だからこそ呪霧は晴れ、その時期を見計らって敵部隊が侵攻を再開したのだ。

しかし、いったいどうやって忍び込んだというのか。

パールゼフォンが魔術を使えないということは既知としているし、卑劣にして奸悪な指揮官であれば森に火を放ったであろう策などを良しとしない、非常にクレバーな戦術を好むことも熟知している。

つまり、剣聖は大胆な発想に基づく周到な準備を心がけた上で、慎重な判断により作戦を完遂する男なのだ。

だが、砦の入口はパールゼフォンが立っているここにしかなく、しかもその手前には連絡拠点を設けていたのである。

「…しかし、なかなかどうしてと言うべきか。どうやら、お前よりも優秀な人間がウエセックスにはいるようだな」

理解に苦しむ謎を前に苦悩するスレインを尻目に、剣聖パールゼフォンは失望の色を瞳に宿して低く呟く。

顔を上げたスレインは、剣聖よりもさらに後方、入口奥の通路に、一人の少年が両手にナイフを構えて立っていることに気付いた。

果たして、いつからいたのか。

ブリテン島西部のウェールズに赴き、ダヴェッド王国にて三人目の聖騎士との密約交渉任務に応じていたはずの蛇が、眼前の剣聖を見据えて身を屈めている。

どのようなタイミングでも迎撃してみせると意気込む構えだ。

「愚鈍な弟子に教えてやってくれないか。…私が、ここにどのような方法を用いて潜入したのかを」

パールゼフォンは彼の勇氣に敬意を表し、スレインを見据えたまま、背後の暗殺者に低く呼びかける。

ヴィクターは一度スレインを見やってから、彼の了解を察して口を開いた。

「…重傷兵です。」

貴方は、あの濃霧を利用して北部マーシア分隊に紛れ込み、交戦した迎撃部隊を壊滅させ、あたかも自分がウェセックス兵であるかのように偽装して重傷兵を偽り、この砦に運び込ませたのです」

その手があったか、とスレインは心の中で毒づく。

分隊で侵攻させていたのは、森林の地形から効率よく進軍させるためばかりでなく、一般兵に偽装した自分を相手に気取らせぬよう、多くの兵を自分たちに対応させるためでもあったのだ。

前線において重傷を負った兵を砦の中で手当する、それ自体は悪くないシステムであったが、しかしだからこそ、バールゼフォンも自分がスレインの立場であったならそうするだろうとして、一芝居を打ったのだと思われた。

そして、砦の中に運び込まれたバールゼフォンは行動を開始した。

剣聖は静かに言葉を繋ぐ。

「その通りだ。君の言う通り、私は重傷兵を装ってこの砦に忍び込み、全滅させた。

…そうなると、どうやら君も重傷兵を偽ってここまで辿り着いた人間だな？

少なくとも、この砦の中で私の襲撃にあっていない人間は、もはや戦う力すらない重傷兵らだけのはずだ」

それが言外に、砦に配置させていた一千の兵士すべてを、わずか一時間たらずで倒してのけたことを意味し、スレインは瞠目する。

そんな彼の心情を余所に、ヴィクターもまた沈黙した。

聖騎士アセルスよりマーシア王国軍の南下を聞いたヴィクターは、すぐさま王都への帰路につくものの、その途中にディーンの森の北入口に部隊を駐留させていたマーシア王国軍を見つけるとすぐに、森を移動するのは不可能だと考えた。

しかし、濃霧の影響で敵味方の判別が難しい現状から確実にウエセックス王国軍と合流するためには、その敵であるマーシア王国軍に紛れ込んだ方が最新の情報も得られて一挙両得だとし、それを実行。

その後は剣聖と同じく、分隊に参加して交戦したウエセックス兵の重傷兵を偽装し、魔導砦へと運び込ませたのである。

「

」

だが、ヴィクターは応えない。

否、応えられないのだ。

聖騎士スレインとともに前後を挟み、二対一という圧倒的優勢にあるはずの自分が、しかし背を無数の虫が這い回るような悪寒に苛まれて抑えられない。

あの超人騎士アセルスをして『あの男は強い』と言わしめたブリテン最強の男を目の前に、あらゆる攻撃パターンを刹那に予測し、それが皮肉にも自分を半ば混乱状態にさせているのだった。

それを、すでに見抜いていたのか。

瞬き程度の時間、一瞬の暗闇が視界に下りて開く、その瞬間に、剣聖と呼ばれる男がとうに自分の懷まで肉薄していることに気付く。

「　　ッ、え…？」

優に五メートルは離れていたはずのバルゼフォンの接近に、ヴィクターは驚く暇も与えられなかった。

サイクロプス戦で見た聖騎士アセルスの神速の踏み込みと同等か、あるいはそれ以上の速度による超人的な動作である。

砦にて鹵獲したウエセックス兵の剣の柄の突端を、最速の角度でヴィクターの鳩尾に当て、次いで首筋に鋭く打ち込む。

「がつ、　　あ…！？」

さらに地面に崩れ落ちたヴィクターの背、ちょうど肩甲骨の中央寄りに点在する急所を踏みつけ、たったこれだけの動作で剣聖は、イングラムが誇る最高の暗殺者を行動不能にしたのである。

「くッ…、御師様！」

砦の入口に駆け付けたスレインを、バルゼフォンはまさしく死神を連想させる冷たい瞳で射抜く。

「最初に掴んだチャンスは決して逃すな。最高レベルでの戦いで相手を仕留めるチャンスは滅多に訪れない。

…お前が本当に成長したのなら、そのまま背後から攻撃を仕掛けるか、あるいは切り札を使うべきだった」

「ッ！」

かつての師の言葉に囚われ、逸らすことのできぬ視線の呪縛に聖騎士は息を呑む。

だが、バルゼフォンはあえて攻撃を仕掛けない。

「それよりも聞きたいことがある。…お前は見つけられたのか？三年前、私が別れの時に聞いた『平和とは何か』を」

湖の乙女ヴィヴィアンによる試練を終え、聖騎士となって帰ってきたスレインは、しかしバルゼフォンとエリスに別れを告げる決心をした。

彼女によって知らされたブリテン島に暗躍する闇の存在が、彼にマーシア王国との離別を決意させたのである。

バルゼフォンは、そんな彼を諭すこともしなければ、止めるようなこともしなかった。

しかし、たった一つだけ、問うたのだ。

『お前にとって、平和とは何か』

当時、スレインは確然と答えることができなかった。

漠然とした理想の平和は思い描いていたものの、それを言葉にしようとする途端に色褪せて、遙か遠くに感じてしまうような気が

したからだ。

それは、空のように目の前にして、ゆえに遠く。

だが、今は違う。

親友カインの夢と死。
暗躍する魔人の実在。
そして、家族の無念。

それが、聖騎士スレインの理想をはっきりと形作つたのである。

「私にとって平和とは、皆が幸福であることです」

スレインは滔々と言葉を繋ぐ。

「御師様に拾われる前、私には弟と妹がおりました。
しかし、二人は栄養失調で病に倒れ、死にました。
貧しくて、ろくに食べ物だと呼べるものさえ、満足に食べさせて
やることができませんでした」

永い、本当に永すぎる戦争が生み出した負の遺産。

“ 誰も助けてくれない。
誰も救ってくれない。
誰も恵んでくれない ”

あまりに夜が昏すぎて、そして冷たかった暗黒の日々。

「そついう時代なのです。」

魔人が嘗々とブリテンを蝕んできたのなら、その貧困と理不尽に冒された泥沼を清めずして、世界が良くなるはずが決してないッ！」

良い世界が新しく訪れないというのなら、生者は何のために死者に祈り、死者は何のために生者に完結するというのか。

古く忌まわしいモノが蔓延るだけの社会しか訪れないというのなら、人間はこの先、どのような夢や希望を抱いて生きていけばいいというのか。

人は、何のために時代に巻き込まれていくというのか。

「魔人を倒し、ブリテンに点在する国家を統一して初めて平和が訪れる……！」

国境線をなくし、夢や理想を共有してこそ、人々は互いに手を取り合い、共存することができる……！」

それが、私が望む“平和”です！」

膨張しつづける列強同士の確執や軋轢が、最下層に漂う難民や孤児を汚濁のように吐き出していく。

澱み続ける問題が、内外を問わずに山積して人々を苦しみ続けるのだ。

その中心に蠢く者こそが、あの魔人なのである。

ならば、その原点を潰さずして、他の問題を解決できるはずがないではないか。

自ら表舞台に立ち上がり、マールシア王国に影の形に添うように裏

で糸を操り、緩やかに動き始めているのだから。

挑戦するかのように輝くスレインの瞳を見据えながら、ただ沈黙に徹して聞いていたパールゼフォンは、しばらくして落胆の目で聖騎士を見やった。

「…そうか。やはり、お前は何も理解できなかったか」

「え…？」

予想外の言葉に狼狽するスレインを尻目に、剣聖はさらに言葉を繋いだ。

「確かに魔人は倒さねばならぬ元凶だ。それは認めよう。

…だが、皆が幸福である世界を、ブリテンを統一することで創ることができると本当に信じているのか？」

「も、勿論です！」

「ならば問う。

お前はブリテンを統一すると言ったが、このブリテンには我々アングロ・サクソン人の他にもう一つ、ブリトン人がいることを知っているな。

先住民である彼らを、元々が侵略者である我々の傘下に収めたとしても、彼らがずっと付き従うとも思っているのか？」

「た、たとえ最初は難しくても、時間をかけて対話を心がけていれば、必ず認識を改めてくれると信じて」

「改めてどうする。虚々実々の駆け引きが、もっと巧妙になるだけ

だ。国境をなくしても、政治や宗教、人種が多種多様に違えば、そこに生まれるのは幸福とは程遠い監視社会だぞ。

…間違えるな、スレイン。

我々は所詮、同じ穴の貉にすぎぬ。そして戦争とは、単に武力行使だけを指す言葉ではないことも覚えておけ」

「　　ッ、…！」

「改めて問う。

お前は、皆が幸福となる世界への革新こそが平和だと言う。

…確かに、その社会こそ理想的だろう。皆が幸福なら争いは生まれず、理不尽な死も訪れはしない。

まさに完璧な社会だ。

英雄王エグバートがブリテンを統一し、魔人を滅して平和になりました、か。

…お前はいつから、そんな幻想に甘えるようになったのだ？」

「ですが、その理想をこそ実現させなければ、いったい何のために我々が戦っていると言うのですかッ！

平和は現実になければ意味がない！

理想がなければ、人は前に進めません！」

「その通りだ。人は理想という空を見上げて夢を抱く。それが善しきにしろ悪しきにしろ、それぞれの理想を空に思い描くものだ。

…だがな、スレイン。人が実際に踏み締めるのは大地という名の現実なのだ。

人が空で生きていけるようには形作られていないように、それでも人が空に辿り着くには相応の犠牲がいるように、そして空と大地が最初から相容れず乖離しているように、理想と現実はいかに必要でありながら相反する相剋にすぎぬ。

…実際に人が手に取ることができるのは、夜空に瞬く流れ星の耀きではなく、泥塗れになりながらも生命を育み続ける土と水の逞しさだけだ」

「　　ッ、…！」

「昼と夜が繰り返すように、平和と戦争もまた繰り返すものだ。

昼が正しくて夜が間違っているのだとしたら、それこそが間違いの原点だ。

人は光だけの世界では眠れない。夜があればこそ人は休息の時間を定めることができる。

…確かに、人の心の闇は誰も褒めはしない。まるで、光だけが正しいのだと言わんばかりにな。

…だが、昼と夜が繰り返すなら、人もまたそうであって何故いけない。

お前は聖騎士であろうとするがゆえに思考が極端となっている。相手を善と悪に分け、新世界に夢を見るあまり、現実を蔑ろにしているのだ。

…尤も、今のお前では、私の言葉も届かないだろうがな」

スレインの表情に正体不明の色が浮かぶ。

激しい困惑。

静かなる憤怒。

忍びやかな慟哭。

それらの感情が強く混ぜ合わさり、剣聖の言葉の意を汲み取れぬ自分に混乱しているのだ。

パールゼフォンはかすかに眉を顰める。

「スレイン、自分の本質を忘れるな。聖騎士とは所詮、ただの人殺しにすぎぬ。そして人殺しでは、どう足掻いても理想には辿り着けない。」

…私が夢を見ていないのはな、スレイン…、私が生み出した犠牲への責任を、まだ果たしていないからだ」

唇を噛み締め、剣を強く握り締めて、スレインはひどく哀しそうに顔を歪めて剣聖を見返した。

「…分からない…！ 私には、貴方の言っていることが何一つとして理解できないッ！」

胸の前に剣を構え、それだけをバールゼフォンへの対抗手段として、内なる動揺を力ずくで押さえ込む。

「勿論だ。元より、お前に理解してもらうつもりもない。」

…さて、お前の意志が知れたところで私はもう充分だ。

お前の部隊が逆転するには、私を倒すしかあるまい。…ならば、躊躇せずにかかってこい」

快々と沈殿する心の蟠りを振り払うように咆哮を迸らせ、聖騎士はバールゼフォンの制空権に身を投じる。

大地を抉るが如き踏み込みによって成し得る、爆発的な高速接近であつた。

一呼吸の暇もなく剣聖の懷に踏み込んでのける超人的な動きを当たり前のように繰り出し、ほとんど目に見えぬ魔導剣の一閃が師に肉薄する。

その瞬間、二つの光が交錯し、弾けた。

スレインの閃光にしか見えぬ高速の斬撃を、事もなげに涼しげな顔で左剣を合わせるバルゼフォンはしかし、一歩たりとも動いていない。

「く　　ッ！」

弾き返される鍔迫り合いの反動から間合いを取り、スレインは少しの逡巡もなく再び踏み込む。

地を這うように低い前傾姿勢から繰り出される閃光の連撃が、踏み込みの加速からさらに速度を増してバルゼフォンに襲いかかる。

その一刀だけでも容易に相手の剣を切り裂き、肉も骨も断ち切る凄まじい斬撃である。

関節のある同じ人間とは到底思えぬほど柔軟に、しかし見れば鉄をもバターのようにな断してしまいそうなほど豪快な剣撃が、刀身が宙に残す光の軌跡となって高速に展開されていく。

だが、この聖騎士の動きに、バルゼフォンの表情は些かも揺るがない。

速いとは見えぬ、しかし現実にはスレインよりもさらに速く精妙に、神速の太刀捌きをもって一歩も動くことなく、かつての愛弟子の攻撃をことごとく防ぐ。

両者の流れるような剣が重なる度に、あたかも極上の旋律を奏で

る楽器となつて即興の楽譜を演奏しているかのようだった。

しかし、驚くべきは剣聖の細緻な剣技にある。

勿論、スレインの斬撃は恐ろしく無駄のない組み立てから放たれ、その動きに一瞬でも躊躇や読み間違いがあれば、それは即座に使い手の致命傷となつて聖騎士の前に倒れることとなるのは明らかだった。

しかし、それでも怜悯な瞳でスレインの斬撃をすべて把握するパールゼフォンは、これ以上ないほど完璧なタイミングで迎撃しているが、その剣の刀身は少しも毀れさせていない。

これは、驚愕すべきことである。

剣聖が両手に持つ二振りの剣は、スレインのルーンブレイドと違って特別製でも何でもない、この魔導砦に配置されていたウェセツクス兵より奪った、ごくごく普遍的な剣にすぎない。

それを一振りだけで、しかも剣の芯をずらすことでスレインの斬撃を真正面から耐えるのではなく、受け流すことによって刃毀れも生じさせずに防ぎ続けているのだ。

パールゼフォンは目を細め、眼前の聖騎士を見やる。

「どうした、スレイン。ヴィヴィアン殿の試練から三年を経て、この程度しか成長していないのか」

この挑発に反応するよりわずかに早く、聖騎士は後方に跳躍して己が師を見返した。

「…騎士は言葉で語らず、剣によって語れ。…かつて、貴方より教わった言葉は、まだ私の胸に生きています…！」

言い終えた瞬間、これまでの速度よりも速く、信じ難いほどの踏み込みを見せてスレインが間合いを詰めた。

相当の使い手であっても視認困難であろう神速の足運びから急速に近づく弟子の閃光と、僅かに目を見開いて迎撃する師の閃光とが重なって、そして。

光の激突から数秒と経たず、スレインが後方に退く。

「…なるほど。よほどヴィヴィアン殿に鍛えられたと見える。

…少なくとも、私の剣を折るほどにはな」

パールゼフォンが繰り出した左剣は、スレインが渾身でもって放った全力の斬撃に耐えられず、刀身の中心から砕けていた。

剣の芯を外しての迎撃だったとはいえ、いかなる達人でも自身の技術によって補う範囲には、やはり限界がある。

その上限を上回る一撃が放たれたなら、何の強化処理も施していない凡庸の剣が、湖の乙女たるヴィヴィアンが創製した魔導剣に耐えられるはずがなかった。

「よかるう。お前は仮にも、私の剣を超えてみせたと言っべきだな。…ならば刮目するがいい。己が未熟を噛み締めて」

静かに瞼を下ろしたパールゼフォンが、砕けた剣を床に落とす。

右手に光るは、もう一つの剣。

「その身に刻め……！」

開眼したと同時に、剣聖が動いた。

それは、もはや単純な踏み込みでは有り得なかった。

生物の動作は、その前提として、ある程度の体重移動や呼吸の癖を無意識に働かせている。

なぜなら、それが本人の経験に基づく最高の運動能力を発揮するために必要な準備であり、これが成されなければ、人は小脳が指令する自在の運動が不能となるからだ。

簡単な話、物を掴むだけでも体重移動は不可欠であるし、座るだけの動作にも呼吸のタイミングを無意識に計っている。

しかし、バールゼフォンはその準備をほとんど必要とせずに最高の運動能力を発揮することができるため、相手に運動や攻撃の先読みを完全に不可能とさせた状態で仕掛けることができるのである。

行住坐臥、常に奇襲を警戒する剣聖を象徴するかのような、およそ常人離れた身体能力であった。

これにより、あらゆる敵に対して奇襲を可能とする彼の動きは、同時にあらゆる敵の奇襲を無力化するため、どのような超人であろうとバールゼフォンが攻勢に転じた時点ですべての動作は後手を回らざるを得ない。

ただの一蹴りで最高速度まで臨界する途轍もない筋力の躍動が通路の床を叩いて、ほとんど瞬間移動かと見紛うほどの疾走が解放された。

聖騎士の眉が、途端に跳ね上がる。

数メートルは離れていた剣聖の姿が幻のように消えたと同時に、すでに懷まで接近して宙に閃かせていた師の剣撃に辛うじて魔導剣を合わせる。

「く　　ッ！」

悲鳴を上げるルーンブレイド。

その衝撃を相殺できずに轍のような足跡を大地に刻みながら、スレインは砦の入口より外へと弾き出される。

その、次の瞬間にはすでにパールゼフォンが肉薄して剣を閃かせる凄まじい瞬発力が聖騎士を襲い、それも寸前で何とか魔導剣を合わせるものの、毛ほどの間もおかずに襲来する剣聖の斬撃は、もはやスレインさえもが戦慄するほどに恐るべきものであった。

宙を舞う切っ先が触れずとも、擦過しただけで大地が切り裂かれ、大気が引き攣り戦慄するが如くに唸りを上げる。

パールゼフォンの一撃一撃が大地に斬撃の傷痕を残して地形を変え、足の踏み場も切り裂いていく様は、あたかも悪夢が現実を侵食して投影されていくかのよう。

聖騎士の動体視力をもつてしてもなお捉えることの難しい神速の閃光が、巨大な鉄槌の質量を秘めて魔導剣とかち合い、そのたびにスレインが剣聖の超斬撃の衝撃によって体ごと後退させられていく。

「く…ッ、…ハアア…ッ！」

交錯する二刃の閃光。

目も眩むような激しい剣撃に押される聖騎士は、しかし鬼気迫る表情でようやく見出だした死中に全力で踏み込み、パールゼフォンの斬撃を鏑迫り合いに持ち込ませる。

「御師様ッ…！」

「よくぞ踏み込んだと言いたところだが、これが私の畏だとは考えもしなかったのか？」

その時、スレインは全身が干からびていくような悪寒が背筋に走った。

刹那、鏑迫り合いの拮抗から剣聖の右腕が振り抜かれ、スレインは予想を遥かに超える臂力に押し負けて吹き飛ばされる。

パールゼフォンの右腕一本の臂力から面白いように宙を舞う聖騎士は、しかし空中で容易く体勢を立て直して見せ、一度の着地では相殺できない慣性に二度三度と着地することで、運動エネルギーを動摩擦によって散逸させる。

スレインはようやく立ち止まると、すぐに五感を研ぎ澄ませて周囲の気配を窺ったが、剣聖が追撃に接近する気配はない。

「く　　ッ！　さすがは　　ッ！？」

顔を上げてから一秒と経たずに、それはスレインに狙いを定めて彼方より瞬時に迫り、大地をなぞるように宙を疾走する。

もはや剣も間に合わぬタイミングで飛来する、巨大な孤を描く刃状のソニックブームであった。

ただでさえ視認が難しい極細の、しかも透明をした死の風が、空气中の塵や砂埃を舞い上げてその姿を露わとし、聖騎士に高速で接近する。

しかし、スレインは顔を上げたそのままの勢いで思いつきり身体をのけ反らせ、紙一重で躲してのけた。

文字通り目と鼻の先を通過し、前髪の毛先を切り裂いたソニックブームが、そのまま背後の木々を薙ぎ倒していくのを極限の集中力に研ぎ澄まされた目で見たスレインは、すぐに体勢を立て直して第二波に備えるべく剣を構える。

超音速の絶技が、再び聖騎士を標的に飛来する。

視認して反応するだけでは絶対に間に合わないその攻撃を、ソニックブームの高速接近を示す大気の振動や風切り音、そして遙か前方にいる剣聖の斬撃軌道を精確に読み、ほとんど脊髓反射レベルの域に達した超反応で、一つ二つ三つと襲いかかる死を切り裂いていく。

もはやそれ自体が神業と讃えるべき驚異的な身体能力であったが、

小脳からの指令伝達と、それを即座に処理する細胞の反射速度が異常に速いスレインだからこそその技巧であり、やはり聖騎士の名は伊達ではないのだと証明する極上の剣技である。

音速の壁を越えた絶技に対し、これもまた天性の反射神経でもって迎撃するスレインの精密な斬撃が三度、剣聖のソニックブームを切り裂く。

全力で振り抜いた魔導剣の刃を合わせ、その接触面から乖離したソニックブームは左右に流れて樹木を切り倒したあと宙に溶けて消えた。

ようやく止まった追撃の手に一呼吸して、スレインは剣を地に下げた脱力の構えでこちらを見やる剣聖に、改めて息を呑む。

単純な目測でも七メートル以上はある距離で、それでも絶技ソニックブームによる一方的な攻撃を仕掛けることができる剣聖に対し、スレインはあくまでも必殺の間合いに詰め寄って初めて攻撃することができするため、すでにリーチで差が歴然とした両者のどちらが優勢であるかは、考えるまでもないことだ。

しかし、すでに三合の打ち合いをもってソニックブームの加速度と迎撃のタイミングを見切っているスレインは、いかな超音速であろうと、ある程度の距離が離れていれば防御することは可能だった。

問題は、接近すればするほどソニックブームの迎撃が困難となるうえ、さらに剣聖の踏み込みにも警戒しなければならないことである。

勿論、魔導剣の四大能力を使えば、この状況から逆転することも

可能なだろうが、その神秘が発現するまでの待機時間を、あのパールゼフォンが素直に待っていてくれるとは天地が覆るうとも有り得ない。

ならば、やはり躲しながら突き進むというのか。

しかしそれは、未来予知の固有能力者でなければ到底不可能な領域の回避技術を要求された接近であるのだ。

確かに、ソニックブームそのものは剣聖の斬撃から生み出される超音速の衝撃波であるのだが、その斬撃もまた目を凝らさなければまず反応できないうえ、絶技の連発も可能とする以上、接近すればするほど迎撃のタイミングも極端に短縮されるなら、不用意な踏み込みは確実な死を意味する。

呪霧が消滅した今、できる限り早期に部隊と合流し、前線にて敵の攻勢に歯止めをかけたいスレインであったが、心技体、どれをとっても上回る剣聖パールゼフォンを倒す方法が見つからず、顔を顰めて隙を窺うばかり。

そんな彼の心中をすぐに看破した剣聖は、失望の余韻を含ませる溜息をついた。

「…ヴィヴィアン殿は人選を間違えたな。やはりお前では、魔人を倒すことも、ブリテンに平和をもたらすこともできはしないだろう。甘い夢に浸るのは幻想の中だけにしておけ。…現実には、お前のように恵まれた、優しい人間ばかりではないのだ」

この時点で、すでにパールゼフォンの意識はスレインに注がれてはいない。

東の方角より、こちらに走り寄ってくる小規模の何者かたちの気配を捉えたがゆえに、聖騎士の微細な動きにも注意を払いつつ、森の道なき道を駆ける者たちの存在を見抜いたのだ。

砦の入口前、夜空が見える開いた場所に佇む二人の前に現れたのは、バルゼフォンが従える部隊の兵士たちであった。

分隊規模で行動していた九人のマーシア兵らは、もはや聖騎士の決闘場と化した二人の一触即発とした空気に狼狽しながらも、剣聖に向かって声を張り上げた。

「バルゼフォン様！ 東の敵部隊が北に向かって後退を始めました！」

その言葉にスレインが瞠目し、次いで苦々しく表情を歪める。

元々、東の戦力差はウェセックス側が一千であるのに対し、マーシア側は五千を投入して迂回させていたのだ。

この五倍もの兵力を埋めるための策が魔導砦の呪霧であったのだが、それが剣聖の潜入によって無力化された今、東の前線を維持するのは確かに困難だろう。

だが、北に後退し、八千の部隊と合流したところで、マーシアの北部隊一万三千が存在する以上、必然と挟撃されるのは目に見えている。

それは手痛い悪手に他ならなかったが、全滅するよりは、と考える苦渋の決断を下した参謀らの気持ちも、スレインには理解できた。

ここまで部隊を追い詰めさせてしまった責任は、他ならぬ自分にあるのだとして。

だが奇妙なことに、声を大にして報告事項を告げた彼らは歓喜に浮かれてはいない。

その報告には、まだ続きがあったのだ。

「しかし、エリス様の部隊がこちらに後退しており、その後方を追撃する敵部隊の姿も…ッ！

ちょうど中間に位置する我々は、このままだと挟撃に合う可能性があります…！　どうか、ご指示を…！」

今度は、剣聖の眉間に更なる深い皺が刻まれた。

エリスの部隊がこちらに向かっているということは王都の包囲網が破られたに相違なく、ならば今頃はドウムニア王国軍も後退しているはずだった。

となると当然、王都から出陣したであろうイングラムは、スレイン率いる主力への補給線を絶つエリスを追撃しているはずであり、このままでは東に迂回させていた五千の部隊が挟撃に合うのは時間の問題である。

本来であれば、このままスレインを倒し、次いで東の五千とエリスを合流させ、イングラムの部隊を迎撃すればいいのだろう。

だが、王都急襲のために限界ギリギリの強行軍を課せられてきたエリスの部隊は消耗率が桁違いに高く、合流する前にイングラムに

捕まり、捕虜の身に、という事態に発展すれば、バールゼフォンは最大の理解者にして有能な指揮官を失うこととなる。

躊躇いは須臾ほども有り得なかった。

バールゼフォンから放たれた絶技ソニックブームが、スレインに疾走する。

イングラムの援軍に安堵した、その思考の隙を突かれた不意打ちに慌てて迎撃するスレインだったが、その奥に剣聖の姿はとうになく、すぐさま気配を辿ってみれば、いつの間にか兵士たちの傍にいて何事かを話している師の姿を捉えた。

「御師様…ッ！」

しかし最小限の応えもなく、返ってきたのは宙を駆けてスレインに強襲する一陣のソニックブームのみ。

「く…ッ！」

ほぼ完璧なタイミングで絶技を両断したスレインは、しかし視界から消えた剣聖の代わりに、剣を構えてにじり寄る兵士たちの殺気を受け止める。

「御師様…！！く、しかし、皆の重傷兵を見捨てるわけには…！」

「さ、先を急いでください…！！スレイン様…！」

聖騎士が振り返ると、砦の入口に胸を押さえて壁伝いに歩いてきた蛇の姿が見えた。

剣聖の打撃を受けて一時的に行動不能となっていた身体のダメージがある程度、回復したのだろう。

まだ万全の調子とまではいかない様子だったが、それでも彼が、たかが一般兵に遅れを取るような少年でないことをスレインはよく知っている。

「私が砦を死守します…。どうか、イングラム様を…」

さすがに少しばかり逡巡したスレインだったが、しかし現状ではそれが最善の策だとして決意を固めた。

「…分かった。お前を信じるぞ、蛇。…決して死ぬな」

微笑んで頷いて見せた蛇に対して聖騎士もまた微笑み返し、依然として殺気を放つ兵士たちに向き直る。

「そこをどけ。…今の私は、手加減できそうにないからな」

次の瞬間、銀色の風が颯爽と駆けて消えた。

『マーシア王国軍 副官エリス』

後退戦術ほど、部隊の消耗率が跳ね上がる戦術はない。

そもそも、後退行動そのものが部隊の士気や体力、精神力に大き

な負担を引き起こすものであり、従って迅速な退却行動に基づきながら、敵の追撃を防がなければならなかった。

逆に、敵の視点から見れば戦術は追撃戦に移行するため、一時的に弱体化した敵戦力を速やかに補足して、相手の組織的な反撃を封じ込みながらの圧倒的な殲滅戦を仕掛けることができる。

それゆえに、部隊の被害を最小限度に抑えるため、自ら最後尾に立って敵の追撃を迎撃していたエリスの体力は、もはや限界に等しい域にまで消耗させられていた。

「穢れたる大気にたゆたう母よ」

粘るような森の薄闇、行く手を阻む木々の間を駆け抜ける彼女は、しかし自分と同速度で追いかけてくる三つの気配に全神経を集中させて警戒する。

樹木の根を器用に避け、顔を打つ枝を躲しながら、ぞくりと背筋に走る殺気に左から襲来する暗殺者の気配を捉えた。

「おおりゃあああああ！」

「くっ！」

闇の向こうから強弓の速度で飛び込んでくる若き暗殺者グレッグのナイフを身体を屈めて避け、次いで右方向より飛び出した暗殺者蜘蛛のナイフを前方に転がることで何とか避ける。

すぐに体勢を立て直し、再び剣を構えると、途端に接近する二人の猛攻を紙一重で防いでは、疼く腰の激痛に顔を歪めた。

暗殺者のピタリと息の合った連撃に後退しつつ、しかし突如として彼女の姿が闇に溶けて消える。

「歎いたる不和の音色を止め、揺らぎの声を集めん」

エリスは樹木の影に入るやいなや、すぐさま後退の速度を活かして倒木を蹴り、垂直に跳躍して頭上の太い枝に取り付いたのである。

本当に闇に溶けたかと思紛うほどに意表を衝いた動作であつたが、その驚異的な体術の代償がすぐさま腰の傷口に跳ね返ってその端正な顔をしかめると、途端に肌が粟立つ殺気に顔を上げる。

「“普く真空の窮奇”（サイクル・シューター）」

不可視の旋風がピンポイントにエリスを直撃し、辛うじて防御姿勢を取っていた彼女の鎧や四肢の表面を切り刻み、その足場であつた枝をも切断する。

「く　　ッ！」

足場が崩れる前に自ら飛び降りて地面に着地するエリスを、さらに二人の暗殺者が急速に間合いを詰めてナイフを閃かせる。

「オラァ！」

「フンッ！」

気合いを放つ両者のナイフ捌きを、苦痛に歪める表情をそのままに防ぎ続けるエリスはしかし、とうに限界を超えた体力に息を荒げ、

その視界も狭窄し始めるほど疲弊していた。

ナイフを弾いてグレッグを足蹴に吹き飛ばし、次いで踏み込んでくる蜘蛛のナイフと鏑迫り合いに持ち込みはしたが、その刀身に王城で見せた力強さが備わっていない。

「あの時とは立場が逆転したな……！ 先刻の屈辱、今ここで晴らさせてもらうぞ！」

以前よりもさらに増した気迫をもって宣言する蜘蛛の前に、しかしエリスも負けじと殺気を迸らせる。

「それは残念ね……！ 今の私は手加減できないわよ……！」

「フン、戯事をッ！」

予想外に撓められた蜘蛛の全力に剣を弾かれ、途端に腹部に走る激痛が、眼前の暗殺者が仕掛けた回し蹴りによるものと気づく。

「ぐっ……！」

後退する、その一瞬の隙を的確に突くグレッグが蜘蛛の肩を蹴って上空から、そして蜘蛛もまた低く姿勢を屈めてエリスの懐へと踏み込む。

顔を上げた瞬間に捉えた上下の暗殺者の奇襲に、迎撃の思考を刹那に混乱させられたエリスの狼狽につけ入るように、二人は間合いを即座に詰める。

「ッ、く……！」

上空から襲いかかるグレッグのナイフを剣で受け止め、しかし地面すれすれの前傾姿勢から接近する蜘蛛のナイフを、跳躍して後退することで辛うじて躲す。

その、瞬間。

「引き付ける相剋の楔」（イン・サイト）

真後ろに飛び退いたはずのエリスが突如として空中に静止したかと思うと、まるで巨人の掌に捕われて引き寄せられるが如くに、物理法則を無視して二人の暗殺者へと身体が戻っていく。

「な　　ッ!？」

あまりにデタラメな事態に言葉も出ないエリスを待ち構えるは、やはりグレッグと蜘蛛の両名。

「いらっしやいませええええ！」

グレッグのナイフがエリスの剣を弾き飛ばし。

「しまっ　　」

「　　これで終りだ…！」

蜘蛛のナイフが、寸前で致命を避けるもエリスの腹部に深く突き刺さる。

「くうううああッ…！」

血肉をえぐられる激痛に大きく顔を歪ませ、蜘蛛の腹を蹴飛ばして後退するも、深い傷口からの出血に手を当て、上半身を屈めて肩で息をするその身体はもはや満身創痍。

武器もなければ魔力もない。

そしてエリスは見た。

朦朧とする意識と混濁する視界の中で、二人の暗殺者の間から現れる何者かの姿を。

空間が奇妙にも人型に切り取られ、何かが翻ったと思った瞬間、頭部から足元までを長く包むマントが宙にたなびく。

その隙間から見えるのは、豊饒と背筋を張った肉体と。

そして、頭巾のような被り物に覗く威厳のある面構え。

その老人が現れた時、グレッグと蜘蛛は同時に跪いて忠誠の姿勢を示し、主の出現に頭を垂れる。

「ほほう…、二人をてこずらせた魔導騎士と聞いてきて見れば、よもやこれほどの美人さんじゃったとはな。

さすがは剣聖、実力があれば区別など不要というのじゃな」

そは、永きに渡ってウェセックス王国を支え続けてきた老練たる頭脳。

四大精霊魔術の中でも、最も繊細なコントロールと精神集中を必

要とする“風”系統魔術を自在に操る者。

高密度に収斂された魔力を滾らせて登場した老魔術士に対し、エリスは苦々しく顔を顰めた。

「やはりイングラム…！　まるで姿を見せない第三の追撃者…！　それにそのマント…、ニーベルンゲン族の財宝…、宝具…！」

南の大国ウエセックスが世に誇りしその名はイングラム。

ブリテン最高の魔術士との呼び声高き、数少ない賢者の一人である。

イングラムは視線をやって二人を立ち上がらせると、反撃する力のほとんどを失った敵指揮官を鮮やかな緑色をした瞳で見やる。

「ほう、知っておったとはなかなか博識じゃな。…そう、お主の想像通り、このマントは東の英雄ジークフリートが使用していたものじゃ」

ジークフリートとは、現代でも知られるドイツ英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』に登場する主人公の名前であり、現代のベネルクス三国の王子にあたる人物である。

彼は少年時代、自らの力試しのために自国の北に位置するノルウェーに住まう小人族と戦うのだが、そこで手に入れた財宝の一つが、今イングラムが着用して見せているBクラス宝具“遮蔽する世界より此方へ”（タルンカッペ）だった。

これは古代ドイツ語で“姿を消すマント”という意味を持ってお

り、その名の通り、装備者の姿を完全に消すと同時に、十二人力の力を与えるという特性を秘めた宝具である。

このマントはカメレオン効果の究極型として、リアルタイムで周囲の環境色彩を完璧に映し出し、全方位からの視覚的空間同化を確立することで、相手の視界から完全に姿を隠すことができた。

勿論、これは本来であれば接近戦に長けた戦士用の宝具であることは言うまでもないのだが、だからといって魔術士なら利便性が低いのかと言われれば、実はそうでもない。

当然だが、神秘を操る魔術士にとって最大の弱点は、呪文詠唱そのものにある。

ただし、呪文と言っても各神秘ごとに定められた文言などでは決してなく、普通なら発生し得ない神秘を強制的に発現させるために、術者がこの世界に対して霊的交感における精神連結を実行するために必要不可欠な“言霊”とさえはいいいのかもしれない。

かみ砕いて言えば、世界に対する専用言語である。

世界という商人から神秘を買うために、言霊という言葉を用いて交渉し、神秘を得る代わりに世界が提示した魔力を支払うことで、魔術士は初めて魔術を行使することができるのだ。

従って、世界と親交の浅い初心者は無駄に長い詠唱から一度で息が上がるほどの魔力を消費しても初歩魔術しか扱えず、逆に世界と親交の深い術者は簡略化した詠唱で魔力の消費を抑えながら、強大な威力を誇る神秘を操ることができるのである。

尤も、これには裏道があるのだが。

しかしながら、この言霊交渉　即ち、呪文詠唱に対してはいかなる術者であっても忘我の集中力を必要とするため、これの実行の際には予め、その致命的な隙を守るための対策を事前に練っておかなければならなかった。

多くの場合、その方法とは事前に詠唱を済ませておくか、あるいは強靱かつ信頼に足る戦士と行動を共にすることである。

前者は、戦闘が始まる前に術者が済ませておくべき当然の行為であったが、それでも相手が倒れなかった場合、または増援などで戦闘が長期化した場合には、どうしても後者である強力な前衛の存在が活きてくる。

これは戦士と魔術士、つまりは前衛と後衛が備える一長一短の特徴を上手く補い合った必然的な帰結であるとも言え、戦術の主軸であるとも断言できるのである。

ならば。

もし仮に、魔術士が自らの姿を完全に消しながら神秘を操ることができるとしたなら、どうだろう。

自分の存在を相手に悟らせぬまま目標を一方的に攻撃することができるこれは、相手にしてみればまさしく悪夢のような不可視の死神として戦場を蹂躪することができる。

しかもマントの効果によって十二人力の身体強化を受けた魔術士は、自分の限界以上の体術をも駆使して行動することができるため、

さらに幅広い戦術を用いることができるのだった。

ただし、中級古咒魔術に分類される“気配遮断”の効果はないため、術者は自分の気配を消しながらの移動を心がけなければならず、さらには中級火精霊魔術の“熱感知”によって装備者の体温を感知されても発見は容易くなるなど、意外に脆い弱点もあるのだが。

敵意を露わにした鋭い目の色を向けるエリスに対し、イングラムはにこりと笑って肩を竦めて見せた。

「まあ、こうしてあえて姿を見せたのは、お主に対する敬意の表れと見てほしいものじゃな。」

お主のような美人さんを殺すのは、世の宝を消し去るに等しい行為じゃわい」

そう言って、しかしすぐに目を細める。

「尤も、王を危険に晒しめた罪は重い。素直に投降すれば、命だけは助けてやらんでもないぞ」

エリスは、唇の端をフツと吊り上げた。

「それは、私の選択肢にない、行動ね…。私、たとえ差し違えても…、貴方たちを、殺す…！」

蜘蛛のナイフによって受けた腹部の傷が疼くのか、苦痛に歪めた表情から察するに、致命傷ではないものの、彼女にとって相当のダメージであることが窺い知れる。

足元の下生えには、大小の様々な血痕が滴り落ちていて、蜘蛛が

与えた傷の深さを推察することができた。

「しかし、お主に武器はない。命は投げ棄てるモノじゃなからう。大人しく投降したほうが身のためじゃ」

くすり、とエリスは笑って見せる。

「武器はない、なんて、貴方がよく言えるわね。さっき、貴方自身と言ったことを、もう忘れたの…？」

私が、誰なのかを　　」

その言葉に続く彼女の素早く小さな呟き声と、イングラムが飛び退いたのは、ほぼ同時だった。

「行けッ！」

エリスの前に、合計十本ほどの氷柱が鋭利な突起を三人に向けながら現れたかと思うと、彼女の号令に応じて宙を疾走したのである。

入森する前に晴れていたため、彼らは知る由もなかったのだが、スレインが起動させていた魔導砦の呪霧の名残が今現在も影響していることによって、ディーンの森は一時的に湿度がかなり高い状態にあった。

そのため、活力の多くを失っていたエリスだったが、この湿度の高さが精霊の活性化を生み出し、水系統魔術の発現を比較的、手助けする役目を働かせていたのである。

しかし、この氷柱の奇襲に対し、三人はほぼ完璧に回避していた。

強く引き絞られた弦から放たれた矢の如き速度で迫る氷柱を、イングラムは横に飛び退いて躲し、その後ろにいた蜘蛛とグレッグもまた、それぞれ身体の一部を薄皮一枚分だけ裂いた程度で回避したのである。

そもそも、エリスの前口上からして魔術による攻撃が予測できたため、致命傷に至ることはなかったが、実のところ彼女にとっても、これは攻撃を目的とした神秘ではなかった。

いや、本当は攻撃用として予め言霊を詠唱していたのだが、自分に残された魔力と敵戦力を比較しても、武器を失い負傷した今の状況では彼らを倒すのは困難だとし、あえて自身に満ちた法螺を吹いたのである。

三人が退避行動を取った瞬間、エリスはすぐさまその場を後にして、今もなお挟られているかのような痛覚の走る傷口に手を当てながら森の中を駆ける。

確か、蜘蛛、と呼ばれていた手練れの攻撃によって更に削られた活力の最後の切り札が、あの中級水系統魔術“連立する単結晶”（クリスタル・ラッシュ）だった。

これを使ってしまったことでエリスに残された攻撃手段は皆無に等しく、覚束ない足取りからも自覚できるように、あの三人の実力者を一度に相手して倒せるなどと自分を過大評価して無理に戦おうとは微塵にも思わない。

戦場は元より、どのような状況でも自惚れや過信こそが最大の敵だと剣聖に教え込まれてきたエリスが、愚かにも彼我の戦力差を見

誤り、焦燥感に任せて自暴自棄になるなどありえない。

だからこそ、ここが最後の引き際だとして後退を選択したのも、当然といえば当然であると言っべきだろう。

相手が、イングラムでさえなければ。

「遠ざかる相剋の楔」（アウト・サイト）」

今度は、突如として巨人の掌に押し出されるかのような衝撃だった。

突如として受けた横からの強烈な圧力によって宙に浮いた身体が、更なる圧力に慣性をつけて速度を上げ、樹木に叩きつけられたのである。

「ガッ ツ、くう……！」

当てられた樹木の厚い幹の表面が剥がれ、わずかに窪むほどの衝撃が、負傷しているエリスの身体に致命的な追い討ちをかけた。

右の肋骨が幾本か折れたのが、自分でも分かる。

息をするのも辛く、吐血した唇から赤い筋がとめどなく流れては、眩暈でぼやけた視界に吐き気を催して青褪めた顔を俯せる。

ほとんど残されていない体力から今にも崩れ落ちそうな膝を支えているのは、もはや芯の籠らぬ気迫のみ。

口の中に溜まる血とその臭いに苛まれながら、いつのまにか左右

に回り込んでいた二人の暗殺者に両腕を掴まれ、目の前に歩み寄るイングラムの姿を見る。

腕を組んでエリスを見据える老魔術士は、彼女の傷の具合を一瞥して口を開いた。

「その様子じゃと、もう反撃する力も残されておるまい。

先の牽制で魔力を使い果たし、そのうえ武器も失ったのでは、いかにお主とて抵抗するだけ無駄じゃよ」

もう、言葉を返す気力さえ惜しかった。

呼吸を整えるだけでも滑り落ちていく体力の砂粒を一つ一つ掬い上げるように、エリスはただひたすら肋の灼けつくような痛みに堪えて、今にも途切れそうな意識を懸命に繋ぎ留める。

「よし。蜘蛛と鼠はそのまま、こやつを連れて下がれ。わしはこのまま先に進み、敵を挟撃してやろう」

その言葉に二人が短く応えようと、絡めたエリスの肩を押し上げて、脱力しきった彼女の身体を少し浮かせるようにして歩き始める。

エリスは、できるなら彼らの腕を振り払ってやりたかったが、もう両脚にすら力の入らなくなった身体では、普通に息をすることさえ困難なのだ。

反撃どころか、ともすれば生命に関わるほどの血を失ったエリスが、しかしこうして辛うじて意識を保っているのは、代用血液として用いた食塩水が僅かながらにも効果を及ぼし、彼女の負担をほんの少しだけ軽減する役割をになっているからだった。

しかし、それももう限界である。

王城戦で背後より受けたグレッグの傷と、先の攻防戦で蜘蛛より受けた傷、そして大量に消費した魔力とイングラムの魔術により、エリスはすでに生と死の境界線に立たされていた。

このまま傷口を放置し、出血を止めねば、そう時間をかけずとも彼女は死ぬだろう。

勿論、イングラムは彼女を殺すつもりなど更々なかった。

剣聖の副官を務めているのであれば、マーシア王国の実情の多くを知っているはずであるのだから、この戦いで剣聖を退けることに成功したなら、それから時間をかけてゆつくりと、彼女から話を聞き出すつもりである。

それに、結局は捕らえられたとはいえ、たった一人で部隊の最後尾に立ち、自分たちの追撃を防ぎ続けた彼女の働きは敵ながら天晴れと言うしかなく、それは同時に、この女指揮官を失っただけでもマーシアの戦力を大きく削ぐには十分な効果があると確信しているのだった。

その時、グレッグが掴んでいたエリスの手が滑り、彼女の身体がわずかに頷れる。

「おい。…つたく、しゃあねえな」

傾いた分だけ膝を曲げ、グレッグは彼女の肩に回した左手に力を込めて、再び体勢を立て直そうとし。

「伏せいッ！」

だが、イングラムの言葉は間に合わなかった。

唯一、偶然にもエリスが頼れると同時にバランスを崩したグレッグだけが、奇しくも彼の言葉通りの行動を実行していて難を逃れたのである。

しかし、蜘蛛は小脳から四肢に向けて発すべき回避の運動信号をすら、送ることができなかった。

白銀の閃光が、背後から目の前を奔り抜ける。

少なくとも、グレッグにはそう見えた死の風は蜘蛛の首を通り抜け、自分の髪の毛先を擦過して、目の前の木々を切り裂いていく。

それが何であるのか、彼には皆目見当もつかなかったが、それでも致命的な何かが蜘蛛に直撃したのだということは理解できた。

「蜘蛛……？」

応えは、ない。

呆然と前を見据えたままピタリと動かなくなった蜘蛛は、そのまま緩やかに、そして鮮やかに朱い横一文字の切り口を首の表面に浮かび上がらせ、じわりと滴る血に滑るように、ソレがごろりと落ちた。

グレッグの眉が、途端に八の字に吊り上がる。

落ちた蜘蛛の首がこちらに向き止まり、驚愕も恐怖もない無表情の顔がかえって不気味にグレッグを見つめたまま、瞳の光が消えていく。

とても理解が追いつかない、追いつきたくもない現実が、もう二度と戻らない過去として大地に転がり、昏い眼差しで見上げているのだと、彼は知る。

これが、死だ。

「…ッ、うううおおああああああアアアアア！」

グレッグの口が裂けそうなほどに開き、声を発するよりも前に低く振動する喉から、ディーンの森を震わせる嘆きと怒りの絶叫が迸る。

「“遠ざかる相剋の楔”（アウト・サイト）」

エリスが力なく地面に倒れたことにも気づかず、仲間の死に瞠目して硬直するグレッグの身体が後方に吹き飛んだ瞬間、直前まで立っていたその場所に再び閃光が疾走する。

これはイングラムの機転だったが、しかし神秘の威力を加減するまでは圧倒的に時間が足りなかったため、その直撃を受けて樹木の幹に激突したグレッグは後頭部を打ち、そのまま崩れ落ちて気絶した。

「…可愛い部下のためとはいえ、随分と粹な現れ方をするものじゃない。…のう、剣聖パールゼフォン卿…？」

イングラムの視線の先、切り口に沿って緩やかに滑り落ちる樹木の陰にその男、バールゼフォンはいた。

右手に剣を携え、油断のない獅子の眼差しを向ける男の殺気を受け止めながら、イングラムは先の不可解な衝撃波が剣聖による間接的な攻撃であつたことを直感で理解する。

「貴公こそ、あの包囲網を破るとは大したものだ」

徒歩の早さでゆつくりと、バールゼフォンは樹木を避けてイングラムの前に現れる。

絶技の初弾を躲した彼に対し、無防備にも位置を晒した剣聖の心境はよほどの自信の現れなのか、それともイングラムを格下と見たがゆえの余裕なのか。

「それに、エリスがテムズ川を渡り、王都に直進していると見抜いた洞察力や見事。貴公の判断が少しでも遅ければ、この戦いはとうに決着がついていたものを……」

…、そのどちらでもない、とイングラムはすぐさま否定した。

互いの必殺の間合いに足を踏み入れた剣聖は歩を止め、地面に横たわる副官の怪我を一瞥する。

夥しい汗が額に浮き出ており、腹部の下生えには彼女の血が付着していてじわりじわりと拡がっている。

朱い血の筋が溢れる青褪めた唇の呼気も荒く、目を開ける体力す

ら惜しい様子である。

右第二・第三肋骨の骨折、肝臓に著しい負担、吐血および咯血も見られ、特に血腹からの大量出血はエリスの表情を窺う限り、少なく見積もっても彼女の全体重の四分の一近く、その他にも打撲傷や切創が数多く見受けられた。

それは間違いなく、生死に関わる危険な状態であった。

「よくぞ見破った。やはり貴公を優先的に倒しておくべきだったか。さすがはイングラム卿…。こうして直に会うのは三度目だが、互いに歳は取りたくないものだな」

エリスのダメージを精確に把握し、剣聖は不敵な笑みを浮かべる老魔術士を見やる。

「ふん、お主に褒められても嬉しくないのう。…それに、わしの可愛い部下が一人、お主の技の前に倒れてしまったわ」

どちらも互いの出方を窺い、全身のあらゆる微細な動きにも反応できるよう神経細胞を電列励起させ、エンドルフィンを放出する。

両者の距離は四メートル。

ここまで近づけば剣聖が圧倒的に有利かと早計に走りそうになるが、相手がイングラムであれば簡単な魔導罫を仕掛けていても不思議ではない。

尤も、絶技ソニックブームによる間接攻撃が可能なバールゼフォンであれば近づくまでもないが、彼が手に持っているのは強化処理

をこしらえていない一般的な剣であるため、これ以上の斬撃は剣の耐久力を大幅に超え、壊れてしまう可能性が高い。

バールゼフォンの経験則が正しければ、あと二・三回も斬撃を繰り出せば、この剣の刃は砕けて使い物にならなくなる。

ここまで彼の斬撃に堪えたこと自体がすでに奇跡に近いのだが、さらにその上、スレインがこちらに向かっているはずであることを考慮に入れても、今ここで剣を失うわけにはいかなかった。

「私としては、彼女を引き渡してもらいたいのだがな。今ここで彼女を失えば、マーシアは貴重な人材を失うこととなる。…それとも、我が剣の露と消えて森に朽ち果てるか？」

じろりと眼球だけを動かし、イングラムは剣聖を見据える。

「ふむ、お主らしくもない焦りが窺い知れるの。…いったい何をそんなに焦っておるのだ？」

彼女の身を案じてか？

それとも魔人の動向が気になるか？

…あるいは、スレインの移動の気配を察してのことじゃろうかな？」

そう言って、イングラムは唇の端を冷酷に吊り上げる。

「まさか、わしらを同時に相手して勝てると思うほど自信家でもあるまい。

…ここは退いた方が良くと思うのじゃがな。そうしてくれれば、わしらはあえて追うまいて。

無論、お主の見目麗しい副官殿についての処遇も諒恕してやらん

でもないぞ」

しかし、剣聖は否定もしなければ肯定もしない。

「それは私の台詞だな、イングラム卿。よもやスレインが辿り着くまでに、ここまで接近を許した私を防ぎ切れるとお思いか」

「お主が本気なら、こんな無駄口を叩くまでもなく、とうに仕掛けておるじゃろう。それをせぬということは、すでにこやつに仕掛けたトラップに気づいたということ。」

…ふん。こんな時でも、つくづく冷静すぎるお主が一番嫌いじゃない」

剣聖は、初めて口元を微笑ませた。

「いつまでも食えぬ奴だ。スレインとは大違いだな」

「元々、わしとアレでは役割が違うでの。奴が光を担うなら、わしは闇を引き継いで支えてやらねばならぬ」

ふと、そこで剣聖の笑みを理解した。

「…なるほど、お主も同じ考えか。ククク…、なるほど。確かに…、本当に、互いに歳は取りたくないものじゃな」

「時代は変わっていくモノだ。その行く先が希望であれ絶望であれ、変わっていく性質であるものを逆行させることは誰にもできない。

…ならば、我々は世界が望む役割を果たせばいい。それは紛うことなく、我々でなければ果たし得ないことだ」

「大層な役割を押し付けられたものじゃな。…わしも、お主も、もつとこの時代に成すべき仕事があるじゃろうて」

「後の仕事を若者に押し付けることができるのも、老人の役得というものだ」

「ふん。お主がそんな軽口を言うとは、世も末じゃな。…もつと違う時代であれば、良き友になれたじゃろうに」

「ブリテンは変革の時を迎えようとしている。…そして、おそらくはスレインが最後の聖騎士となるだろう。

…その時、あの男が抱く幻想が、今と変わらぬことを願っている」

「闇を知らぬアレには難しい注文じゃが…、しかし、剣聖と呼ばれるお主も弟子に対しては随分と甘いもの…」

途端、剣聖の瞳が鋭く細まった。

「…語りすぎたな。

…良からう。たった今、エリスはここで死んだ。ならば死体を魔人の傍に置いておくよりも、貴公らに処分してもらった方が確かに良い」

「良からう。元より、我等も反逆者を始末せねば先には進めぬ。

…安心せい。部隊の安全を確認したなら、彼女はスレインに面倒を見させるからの」

パールゼフォンは微笑した。

「じゃじゃ馬にじゃじゃ馬を宛がうか。貴公の趣味も随分と悪くな

ったな…」

そう言って、剣聖は背を向けた。

「…残念だが、結界は破壊不可能だ。今はヴィヴィアン殿が辛うじて抑えているが、臨界点を超えるのも時間の問題らしい。」

…その前に、対策を講じる必要がある」

イングラムは溜息を漏らした。

「やはり無理か。高速更新型の結界は特に厄介じゃから困る…。
…分かった。こちらでも何か手を打っておくことにしよう」

イングラムが瞬きをした、その瞬間にはもう、剣聖の姿はどこにもなかった。

「イングラム…！ 無事だったか…！」

闇夜にざわめく木々の葉が揺れて、入れ代わるようにスレインが現れる。

イングラムは、彼の無事を確認して心の中で安堵した。

「お主こそ、よく持ちこたえてくれたの。…じゃが、新たな問題が浮上したわ。」

スレイン、お主は主力を後退させ、わしらと合流させい。そうすれば、向こうも容易には手出しできなくなるからの」

「…分かった。…だが、パールゼフォン卿がこちらに来たはず。今、無闇に動くのは」

「安心せい。奴はお主が来て引き返したわ。…尤も、部下が一人だけ殺られたが、奴の副官を捕まえられたなら仕方ない犠牲じゃ」

「副官…？」

スレインはイングラムが指し示した方向へ目をやると、そこにエリスが横たわっていることに気づいた。

「エリス…！？」

「なんじゃ、知り合いか。」

「…まあ、そんなことは後回しじゃ。今はちよいと時間がないので、お前は早く部隊を引き返してこい。こやつは、わしが責任をもって治療してやる」

「…分かった。イングラム、よろしく頼む」

風に溶けるように走り去っていく聖騎士の背中を見やり、そしてもう一度、大地に横臥するエリスを見やった後、イングラムは再び溜息を落とした。

「…確かに、そろそろ老人は次代に仕事を委ねるべきじゃな。豊かな才能に恵まれた若人たちは、何よりも尊い財産じゃからのう…」

闇が下りて、天蓋に点る星たちが瞬いている。

この日、剣聖との戦いにおいて多くの被害を受けたウェセックス王国軍は敵マーシア王国軍の後退に合わせ、全部隊を一時的に王都へと帰還させた。

ウェセックス王国軍が軍備の再編成と西ドウムニア王国軍への再
侵攻を計画する中、ブリテン島の西部に勢力を構えていたウェール
ズ連合軍はポウイス奪還を果たし、マーシアを牽制。

剣聖バールゼフォンは、南部の“テリック砦”に部隊を駐留させ、
再び王都へ帰還したのだった。

第十五話 く光の影、影の光（前書き）

もう、十を超えるページ数が当たり前のようになってきたオワタ式です。

深夜1時の投稿から、お邪魔しております。

実は、ついさっき前書きを書くのに夢中になっていて、危うく赤信号の大通りをそのまま直進しそうになりました。

こんな時間でも、まだ車は走ってるんですねー。

なんだか、他人のようにには思えません。

ええっとですね、少し後書きにも何か書こうかなと思いついて、これからは遅くなる代わりに次回投稿予定日なるものを後書きに書いていこうかなと思います。

まあ、あくまでも予定なので日にちが前後するかもしれませんが、ご容赦のほど、よろしく願います。

それでは、長くなりましたが引き続き、本編をお楽しみください。

第十五話　く光の影、影の光く

フィダックス城の一階、南側の通路に設けられた部屋の一室、聖騎士スレインと王宮魔術士長イングラムはいた。

ここは本来、他国の重要な来賓者が体調を崩した際に使用されるため、その内装も特別に逃えた清潔的な個室であったが、しかし今現在、この部屋を利用しているのはまったく別の、本当なら地下牢に入れられていてもおかしくない人物である。

窓から差し込む陽の光に照らされて、天性の美貌を与えられた女性が見守られながら寝台で眠りにについている。

それは、死神を傍に侍らせた眠り、ではない。

意識はなくとも呼吸は穏やかに安定しているし、素肌に適度の張りを残す胸は規則正しい鼓動を繰り返している。

また、一週間前の戦闘で負った傷も快方に向かいつつあり、腹部の二カ所の傷はすでに消毒して縫合されていて、折れた肋も治癒魔術による自己治癒能力の強化によって緩やかに矯正し、少しずつ癒着し始めていた。

そして、これらはすべてイングラム主導の下に行われ、本来なら確実に死していたはずの彼女を助けたのである。

穏やかな寝顔の、このまま順調に回復すれば、やがて迎えるであろう生還への深い眠りにつく女性を見つめたまま、イングラムは口を開いた。

「ご覧の通り、今は絶対安静が最優先じゃな。…尤も、逃亡防止も兼ねて強制催眠をかけておるから、目覚めるのはずっと先になるじやろっ」

静かに眠るエリスを複雑な表情で見やるスレインは、暫しの逡巡のあとに言葉を返した。

「…彼女の命に別状はない、と？」

「うむ、危うい峠はすでに越しておる。あとは緩やかに快方に向かうだけじゃ。」

「…それにしても驚いたぞ。お主が剣聖の弟子じゃったことは知っておったが、まさか、彼女も一緒だったとはのう」

「…彼女も、私と同じく孤児だった。永い戦争が生んだ無力な犠牲者の一人…。山賊に襲われて全滅した名もない村の出身で、そうして村の惨状を聞き付けた御師様に拾われたと私は聞いている」

ああ、とイングラムは呟いた。

「よくある話じゃな。戦う気のない者も、自分の大切なモノを理不尽に壊されれば復讐する。」

「…そうして山賊は増え続け、やがて殺戮と奪略が日常となる」

スレインは頷いた。

「…私が御師様に拾われたのは十の頃だ。その時にはすでにエリスがいて、私は彼女とともに御師様の下で教育を受けてきた」

「…というと、お主と彼女は同じマーシア王国の出身か」

「ああ。…御師様の下で受けた教育は、学問から教養、剣術に至るまで幅広かった。一日中ずっと勉強や修業に没頭していて、ようやく眠りにつく頃には、疲れ果てて夢も見ずに朝を迎えていたよ」

イングラムはスレインに顔を向けた。

「それが、今のお主らの基礎となったのじゃな」

「だが、私は魔術の素質がないと分かると、いつも剣術ばかりを磨いていたんだ。

だから、エリスが魔術を操って見せてくれた時は、子供ながら羨ましいと思ったこともある」

イングラムは苦笑した。

「魔導と剣術、両方の才に恵まれた者は数えるほどしかおらぬ。…そして、その二つを本人の最高レベルにまで高めた者は、さらにその一割を下回る。

…このエリスとやらの努力たるや、それはそれは並大抵のモノではなかったはずじゃ」

スレインは頷いた。

「私と同じ訓練を受けていながら、彼女はさらに寝る間も惜しんで魔術の鍛練に精を出していた。

…尤も、そのことに気づいたのは拾われてから一年後のことだね。私はそれを知ると、自分も負けじと対抗心を剥き出しにして、剣術の鍛練に励むようになったんだ」

「何とも可愛らしいのう」

ああ、とスレインは微笑った。

「何とでも言ってくれ。」

…それから暫くして、私は湖の乙女ヴィヴィアンに候補者として選ばれた。だが、私は素直に喜べずに悩んでいたんだ。もし聖騎士に選ばれたとしても、本当に私などに務まるのだろうかとね。

…だが、私が行くと決心した時、二人が背中を押してくれたことは今でも思い出せる」

「…ん？ 彼女は選ばれ难道か？」

スレインは少しばかり眉を顰めた。

「少なくとも、私が御師様の下にいた時はなかった。実力的にも人格的にも申し分ないはずなのに…」

ただ、当時は女性の聖騎士というのは聞かなかったから、候補者に選ばれるのは男だけだと思って、一応は納得していたんだ」

「ふむ…。となると、彼女の何かが足りなかったのか、それとも去年の聖騎士が異例中の異例じゃったということになるな」

「ああ。…候補者に選ばれた時、試練には私の他に三人いた。

イースト・アングリア王国の騎士セレス、ドウムニア王国の將軍ゼノン、そしてフィッチ王国の守護騎士カイン。

…三人とも、実に個性的な実力者たちだった」

「そして、最後に残ったお主が聖騎士となったのじゃな」

「私は最後の試練を終え、聖騎士の証として、この聖銀の鎧と魔導剣ルーンブレイドを託された。その時に初めて、私は魔人の実在を聞かされたんだ。」

「正直に言えば、私は最初から魔人の存在を信じていたわけじゃない。当時は真しやかな噂だけがマーシアに広まっていただけだったし、それどころか魔人の存在を真面目に語るヴィヴィアンに対して、最初は疑念を抱いていたほどだ」

「ふむ…、それは仕方あるまい。普通の人間なら、伝説の中でしか存在しえぬはずの者の実在を告げられてもピンとこぬじやろう。…かく言うわしもその一人じゃったし、ごく自然的な反応と思うぞ」

スレインは少し笑って見せる。

「私は当初、聖騎士とは騎士の頂点に位置する、ただの称号なんだと思っていた。ブリテンに存在する騎士の憧憬を一身に集める、騎士道の体現者なのだと…」

だが、聖騎士とは魔人を倒すために必要な実力を持った人間たちを指す言葉であり、その目的は即ち、魔人を倒すことに集約されるのだと、その時、私は初めて気づいたんだ」

「そしてお主は、マーシアを離れたのじゃな。…しかし、パールゼフォン卿や彼女には相談せなんだのか？」

イングラムの怪訝そうな視線に、聖騎士はじつと視線を足元に向けて、ぽつりと言葉を落とした。

「…いや、勿論した。魔人のいるマーシアを離れ、その打倒に力を尽くすべきだと。」

…だが、御師様は頑として首を縦に振らなかった。エリスにも相談したが、やはり御師様から離れようとはしなかった。

…だから私は仕方なく一人でマーシアを離れ、ドウムニア・ヴァイキング連合軍との戦いで命を落とした將軍不在のウェセックスに辿り着いたんだ」

イングラムは窓辺に視線を向け、当時の記憶を思い出した。

「そうして、わしとお主が出会ったのじゃな。…初見じゃというのに、バカ正直にマーシアの出身じやと告げたお主の堂々っぷりときたら、呆れてモノも言えなんだわ」

そう言って、込み上げる笑いを堪えようと口に手を当てていたが、肩が小刻みに動いているのを見てとって、聖騎士は少し困ったふうに腕を組む。

「これから剣を捧げる国の重鎮に嘘をつく必要はないからな、当然のことだ」

イングラムは、ついに堪えきれず笑いを零した。

「…そして私は王と貴方に魔人の実在を話し、その打倒に向けて、まずは西のドウムニアとの戦争を終わらせることから始まったのは記憶に新しい」

しかし、とイングラムはぴたりと笑いを止めて呟いた。

「わしらは再び、ドウムニアと剣を交えねばならぬ」

言って、イングラムはスレインと顔を見合わせた。

「奴らはマーシアと手を組み、わしらを窮地に陥れた張本人どもじや。奴らが裏切らねば、わしらはもつと早く合流して剣聖を迎え撃つことができた。」

…この卑劣なる暴挙を断じて許すわけにはいかぬ」

聖騎士は顔を顰めた。

「イングラム…。彼らは、本当に敵なのか？」

「スレイン、何を言っておる。確かに奴らに裏切りを囁けたのは剣聖じやろうが、それを決意し、実行に移したのは他ならぬ奴らなのじゃ。所詮、ブリトン人とわしらアングロ・サクソン人は相容れぬ人種。…ほれ」

イングラムより手渡された書簡を開いて文を追うと、聖騎士は次第に目を見開かせて、その顰め面をさらに陰しくした。

それは、ドウムニア王国の国王直筆の独立宣言と、ウエセックス王国に対する宣戦布告を認めた公式文書であった。

スレインは困ったように彼を見やり、しかしすぐに目を伏せた。

「コレから見ても分かる通り、わしらに戦う気はなくとも奴らは遠慮なく襲ってくるじやろう。わしらはわしらの国を守るために戦わねばならぬ。たとえ一時的に和平が成立しても、時間が経てば、どのみち軍備を整えた奴らが再侵攻に乗り出すのは火を見るよりも明らかじゃ。」

…分かってくれ、スレイン。わしらがここで立ち止まるわけにはいかぬのは、他ならぬお主が一番よく知っておるはずじゃ」

彼の苦衷を汲んで肩に手を置き、イングラムは言葉を繋ぐ。

「すでに部隊編成は整うておる。…じゃが、お主も知っての通り、先の剣聖との戦いで三千の兵を失い、わしらは大敗を喫した。その上、マーシアはまだ完全に部隊を退いたわけではないので、西に割ける戦力は五千が限界じゃ」

複雑な表情を浮かべながら、スレインが顔を上げた。

「…ゼノン將軍は、智略を尽くして戦う繊細なタイプじゃない。…だが、その豪放な人格から部下の信頼も厚く、野生的な魅力のある騎士だ。」

衝突すれば、おそらく

スレインは少し言葉を切り、窓の外へ視線を向けた。

「そういえば、東のイースト・アングリア王国軍の動向はどうなったんだ？」

イングラムは首を横に振った。

「イースト・アングリアは落ちた。どうやら剣聖の南下を狙って軍を動かしたようじゃが、そこに現れたのが、あの魔人だったようじゃな」

「魔人…！」

わずかに瞠目したスレインが、呻るように呟く。

「そう。奴はついに、本当の意味で表舞台に姿を現したのじゃ。自ら最前線に立ち、一万の軍勢を退けたばかりか、わずか五日間という短期間でイースト・アングリア王国を屈服させた…。これが何を意味しておるのか、お主ならすぐに分かるじやろっ」

「マーシアと対抗し得る勢力が一つ消えることで、我々以外に単独でマーシアと戦える勢力は西のウェールズだけとなった。

…そして、それ以上に影響が出るのは、これまで戦況を傍観していた東三国の取る姿勢だ、ということだろう？」

「その通り。イースト・アングリア王国の降伏に加えて、剣聖との戦いで大敗を喫した我らの不甲斐なさをつぶさに見てきた彼らじゃ。我々の状況が劣勢と知ると、自分たちに向けられるやもしれぬ魔人や剣聖の矛先を躲すため、あるいはマーシアに荷担する可能性も捨てきれぬ。

…もしそうなれば、我々はますます苦境に追い込まれてしまうわい」

そう言って、老魔術士長は溜息をつく。

「わしらには、もう悠長に論じておる時間すら惜しいのが現状じゃ。蛇の報告によれば、西のウェールズはわしらとの共闘を断ったとある。

…ならば、東三国の協力も得難いわしらは独力でマーシアと戦うしか方法がないのじゃ。そしてマーシアとの戦に専念するため、背後から剣を向ける裏切り者を始末せねばならん」

だが、とスレインは咄嗟に反駁した。

「今だからこそ西のドウムニアと手を組み、打倒マーシアに向けて

協力するべきではないか？

その方が戦力も増えて

「

「王の命が狙われた。そして部下の多くが命を落とし、その家族や友人が嘆いておる。戦争だからという言葉ですべてが割り切れるほど人の心が単純でないのは、孤児じゃったお主が一番よく理解しておるはずじゃ。」

「それとも、愛する者を殺した裏切り者と協力するために、彼ら全員を説得するとも言うつもりか？」

聖騎士は目を見開いて息を呑み、顔を顰めた。

「…すまぬ。今のは少し卑怯じゃったな」

イングラムの声は、どこか優しげだった。

「じゃが、分かってくれ、スレイン。お主の協力なくして魔人を倒すことは不可能じゃ。そしてその前に、我らはどうしてもドウムニアを倒し、後方の憂いを絶たねばならん。」

「…わしらには、最初から二国を相手取る余裕がないからの」

スレインは黙したまま、俯いてしまっていた。

“我々は所詮、同じ穴の貉にすぎぬ”

そう言った師の言葉が、彼の脳裏に反芻しているのだ。

ブリトン人も。

アングロ・サクソン人も。

結局は同じ人間であるはずなのに。

思想、生活、習慣、血筋、宗教、政治、因縁、格差。

数え上げればキリがないほど積み重なりすぎた現実には、しかし最初こそは共に手を取り合うための集まりだったのかもしれない。

それがいつしか他者と区別し、上下関係を築き上げることによって適所の人材を最大限に活かすための基盤が整理され、家庭の連なりが集落を生み、村から街へと拡大して、ついには国を形作つたのだ。死にゆく者たちは子供たちのために、そして成長した子供たちは、また次なる世代へと想いを託していく。

“そうして両者は、血縁的にも地縁的にも、霊的にも命脈を構え、生者は死者のために祈り、死者は生者のために完結する”

そこに生まれるのは、誇りと思い出だ。

増え続ける家族たちを豊かにするために領土を広げ、より生活を楽にするために社会システムを発展させていく。

戦争は必然の産物である。

対話の通じない相手もいれば、足元を見て有利に交渉を進める者もいるし、こちらに戦う気がなくても問答無用で侵攻する者がいれば、裏切る者も現れる。

…そう、同じ人間だからこそ、過去に折り合いをつけるには、人

はあまりにも多くの血を流しすぎたのだ。

ドウムニア王国の場合は、どうだろう。

そもそも、アングロ・サクソン人がブリテン島に渡ってきた背景には、遊牧民フン族の侵略戦争により端を発した歴史的大移動“ゲルマン民族の大移動”が非常に大きな影響を及ぼしていた。

ゲルマン民族を攻撃するフン族の攻勢は、それはそれは凄まじいものだった。

あらゆる建築物に火を放っては社会生活を一扫し、その土着民族を徹底的に殺戮、奴隷化させていく。

そうした、冷酷極まりないフン族によって西へと移動することになったゲルマン民族は、四世紀後半に入って辿り着いたローマ帝国に保護を求めるのだが、その二年間の扱いがあまりに酷烈であったため、ついには反乱を起こすこととなる。

これが、ローマ帝国が東西に分裂することとなった最大の原因であった。

東ローマ帝国は、軍事力と経済力を高めることでゲルマン民族の侵入を最小限に留めることに成功するのだが、西ローマ帝国はイタリア半島の維持さえも覚束なくなり、ついには滅亡してしまう。

当時、ブリタニアと呼ばれていたブリテン島は、このローマ帝国の属州の一つだった。

しかし、東西の分裂したローマ帝国の時勢を好機と見てローマ皇

帝を自称したコンスタンティウス三世が軍を率いて島を離れた時、ブリテンに残されたケルト系民族ブリトン人は、自分たちだけで島の防衛と自治に当たらなければならなくなり、ローマ帝国によるブリテンの支配は実質、約410年ごろには終焉を迎えたと考えていい。

ただし、この時に入れ替わるようにしてブリテンに侵攻してきたのが、アングル人、ジュート人、サクソン人というゲルマン系三部族であり、彼らのことを総称して、現在のアングロ・サクソン人と呼ぶのである。

そして、その彼らを撃退したのが、後の二十一世紀にまで語り継がれるブリテン最大の伝説王、アーサー・ペンドラゴンその人だ。

最後までしぶとく侵入を試みたアングロ・サクソン人をバドン山の戦いで完全に退け、その後の二十年間をブリテンの平和に導き、しかし円卓最強の騎士ランスロット卿の裏切りによってフランク王国まで遠征するも、突如として反乱を起こしたモードレッド卿に王国を簒奪され、すぐにブリテンへと帰還したアーサーは、そうしてモードレッド卿と交戦したカムランの戦いを最後の戦場として、その波瀾万丈だった人生に幕を下ろすこととなったのである。

モードレッド卿を打ち破るも、深手を負ったアーサーがその後、どのような最期を迎えたのかは誰一人として分らない。

しかし、この希代の英雄によって、ブリトン人たちは自分たちの国を守ることができ、誰からも束縛されることのない、真の自由を手に入れたことは確かな事実だ。

尤も、アーサーという絶対的なカリスマを失った代償は大きく、

再び侵攻を開始したアングロ・サクソン人の攻勢にブリトン人は島の端へと追いやられ、ついには南西のドウムニア王国と、西のウェールズ地域に点在する複数の小王国を残すのみとなって、今に至っているのである。

…そう、彼らは最初から、単なる被害者にすぎないのだ。

ブリトン人は、ただ自分たちが生活していた土地に侵入してきたユリウス・カエサル時代よりローマの支配に抵抗し、そして力足らず支配され続けてきた。

一度は大規模な反乱を起こすものの、それも鎮圧され、完全にローマの支配下に収められたところへ、あのゲルマン民族の大移動が始まったのだ。

自分たちの意思に関係なく、他国からの脅威に怯え続ける日々に見えた待望の英雄、伝説の騎士王。

その王も消え去った今、しかしそれでも自分たちの国を守るためにアングロ・サクソン人への抵抗を続けるのは、当然といえば当然なのである。

自分たちの家族を、友を、仲間を、誇りを、思い出を、そのすべてを守るために戦い続ける。

その純然たる想いのどこが、アングロ・サクソン人たるスレインたちと違いようか。

…同じだ。

同じ人間だからこそ、当たり前前の行動なのだ。

しかし同時に、アングロ・サクソン人もまた、自分たちが生きるためにブリテンに渡り、存亡をかけた戦争を繰り返しながらここまでの繁栄を築いてきたのである。

ウェセックスを含めた七王国の社会制度は、大抵が三つないしは四つの身分に区分された階級社会だ。

王族の支配階級から、土地所有者たる貴族に至り、その耕地を農民が耕して、…そう、ブリトン人を奴隷にした労働力や…、…交易商品としても他国に売買していたことは、後世にも残る記録に明記されている。

“…私にとって平和とは、皆が幸福であることです”

「…ッ、ハハッ…。皆って、誰のことだ…？」

自嘲めいた苦笑を浮かべるスレインを、イングラムが横目で訝しむ。

もう、ドウムニアとの戦争は避けられそうにない。

そして相手が“獅子將軍”の異名をもつ剛力の騎士ゼノンであるならば、正々堂々と真っ向勝負を仕掛けてくるだろう。

「…分かった。ドウムニアは、私が引き受けよう」

そう告げたスレインの瞳は、どこか哀しみを帯びていた。

『フィダックス城 ルナの部屋』

その部屋には、いつもなら幽かな花の香りに包まれて、彼が愛する唯一の少女が帰りを待っているはずだった。

陽射しがよく似合う木の質感、肌触りの良さそうな白の生地に包まれたシンプルなベッドが窓に沿うように配置されていて、降り注ぐ空の健やかな透明感がそのまま、この寝台に投影するかのように表面が淡く輝いている。

その隣には、これもまた上質な木で作られたと思しきナイトテーブルがあり、その上には何も活けていない空虚な一輪挿しと、二人が少女の誕生日を祝ってプレゼントした木彫りの人形が凭れかかるように二つ、互いの手を繋ぐようにして丁寧に置かれていた。

それは紛れもなく、少女が日頃からそれを大切に扱っていたことを証明づける、ささやかな日常の名残であった。

しかし今、ここには少女どころか、二人が慌ただしく入室するまでは、誰一人として存在していなかった。

「そ、んな……！ ……こんなことって……ッ！」

寝台に力なく手を添えながら床に膝をついた少年が、呻るように呟く。

その、あまりにも痛々しい背中を見ていられず、後ろで立ち尽く

していた同世代の少年が、意を決したように重い口を開いた。

「…ヴィクター、すまない…。もっと俺がしっかりしていれば、こんなことにはならなかったのに…」

ヴィクターと呼ばれた少年はしかし、視線を伏せたまま首を横に振った。

「…グレッグのせいじゃないよ。…悪いのは、マーシアとドウムニアの連中だ…！」

「いや、俺がバカだった。まさか王女が裏切るだなんて夢にも思わずに、俺は無警戒にも、彼女をルナちゃんに近づけさせていたんだ。…初めての友達だからって、あんなにも簡単に気を許すべきじゃなかったことを、俺は今でも後悔してる」

体温が緩やかに低下していくような、息詰まる沈黙が部屋を満たした。

それは殺気などではなく、もっと本質的な…、そう、憎悪や赫怒が力任せに混じり合って慟哭しているかのような、そんな感情の激流であつたのだ。

敢えていうなら、どうしようもなかった運命をこそ果てしなく呪い続ける、そんな沸然とした、しかしやり場のない嘆きの暴風…。

ヴィクターは顔をうつ伏せたまま立ち上がると、グレッグにも振り向かずにそのまま問いかけた。

「…君が言ってたことは、本当なのかい…？ あ、の王女が、本国に

人質を用意していた、って話したこと……」

「……あ、ああ……。確かにそう言ってたが……、って、お前まさか？」

瞠目するグレッグは見た。

わずかに首を巡らせたヴィクターの横顔、そこに輝く闇色の双眸が、何者をも寄せ付けぬ怒りを湛えて映えているのを。

そして、そこに隠された若干の哀しみのニュアンス。

「止めないでくれ、グレッグ」

ゆつくりと、再びベッドの枕元に視線を移した少年が呟く。

「僕には、もう姉さんしかいないんだ。この世に残された、たった一人の肉親……。血の繋がった、唯一の姉弟なんだ。もう父さんも母さんもない世界で、僕が守らなくていい誰が病気の姉さんを守るっていうんだ……！」

強く、鮮やかに朱い血が滴るほど強く握り締められた拳が意味する相当の怒気を汲んでやりたかったが、しかしグレッグはそれでもヴィクターを制する覚悟を決める。

「……お前の気持ちは痛いほどよく分かるつもりさ、ヴィクター。……俺だって、先の戦争で仲間を失った。……お前も知ってるだろ？ 訓練の時、一緒に飯を食った蜘蛛さ。……あいつが死んだ時、俺も死にかけた。それを救ってくれたのが Ingram 様だ。

……俺たちは Ingram 様に助けられ、育てられ、そして忠誠を誓

い合った。あの方がいなければ、俺たちは道端で捨てられたボロ切れのように、誰にも見向きされずにとつくに死んでた…！ そうだろっ！？

まずは冷静になれ！ イングラム様に指示を仰げば、必ず助け出す方法が見つかる…！ それに、仮にルナちゃんが本当にドウムニア王国のキャメロット城にいるとしても、そのどこにいるのかが分からなければ助けようがないじゃないか！

だから今は落ち着いて

」

「 落ち着け、だつて…？ 」

普段のヴィクターからは想像もできぬほど低い声の呟きと同時に胸倉を掴まれ、グレッグの身体がわずかばかりに浮き上がる。

「 落ち着いてなんかいられるかッ！ 今こうしている間にも、病魔に冒された家族が危険に晒されているんだぞッ！ 」

「 く、苦しい…！ 」

首がきつく締め付けられ、グレッグが苦しそうに顔を歪めて喘いだ。

しかし、ヴィクターの言葉は止まらない。

「 姉さんは一人じゃ満足に歩くこともできないッ！ そばにいる人間が誰なのかも分からないし、ましてや大人に囲まれば、その暴力に抵抗することだつてできやしないんだ…！ 夜にもなれば尚更、不安に胸が押し潰されて眠ることだつて難しいはず…ッ！ 」

…絶対に助け出す…！ そのためなら僕の命だつて差し出しても構わない…！ 姉さんを守るためなら、僕は何だつてしてみせる…

ッ！」

乱暴に手を離して、ヴィクターが部屋から出ようと入口に歩き始める。

「ぐ…ッ、ゲホッ…、くっ、…待てよ、ヴィクター…！ 待てつて…！」

投げ捨てるように解放されたグレッグは暫しの間、呼吸を整えていたが、すぐにヴィクターを追いかけて部屋の外で捕まえ、肩を掴む。

長い通路の中央で、二人の少年が向かい合う。

「戦争準備の直前で、ただでさえ緊張してる敵地に単身で忍び込むなんざ、どう考えたって正気の沙汰じゃねえだろうがッ！」

グレッグの碎けた言葉が、通路に響く。

「うるさいッ…！ 僕の邪魔をするな…ッ！」

「いいや、俺は何度だって、お前の前に立ちはだかつて見せるさ！ 仲間が死に行くのを黙って見過ごせるわけがねえだろうがッ！ 俺たちは親友だ！ そうだろう！？」

唇を噛むヴィクターの表情が、複雑に歪む。

「頼む…！ せめて、イングラムに言上してから決めてくれ…！ スレイン卿がドウムニアに進軍するのは時間の問題だ…！ だったら、俺たちが騒ぎに乗じてルナちゃんを助け出せる公算も出てくる

ッ！

…それに、お前が死んだら、いったい誰がルナちゃんを守っていかって言うんだよ…ッ！」

ヴィクターが心の底から困惑し、心の底から憤怒しているようにグレッグには見えた。

激情のあまり怒鳴ることもできないようなのに、彼はそれほど怒り狂っても、目の前で仲間が殺され、傷ついているはずのグレッグが真摯な眼差しで自分を見つめていることを心のどこかで嬉しく、そして有り難く感じているのだ。

「いいか、これだけは覚えておけ！ この先、何があっても俺はお前の親友だ！ そして、俺はお前に負けなくらい、ルナちゃんを愛してる！ 今すぐにでも助けに行きたいのは、俺も同じ気持ちなんだ…ッ！

だから頼む…！ これ以上、俺に失う哀しみを与えないでくれ…ッ！ お前らまで死んじまったら…、俺は…、俺は…！」

「…グレッグ…。君は、姉さんのことを…」

驚愕に導かれて少しずつ冷静さを取り戻していくヴィクターの問いかけに、グレッグは真摯に頷いた。

「…ああ。…俺は、ルナちゃんのが好きなんだ…。…隠していて、本当にすまないと思ってる…」

申し訳なさそうに視線を床にうつ伏せるグレッグに対して、ヴィクターは親友の予想外の告白に目に見えて狼狽し、肩を掴む彼の手をすり抜けるように後退る。

気まずい沈黙から数秒の逡巡を経て、先に口を開いたのはヴィクターの方だった。

「……………それって…、…いつたい、いつ、から…？」

「俺が一つ目の最終試験を終えてから暫くして、初めて紹介してくれたあの日から、ずっと…。一目惚れってやつかな、ハハ…。ルナちゃんを見た瞬間、全身に電流が走ったっていうか、頭の中が真っ白になったっていうか…。…正直に言えば、もう、気がついた時には、自分でもどうしようもないくらい好きになってた…」

暗殺者 ウエセックスが誇る闇の秘密工作員のことを指す彼らは、現在までに約百人がイングラム指揮の下でブリテンに暗躍し、多岐に渡る任務に従事している。

その中でも、特に優秀な暗殺者らにはそれぞれコードネームが割り当てられており、しかも、そのほとんどはイングラムの孤児院から選出された子供たちであった。

万能なる蛇を戴くヴィクター、絶対生還を誇る鼠のグレッグ、そして堅実速効を旨とする蜘蛛を含めたコードネーム保持者たちは現在でわずかに五名しか存在せず、しかも七歳の頃にはすでに、彼らは本人の希望によりイングラムによる教育を受けていた。

その理由は勿論、様々だ。

ヴィクターは姉の生活と安全を保証するため、そしてグレッグと蜘蛛は天涯孤独の身より餓死寸前だった命を救われた恩返しのため、暗殺者への道を選んだのである。

しかし、当然だが、その道程は酷烈なものだった。

まず、彼らには一人一人、それぞれに幼い犬が与えられ、愛情を注ぎながら世話をすることで責任感を養い、共に育っていく。

そして朝から夜にかけてはずっと、体力錬成や戦闘護身術、武器取り扱いから破壊工作技術といった、決して弱音の許されぬ心身鍛練が行われ、その後の深夜に至るまでには、医学、薬学、毒物学、語学、諜報の理論から実践経験、そのすべてを頭に叩き込む暗記だけで覚えなければならなかった。

訓練生が犬を飼育する目的は、二つ、ある。

一つは、そのあまりに過酷な訓練によって蓄積する訓練生のストレスを癒すためのリラクゼーションだ。

“ 古来より、犬は人間にとって掛け替えのないパートナーであり ”

自分に懐く動物と触れ合うことで、養成所より外の日常感覚を維持しながら訓練のストレスを軽減する目的であるのだが、万が一、この犬を間違っても死なせてしまった場合、その訓練生は次の日から姿を消すこととなる。

その理由が、二つ目の目的に集約されていることを訓練生たちが知るの、ずっと後のことになるのだが。

そんな環境の中で、ヴィクターとグレッグは相部屋の共同生活を送るパートナーとして互いを認識していた。

しかし二人の仲が良かったのはそればかりではなく、年齢が同じだったこともあるのだろうが、それ以上に性格がまるきり違う正反対の二人だったからなのかもしれない。

グレッグは、すべての面において養成所の優等生だった。

水泳から長距離走、道具を用意して何時間も潜水したり、何日も水だけで断食したりなど、過酷な訓練の当時の最高記録を塗り替え続ける期待の新人。

明るく陽気で仲間想いの人格から周囲の信頼も厚く、日々に成長し続ける彼の記録更新が、いつの日か、次代の“蛇”を担う者として周囲の羨望を受け止めるヒーローのような人気に拍車をかけていた。

一方、ヴィクターとは言えば、その内気で優しい性格と、グレッグの二番手に常に位置する成績から万年次席のあだ名で揶揄され、首席のグレッグにへつらう尻尾だと風評を買っていたのである。

勿論、そんな事実が存在しない。

それはあくまでも噂にすぎず、優秀なグレッグとともに切磋琢磨しながら訓練をしてきたからこそその成績であり、二人はむしろ、その噂をこそ追い風として親交を深めていったのだ。

“ 種族の垣根を越えたその関係は ”

だが、そんな二人に転機が訪れたのは、彼らが十三歳の頃ちょうど、あの秘密工作員養成所にきてから約五年ほどが経過した、

ある日のことだった。

当然のことだが、養成所で行われる連日の訓練に精神的にも肉体的にも限界を感じる訓練生が現れるのは、当たり前のことだった。

いかに命の恩人たるイングラムのためとはいえ、すべての訓練生が優れているわけじゃない。

現実の訓練から蓄積し続ける過度な負担に辟易とし、懐く犬にさえも嫌気がさすほどのストレスに苛まれる訓練生は、その苦悩から逃げるために脱走を決意し、それを実行することがある。

脱走者一名、その始末を命じられたのが、養成所の訓練でも特に良い成績を修めていたヴィクターとグレッグの両名だった。

追いつくだけなら、さほど難しくはない。

だが、肝心の脱走者を目の前にして、グレッグはどうしても、己が手に持つナイフを、昨日まで同じ飯を食べて訓練に励んできた年下の仲間の心臓へと突き刺すことができなかったのである。

…訓練と実践は、違う。

人を殺す技術を身につけると実際に人を殺すのでは、天と地の差があるように。

そこには一切の虚構が通用しない、非人間的な意志力が要求される行為であるものなのだ。

実行したのは、グレッグではなくヴィクターだった。

見逃してくれと懇願する眼前の仲間を殺すことに躊躇する彼とは逆に、ヴィクターは淡々と脱走者を殺してのけた。

そして、その日の枕元で密やかに聞こえる親友の泣き声を、かける言葉など見つかるはずもないグレッグはただ、その慟哭とともに夜を明かすことしかできなかったのだ。

誰かがやらねばならぬ任務だった。

訓練の秘密と養成所の位置を外部に漏らさぬために、脱走者は必ず始末しなければならない。

だが、グレッグはそれを放棄しかけ、危うく取り逃がしそうになったところをヴィクターが代わってそれを実行したのである。

そしてこの結果、ヴィクターはイングラムの手に引かれて翌日より養成所を卒業し、グレッグはそのまま養成所に残って、急に冷たくなった仲間たちの視線を浴びながら最終試験の日を迎えることになる。

仲間たちからの、侮蔑や嘲笑を多分に含ませた陰口などどうでもよかった。

ただ、善悪に関係なく他人を殺すという行為に躊躇してしまった彼は、それを日常茶飯の仕事とする暗殺者としての心構えをもう一度、改める必要性に迫られていたのである。

“まさしく魔術のように神秘的な親しみを感じさせてくれる存在です”

それが、この最終試験のすべてだった。

暗殺者として養成所を卒業するために必要不可欠な最終試験の目的とは、擬似殺人による処女性と罪悪感の喪失に直結するため、それ即ち、命を奪うことに集約される。

しかし、ただ命を奪うだけでは認められなかった。

たとえば、罪人を用いて殺したとしても、その訓練生の心情には相手と自分とを善悪で区別できてしまい、ある程度の納得材料としてその決断を易々としてしまうからだ。

ならば、どのような相手が適当であるのか。

幼い頃より共に成長し、その日常を過ごしてきたもう一人のパートナー。

相部屋の友人とはまた違う友情を分かち合い、無垢な愛情を全力で注いできた真摯な心の拠り所。

そう。

今まで丁寧に向き合ってきたその犬を、訓練生が自らその手で、殺すのだ。

自分の大切な存在を、自分の手で殺す。

そうした、鉄の意志力を持った者こそが、善悪に関係なく命を奪うことを“殺人”と苦悩するのではなく、“仕事”だと割り切るこ

とができる暗殺者たりえるのだ。

ゆえに、普通の人間が足を踏み入れる領域の世界ではなく。

表面では張り切っていても、自分は殺人者になりきれないと悩む者は、この最終試験を経て二度と姿を見せなくなる。

グレッグは、この直面において初めて理解した。

ヴィクターが養成所から卒業したのは、脱走者の始末こそが最終試験の目的である殺人と同意であるために、皆に先んじて合格を得たのだと。

最終試験は、十分間の猶予の間、イングラムの目の前で犬を殺さなければならぬ。

命を奪うことに躊躇した自分の代わりを忠実に実行したヴィクターの、しかしその日の夜に流した彼の涙の慟哭を存分に味わいながらたつぷりと苦悩して…、そして、グレッグは自らの手でもう一人のパートナーを殺したのである。

彼は、その瞬間から暗殺者となった。

それは同時に、犠牲にした愛犬に誓って命の大切さを心に刻み、生きることの素晴らしさを学んだのである。

だからこそ、彼はどのような任務でも必ず生還してのける“鼠”の異名を与えられ、後にヴァイキング暗殺任務で大活躍するのだが、それはまた別の話である。

そして、本当の意味での最終試験はこの後に待っていた。

養成所を無事に卒業した暗殺者たちには約一ヶ月間の休暇が与えられ、そこで思い思いの日常を過ごすこととなる。

十四歳という若さで晴れて暗殺者となったグレッグは、当時すでに第一線で活躍していたヴィクターと再開するのだが、その時に紹介されたのがルナだった。

ルナのことは養成所の頃から聞いてはいたが、小部屋とはいえ王城の一室を与えられて生活することを許可された人物に会うことに、グレッグは当初、乗り気ではなかった。

不治の病、知らず知られずの事情から仕方がないことではあったが、それでも実の弟が鞅掌に人を殺めてまで手に入れた生活を享受する少女とやらに、彼はどのような顔をして会えばいいのかわからなかったのだ。

だが、挨拶程度に済ませておこうと考えた彼を待っていたのは、その部屋の、あまりに脆くも完成された聖域然とする空気に咲く、一輪の慎ましやかな花だった。

ヴィクターと瓜二つの相好、盲目と病に苛まれてもなお力強く生きていこうとする心の強さに支えられた、ある種の芸術めいた神秘的な雰囲気醸し出す細身の繊細さ。

まさに、誰にも穢されることなくたゆたう窈窕の花　見る者
触れる者すべての幽愁を揺さぶる、ただそこに在るだけで心を惹き
つける千鈞の花であったのだ。

聞けば、生まれてからずっと続いているという彼女の闘病生活、日常を死で怯えながらも懸命に抵抗し続ける生き方そのものが命の尊さを教えてくれると同時に、五体満足で健康的に生きられるということの有り難さを再認識させてくれる。

それは奇しくも、彼が矜持する“生きることの素晴らしさ”を全霊で体現していることに他ならないのではないか。

ならば、その過酷な運命を細い身体で耐え忍ぶ彼女こそが自分の理想の体現者であり、ゆえにすべてをかけて護るべき信念そのものであるのだと。

そんな彼女と接するだけで殺伐とした心が洗われ、命令一つで善も悪も殺し尽くす暗殺者へと成った自分を“人”に戻してくれるような気がした。

ヴィクターが惑溺し、自らの手を血に染めてまで守り抜こうとするのも頷ける、最期の良心…。

それこそがルナという少女の魅力であり、そしてグレッグもまた、運命が花開くように彼女に惹かれていくのにそう大して時間はかからなかった。

この出会いが、彼の精神力を強くしたのだろう。

暗殺者本当の最終試験とは、この休暇にあった。

のんびりと休暇を過ごす卒業生たちはその日常の一部始終を監視され、その忠誠心などが徹底的にチェックされる。

そしてある日、彼らは突如として敵国の間者容疑で捕縛され、容赦のない尋問は酷烈な拷問へと変わり、ついには絞首刑にまで至るのだ。

勿論、本当に殺したりはしない。

絞首台の足場が開かれて卒業生が落ちる瞬間、彼らの首を絞める縄が切れる仕組みになっており、秘密の暴露を強要されてもお口を割らなかつた者だけが、初めて本当の暗殺者の一員となることができるのである。

ルナと出会って二週間が経つたある日のこと、秘密地下牢に捕縛されたグレッグは、最後まで口を割らなかつた。

自分が生きることだけを考えれば、裏切る方が正しい選択なのだろう。

だがグレッグは、自分が生きるためではなく、仲間たちが生きるための最善の方法を選んだのだ。

イングラムが拾ってくれなければ、とうに朽ち果てていたこの命、ほんの一步分の運命を踏み外していればヴィクターという親友と巡り会うことも、そしてルナという少女に出会うこともなかつたはずなのだ。

ならば、最期は自分のためではなく、他人のために使うのも悪くはないのだと、そう自分の運命を誇りながら死んでやろうと思つたのである。

こうしてグレッグは、真の意味での暗殺者最終試験を終えた。

そして一年後、ドウムニア・ヴァイキング連合軍との戦いで戦死した先代の“蛇”に代わってヴィクターが最高峰のコードネームを襲名し、グレッグもまた新たな“鼠”のコードネームを得てヴァイキング暗殺任務に就くこととなったのは、記憶に新しい難事であった。

わずかに静寂する通路で、グレッグは思い出そうとするように視線を伏せて、再び口を開いた。

「俺は彼女を守りたい…。だが、そのための最善の方法が無考えに今すぐ潜入することだとは絶対に思えない。…それに王女のことを庇うわけじゃないが、あのタイミングで俺だと確信していながら軍を退かせ、人質だと偽って居場所を教えた彼女の真意が分からない。だからこそ、ここは慎重に動くべきだろう…!？」

見上げる親友を前に、ヴィクターは視線を外した。

「…たとい罷だろうと何だろうと、僕は姉さんを助ける…!」

言って、しかし彼は静かに言葉を繋ぐ。

「…だけど、確かに君の言う通りだ。僕は気が動転して、少し焦っていたのかもしれない。

…イングラム様に言上しよう。それがダメだったら…、その時は、僕は一人でも姉さんを助けに行く」

冷静さを完全に取り戻したヴィクターを見て、グレッグがようやく微笑した。

「バカ。その時は俺も一緒だ。将来は義弟になるかもしれない親友を放っておけるわけがないだろ？」

それにつられて、ヴィクターも苦笑する。

「僕を義弟にしたいなら、絶対に姉さんを助け出さないとね。

…ありがとう、グレッグ。君が姉さんを好きになってくれて、本当に良かった」

「おいおい、まだ助けでもないのに礼なんて言うなよ。そうゆうことは、ルナちゃんを助けてからにしようぜ」

「そうだね…。…うん、確かにそうだ」

「そうそう。やっといつものヴィクターに戻ったな。それでこそ蛇を名乗れるってもんだ」

言って、互いの隔意が解けた二人が破顔すると、ヴィクターの後方からこちらに近づく何者かの足音が聞こえてきた。

「ん？ 二人とも、そこで何をしておるのじゃ…？」

二人が向き直ると、そこにはエリスが眠る部屋のそば、南側の階段より一階から二階へと上がってきたスレインとイングラムがそこにいた。

直属の上司たる彼の姿を見やると、二人は途端に跪いて忠誠の姿勢をとる。

「せっかくの雰囲気の水を差して悪いが、お主らには対ドウムニ

ア戦において、重要な任務を託したい。後でわしの執務室に来てくれ」

イングラムの言葉に顔を見合わせた二人は、少し躊躇った様子だった。

だが、ヴィクターは意を決したように口を開いた。

「イングラム様。折り入って、お話がございます」

興味深そうに、イングラムが首を傾げた。

「なんじゃ、蛇、改まって。申してみよ」

「ハッ。…実は、私の姉であるルナが、先のマーシア王国軍の王都急襲に紛れて敵地であるドウムニアに連れ去られてしまったのです。それで、イングラム様には何卒、救出の許可をいただくべく」

「何じゃと!? ルナが攫われたのか!？」

その、予想外に狼狽したイングラムの声に驚いたのは、何もヴィクターやグレッグばかりではなかった。

聖騎士スレインもまた、いつもなら冷静な表情を崩さぬイングラムの心底、困惑したように眉間に深い皺を寄せる様をまじまじと見やり、驚いていた。

イングラムは口到手を当てて思案投げ首になり、うつ伏せた視線そのままヴィクターに問いかける。

「…蛇よ。それで、お主の身体は大丈夫か？」

え、と思わず声を漏らすヴィクターは、その言外に込められた意図をまるで理解できずに彼を見返す。

「身体…、でございますか…？」

「そうじゃ。…たとえば、何か良からぬ夢を見るようになったとか、あるいは奇妙な幻聴を耳にし、不思議な幻覚を見るようになったとか…」

そうは言われても、まったく心当たりのない怪現象の体験を問われて困惑するヴィクターは、しかし仕方なく思い返すような仕種をしてから、やはり首を垂れた。

「…いえ、そのような体験は一度も…。それが何か…？」

少し顔を上げたイングラムの様子は、わずかながらも瞭然と安堵した風だった。

「いや、何もないならそれで良い。…元々、双子とは母胎にいやる頃から魂を共有しておる。もしお前の姉に何らかの悪影響があったなら、お主にも何らかの形で影響が出るやもしれぬと思っただけじゃ」

「は、はあ…。なるほど…」

靈魂などにはてんで無関心だったヴィクターであったが、イングラムがそう言うからにはそうなのだろうとして疑問符ばかりが浮かぶ思考を強引に納得させ、その先は敢えて尋ねないことにした。

だが、それきりイングラムは口を閉ざしてしまい、二人の若き暗殺者は主に倣って黙し、彼が再び口を開くのを待つ。

スレインは奇妙な沈黙の間を利用して、ヴィクターに声をかけた。

「蛇よ。お前の姉がドウムニアに攫われたというのは確かな情報なのか？」

当然に思う質問に応えたのは、グレッグだった。

「はい、私が彼にその事実を伝えました。ドウムニア王国軍に奇襲を仕掛けた際、敵本陣の帷幕にて確かに耳に」

「ふむ…」

少し考えてから、スレインが言葉を繋ぐ。

「…ならばイングラム、ここは私の部隊より先行させ、先に王都に潜入させれば良いのではないか？ 先のヴァイキング暗殺を果たした彼らだ。王都に忍び込むだけなら容易いだろう。」

私の部隊は五日後に出撃する。その五日間で居場所を探り当てれば、後は簡単だ。

私の部隊を確認すれば、ゼノン將軍は背水の陣で必ず迎撃に出てくる。この時、手薄となった王都でなら、彼らも動きやすくなるだろう。その隙に救出してやればいい」

自分が助けられなかった妹と弟の幻影をヴィクターら姉弟に重ねながら提案するスレインの言葉に、イングラムはさらに眉を顰めて沈黙考する。

「スレイン様……」

「確か、お前の姉は常日頃から病苦に苛まれていると聞く。ならば、お前が心配するのも仕方のないことだ。」

「尤も、奴らがなぜお前の姉を攫ったのかが分からぬ以上、最悪の事態も覚悟しておいた方が良いことも、分かるな？」

「……はい」

不意に、イングラムが顔を上げた。

「……良からう。お主……いや、お主らが王都を掻き回してくれれば、それだけスレインも敵を撃破しやすくなる。」

「……蛇と鼠の両名には、ルナの救出を命じる。早速、今日の夕刻より王都を出立するがいい」

その瞬間、ヴィクターとグレッグの二人は顔を見合わせて表情を明るくした。

「ハッ。ありがとうございます、イングラム様」

「それでは、失礼いたします」

いや、とイングラムがグレッグを制した。

「鼠、お前には少し話がある」

そう言って、今度は聖騎士に向き直った。

「スレインは先に王の下へ行ってくれんか。少し話が長くなりそうじゃからの」

「分かった。…蛇。お前たちが無事に帰ってこれるよう、私も神に祈ろう」

「スレイン様…。勿体なきお言葉に、感謝の念が絶えません」

二人が通路の向こうへと去っていくのを見届けてから、イングラムがグレッグに振り向く。

「…さて、グレッグよ。お前にはこれより、王都潜入に向けて一つ、非常に重大な任務を与える。…これは、お前にしかできぬことじゃ。やってくれるな？」

「ハッ。勿論でございます、イングラム様」

「うむ。…では、心して聞け」

びっくりするほど優しい声で続くイングラムの詳述に、グレッグは全身に冷水を浴びせられたが如き戦慄に、視界が真っ白になった。

第十五話 く光の影、影の光（後書き）

次回投稿予定日は、12月22日を予定しております。

私のような若輩者の作品をご愛顧していただき、本当にありがとうございます。

それでは、また次話でお会いしましょう。

ありがとうございました。

第十六話 く心の在り処（前書き）

間に合ったああああ!?

お久しぶりでつす、皆さん!

(> <)ノ

いやあ、ギリギリセーフだったつすねー。

え、何がつて?

やだなあ、投稿日に決まってるじゃないですか! (笑)

もう、何が嬉しいつて、こうして投稿日に間に合ったつてコトですよー。

一回目からオチたりなんかしたら、もう冷や汗かきまくりですからね!

なかなかの達成感がありますよ、コレ(。(。)

友Y「土・日潰してるけどなww」

そりはないでえええええ!

はい、休日がおワタ式です。

これで安心して年が越せそうですが、皆さん、お風邪などは大丈夫ですか?

私は土曜日にインフル予防接種に行ってきたばかりなのですが、お互いに体調に気をつけて、無事に年が越せるといいですね。

（ ＊ ）

や、慣れない顔文字自重、ってやつですね、わかります（笑）

ではでは、長くなりましたが、引き続き本編をお楽しみください。

オ「え？ 史実？ なにそれ？ おいしいの？」

第十六話　心の在り処

目覚めるという行為が瞳を開けることだとしたら、それは目覚めというのではないのかもしれない。

だが、目覚めが五感の活性化を意味するのなら、彼女は間違いなく目覚めていた。

起きて最初に感じたのは、鼻腔を優しくくすぐる馥郁とした香りだった。

ただし、それは空腹をより刺激する豊富な食材たちの香りではなく、彼女が日頃から使用しているような安っぽい残り香など一切しない、豊潤な石鹸の香りであった。

それは水が喉を潤すように体内を循環し、呼吸を繰り返すだけで心安らかな清福に満ち足りていく…。しかしどこか、春の日差しのように儚く脆い慎ましさに溢れていて…。

それが誰の香りであるのかを、彼女は知っている。

そして、その上品な香りによる嗅覚への刺激が、寝起きの意識に絡み付く靄を振り払いながら五感を回復させていく。

「ん…、うう…」

肌触りの良い、しかしながらいつもと違う寝台の感触に気付くのに、時間はかからなかった。

身体を優しく閉じ込めるシーツの、撫でるように柔らかい贅沢な清潔感。

耳元まで深く沈み込む枕はまるで、母の胸に抱かれているかのような錯覚さえ覚える。

…それは彼女にとって、もう、とうに忘れ去ってしまっていたはずの懐かしい温かさだった。

思い出そうとすればするほど望郷の感慨に心奪われて、この厳しい現実に関胸が締め付けられる幼き日々の思い出たち。

無用心に手で触れれば自らの肌に傷をつけてしまう砕けたガラス細工のように、それはどれだけかき集めてみても、もう二度と元には戻らない過去の力ケラでしかなかった。

…生まれた時から全盲であつた彼女には、故郷の場所さえ定かではない。

それどころか、あの惨劇から数日後、イングラムと名乗る老人に拾われていなければ、今頃は姉弟ともに野垂れ死にしていたはずである。

その後、彼の計らいによつて居を移した孤児院での生活は長く続いていたが、生きているということさえ有り難い彼女にとって、そこに感謝こそあれど不満などない。

ただ、漠然とした不安にも似る疑問はあつた。

十三の頃だつたろうか、それまで続いていた孤児院での生活から

急遽として王城の一室を与えられ、そこで生活することをなぜか許されているからである。

これは、どう考えても前例のない不思議な事態だった。

極言すれば、彼女は何の役にも立てずに病床に伏す身である。

働こうにも目が見えず、しかも同じ年頃の女の子と比べても遥かに低い水準の体力しかないルナは家事さえ満足にできず、自炊することも困難であれば、用便を足すことにさえ通常の何倍も時間がかかってしまう。

従って働き口など最初からなく、仮にあつたとしても仕事は極端に限定されてしまうし、その効率も他の障害者と比べてかなり遅い。

彼女のような全盲者は、ごく当たり前の日常生活においてもこれほど大きな制約を受ける。

ただ歩くという行為にさえ一歩先にあるかもしれない未知の危険を警戒せねばならず、決して光が差すことのない暗闇の中で、一つ一つ手探りで丁寧に安全を確かめなければ、足を踏み出すことにさえ不安に駆られて恐怖するものなのだ。

そんな自分が、一介の配送屋にすぎぬはずの弟の働きによって、かつては物置だったとはいえ小部屋を与えられ、王城で生活することを許されるものなのだろうか。

尤も、これはいくら考えてみたところで答えなど出せるはずもなく、ヴィクターらに聞いてみても要領を得ない返事ばかりで言葉を濁すのだから、この話についてはあまり深く追及しないようにして

いた。

それに、王城に越してからというもの、大切な友人も増えて嬉しかった。

ヴィクターが紹介してくれたグレッグに、庭園で出会った王女ジュリア。

二人はルナにとって掛け替えのない友人であり、どちらと過ごす時間にもささやかな幸福を感じることができた。

たった一人で過ごす寂しさに少しばかりの思い出を添えて、眠れない夜には二人からもらった木彫りの人形を胸に抱く。

毎日ヴィクターの安全を神に祈りながら、たまに顔を見せては聞かせてくれる地方の土産話や仕事での笑い話などに一喜一憂し、たった一人の家族の無事に安堵する。

ゆえに、たとえ部屋に閉じこもりきりの生活で人生が終わったとしても、彼女は弟より先に死ななければそれだけで自分は恵まれているのだとして、ヴィクターに余計な心配をかけぬよう心がけてきたつもりだった。

しかしそれも徒労に消え、今頃はきっと、彼は自分の安否を心配しているに違いなかった。

とはいえ、ルナ自身、いま自分が置かれている現状を把握できてはいなかった。

かすかに残る記憶の海から引き揚げられたのは、王城で兵士と衝

突したその瞬間の頭痛とひどく心配そうに狼狽するジュリアの声、そして遠く離れていく王城の外観だけであった。

しかし、これ以上はどう頑張っても思い出せそうにない。

ここがどこなのか、そしてあの不慮の事故からどれくらいの間が経っているのか、今のままでは何も分かりそうになかった。

その時、不意に扉が開く音がした。

次いで、仰々しく擦り鳴る金属製のブーツの足音がこちらに近づいてくる。

ルナは咄嗟にシーツを掴んで身体を強張らせたが、どのみちこの寝台から一寸先ですらも見えぬ自分には最初から抵抗する術もなく、相手がすぐそばで立ち止まっても逃げることはしなかった。

だが、内心は狩人を前にした兎のように、この先に待ち受ける自分の運命に怯えていた。

辺りから漂う上品な香りから、自分がいるこの場所にはかつてジュリアがいたであろうことは察せられたが、しかしだからといって、いま目の前にいる人物が彼女だとは到底思えなかったのだ。

恐らくは、男だろうとルナは思う。

それも、かなり体格の良い男性である。

近づくほど明瞭となる足音の重厚感。

目が見えずとも判然と鳴り合う鎧が自分のすぐ横に立ち止まった瞬間に最後の一言を奏でて、それが想像以上に高くから聞こえてきたことに驚く。

しかし、男はそれ以上、動く気配はなかった。

自分に触れることもしなければ言葉を投げかけてくる風でもなく、それが返って不気味に不安な沈黙の間となって、ルナの恐怖を増大させた。

堪え難い静寂にシーツを掴む手をさらに強くして、ルナは精一杯の勇気を振り絞る。

「…だ、だれですか…？」

相手に対する警戒と疑念を含ませた彼女の問いかけに、しかし男は特に気を悪くした様子もなく言葉を返した。

「起こしてしまったならすまない。…気分はどうだ？ どこか痛むところでもあるか？」

そう言つて、男は手に持っていた何かを、ルナの寝台の横に設けられたテーブルに置く。

小さな密室で水が跳ね上がる音から、ルナにはそれが水差しであることが分かった。

「君の真横に小さなテーブルがあるから、そこに水差しを置いておく。手を伸ばせば簡単に届く距離だ、誤って落とさぬように注意したほうがいい」

「あ、ありがとうございます…」

その声音に、自分に対する威圧や敵意がないことはすぐに分かったが、しかし素性も知らぬ男を前にして簡単に警戒を解くわけにもいかず、それでも最低限のお礼を言おうとして、ルナは上半身を起こそうとした。

それを、男が彼女の肩に手を置いて制する。

「いや、そのままでもいい。君が病に冒されていることはジュリア様より聞いている。無用の気遣いで無理をして病状を悪化させるよりも、楽な姿勢で安静にしておいたほうがいいだろう。」

…ここには、君しかないのだからな」

びっくりするほど優しく加減された大きな手に阻まれてルナは少し驚いたが、男の有無を言わせぬ言葉の迫力に気圧され、そのまま申し訳なさそうに顔をうつ伏せながら再び背中を寝台の床に伏せた。

「あ、あなたは…？」

声のする方へ見上げるルナに対して、男は邪気のない声音で応える。

「私はドウムニア王国軍を束ねる、ゼノンと言う者だ。王女ジュリア様からの命により、君の身の安全と保証を仰しかった。

とはいえ、無理に私を信用する必要はない。目が見えぬ不安というのは、当人しか分からぬからな」

ゼノンはそのまま、部屋の様子をルナに伝えた。

今、二人がいるこの場所は、普段はジュリアが居する部屋から直接に繋がった隠し部屋であり、その存在を知る者は王族を除いてゼノンしかおらぬ秘密の個室である。

これは、もし王城が戦場となった際に王女が速やかにかつ安全に身を隠すことが出来ることを目的として造られており、内装こそ質素ではあったが、その機能性は一人が生活するのに必要な物がすべて整えられていた。

ただし、備蓄している保存食と、時間が経つほど悪化する衛生面から、その利用期間は約一ヶ月程度でしかない。

従って、今回のように一部の関係者が内密に匿いたい人間の安全を確実とするために定期的な供給を施さない限り、ここはあくまでも身に迫る危険を一時的に避けるための避難場所でしかなかった。

そして、これらの配慮がすべて、王女ジュリアの好意によるものであることも。

「…じゃあ、ここは…」

一通りの説明に理解を示したルナの呟きに、自らをゼノンと名乗る男は意を汲んだように言葉を紡ぐ。

「そう。君から見れば、ここは敵地のど真ん中にあるということになるな。」

…だから、間違ってもここから逃げ出そうなどとは考えないことだ。君のことは私とジュリア様以外には知られていない。この部屋から一歩でも出れば、君は王城に忍び込んだ不審者として即処刑に

されるかもしれん」

尤も、全盲の彼女では一人で歩くこともままならぬことを、ゼノンは当然に既知としている。

ゆえにそれは、ある一つの可能性を除いては、警告というよりもほとんど互いに隔意なく確認したかったというほうが正しいだろう。

それを敢えて口にした男の言葉に、ルナは真摯な表情で頷いた。

「分かりました。ご心配を、おかけするような、ことは致しません。……ありがとうございます。私のような、者のために、何から何まで、良くしていただいて……」

深く頭を下げるルナに、ゼノンはやや呆れた様子で眼光を細めた。

「どこまでも演技を続けようというわけか。……まったく、アングロ・サクソン人はつくづく図々しい生き物だな」

言って、ゼノンは薄く笑う。

「……そうだな。この部屋の実在は私しか知らない。そして今、ここには男と女が二人きりだ。これが何を意味するか、分からぬ年頃でもあるまい」

あまりに明け透けな物言いに驚きを隠せぬルナは瞳を瞬かせ、男を見上げながらも返答に窮した。

当時、ルナのように十五を迎えた年頃の娘たちであれば、そろそろ結婚を意識しているのが常識だった。

なぜならこの戦乱の時代、強国同士が争い、山賊が領地に跋扈する危険な世の中では、治癒魔術などの強力な医術が充分に施されることのない平民たちの意識には常に、死という概念が身近にあったからだ。

天寿を全うしたとする平均年齢は、約五十歳。

これはウェセックス王国の現国王エグバートの年齢と同じであり、ゆえに彼はこの時代において、一時的にフランク王国に亡命していたとはいえ、かなり長生きしている国王であると言えるだろう。

また、十七を数える娘の多くは目途に頼れる男を見つけて祝言を挙げるものだったし、もっと早ければ、赤子の一人や二人を抱いていても何ら不思議ではなかった。

ゆえに勿論、ルナも男女の営みがどういうものであるのかは正しく理解している。

そして恐らくは、一生、我が子を胸に抱く幸福を経験することはないだろうということも、また。

途端、男が掛け布団を剥ぎ取って寝台に身を乗り出した。

ギシリ、と想像以上に大きく軋む寝台の悲鳴に身体を強張らせ、何が起きたのか分かるはずもなく寝間着を露わにされたルナの表情が凍り付く。

「誰も知らぬ部屋の中で悲鳴を上げて、外の間人はその異変に気付くまい。…ましてや君は招かれざる来訪者だ。君を助けてくれる

人間は、ここにはいない……！」

吐息を感じるほどに近くから宣告された冷酷な口調から躊躇なく、ゼノンがルナの寝間着を乱暴に引き裂いた。

鎖骨から下腹部までを、肌着も着けていないルナの肢体が男の前に曝され、ヒッ、と悲鳴を上げて羞恥に顔を背ける少女はすぐさま隠すように身体を包める。

その一瞬に、ゼノンは見た。

水を弾くように木目細かい素肌、すらりと伸びる鎖骨の美しいラインと、仰向けの姿勢にあつてなお形の崩れぬ小振りな乳房、その丸みから滑らかな曲線を描いて続く細い腹部。

だが、ゼノンが注目したのは、無数の男たちの官能中枢を刺激するような少女の魅力的な柔肌に対してではなかった。

臍より少し真下に位置する下腹部に、男が驚愕に慄く奇妙な光景が浮き出ていたのだ。

そこに薄く透けて見えているのは、紛うことなくルナ自身の子宮であつた。

筋肉の壁でできた袋状の小さな構造、それは目を凝らさねば見えぬほどにうつすらと皮膚の表面から見えていたがために生理的な瞳目はなかったが、それでも、まるで体内を表から覗き見ているような感覚に息を呑んだ瞬間、ゼノンはソレと目が合った。

時間にして一秒にも満たぬ刹那の時の中で、しかしゼノンはなぜ

か九死に一生を得たかのような安堵感に次いで、言い知れぬ恐怖を自分にもたらしたソレを見てしまったことに心の底から後悔する。

無論、ソレが何であるのかをゼノンは知らない。

だが、彼女が咄嗟に身体を包めてくれなければ、自分はそのまま何の抵抗もできずにどこか 時空を超越した想像も及ばぬ無明の房室で 無慈悲な死よりもおぞましい混沌へと連れ去られてしまい、もう二度と現世に戻れなかったのではないかとさえ確かに思ったのだ。

しかし。

それはやはり、刹那の時の中で暴走した恐怖の震撼にすぎない。

「な、何だったんだ、今のは…」

急速に伝染する恐慌が鳥肌となって身体を震わせながらも、ようやく冷静な思考を取り戻したゼノンはそれだけを呟く。

見てはいけないモノを見た。

戒心したゼノンが己に刻したのは、見ただけで戦慄を撒き散らす理不尽なソレを単刀直入に表した、素直な感想であった。

そして間違っても、もう二度とそれには関わりたくないと戒める、ある種の蛇蝎そのものの絶対的な教訓も。

「き、君は、いったい…」

ゼノンが寝台から降りたことにも気付かず、ルナは急いで裂けた寝間着を寄り合わせて男に背を向ける。

「…それが、君の不治の病の原因、なのか…？」

ルナは、彼の問いに応えようとはしなかった。

ただ、小さく頷いただけで彼女の拒絶を察したゼノンもまた倣うように黙し、これ以上カマをかけるのは無意味だと悟る。

「…いや、すまない。君が敵の間者である可能性を確かめるべく、失礼ながら試させてもらった。…今の非礼を心より詫びよう」

わずかに躊躇った気配を見せたが、ルナは背を向けたまま応えた。

「いえ…。このことは、どうか、忘れてください…。…私も、忘れます、から…」

ルナは正しく理解している。

それは、ゼノンという男が、たとえ誰であろうとも無抵抗の女性に手をかけるような無法行為に出ることは絶対にならないのだということとを。

でなければ、どうして王女が彼を信頼するだろう。

勿論、ゼノンが告げた言葉のすべてが虚言である可能性も否定できないが、この部屋に漂う石鹸の香りは間違いなく庭園で同じ時を過ごした王女のものに相違なかったし、その王女の部屋に簡単に入りできる人間であれば、それが信頼に足る人物なのだろうという

ことは推察に容易い。

それよりもルナが困惑したのは、今の今まで秘匿していたソレを他人に見られたということだった。

この十五年間、たとえ弟といえども知らぬソレを、彼女はたった一人で頑なに隠し続けてきた。

ソレは彼女が墓まで持っていかなければならない秘密であり、もしソレを公に露呈されてしまったら…。

「どうか、忘れてください…。他ならない、貴方自身の、ために…」
そして、ゼノンもまた、ルナの言葉を正しく理解した。

声色は優しげに穏やかであったが、はっきりと記憶から消せと告げる少女の明確な拒絶は、彼女の美しい肢体に対してではなく、そこに隠された“何か”のことを指しているのだと。

「…分かった。本当にすまない…」

一度は自分で剥ぎ取った掛け布団を、いまだ背を向けたままのルナの肩までゆつくりと掛け直して、ゼノンは言葉を繋げる。

「…ジュリア様は公務でお忙しく、ここには来られないと仰られていた。ゆえに、私が代わって君の世話に責任を持つようにと託されたが、あいにく私も迎撃準備に忙しく、なかなか顔を見せられないだろう。」

従って、君の世話役を用意させてある。私よりも彼女の方が適任だろうから、君にぜひ紹介したいのだが…、いいかな？」

暫しの逡巡のあと少女が頷いたのを見て取って、ゼノンは入口に向き直った。

「入れ」

男の短い招きに応じて、はい、と続く返事とほぼ同時に扉が開き、奥から一人の女性が現れて静かな足取りで部屋に入る。

ルナは、立ち止まった足音の方角へと身を返した。

「初めまして、クリスティーヌと申します。以後お見知り置きを」

あたかも、それ自体が官能的なフェロモンで精製された驚くべき完成度を誇る香気の如く、短くも妖艶な声質がその挨拶には秘められていた。

目が見えぬルナにはその容貌を知覚することはできなかったが、同性の彼女からしても、十五年という月日を重ねてようやく積み上げた心の壁をたったそれだけで開けてしまいそうな、そんな魅力あふれる豊かな声調だった。

内心の動揺を抑えながら、ルナが短く会釈する。

「は、初めまして……。ルナと申します」

お互いに軽く挨拶を交わしたあと、ゼノンが再び口を開いた。

「彼女は王族に仕える侍女の一人だ。本来なら城内の雑務に当たっているのだが、少し無理を言って、君の身の回りの世話を付きつき

りで引き受けてくれることとなった。何かあれば、すべて彼女に言えば問題ないだろう」

「はい。何が要望がございましたら、すべて私にお申し付けください。私はいつでも傍に控えておりますゆえ、遠慮なく声をかけてくだされば、ルナ様の目となり足となってお応え致します」

「あ、ありがとうございます…」

二人の様子に、ゼノンは心持ち安堵した。

「それでは、私はこれで失礼する。…少々、手荒い真似をしてすまなかったが、あれは私の独断だ。ジュリア様の意思があこの行為になかったことを、改めて言わせてほしい」

ルナはしっかりと頷いた。

「はい、分かっています」

そう言って、ルナは少し躊躇いながらも言葉を繋げた。

「あ、あの…。ジュリア様にお伝え、していただけない、でしうか。…私のために、ここまでの配慮を、していただいて、本当に、感謝の言葉もありません、と…」

「心得た。必ずジュリア様にお伝えしよう」

応えて、ふとゼノンは微笑んだ。

「…君のことは、フィダックス城にて拘束されていた時に随分と良

く接してくれた友人だったと、ジュリア様より聞いている」

言って、ゼノンは視線を少しばかり伏せた。

「…あの方は国のことを思うあまり、いつも我が身を後回しにして公務に励んでおられた。そのために、心許せる友人が作れなかったことも知っている」

記憶の糸を手繰り寄せるように、ゼノンが滔々と語り始めた。

「私は、あの方が幼少の頃から世話の役を陛下より直々に仰せつかった。あの方の誕生の瞬間に立ち会えた喜びも束の間、その大任を任された感動に、私は王国の明るい未来を想像したものだ」

ゼノンが生まれたのは、今から三十七年前のことだ。

彼の家系は、代々よりドウムニア王国の近衛騎士団長を輩出してきた名門貴族であり、ゼノンもまたその例に洩れず、二十を数える若さの頃にはすでに、老いた父に代わって近衛騎士団長を務めるに到っていた。

しかし、彼をその地位に戴かせていたのは、時代を経て積み上げられた家柄がその背景にあったからでは決してなく、天資たる強靱な臂力をこそ武器として鍛え上げた、超規格外の肉体による実績の賜物であった。

二メートルを超える並外れた身長と、およそ百三十にまで達する体重は、その体脂肪率を理想的に維持するがゆえに高密度の筋肉を搭載し、全体的な体格のバランスを少しも損なうことなく怪物的な騎士の肉体を完成させる。

常人がどれだけ鍛え抜いても、遺伝子レベルで超人であることを前提に成長する男の肉体には遠く及ばぬであろう、それ自体が一種の才能めいた畏怖の具現。

撓められた贅力に体重が自乗し、さらに常人離れした瞬発力が加われば、これはもう誰にも止められぬ颯風の剣閃となって立ちはだかる敵を屠るだろう。

「それは私にとって、心から幸せだったと言える唯一の思い出だった」

ただし、それは当然のことだが、ゼノンの意志とは無関係に成長し続ける才能でもある。

技が、幾星霜を経て培われる努力や才能の申し子たちによって永久に磨き続けられていく後世への継承であるならば、力とは個性的な二重螺旋を骨格とする、模倣も伝授も決してできぬ先天的なパースナリティに他ならない。

騎士団長であることを義務付けられた誇り高き伝統の家系に生まれ、厳格な父の半ば拷問にも似た鍛練を物心つく前から繰り返し、そのための資本となる栄養を毎日毎日、吐き出しても受け付けなくなっても摂ることを強要される。

そうした日常は、同じ騎士の家系にあった大人たちさえも思わず目を背けたくなるような虐待にしか見えなかったが、それでも圧倒的な資質を秘めるゼノンの身体はその酷烈な環境に順応し始め、やがて苦痛を感じなくなった二十の頃には、彼の肉体はほとんど完成されていると言っても良かった。

そうして、怪物的な巨体を誇る騎士が誕生した。

鋼鉄のように凝縮された筋肉は硬質の存在感を宿して他者を圧倒し、その鋭い眼光は本人に威圧するつもりがなくても視線先にいる相手が勝手に怯えて竦む。

ゼノンの視覚的な迫力があまりに強烈すぎるため、男たちの畏怖や憧憬を集めこそすれど、女たちは引き攣った笑顔を見せてはそそくさと逃げ去り、残酷にも震えた表情を残して遠ざかっていく。

それを是と、彼は思う。

王族を守る騎士として己は厳格で在り続けなければならず、その象徴たる近衛騎士団長の地位を戴くのであれば、ただ是と。

「ジュリア様は聡明で心優しく、そして何よりも明るい性格から、皆に愛されるお方だった。

王家の宝を隠したり、木の実を取ろうとして枝まで昇ったこともある。礼儀作法の時間を真面目に取り組んだかと思えば、その後の宵闇の下りる時間になっても隠れておられたかくれんぼには、城内が騒然として総出で探し回ったこともあったな。

…騎士の私が馬役になってジュリア様を背に乗せた時、あの方は愉しそうに笑いであられた」

そんな彼に差し伸べられた、ほんのわずかにでも力を込めれば聞いた音を立てて折れてしまいそうな小さな手こそが、王女ジュリアとの出会いであった。

不器用にも胸に抱いた赤子のジュリアが彼の腕を頼りなくも掴ん

だ時、ゼノンはそれが驚くほど柔らかく、そしてかくも脆弱にか細いものなのだと知る。

ジュリア王女のお目付け役にも抜擢されたゼノンは、無邪気に城内を走り回る彼女の天真爛漫な行動に目まぐるしく引き回され、日が暮れてようやく王女が眠りにつく頃には、彼の方がくたくたになっ
ていたほどだ。

騎士団の稽古の最中にも王女が現れて剣を振るうこともあったし、厨房で調理された昼食をとにもつまみ食いしたことも懐かしい。

それが何日、続いただろう。

彼はいつの間にか、ジュリア王女の見せる屈託のない笑顔をこそ守りたいと思うようになっていた。

やがていつか現れるであろう想い人が彼女を迎えにくる日まで、そして結ばれてもなおジュリアの剣となり盾となり、あらゆる外敵を斬り伏せる忠実な騎士でありたいと。

それは、怪物が密かに夢を見る、ささやかな願い事。

「あの頃だけは、何もかもが楽しい思い出だったと誇れる。人を斬ることで誉め讃えられてきた人生の中で唯一、手を血に染めることなく守り続けてこられた笑顔がそこにあったからだ」

そこで言葉を切り、同時にゼノンの表情が曇った。

「だが、あの方はやはり、国の未来を導く王女様で在らせられた。心許せる友を作る時間があれば国政に尽力して民の声に耳を傾け、

和平派と抗戦派の複雑極まりない緊張の掛け橋となって両者の意見を汲んでこられた。

… なまじ優秀すぎたがために期待に応え続けてきた結果、いつの頃からか、私が守りたかった笑顔はとうに消えてしまっていたのだ…」

ゼノンは、生まれて初めて自分の無力さに憤りを覚えた。

騎士として国を守ることはできても、あんなにも一緒だった王女の笑顔を守ることはできなかったのだと。

通路ですれ違ったびに美しく成長していく王女の、しかし時が経つにつれて消えていく笑顔の言い知れぬ虚しさ、剣を握ることしかできぬ自分の掌に集約されていることをゼノンは思い知らされる。

それは、密かに夢を見る怪物を引き裂く、淡々とした現実からの贈り物。

「今なら分かる気がする。どうしてジュリア様が君を友達に選んだのかを。」

… どうか君は、君だけは、ジュリア様の本当の友達であってほしい。… 初めて会う君にこんなことを頼むのは道理に反しているのかもしれないが…」

いいえ、とルナは首を振った。

「私なんかで、よろしければ…。ゼノンさんも、どうか、ご無理を、なさらずに…」

思わず、男は息を呑んだ。

「あれだけのことをした私を…、君は許してくれるというのか？」

「それが、ジュリア様の、ことを、思つての、ことなら…。ゼノンさんは、ジュリア様の、騎士、ですから…」

「そう言ってくれるのか…。…君は強く、そして優しすぎるのだな。…いつの日か、その優しさで残酷な選択に運命を引き裂かれなことを切に願う」

ゼノンは、これほどに強い少女がこの世にはいたのかと改めて驚嘆し…、そして同時に強い不安を感じた。

目が見えず、病に伏す身体を乱暴にされながら、それでも感情的にならずに、相手の状況をきちんと理解したうえで斟酌するなど、誰にでもできる行動ではないからだ。

そしてそれは同時に、この病膏肓に入る少女が他人を思いやるあまり、自分の身を軽々しく扱っているのではないかとも思えてならない。

そこに、いったいどのような覚悟が秘められているのか、ドウムニア王国の誉れ高き驍將ゼノンは、想像することさえ禁忌に触れるような気がして、そこで思考を止めた。

「…では、クリスティヌ。後のことはよろしく頼む。どうか、彼女を支えてやってくれ」

「はい。お気をつけて行ってらっしゃいませ」

「ゼノンさん…、お氣をつけて」

「君も、自分の身体を大切にな」

そう言い残して去っていくゼノンの足音が閉まる扉の向こうへと消えたのを聞き届けて、ルナは不意に肩の力が抜けて安堵したのか、思わず溜息をついた。

「大丈夫ですか、ルナ様。あまりご無理をしては、身体に毒ですよ」
クリスティーヌと名乗った侍女の、びっくりするほど柔らかい赤子のような掌が自分の額に触れて、ルナは含羞の色を浮かべる。

「あ、あの…」

「ご安心ください。私は医術にも多少の心得がありますから、どうかそのままお待ちください」

困惑しながらも成すがままに硬直する彼女をよそに、クリスティーヌはルナの体調を精確に淀みない動作で調べていく。

やがて触診を終えた侍女の手が離れると、ルナは意外にも少し残念に思った自分に驚いた。

「ルナ様は頭部を強打されたとお聞きしましたが、幸いにも疵痕が残るようなものではないようです。その他にも、呼吸、心拍数、体温などを調べさせていただきましたが、怪しい点はありませんでした。」

…では、後で着替えとお食事の方をご用意いたしますので、今はごゆっくりとお休みください。起きたばかりで、お疲れでしょうか

ら」

そう言って、テーブルの水差しを丁寧に小杯に注ぎ、そのままルナに手渡した。

「これで喉を湿らせてください。眠っている時は大量の汗を流しますから、適度に水分補給をしておかないと、せっかくの綺麗な肌が乾燥してしまいますよ」

「い、いえ…、そんな…」

不慣れな賛辞に顔を朱に染めて、慌てて水を飲み干したルナは小杯をクリスティーヌに返し、気恥ずかしそうに視線をうつ伏せる。

クリスティーヌは、くすりと微笑んだ。

「大丈夫です。ルナ様は、ルナ様が思っている以上にお美しい顔立ちをしていらっしゃるんです。ですから、もっと自信を持ってください。」

…今こうしている間にも、貴女は世界を守り続けているんだから」

唐突に、クリスティーヌの碎けた声調に意味深な余韻が灯り、無音のまま、しかしはつきりと戦慄したルナの動揺が硬直した表情となって現れる。

「あ、あなたは」

「すべて知ってるわよ。なぜ貴女の病が不治なのか、どうして魔人がこの小さな島国に固執するのか、…そもそも、この物語の本当の始まりがいつなのかということもね」

どこまで知っているのですか、と問おうとして先んじられた彼女の告白に、ルナは度肝を抜かれた。

「まあ、私自身はジュリオールからアイツの裏切りのことを聞いて、ここに来ただけだね。

…ほら、当時の記憶の“原因”を消されていない貴女なら、覚えてるでしょ？ 十五年前、ここから東に行った場所にある、かつて貴女が住んでいた小さな村を襲った張本人。…そして、貴女だけに呪われた真実を話した男のことよ」

ぞくり、とルナの表情が凍り付き、冷酷とも魅了とも取れるクリスティーヌの言葉が続く。

「ジュリオールが打ち明けた真実をよく受け止めたわね。…そんなにも細い身体で、貴女は誰にも知られることなく、たった一つの信念だけを味方にして運命と戦い続けてきた。

…千五百年前に現れた賢者と同じ力を持ちながら、世界を革命する英雄になるのではなく、たった一人を救うためだけに自分のすべてを犠牲にして」

ルナは、小さな雫の形をした熱が頬に滑り落ちていくのが、自分でも分かった。

「私は…、私は…！」

口元を忙しく震わせ、痛ましげに眉を顰めながらも、何かに憑かれたように譫言を繰り返すことで課せられた己の責務を無理やり一念し、自らに稚拙な暗示をかけようとしているのである。

そうしなければ、今まさに脆くも崩れ去ろうとしている自分の心を守ることはできないのだと。

それをこそ、哀しいと言わずして何と言うのか。

泣きたい時に泣けない彼女の孤独はあまりに深く、それでもなお涙を堪えようとしているルナは、いったいどれほど傷つけば、その献身的な努力が報われるというのだろう。

…、それが永遠にこないということを、彼女は知っている。

「…そうね。それだけ身も心もボロボロに傷ついて、それでも力を使い続けるだなんて芸当は、憎しみでは不可能よね」

途端、ルナは優しい鼓動が聞こえるクリスティーヌの豊満な胸元に引き寄せられ、温かく抱きしめられた。

とくんとくん、と脈打つ生命の律動が、傷だらけとなった少女の心をどんな言葉よりも安らかに癒してくれる。

下唇を噛み締めるルナの瞳からとめどなく溢れ出すのは、まだほんの十五歳の女の子が母に甘えたかった哀しみであったのか。

「大丈夫、誰も見てないわ。…だから今は、思いつきり泣いていいの。貴女の王子様が迎えにくるまで、私が貴女を守ってあげるから」

その瞬間、ルナの感情はついに爆発して、力の限りの大声で、今まで全力で堰き止めてきた辛苦のすべてを吐き出した。

滂沱と溢れる涙が冷たくて。

クリスティー又は、助けてあげることできない残酷な運命を課せられたその細い身体に、何の足しにもならない温もりを与えてあげることしかできなかった。

『キヤメロット城 地下二階 独房』

そういえば、隅々まで探索したキヤメロット城も、この地下に設けられた牢獄には一度も足を踏み入れたことがなかったな、とジュリアは苦笑する。

冷たい風がどこからともなく嫋々と肌を撫で、身を震わせる王女はもう一度、周囲を見回してみる。

目の前には赤錆びた鉄格子。

地下二階の重罪人を閉じ込める小さな監獄の番人は、特別製の鍵がなければ開かないように工夫を凝らしてあるが、最初から逃げるつもりなどない彼女には大して意味がない。

陽の光など入りようもない石牢、その床には誰のものとも知れぬ白骨化した遺体が転がっていて、血と体液のこびりついたような饅えた臭いが充満していた。

暗闇を照らすのは、たった一本の蠟燭のみ。

それは申し訳程度に置き去りにされた壊れかけの食台の上に立ち、

熱に溶ける蝋が円柱に沿って滴り落ちて固まり、土台の役目を担った。

そのすぐそばに敷かれているのは、所々が破れていたり黄ばんでいたりする、麻で編まれて薄汚れている寝台であったが、そこから何よりも強烈な生理的悪臭がジュリアの鼻について思わず顔を背ける。

気を取り直して咳払いした後、ジュリアは再び中空に視線を彷徨させた。

「寒いわね…。ホント、いったいどこから風が入ってきてるのかしら。…なんて、そんなこと気にしても仕方ないわよね」

ひとり愚痴るジュリアは小さく溜息をつき、一人を除いては誰も訪れることのない鉄格子の方へと視線を向けた。

鉄格子の向こうから訝するのは、ジュリアと同じように罪を犯して囚われた者たちの、絶え間ない蠢動であった。

意味のない罵声や嘲笑を誰に聞かせるともなく叫んでは鉄格子を激しく揺さぶり、ようやく満足したのか単に疲れただけなのかは知らないが、ぴたりと喧騒が静まったかと思うとまた別の囚人が憂さ晴らしに嘯き始める。

地下に漂う空気は不浄に穢されて暗く冷たく、光に溢れる地上を嫉妬するように澱んでいた。

そこに暗澹と垂れ込める地下独特の圧迫感と、噎せ返るような囚人たちの狂騒が相俟って、ジュリアには自分が、あたかも肉食の猛

獣たちに捧げられた哀れな子羊になったような気がして落ち着かなかった。

それは、今すぐにでも彼らが鉄格子の前に連なり、喚声を上げて蹴破つてきそうな、そんな漠然とした不安であつたが、しかし誰に見えずとも王女としての威厳だけは保とうとして、ジュリアは毅然と前を見据えた。

だが、彼女が連想する不安は杞憂にすぎない。

事実、ジュリアがこの独房にいることを知っているのは、父である国王と将軍のみであるのだから。

途端、狭い地下の牢獄で常態化した狂気に酔いしれる囚人たちの喧騒がぴたりと止んだ。

階段を下りる足音が異様に地下に響き渡り、それだけで並外れた巨体を想起させるのに、不思議と鈍重そうな気配は微塵もない。

その人物はジュリアのいる独房へと真っ直ぐに向かつており、彼女にはそれが誰であるのかがすぐに分かった様子で淡い期待に目を輝かせる。

幼い頃から聞き慣れた特徴を間違えるはずもなく、ほどなくして鉄格子を挟んだ入口に立ち止まった騎士は、何の躊躇いもなく扉を開けて独房に入り込み、そのままジュリアの前にて跪く。

初見であれば誰もが息を呑むであろう隆々たる筋肉の鎧。

健康的な肌に刻まれた無数の傷痕は歴戦の戦士を想像させ、茶色

の髪は短くも鮮やかに整えられている。

彫りの深い顔立ちに映えるのは湖水のブルーを湛える両の瞳、しかし容易には近寄れぬ威圧感をもたらす眉間の皺がそれにアクセントを添えて、黙しても強烈な存在感を放っている。

「ジュリア様。お待たせして、誠に申し訳ありません」

深く頭を垂れるゼノンに対して、ジュリアは静かに首を振った。

「いいえ、ゼノン將軍。私のワガママを聞き届けてくれただけでも深謝します。…それで、ルナの様子はどうだったの？」

「つい先ほど、お目覚めになりました。特に不調を訴える様子もなく、今は侍女の一人に世話を任せてあります。…その方が、男の私よりも気が楽でしょうから」

ジュリアはかすかに苦笑した。

「そうね、その方がいいのかもしれない。彼女は右も左も分からないだし、せめて女同士で見知らぬ土地の緊張を緩和したほうが、いいのかもしれない…」

そう言って、しかしジュリアは面伏せる。

「ルナには淋しい思いをさせるわね。…それに、ゼノン將軍。貴方にも大きな迷惑をかけて…」

いえ、とゼノンはすぐに言葉を落とした。

「何時いかなる時でも、ジュリア様が選ばれた決断こそが私にとつての最善でございます。…我が使命は全力でジュリア様をサポートすること。ならば、ジュリア様の決断に従い、それに伴うリスクを最小限に抑えてフォローするのが役目でありましょう。」

…どうか胸をお張り下さい。あの時、ジュリア様の迷いなき判断を責めることなど、誰にもさせませぬ」

ありがとう、と言ったジュリアの表情は、ひどく翳っていた。

あの時　　帷幕に現れたマーシア王国軍の少年兵がグレッグだということに、ジュリアは一目見た瞬間から気付いていた。

それは同時に、野営地を襲撃してきた敵部隊がマーシアではなく、敵ウエセックス王国軍であることを意味しており、ゆえにジュリアの脳裏にはすでにこの時、その対応策を瞬時に弾き出していたのである。

野営地に現れた敵部隊の正体が、マーシアの装備に身を固めたウエセックス王国軍である以上、その狙いは王都に包囲網を敷く二国間に不和を生じさせ、疑心暗鬼となった双方を衝突させることで両者の兵力の消耗を謀るとともに、王都への包囲網を崩すという漁夫の利を得ることにある。

だが、それは両軍を相手に同時に急襲を仕掛けなければ成功しない危険な策であり、しかも鹵獲していた装備の絶対数の不足も相俟って、この敵部隊の兵力が自軍を上回るということは絶対ないと考えるのは容易かった。

ゆえに、本来ならゼノン將軍に敵部隊を邀撃させ、剣聖の副官が指揮しているというマーシア軍と合流することで補給線の封鎖を維

持するか、あるいは偽装部隊の失敗によって戦力を致命的に消耗した王都を再攻略するのが一番の安全策であることは言うまでもないことだった。

しかし、ここで強烈な心理効果を発揮してくるのが、他ならぬ“疑心暗鬼”という人の心の働きである。

仮に、王都を急襲したマーシアの別部隊を剣聖が指揮していると
いうのなら、ジュリアは躊躇こそあれど何の不安も抱かずに敵部隊
を迎撃するよう、ゼノン將軍に告げていただろう。

なぜなら、野営地を襲撃してきた敵部隊の正体がウェセックスだ
とジュリアが見抜いたのは、偶然にも顔見知りだったグレッグが帷
幕に現れたからであり、ましてや剣聖の副官とやらがどのような人
物なのか未知数である以上、自分と同じように敵の策を見抜いてい
ると考えるのは一種の賭けに近い。

加えて言うなら、もしジュリアが本物だと名乗り出たとしても、
同じように偽装したウェセックスの部隊に襲われたマーシアがそれ
を素直に認めてくれる可能性は不安が大きく、最悪の場合、あくま
でも可能性の一つとしてではあるが、ジュリアやゼノン將軍に裏切
りの冤罪を着せて捕らえることで、ウェセックスを倒したあとのド
ウムニア陥落も容易にさせる目論見があるのではないかと疑懼に走
ることもできるのだ。

これらを踏まえたうえで、ジュリアが見出だした方途は二つある。

一つは、こうした危険性を承知して敢えて飲み込み、敵ウェセッ
クス王国軍を邀撃してマーシアとの連携を維持する、最も妥当な方
法であり。

そしてもう一つは、野営地を襲撃してきたのがあくまでもマーシアだと敢えて認識したままで軍を後退させ、剣聖がウェセックスを打ち破るまで情勢を傍観する、しかし両者の形勢が対等化した時点で本国の孤立化を誘発しかねない危険な方法である。

ならば当然、本国の未来を思えば多少のリスクを冒してでもマーシアとの共同作戦を継続し、隣国であるウェセックスを確実に倒すことが最優先であることは言うまでもないことだ。

それなのにあの時、ジュリアが心を痛めたのは本国のことではなく、ゼノンが誇る自慢の大剣を前に為す術もなく追い詰められたグレッグの、じりじりと目の前で逼迫する死の瞬間であった。

殺せ。

彼は、間違いなく敵だった。

ドウムニアがウェセックスと袂を分かった以上、グレッグが敵国の人間であることには疑う余地もない。

だが、一介の配送屋でしかないはずの彼がなぜ、ドウムニア軍の野営地を襲撃しているというのか。

それが、一時的に編成された暴虎馮河の民兵であるというのならまだしも、グレッグは恐ろしく素早く、そして的確に躊躇うことなく二人の衛兵を殺してのけたばかりか、獅子將軍の異名を持つゼノンの烈火の如き剣撃をも、一度ならず二度までも防いで見せた。

これは、どう都合よく考えても、つい先ほど招集された民兵であ

るとは思えないのである。

ならば、突き当たる可能性はただ一つ。

グレッグが最初から配送屋などではなく、ウェセックス王国の兵士であつたという事実だ。

それも、凄まじい鍛練を経て完成された実力者であろうことはまず間違いない、とジユリアは見ている。

ころせ。

ゼノン將軍は、その圧倒的な膂力から繰り出す剛剣を得意とし、さらには一族の家宝である大剣を得物とする、一撃必殺を体現した剛力の騎士である。

ゆえに三年前、聖騎士になれず帰ってきた彼を温かく迎え入れた王は、その絶対的な評価をいささかも揺るがせていないのだ。

だからこそ、聖騎士スレインに敗れて命を落とした將軍の跡を継ぎ、ヴァイキング撤退後にやむを得ず降伏せざるをえなかったドウムニア王国の衰弱した軍の指揮を、近衛騎士団長であつたゼノンに一任したのである。

騎士団長であつた頃から“獅子騎士”との異名を持って部下から厚い信頼を寄せられていた彼は、そうして將軍の地位を得てドウムニア王国軍を束ね、王都の治安を守り続けてきた。

ゆえにおそらくは、このブリテンでも指折りの実力者であろうゼノンの剣を、防ぐ。

これは、偶然の一言では容易に片付けられない驚愕に値するべきことであり、それゆえにグレッグの技量が、一般兵や並の騎士とは一線を画す、非常に高い水準に達している実力者だということは想像に難くない。

だが、そんなグレッグの技量をもつてしても、ゼノンの剛剣の前にはたった二合しか耐えられなかったのだ。

剣を碎かれ、抜いたナイフを片手に構えながら奄々と呼気を荒げるグレッグに、ゼノンは当然のことだが敵を両断せんと剣を振り上げた。

コロセ！

友の死が、すぐそこまで迫っている。

初めて人の死を、他ならぬ人の手によって目の当たりにしようとする彼女は、しかしそれが互いに知り合いであるという皮肉な運命に直面し、刹那の時の中で永遠とも思える葛藤の悩乱に、また泣きたくなった。

どうして、こんなことになってしまったのだろう。

誰もが悪くないことは分かっている。

だが、生命を求めれば、生命を失うのが世の理なのだ。

目の前で二人も仲間を殺されたゼノンがグレッグを捕虜にするとはいえず、しかし無考えに横槍を入れてもいたずらに彼の疑心を招

くだけならば。

コロセ！　コロセ！　コロセ！　コロセ！　コロセ！

民の誰もが愛する“優秀”な王女の、決断の時がきた。

ジュリアは選択肢を知っている。

非情な現実の前に、法律ルールに縛られた道徳ルールは境界線にすらなりえない。

運命とは、完璧にして冷酷な選択の問題だ。

さあ“どっち”を殺す？

優しい思い出をくれた友情か。

自国の救い手を求める愛情か。

善悪にはまるで無頓着な運命が嗤っている。

大人としてのジュリアは、自国を救うためにグレッグを見殺しにしると言っている。

子供としてのジュリアは、友人を救うために將軍の剣を止めるべきだと言っている。

一人だけの友情を救うのか。

何万という愛情を救うのか。

そこがポイントだ。

さあ“どっち”を救う？

どんなに努力しても人間には限界がある。

救済が人の手に余るのは、何を以って救済と呼ぶのかを、本人も救い手も自覚していないからだ。

奇跡の寵愛が善悪に関係なく差し延べられるのは、黄昏の吐息に絶望することなく未来に敬虔であり、矛盾する信仰よりも強く罪と罰を受け入れることで、毅然と生き抜こうとする者の意志が盲目の奇跡の手を掴むからに他ならない。

ゆえに彼らは、救い手がおらずとも自己を尊崇して苦境を乗り越え、幾度も陥穽に堕ちながら幾度も這い上がり、困難に挑戦する。

だが救い手は、いつも自分が正しいと腐心する尊い行為で弱者を助け、畢竟すれば粗略に扱われる運命に絶望しながら秩序に捨てられる。

真に救済すべきは虚業の安全地帯で合法的に毒泉を生み出す狡猾な賢者たちであるのに、哀しいかな英雄は、目の前の名も知らぬ他人を救い続けることで、やがて保身に忠実な他人の手によって殺されていく。

善人は“ルール”に縛られて動けない人種だ。

だからこそ救い手は救い手であるのだが、その恩恵に縋る人間を

本当の意味で救済することはできず、救い手自身も救済することができない。

そして真の悪夢の前では、奇跡でさえも間に合わない。

まるで見当違いの友情が邪魔をして、ジュリアの正しい愛情を阻んでいる。

ところが、クルシイノ…。

頭では、それが最悪の選択だということは分かっている。

トテモ、トテモ、くるしいの…。

それを選んでしまったら、王国は二度と独立できない。

どうして？ タスケて！ こんなコトに？ だレか！

その一線を越えてしまったなら、もう二度と戻れない。

ダカラ？ オネガイ！ ミステルの？ ヤメて！

国を守るべき“優秀”な王女が、国を捨てるだなんて。

ドウシテ、コンナニモ、ココロガクルシイノ…？

この瞬間の記憶を、ジュリアは完全に失っていた。

王城キャメロットへと帰還する途中、半ば錯乱状態にあった思考

に冷静さを取り戻した彼女は、なぜ軍が後退しているのかをゼノンから聞き、あの時に自分が帷幕で何を口にしたのかを知る。

そしてそれが、ジュリアが犯した最悪の大罪。

他人の容喙すべき問題ではない事態に、一時はゼノンが自らをすべての罪の犯人だとして国王に告げるも、それを是としないジュリアの告白により真実を知った国王は彼女の行動を叱責し、地下二階の独房へと身柄を拘束したのである。

王女は、まさしくゼノンに対する人質だった。

国王はジュリア王女を捕らえることで、今まで彼女を中心に活動してきた和平派の行動を遅鈍化させ、対ウエセックス王国戦に向けての本格的な準備を、自身を中心とする抗戦派を集めて着々と進めている。

そして、軍の後退があくまでも自分の指示だと固持して譲らないゼノンに対し、国王はジュリアを庇う彼の意思を忖度して交換条件を出した。

即ち、ジュリアを国家反逆罪から救いたければ敵を倒せ、と。

それが、今の二人が置かれた状況のすべてだった。

「ゼノン將軍。こんなところで胸を張っても、誰も見てくれる人なんていないわ」

視線を伏せたまま、ジュリアは静かに口を開いた。

「…それに、私は皆を追い詰めた愚かな王女だもの。私を見て恨み辛みを並べることはあっても、喜ぶ人はまずいない…」

ゼノンは弾かれたように顔を上げた。

「そんなことはありません。ウェールズの聖騎士がブリトン人の希望なら、ジュリア様こそはブリトン人の栄光でございます。ジュリア様なくして、今のドウムニアはありません」

王女は首を振る。

「いいえ。それは、私には身に余りすぎる言葉よ。栄光は国を守る勇者たちに与えられるべきもの…。私のような国を裏切った人間ではなく、ゼノン將軍のような気高い騎士たちにこそ相応しいわ」

「ジュリア様…。そこまでご自分を非難されるのはあまりにも酷というものです。」

…利用する者される者。戦争は死を常に意識するあまり、いつ本性を露わにするか分からぬ魑魅魍魎が渦巻く混沌の世界です。

そんな中、ジュリア様は対話こそが正しい戦いなのだとして邁進してこられた。その努力は必ずや、未来のドウムニアに栄光をもたらすはずです」

「ゼノン將軍…。力でなければ守れない戦いが戦争なのよ。今の時代、言葉はあまりにも無力すぎる…」

「ジュリア様、力がなければ国は守れない、それは確かに事実です。しかし、その後のことも考えてください。」

我々のような騎士は剣を握ることしかできません。多くの仲間を失い、多くの敵を殺してきた我々は戦乱の時代にこそ活躍すれど、

平和の時代になれば不要の存在です。

治安を守ることはできても、民の生活を豊かにすることはできない。

悪を懲らしめることはできても、悪が現れる原因を突き止め、それを改善することはできない。

騎士団は、民を導く政治があつて初めて、その力を存分に発揮することができなのです。そうでなければ、我々は何のために、誰のために剣を振るうと仰るのでしょうか。

…ジュリア様、どうか顔を上げてください。我々と民を導き、思い描いた夢に辿り着くことができるのは、他ならぬ貴女様だけなのです」

しばらく無言だったジュリアは、躊躇いがちに呟く。

「戦争に勝つことも、平和を維持することも、どちらも同じ困難を伴うもの。…相手は同じ人だもの、戦争の時代に私が無力であることには変わりがないわ。

…言葉で相手の剣を止めることができないなら、私にどんな意味があるというの？ 無抵抗でいたら、相手は攻めてこないとでも？ 話し合いで戦いが終わるなら、誰も戦争なんて最初からしないわ

…！

…こんな時、民を守ることができるのは…、貴方たちのような高い勇者だけよ、ゼノン將軍…」

ゼノンは、深い絶望に自分を追い詰めていくジュリアを居た堪れない思いで見つめていた。

帰る場所さえ見失った傷だらけの小鳥のように、空に羽ばたくこともできずに檻に閉じ込められた王女が、陰鬱な地下の毒気に汚染されてひどく憔悴しているように感じたのである。

…確かに、四六時中、周りを囚人たちの耳障りな狂騒で一日が始まり終わっていくこの牢獄にいれば、その思考がネガティブになるのも仕方がないと思える。

だが、それでもジュリアは王国のために必要不可欠な人物だった。

それがゼノンのエゴであることは分かっていたが、もうウエセックスとの戦いを回避することができぬ以上、そして彼我の戦力差があまりにも絶望的である以上、今後の王国と民の未来を考えれば、彼女が存在はどのような絶望をも覆すブリトン人の救い手となるはずだからだ。

牢獄の無機質な天井を見上げたゼノンは、赦しを請う罪人のような目で思いを巡らせる。

そして、忠実なる騎士は王女を見据えた。

「…陛下を中心とする抗戦派のお歴々は、ジュリア様を失った和平派の動きを封じ込み、独立宣言と宣戦布告を認めた公文書を使者に持たせてウエセックスに送りました。

元より、彼らを裏切った時点で独立するしかなかった我々は、単独でウエセックスを倒さねばなりません」

「無理よ。兵力差に違いがありすぎる。先の出撃だって、騎士団は兵力の六分の一しかいなかったじゃない…！」

…それでも、お父様を止めることは、もう誰にもできないのね。

…そこまで追い詰めてしまったのは、他ならぬ私だもの…」

「元々、七年前の王妃様の事件以来、陛下は別人のようにアングロ・

サクソン人を憎んでおられました。それが引き金となって先の戦争が起こり、我々が敗北したのは記憶に新しい、騎士団の恥部でございます」

国王がアングロ・サクソン人を毛嫌いしている背景には、農村から王都へと戻る途中に山賊に襲われ、ゼノンが救出した頃には、残酷にも変わり果てていた王妃に起因していた。

それはちょうど、ジュリアが十の頃の事件であり、この件を境に、父と娘の間には思想の決定的なすれ違いが生じることとなる。

父は許せなかったのだ。

母が農村に赴いていたのは、民の切迫した事情を現地で体感すること、実益ある打開策を施策しようとしていたからであり、それは決して気紛れな遊興などではなかった。

しかし山賊は一行を襲い、金品を奪ったばかりか、民から羨望の眼差しを受ける美しい母を嬲りものにして、その人格と精神をスタスタに破壊したのだ。

母は今も生きている。

だが、唐突に目覚めては狂ったように男を求める彼女を見るたびに、父は皆殺しにした山賊が憎きアングロ・サクソン人であることを思い出すのである。

その憎悪と憤怒を止める術など、あろうはずもない。

それはジュリア自身、当時は自分の理想であった母のあまりの変

貌ぶりに三日三晩、泣き続けたことは今も昨日のことのように思い出せるからだ。

しかし、母が受けた凌辱に対する憎悪をジュリアが向けたのは、今の飽くなき戦乱を長引かせるブリテンの異常な社会全体に対してであつた。

山賊は、必ずしもその略奪行為を至上の愉悦として最初から形作られているわけではない。

勿論、それを代々続く家業として生活を成り立たせている山賊もいるだろうし、泣き叫ぶ善人を前に躊躇うほどの良心が最初からない非道な山賊もいるだろう。

だが、愛する者を殺され、食べる物もなく、住む家を焼かれれば、誰もが生きるために山賊になる可能性を秘めているのだとジュリアは思う。

真に悪いのは、こうした酌量の余地ある山賊を生み出し続ける社会。即ち、このあまりに永すぎる戦争そのものにこそあるのだとして、彼女はむしろ人々の心の奥底に根付く軋轢や摩擦を、対話によって少しずつ消化していくべきだと考えたのである。

当然だが、それが最も困難を伴う荆棘の道であることをジュリアは既知としている。

しかし、戦争や革命で社会を変革したとしても、犠牲という名の平和の土台には多くの次なる争いの火種が隠れて憎悪を養分に成長し、その悪意の花粉を社会に撒き散らす可能性がある。

もしそうなれば、ブリトン人とアングロ・サクソン人は永遠に戦い続ける泥沼の宿命にどっぷりと身を沈め、また母のような被害者を繰り返し繰り返し生み出し続ける温床を育てる結果に至りかねない。

…あまりに永すぎる三百年という戦乱の時代に、国民は悲壮感さえ漂うほど疲れきっている。

そうした声を受けて立ち上がった勢力こそが和平派であり、国王を中心とする抗戦派と対立する背景であるのだった。

ゼノンは眉を寄せて話を続けた。

「…陛下は全国民に訴えました。男ならば剣を取り、女ならば支援に回れとの通達を。…民兵は五万を越え、我々は出撃に備えて部隊編成に熟考しているところです」

「民まで巻き込む戦争に未来はない、なんて言う資格は、もう私にはないわ…。私さえ、私さえいなければこんなことには」

「違う、違いますジュリア様…ッ！」

ゼノンは、崩れるジュリアを支えて言った。

「誰のせいでもありません。ジュリア様が“皆”を愛しておられることは、国民の全員が知っていることです。…後のことは、すべて私にお任せ下さい」

「ゼノン…」

哀しく濡れる王女の瞳を真っ直ぐに見つめて、ゼノンは頷く。

「私には、山賊をも救うという考えは思ってもみなかったことです。… なまじ力を持ちすぎる者は、どうしても力で物事を解決したがる性質があるようです。説得に尽力して相手と対等のまま話が平行線を辿るより、力で押さえつけたほうが簡単ですから…。… しかし、ジュリア様は違う」

面伏せるジュリアに、ゼノンは微笑む。

「ジュリア様は、最も困難ではありますが、最も正しい過程を経て理想的な社会を作ろうとしておられる。きっと、貴女様の思い描く社会には、ブリトン人もアングロ・サクソン人ともに笑い合って生きているでしょう。… 私には想像もできない世界を、貴女様は夢見ておられる。

… 思うに、それは王妃様の件だけではない強さが芽生えたからではないでしょうか。… 例えば、恋、のせいですか…。？」

ジュリアは瞠目して顔を上げ、目の前に微笑むゼノンを見据えた。

「やはりそうでしたか。… ならば相手はおそらく…。… あの時に帷幕に現れた少年、でありましょうか？」

途端に赤面して瞬きを繰り返す王女の初々しさに、ゼノンは無言の確信を得た。

「そうでなければ、あの時の貴女様の動揺ぶりとはご説明できません。… それにしても、あの少年がジュリア様の想い人であったとは…。… いやはや、もう少し間近で、もっとよく見ておくべきでしたかな？」

そう言つて、將軍は呵々と笑う。

「ゼノン將軍…、私は…！」

「あの少年は筋が良いですぞ。足の運びから踏み込みのタイミングと速度は申し分なく、小手調べとはいえ私の初撃を耐えて見せた胆力と技量は、紛れもなく将来有望な男です。

…まあ少々、口が悪いのが欠点でありましょうが」

そういえば、グレッグに『この化け物め！』と言われていたのを、ジュリアは臆気ながらも思い出した。

「人は時として、残酷な選択を強いられるものです。家庭か仕事か、友か愛か、そして生か死か…。

ジュリア様の場合、それが人よりも早く訪れてしまっただけのことなのです。まだほんの十七歳で、生命の天秤をその手に握らされてしまったのですから」

「…それでも…」

ジュリアは、苦虫を噛み潰したように顔を歪めて言葉を繋げる。

「それでも、私は祖国を裏切ったわ」

「いいえ、裏切つてなどおりません。…なぜなら、真相を知るジュリア様は、この戦いを経て私服を肥やそうとした將軍の奸計に捕まり、謂われのない汚名を着せられて地下に囚われているのですから」

「…、え…？」

一瞬、ゼノンが何を言っているのかを、ジュリアは理解することができなかった。

「生き抜いてください。…それだけが、私の望みです」

立ち上がるゼノンを見上げて、困惑の色を隠しきれないジュリアが声を荒げる。

「ゼノン…！？ 貴方、いったい何を言ってるの…！？」

「愚かな王女には、愚かな騎士がよく似合う。…そうは思いませんか？」

ゼノンは、牢獄の入口へと向かいながら言葉を続けた。

「マーシア王国軍との共同作戦が成功すれば、ドウムニアはウエセックス王国の領土の半分を支配することができます。愚かな將軍は、その後に与えられる相当の報奨に目が眩み、その甘い誘惑に喜々として軍を動かしたのです。」

しかし、王都から無理やり連れ出されたジュリア様はそれを見破り、命懸けで私を説得しようとしたが、私はその警告を無視した。そこへ、あの急襲が始まったのです」

「ダメよ！ そんなことをしたら、貴方が…！」

ジュリアが急いで駆け寄ったが間に合わず、頑なに閉じられた鉄格子の向こう側に立つゼノンを見据えた。

しかし、ゼノンは背を向けたまま、さらに言葉を繋ぐ。

「そして国王には作戦失敗のすべての罪がジュリア様にあると嘘を告げ、冤罪を背負わされたジュリア様は、こうして地下に閉じ込められてしまう…。」

これが、ウエセックス王国に対するドウムニア反乱の、真実です」

ジュリアは鉄格子にしがみつきながら首を振った。

「違う！ 貴方は自分のために他人を巻き込むような人じゃないわ！ 貴方は、ただお父様の命令を」

「ジュリア様、もう立ち止まらないのです。すでに和平派の全員を売国奴として捕らえ、この地下に幽閉しております。…王城に残る者はみな、国王陛下に追従する抗戦派のお歴々のみ…。そして、ここまでは私の計画どおりとなりました」

この瞬間、ジュリアはすべてを理解した。

「待つて！ ゼノン！」

ジュリアが鉄格子に縋る。

その、向こう側。

振り返る騎士の表情は　　。

「ルナ様からの言葉をお借りして、改めて言わせていただきます。…ありがとうございます。」

私のことはどうか、お忘れください。そしてすべての責任が私にあることと、その証拠が私の執務室に眠っていることを、覚えてい

てください」

それは、狂気を演じる気高い騎士の、壮絶な最期を予感させる笑みだった。

「ゼノン！ ダメ！ 貴方は…！ 貴方こそ、今のドウムニアに必要な人なのよ…！ お願い！ 待って…！ ゼノン…！」

王女の痛烈な声に、しかし騎士は、ついに最後まで振り返らなかった。

遠く離れていく、優しくて力強い背中に届かぬ手を必死に伸ばしながら、王女はその場に崩れ落ち、密やかに泣いた。

第十六話 く心の在り処 (後書き)

次回更新予定日は、1月12日になると思います。

開き直ってページ数を気にしなくなると、うんと書きやすくなりま
すね。

それでも、編集が面倒で誤字脱字のガンパレード状態は改善したい
ところですが…。

では、また次回でお会いしましょう！

ありがとうございました。

第十七話 〈暴君vs黒騎士〉（前書き）

友M「中の人などいないッ！」

はい、出才子早々、オワタ式です。

皆様、新年、明けましておめでとうございます。

友Y「明けましておめでとうございます」

友M「おめでとうございます」

遅ればせながら、ようやく投稿することができました。

今話から、戦闘シーンが四話連続でありますので、読んでいくうちにすごく目が疲れると思います。

なので、適度に休憩を挟みながら読んでいただくことをオススメいたします。

また、もう一話が長すぎる、という方につきましては、申し訳ありませんと謝ることしかできません。

友Y「や、それはいいんだけどさ。俺たちが言いたいのはそっちなやなくて」

ん？

友M「早く続きを上げろってコトだアアツツ！」

どこの吸血鬼ですか、おまいは……。

でも、確かに言つとおりです。

投稿が遅いのは、単純にオワタの筆力がないからです。

重ね重ね、本当に申し訳ありません。

それでもオワタに付き合つてやるよ、というツンデレな読者がいらつしゃいましたら、どうか最後までお付き合いしてください。

それでは、長くなりましたが、引き続き本編をお楽しみ下さい。

第十七話　く暴君 vs 黒騎士く

そこはもはや、外界を遮断した“異界”と化していた。

洗練された白壁、そこに豪壮さを強調する照明が幾つも懸架されていて、規則的に飾られた数十個もの国旗と重厚感のある内装を華々しく照らしている。

しかし、塵や埃も一つたりとて許されぬと言わんばかりの、病的なまでに維持された清潔感にはむしろ、ある種の命懸けとも言える侍女たちの緊張感ある息遣いが聞こえてきそうな、そんな剣呑としたただならぬ気配があつた。

その中央、強烈な個性を発散する赤に染め抜かれた豪奢な玉座が、その辺端を目映い黄金で装飾し、大樹のような不動の存在感を伴って設えられている。

そして　　。

唯一絶対の玉座に堂々と座る男は、その肘掛けを利用して頬杖を突きながら、しかし息詰まる圧迫感を宿す空気に目を踊らせていた。

ぎらつく双眸、豊潤な餐食に恵まれたやや肥えた体躯と、相手に無理やり威厳を押し付けるような虚飾を隠しきれない態度は、マシア王国の頂点に君臨するベオルンウルフ王に相違なかったが、しかしそんな一国の主たる彼がそれほどに恐れる相手とは、いったいどのような人物であるのか。

その答えが、今まさに国王の目の前にいた。

抜けるように高く設計された天井を誇る玉座の間で、冷厳な姿勢で謁見に臨む超人と、国王の隣にて氷よりも冷たい笑みを湛えて腕を組む挑発的な魔人との、途轍もない緊張を孕んだ権謀の刃先が次々と交差する。

「実に素晴らしい働きでした、バールゼフォン卿……。副官を死地に送ってまで相手を生かす慈愛に満ちたその思いやりは、さすがの私も真似できそうにありません」

狂気を彩る紫紺の瞳が、深奥に秘められた熾火のような翡翠の眸子を注意深く観察する。

「それとも、愚昧な私の先入観が、あなたの大胆不敵な判断に及んでいないだけなのでしょうか」

老聖は意に介する風でもなく、魔性の青年を見上げたまま微動だにしない。

くく、と笑う魔人が続ける。

「私とあなたを例えるなら、見事に不調和な二音だ。その名を耳にしただけで絶息しそうな恐怖の体現者。」

「けれど、その二つは静かに人を不安にさせ、鋭利な刃を前にしたように緊張感を高まらせるばかり。一見すれば似た者同士だが、刃と刃が交じ合えば、そこには反発しか生まれない。」

「まさに、私たちそのものだとは思いませんか？」

「お前が刃だとは笑わせる」

バールゼフォンが、蠅を掃うように吐き捨てた。

「私が刃なら、お前は矢だ。誰にも制御できない狂犬。騎士が誇りをかけて刃を交じている最中で平然と、お前が横から現れて戦場を掻き乱す。それはただの一方通行の悪意にすぎない。」

…物影に隠れるのは、自分の悪業が白昼の下に曝されることを恐れ、人々から狙われるのを防ぐためだろう」

「不和をもたらすのは私の技能ですよ、バールゼフォン卿…。幸運なことに、私は裏切り者が一目で分かるものでしてね。どのような騎士の刃が翻り、いつ主に向けるのかを嗅ぎ取ることができる。」

…その点で言えば、私は実に優秀な忠犬ですよ、ベオルンウルフ王」

魔人は、隣に座する国王に囁くように告げる。

「彼の言う通り、私が矢だとすると、それは放たれてしまえば目標まで一直線に突き進むことしかできない。目の前にいる騎士ものの“誇り高き刃”と違って、私は射手に裏切れない罪作りの矢なのです。…くつくつくつく」

途端、ベオルンウルフ王に明らかな狼狽の色が浮かぶ。

「ば、バールゼフォン卿が、私を裏切るといふのか!？」

「いいえ、彼は裏切れません。…かつては“そうだった”のかもしれませんがねえ…、バールゼフォン卿…？」

多分に含みを持たせた口調に、しかし剣聖は眉を顰めるだけに留めた。

「ふふ、そういえば、刃と矢もやはり相容れない存在でしたね。…
くく、なるほど。それだけを言えば、私とあなたは同意しているの
でしょうか」

「奇遇なことだ。私も裏切り者を一目で見抜くことができる。…お
前の言う通り、私は王を裏切らない。最も危険な裏切り者が目の前
にいるからな。」

「…お前の物語は最初から最後まで不義に満ちている。ワルプルギ
スの狭間に生まれたお前は、誰よりも世界が燃えるのを望んでいる
はずだ」

ニタリ、と悪魔的に歪む魔人の表情に怖気が走り、王は反射的に
目を背けた。

「あなたが私を理解してくれているなんて、実に光栄なことだ。…
だが間違ってはいけない。私は最初から最後まで王に忠実だよ。…
ただ、あなたと私とは、少々やり方が違うだけさ」

「財に興味がなく、名誉にも、歴史に名を残すことにも無頓着なお
前が忠実であるのは、際限のない欲望だけだろう。その成就のため
なら、お前は躊躇いなく世界に火をつける」

「私が燃やすのは理性だけさ。自分に正直な者だけが、人々の憎悪
を愉しみながら最後まで信念を貫くことができる。」

「…少しは私を見習ったらどうだ、バルゼフォン卿。予言しても
いいが、あなたの行動が正しい信念に裏打ちされているとしても、
誰もあなたを讃えはしないだろう」

「お前はまだ私を理解できていないようだな、ヴェンツェル…。私

は英雄に興味はない。大切なことは信じることだ。自分の誇りと、生命の感謝をな」

ヴェンツェルと呼ばれた魔人が、肩を竦める。

「つくづく期待を裏切らない男だ。…あなたと違って、弱者は強者を前にすると、たちまち論理や道徳を振りかざしては自分が正義にあると比較したがるからね。…それにどんな意味がある？ その論理や道徳さえも、強者が弱者に刷り込ませた固定観念だということに気づかないのだから喜劇だよ」

魔人が玉座前の階段を下りていく。

それを、剣聖は油断なく見据えた。

「…知ってるかい？ 私とあなただけが怪物ではないことを。英雄が人々に生かされているのは、単に都合よく助けてくれるからさ。救済に縋る呼び声に応え、無償で人々を助けるのが英雄だと祭り上げる。…だからこそ人々から称賛され、その利用価値があるうちは無罪放免。何をしても“自分たちの為だから”と見逃してあげる。だから面白い。英雄の行為によって自分たちが立たされている足元が脅かされれば、まるで据じ曲げていた掌をこそ元に戻すように、恥じ知らずにも彼らを責め立てるのだから。」

…私はね、そんな“平和的”な人々の内なる怪物ほんねを解き放ってやつているだけさ」

超人と魔人の肩が並ぶ。

「イースト・アングリアはまさにそうだった。たった一人の指揮官を失っただけで亀裂が走り、魔人だの悪魔だのと罵っていた男の言

葉に忠実になる。

… 国王サマは実に可哀相な人だったよ。信賴していた家臣たちにいきなり裏切られ、その見せしめに家族も皆殺しにされたんだから… クククク。怪物とは、本当は何のことを指す言葉なんだろうね」

「善悪に固執している時点で、お前も小物であることに変わりはない。光と闇のある世界が正しい在り方だ。その一方だけを否定すれば、必然的に生まれる矛盾に破滅する」

魔人が密かに笑う。

「私を前に小物だと言ってくれるのは、もうあなたしかいなくなっってしまったな。… 他の人間たちは真つ当な口しか利いてくれないんだ。お前はクズだ、とか、この悪魔め、とかね。… あまりに聞き慣れすぎて、子守唄のように心地よく感じてしまうから相手は救われない。… そして、この世界も。」

「どうやら、永遠に救われないのがこの世界の在り方ようだ。… 信じる者は掬われる。だが、こつちの言葉が正しく思えると、人間たちは悲劇的に暴走するだろうね」

「お前から世界を救うと聞かされるのは驚きだな。… 影のない人間は“ヒト”と呼ばれずに亡者となる。血を吸う人間が“吸血鬼”だと区別されるように、これらは人が闇を必要とする一つの証拠だ。… 自分とは違うモノなのだと安心するためにな」

ああ、と魔人が苦笑した。

「吸血鬼は人間ではないのだが…、まあ今はそんなことはどうでもいいな。些細な勘違いを訂正するよりも、もっと大きな情勢の誤解

を解くほうが先だ」

言って、ヴェンツェルは芝居じみた動作でパールゼフォンへと向き直る。

「…あなたは何者だ？」

耳元でそつと囁く魔人の問いかけに。

「私はパールゼフォンだ。それ以上でもそれ以下でもない」

老聖はわずかの逡巡もなく即答した。

しん、と静寂に沈む玉座の間に、高らかな魔人の哄笑が響き渡る。

「あなたならきつと、そう答えてくれると信じていた。…だが、あなたの切り札であるスレイン君はどうだろう。私が思うに…、きつと自分を“聖騎士”だと名乗るのではないかな？」

途端、細めて射抜く剣聖の眼光に、魔人が舌なめずりをして端正な口元を歪ませた。

「私はね、あくまでも善意で、あなたを南にと王に推挙してあげたんだよ。私が南の聖騎士クンと会えば、彼の精神は耐えられずに自壊する。私は演出してやればいいだけだ。そうすれば、自らの正義によって自分を断罪する彼は、聖騎士という能力の限界以上へと釣り上げてしまった自分を許すことができず、ついには“復讐者”へと墮落するからね。

…あなたも調べている通り、フィッチ王国の守護騎士がその代表例であり、彼を狂気へと導く前準備さ。…まったく、正義とはどう

してこうも脆いものなのか、私には格好の遊戯にしか見えないな」

魔人が超人を見返した。

「そんな光景を、あなたは見たくないだろう？　まだ救えるなら、早く救ってあげた方がいいのではないかな？　そう時間がないのは、あなたが一番よく知っているはずだ。…クククク」

両手を空に広げて、魔人が言葉を続ける。

「さあ、聞かせてくれ。可愛い副官を殺してまで生き長らえさせたウェセックス王国に対する、今後の作戦方針を」

「うむ、それは私も聞きたいところだ」

意味不明な単語を並べる二人のやりとりと剣呑な空気に居た堪れない思いで玉座に座っていた王が、ここぞとばかりに身を乗り出して口を開いた。

「どうやってウェセックス王国を攻めるつもりだ？　奴らが衰弱しているドウムニアを征服するのは時間の問題だろう。…ならば、その背後から王都を攻めるのか？」

いえ、とバールゼフォンが呟く。

「奴らがドウムニアに気を取られている間に、私は東二国を攻略します」

言い終えると同時に、魔人の拍手が響いた。

「素晴らしい。あなたの本気を知ることができて、私は心の底からの痛快事を堪能することができます」

言って、魔人が振り返ると同時にパールゼフォンが眉を顰めた。

「お前はどのようなつもりだ？ 西のウェールズが動いたと聞いた。…これほど早期のタイミングで動けるほど、彼らの連携は容易くなかったはずだが…？」

「今回のポウイス奪還は、北のグウィネズ王国の独断ですよ。あそここの王サマが若くて野心家なのは知ってるだろう？ …フフ、小娘の聖騎士には任せていられなかったんじゃないかな？ …それとも復興したポウイスを陰から支配するつもりなのかもしれないね」

尤も、それを快く思わない国から非難轟々だけど、と乾いた笑い声が魔人から零れた。

「大丈夫です。言っただけですよ、マーシアには誰も入れないと。…あそこには私も建設に携わった“オフアの防塁”がある。たった三千ぼつちの兵力でも、守るだけなら簡単だ。…それに、向こうには私の新しい飼い犬が防衛に赴いていてね。今頃は王サマにでも挨拶してるんじゃないかな？」

パールゼフォンが怪訝な表情で魔人を見やる。

「…新しい飼い犬だと？」

「私からのささやかなサプライズさ。黒い戦友だとも言えいいのかな？ …私には分からないが、友と戦うというのは、いったいどんな気持ちなんだろうね」

そう言って、ヴェンツェルは出口へと歩き始めた。

「せいぜい頑張ってください、パールゼフォン卿…。あなたの後ろ盾が壊されないうちに、ね」

「お前こそ、西の聖騎士を過小評価しているようだな。…アレは手強いぞ。少なくとも、南よりはな」

くつくつく、と澀んだ粘着質の苦笑が洩れた。

「あなたから見ればそうなのでしょう。…しかし私から見れば、アレは最弱の聖騎士だよ。哀しいかな、善人には失うモノが多すぎるからね」

途端、耳鳴りのするような笑い声を残して魔人ヴェンツェルの輪郭が黒に塗り潰された瞬間、その姿はどこにもなく消えていた。

「…だからこそだ。お前の慢心が、最弱を最も手強くする」

残された剣聖は魔性の青年が消え去った方角へと目をやったまま動かず、意味も分からず玉座で目を瞬かせる国王は魔人がいなくなつて気持ちが悪くなつたのか、軽く咳払いをしてパールゼフォンに声をかけた。

「それで、具体的にはどうするつもりなのだ、パールゼフォン卿。東の二国と言えば、エセックスとサセックスのことか？」

剣聖は振り返り、はい、と応えた。

「では、陛下のご心配を取り除くべく、まずは作戦の概略からご説明いたします」

バルゼフォンは、諄々と語り始めた。

『ウェールズ地域 ポウイス王国 王都ニートン』

ウェールズは、二十一世紀現在も、二十以上もの州に分かれている。

これには、アングロ・サクソン人の船来によってブリテン島の西へと移動せざるをえなかったブリトン人たちが、それぞれが属する小部族の意向によって国家を群立させたからであり、それはまさに当時の小国家の影響がそのまま、後世にまで残ったからだと言えるだろう。

九世紀現在、ウェールズ一帯に数多く存在する小部族国家は後世の数とほぼ同数であったが、それらの多くはすでに一部の強国の属国となっている按配であり、ウェールズの代表国とも呼ぶべき国は、合わせて四つほど存在していた。

否、正確には四つだったと言った方がいいのかもしれない。

ウェールズとマーシア王国との国境線に建設された難攻不落の長城“オフアの防壁”のすぐ隣に建国していたポウイス王国は、その位置的にもマーシア王国軍の攻勢を真つ先に受け止めるため、一年

前、聖騎士の誕生を脅威と危惧した剣聖との熾烈な戦いを繰り広げていた。

だが、ポウイスを失えばマーシア王国軍がウェールズ攻略への重要な足がかりを手に入れてしまったため、この国を死守することはウェールズに存在するすべての小国家の総意である。

一年間にも及ぶ激闘の末、惜しくもポウイスは陥落してしまったが、当時、まだ除け者扱いだった聖騎士の奮戦もあって被害を最小限に食い留めることに成功したウェールズ連合軍は、ポウイス国民を北のグウィネス王国へと避難させ、その反撃の好機を密やかに窺っていたのであった。

しかし、ポウイスを失った反動もまた大きく、各国に波紋のような不安を拡大させ、自国の軍備増強と保身のための動きに余念がないウェールズ内の情勢から、その連携は必ずしも一枚岩などではない。

いつマーシアが自国に攻めてくるのか、ただそれだけを懸念する各小部族国家群は、同時に降りかかる責務の火の粉を回避するため、連合軍総司令官の地位に先の戦争で活躍した聖騎士を推挙させることを満場一致で決議し、半ば人柱の意味合いを持つ若き代表者はそうして、政治面と軍事面の両面から一方的に飛び交う矢面に立たされることとなったのである。

しかし今、ここポウイスに駐屯していたマーシア王国軍を撃退したのは、その聖騎士ですらなかった。

盛り上がった丘の上に、ポウイスの王都がある。

ポウイス王国は“オフアの防塁”に沿うように広大な領土を保有しているため、各国家間の交易都市としても機能する王都の戦略的・経済的価値は非常に高く、ここを制圧するか阻止するかに序盤戦のすべてがかかっていると言っても過言ではない。

雑然とした家屋や商業施設が建ち並ぶ王都の東側、ウェールズの内寄りにある王城から少し離れた、小ぢんまりとした広場にその男はいた。

目の前に構える王都の入口を見据えたまま、その視線の先に映るのは果たして敵の姿か、それとも今後の青写真か。

誰よりも“炎”という言葉が似合う男であった。

鳩の血を想起させる紅い瞳、燃え立つような髪もまたほんのり輝く赤色で、男の凶暴な気配をさらに引き立たせている。

すらりと整う容貌の輪郭、大きな目と細く高い鼻筋、そして広く薄い唇を見れば男はまさに美青年であったが、そこに隠そうともしない情念が、不用意には近寄りがたい獰猛な雰囲気を完成させていた。

「ふん、他愛もない。…やはりあの男がいなければマーシアはこの程度か。魔人ならば愉しませてくれると期待していたんだが…、ここにいないのでは話にならん」

「若様アツ…！」

老翁とした男の呼び声に、青年が振り返る。

「どうした、ジイ。お前には民の移動を命じておいたはずだが…？」

息せき切りながら青年に駆け寄る老人は、しばらく呼吸を整えた後、言葉を繋げた。

「どうしたもこうしたありません…！ 若様のポウイス制圧を聞いて、各国から『独断での行動は横暴だ』との反感が相次いでいます」

そんなことが、と青年が一蹴する。

「安全地帯に入り浸る連中の戯言など、適当にあしらっておけばいい。程よく甘い汁を吸わせてやれば、奴らは喜んでモグモグと口を閉ざすさ。…人は皆、甘いモノに目がないからな」

「しかし、聖騎士殿はそうではないでしょう。…こちらに彼女が向かっているとの報告も上がっております」

途端、男が嬉しそうに破顔した。

「そうか、あいつが俺の下へ来るのか。…なら、俺もそれなりに正装して歓迎してやった方がいいかな？」

お気に入りの私服を着る自分の佇まいを見せて、しかし老人は肩を竦めるに留めた。

「そのままの方が、個性的でよろしいでしょう」

「そうか？ ならば、このまま待とう」

言つて、男は入口の門に向き直つた。

「見る。自分で勝ち取る栄光は、やはり何物にも換えがたい快樂だとは思わないか？　どんな幸福も、自分の力で勝ち取つてこそ意味がある。至上の喜びを存分に堪能することができる。」

「…他の連中は、こんな当たり前のことを知らないから保守的になるんだ。俺には到底、真似のできない生き方さ」

「どなたも若様の真似などできません。そんなことをすれば自らを滅ぼしますからね、彼らは利口なのです」

「消極的な賢者だな。国民のためではなく、自分たちの懷をぶくぶくと肥えさせるための“ルール”だと言えば、後世まで残す後ろめたい無知どもを作らずに済むというのに」

「堂々と敵を作るよりも、必要な嘘で装飾した握手のほうが遥かに平和的だからですよ。国民は、それとは気づかせずに掌で踊らせるのが効果的だということは、誰もが知っています」

青年は思わず苦笑した。

「いつにも増して毒舌だな、ジイ。俺よりもよっぽど腹黒い黒幕に見えるぞ？」

ジイ、と呼ばれた老人が微笑む。

「腹黒さで言えば、若様に敵う相手はおりますまい。…北のラインハルト王と言えば、誰もが震える暴君として有名でございますからね」

「そんなに誉めるなよ。大して褒美は出せんぞ？」

「最初から期待しておりません」

ラインハルト 北の強国“グウィネズ王国”の王位に若くして戴冠した男であり、その大胆不敵な政策と傍若無人な振る舞いから、ウェールズ諸国に“暴君”として悪名を広めている青年である。

彼は四年前、病床にあつた前王の急死から王位を継承したのだが、そこには陰謀説や暗殺説などの黒い噂が国内外を問わずに広まっており、何かと話題には事欠かない男であることはウェールズにいる者なら誰もが既知としている事実だった。

そして、そのラインハルトから愛敬をもつてジイと呼ばれているこの老人は、名をルシアンと呼び、代々から王家たるラインハルトの一族に仕えてきた忠実なる片腕であり、五十に達する今でこそ衰えてきた印象があるが、槍の名手としても評価が高かった人物である。

ラインハルトは、口元に笑みを絶やさずに言った。

「自分に正直なのは良いことだ。上辺を嘘八百で塗り固めた連中の笑顔よりも信頼できる」

「逆に、若様を信用できない私はどうすればよろしいでしょう？」

「それはヒドイな。こんなにも長い付き合いなのに、そんなに俺が信用できないか？」

「若様に、人様からの信頼があるとでも？」

ふと、ラインハルトは考え込むように腕を組んでから、首を傾げた。

「俺は、約束は守る男さ」

「先月、私が選りすぐりの娘たちを集めたにも関わらず、若様はついに相手を選ばれませんでしたか？」

「まだ期限まで六ヶ月もあるじゃないか。…それに、俺が心に決めた相手は、後にも先にも一人だけだ」

呆れたように、ルシアンが言う。

「あの聖騎士殿ですか。この前もこっぴどくフラれたばかりだと言うのに、まるで懲りておりませんね」

「俺は諦めの悪い男でね。この世に二人といたくない極上の女は、必ず手に入れたいんだ。…あいつは、俺に愛でられるためにウェールズに舞い降りた白銀の天使さ」

「まさか…、ここに攻め込んだ本当の理由は、彼女の気を引くため？」

「名案だろ？」

そう言って目配せするラインハルトに、ルシアンは小さく溜息をついた。

「各国の連携を思うように纏められず、遅々として進まなかったポ

ウイスの奪還がまさか、アセルス殿の気を引くためとは誰も思いま
せんでしよう。…他ならぬ暴君としての悪名を広めるに終わるだけ
ですよ」

「少なくとも、お前が知っている。俺の理解者は、俺が何も言わず
とも察してくれるから心強い」

「私でなければ、誰も若様の相手は務まりませんでしょう。…引退
は、まだまだ先の話ですか」

フツ、と男が微笑した。

「俺が生きているうちは引退などさせんぞ。俺とアセルスの晴れ姿
をじっくりと目に焼き付けてから死ね」

「殺すまで傍に置いて下さるとは光栄です。…なに、私も若様が聖
騎士殿に完全にフラれるのをしっかりとこの目で見届けるまで、ど
こまでもお供いたしますよ」

ラインハルトが笑う。

「そんなに期待してくれているとは予想外だったな。…なら、俺も
その期待を完膚なきまでに裏切ってやるとするか」

途端、二人の表情が途轍もなく高純度の殺意に気付いて険しくな
る。

「…無粋なお客様が、アポイントもなしに来られたようです」

王都入口の門前、周囲の大気を歪めるほどの呪詛を身に纏う、あ

まりにも禍々しい騎士の姿がそこにあった。

「ふん。殺意を纏いながら丸腰とは、随分と失礼なヤツだ」

それはあたかも、物質化した暗黒がたどどしく人型を真似て、気紛れから思い付いたように邪悪の化身を模造した悪意の塊に違いなかった。

間違つても人間とは見えぬ面容は果たして本当に兜のせいかな、歪な黒の鎧で全身を隙間なく固めた姿は、まさしく鬼を彷彿とさせる。

途端、その黒い騎士の脇から夥しい数の黒犬が疾走して王都に侵入していくのを見やり、ラインハルトは帯剣していた刃を抜いて、ルシアンに向かって顎を動かすことで無言の指示を出した。

「お氣をつけます、若様……！ アレは、常軌を逸した膨大な怨念に憑かれた、魔人の手先でございます……！」

「見れば分かる。あれほどの邪気を帯びる人間など、そうそう居るものじゃない。……どうやら、魔人も本格的に動き始めたようだ。西のダヴェッド王国を滅ぼして、次は何を企んでいる……？」

黒騎士は何も言わず、しかしいつの間どこから取り出したのか、これもまた異様に黒く塗り染められた剣を握っている。

「ジイ、お前はさつさと小煩い犬どもを蹴散らしてこい。こんな悪趣味な鎧を人前で平気に着込む変態は、何の因果か俺に用があるらしいからな」

「類は友を呼ぶという言葉をご存知ないのです？」

「言ってくれるじゃないか。…俺は、他人に媚び諂うように尻尾を振る犬が大嫌いなんだ。…野犬狩りは徹底的にしてくれ。クサイ臭いが移ると、街を消毒したくなる」

宣告もなく躍動する黒騎士が刹那に迫り、黒の一閃とラインハルトの銀閃がぶつかり合う。

音を立てて沈下する若き国王の足場が、その一撃に秘められた凄まじさを物語っていた。

「ジイ、行けッ！」

「お気をつけてッ！」

ルシアンが走り去っていくのを横目で確認し、ラインハルトは改めて黒騎士をまじまじと見る。

おぞましい異形の人面から蒸気のように荒々しい呼気が伝わるほどの接近で判然とするその容貌は、確かに兎にそのまま鬼の顔が彫り込まれたように見える。

漆黒の光沢を塗す硬質感はまさしく非人間的であり、それは正しく純粹な憎悪や殺意から創造された彫刻に相違ないように思えるが、しかしラインハルトは、どこか異質な違和感を覚えていた。

ただの彫刻ではありえない脈打つような生々しさには、今にもその人面の無機質な表情が動き出しそうな敵愾心が爛れるように満ち満ちている。

永遠に求めて止まぬ飢渴感と、決して癒されぬ殺戮への欲望、そして痛風の如く襲い続ける絶え間のない激痛をこそ堪えたような、そんな限りなく人間的な慟哭を刻むその表情。

これではまるで、この鎧そのものが本当に生きているようだ。

ならば、その内側に息づく人間は、いったいどのような責め苦に苛まれているというのか。

…、しかしラインハルトは同情しない。

「お前が何者かは大して興味はないがな。俺を前に剣を抜くヤツは全員、敵だと相場が決まってる」

互いに剣を弾いて瞬時に間合いを取ると、ラインハルトは黒騎士の底なし沼のような瞳の奥を見据えながら不敵な笑みを浮かべ、片手を挙げる。

「正々堂々とした騎士道精神は善人のすることだ。俺とお前には似合わない」

その瞬間、二人の位置からちょうど矢頃にある周囲の家屋の屋根に据え付けられた物干し台に、八名にも及ぶ弓兵が一斉に立ち上がって矢を構えた。

黒騎士が顔を上げ、その一瞬の隙に、片手を下ろしたラインハルトが一足飛びに後退する。

国王を護衛する精鋭の弓兵部隊。

張力の強い弦を引く強靱な膂力に加えて、一点に集めた貫通力を宿す矢を限界まで維持する握力、そして一撃必殺を前提に磨き抜かれる卓越した射術を兼ね備えた、恐るべき狙撃手たち。

空気を切り裂く音、が聞こえた瞬間には緊張に張り詰めた弓から解放された矢が黒騎士を標的に、ことごとく。

その、ことごとくが黒騎士の決して頑強とは見えぬ鎧に弾き飛ばされ、先端をひしゃげられた矢が地に落ちていくのを、若き国王は眉を顰めながら確かに見た。

何事もなかったように立ち尽くす黒騎士は、その鎧に傷一つなくラインハルトに視線を戻す。

信じられぬ強度であった。

通常、これほどの強力な加護を恒常的に発現している常時発動型の宝具には概ね、その性能の高さに比例する当然の代償を必要とする。

それは魔導の絶対法則である“大前提の原則”に該当する等価交換であり、その神秘を得るために世界に支払わなければならない不可欠な代価であるからだ。

大前提の原則とは、要約すると二つの決まり事に絞られる。

一つ、無から有は生み出せない。

一つ、神秘や奇蹟に残留する代価が尽きた時点で、発現するあら

ゆる効果は消滅する。

従って、それ自体が超自然的な神秘の具現である宝具の能力は、しかし勿論ながら万能ではなく、この原則に忠実に従い、その効果はあくまでも、無から有を生み出すことのない等価交換を前提として発動する。

そのため、放たれれば頭蓋骨をも容易に貫きかねない熟練者の矢を弾き返すほどの防御力を秘める黒鎧は、当然ながらその強力な保護を恒久的に維持するための代償として、世界が提示する魔力や生命力を支払い続けなければならない。

しかしながら、どのような人間であろうとも不死や不滅を前提に存在できぬ以上、半永久的に魔力や生命力を代償に消耗することは不可能であるため、この鎧を着装する人間の未来は必ず、破滅への一途を辿るのが常であった。

ゆえに、その強力な鎧の性質は多くの場合、呪われた宝具と認識され、結果として必然的に“負”を帯びる。

だが、この黒騎士はそれほどの強力な防御力を維持する宝具を身に着けていながらも、衰弱している気配が微塵も感じられなかった。

「どういうことだ…？ 無限の生命力を持つ人間など、聞いたこともないぞ…？」

ラインハルトの呟きに反応する風でもなく、須臾も待たずに黒騎士が踏み込む。

ルシアンに鍛えられたラインハルトの剣技は、並の騎士たちとは

比べるべくもない水準に研ぎ澄まされていたが、その遙か上をいく黒騎士の剣技を前にしては、辛うじて太刀を合わせるのが精一杯であった。

かち合う剣の鋭い悲鳴が繰り返し広間に響くたびに、ラインハルトはじりじりと後退して、その表情を苦々しく歪めていく。

体格で言えばラインハルトとそう大差ないように見える黒騎士は、しかし人間離れした膂力から幾度も鋭い剛剣を放ちながらも、まるで息切れすることなく踏み込み、その速度を緩めることなく襲いかかる。

防戦に徹するラインハルトに休息の時間も与えまいと、次々に黒い剣撃を閃かせては前進する黒騎士の猛攻に、家屋で待機する射手たちは両者の密着状態から援護射撃もできずに、きりきり、と神経を擦るように弦に圧力をかけ、敵の隙を虎視眈々と窺うことしかできなかった。

黒騎士の一刀を受け止めるたびにラインハルトの両腕が痺れ、筋肉を痛めながら骨が軋む。

横一閃の強烈な薙ぎ払いに剣を合わせるが、用心深く服の下に着込んでいた手甲を刀身に当てて体重をかけていなければ、相手の質量に耐えることもできずに吹き飛ばされていただろう。

だが、ラインハルトが苦戦を強いられている理由については、なにも黒騎士の膂力や速度ばかりではなかった。

彼の剣技が、その性格を反映するが如く剛剣を得意とするなら、黒騎士の剣技はまさしく河川のように様々な表情を見せては変化す

る流剣であつた。

通常、物理法則とは魔導と同じく、一過性の現象に纏まるものである。

例えば、上段から下段に向けて剣を振り下ろす。

これは対象に最大の損失を与えるために、その最短距離を最大の加速と体重の移動をもって、初めて効率的な破壊をもたらすことができるからだ。

ゆえに、上段から下段にまで振り抜いた剣をそのまま、再び上段にまで斬り上げようとしても、その切れ味は著しく低下する。

物質の動きのほとんどは単純かつ明快で、それは一方通行の予測不可能なエネルギーの流動にすぎない。

ならば。

もし、この“力の流れ”をある程度ながら把握することができる天性の第六感覚に加えて、そのエネルギーの流れが変化する特異点に合わせることで自由自在に太刀筋を変化させることができたとしたら、どうだろう。

もし上段からの斬撃が途中でぴたりと止まり、その瞬間に刃が翻えるやいなや同質の速度をもって水平や鋭角に疾走させることができたなら。

もし一点に破壊力を束ねた突きが、目標を外してもなお同等の質量を秘めて水平に、あるいはそのまま上下に剣を滑らせることがで

きたなら。

それが、黒騎士の恐るべき“技”の繚乱であつた。

人間の肉体が潜在的に抑制する耐久力の限界を維持したまま繰り出される、ブリテン最強の代名詞たる聖騎士たちの技量をも上回るのではないかとさえ思える剣技の咆哮。

それを、どれも紙一重であるとはいえ防ぎ続けているラインハルトの実力もまた驚愕に値すべきことであつたが、防戦だからこそその善戦にある彼の心中は、決して穏やかではない緊張感にしかし畏縮することなく、むしろ喜々として昂ぶっていた。

「ハッ、もつとだ！ もつと俺を愉しませろッ！」

そう、ラインハルトは己が窮地にあるこの状況をこそ、愉しんでいるのだつた。

生死をかけた戦いとは言わば、相手を支配するために勝利を前提とする、個人対個人の戦争であると彼は思う。

その結果、自分が負けたとしてもその先に待つ死を享受するのみであつたし、逆に自分が勝者であるならば、思う存分に相手を征服し尽くして欲望を満たし、また次なる獲物を夢想しながら愉悦に痴れる。

それが、勝者に与えられた褒美であるからだ。

逆に、彼がいまだに理解できないものが騎士道精神なるものであつた。

そもそも、彼がこの世に生を受ける前から混沌とした戦乱にある今の時代において、なぜ、騎士道などという戯言をこそ正しい精神の在り方だと騎士たちが認識しているのかが分からない。

国を統べる王家の唯一の正統後継者として生まれたラインハルトは、そこから毒にも薬にもならない政治を議論し、猜疑に満ちた笑顔で頭を垂れる家臣たちの表情から、むしろ独善的な卑劣、狡猾な残虐性に類する悪辣さをこそ理解し、それを上回る暴虐を振る舞うことができた。

人も獣も本質的には平等に弱肉強食、ゆえに生命とは生まれ付き遺伝する難病のように不平等であり、神など居るはずもないこの世では、強者が弱者を支配するのは当然なのだ。

だからこそ、彼は嬉しかったのかもしれない。

恥も外聞もなく偽善を振りかざす騎士サマなどよりも、生命を奪うことに一切の躊躇もなく殺戮に泥酔する黒騎士の方が、より子供じみた人間的なワガママを見ているようで飽きないのだから。

「だが、残念だな」

二人の剣閃が幾度となく絡み合い、尋常ならざる殺気を互いに交差させながら再び激しい鍔ぜり合いに持ち込ませたラインハルトは、そのまま泥土のように混濁している黒騎士の双眸を真正面から見据えて口を開いた。

「元々がプライドの高い人間らしいな。お前の剣には、狂気を台無しにする美意識がある。永い訓練で技を刻んだ肉体がそう反復する

のか？ …もつと肩の力を抜けよ、俺が手品を見せてやる」

しかし、黒騎士は応えない。

ラインハルトの剣を強く弾いて後退させ、そのわずかな間合いを利用して、バネのように弾力的な躍動の接近から追撃の剣が振り抜かれる。

その、寸前。

黒騎士が何かに足を取られたように躓き、滑稽な動作で前のめりに倒れると、そのまま大地に両手をつく形で姿勢を崩した。

「王の前には跪く。当然の礼儀だな」

何が起きたのか分からずに困惑する黒騎士は突然、ラインハルトに顔を蹴られて無様にも地面に倒れた。

金属同士が強く衝突した鈍い音が響き、しかしラインハルトもまた激痛に顔を歪める。

脚部にも隠し装甲を身に着けていたために下肢骨にまでダメージが浸透することはなかったが、それでも物理的な反動が伝播して右足に痺れをもたらしていた。

対して、その身に受けた初めての屈辱に喉を鳴らす黒騎士はしきりに身体を震わせ、更なる憤怒を塗り固めるようにして呼吸を荒げている。

だが、ラインハルトは構わずに街路の方へと歩くと、屋上で射撃

姿勢のまま待機している弓兵たちに別種の合図を送ったあと、小さな樽を片手に持って、いまだ地面に顔を向けている黒騎士に近づいていく。

途端、怨敵の接近を察知した黒騎士が立ち上がったと同時にラインハルトが樽を投げ、しかしそもそも武器ですらないその道具は当然のように漆黒の鎧の前に碎け散る。

しかし、黒騎士はその奇妙な違和感の正体に気づけずに、そのまま立ち尽くしていた。

想像を絶する膨大な“負”に保護された鎧の表面に、何か粘液状のモノがぶちまけられている。

片手を挙げたラインハルトが、ニヤリ、と笑う。

「良い具合に“あぶら”が乗ったじゃないか。…そんなお前に、俺からのワンポイント・アドバイスだ」

そう言って、何の躊躇いもなく手を下ろす。

「そんな暗い恰好をしてるから陰気クサくなる。もっと明るくなれ」

その瞬間、弓兵たちの放った矢が不思議にも朱い軌跡を宙に残しながら、禍々しい漆黒の騎士に向かって滑空する。

だが、もちろん結果は変わらない。

黒騎士の鎧は目にも止まらぬ速度で迫る矢をすべて弾き、わずかな傷もなく堂々と存在して主を守り抜く。

否、守り抜く、はずだった。

「

」！

怨嗟と赫怒が入り混じった黒騎士のおぞましい叫びが、唐突に広間に響き渡った。

あの、限界にまで引き絞られた弓の弦から解放された矢には、黒騎士の鎧の表面に大量に付着したオリブ油を引火させるための火が用いられていたのである。

油を塗った鏃に火をつけただけの火矢。

無論、そのものの殺傷力こそは、やはりあの鎧の前に無力であったが、瞬間的に火勢を広めて全身を炎上させることで、結果的に致命的なダメージを黒騎士に与えたのである。

一息に燃え盛る炎に包まれた黒騎士は全身を炙る高熱を払うように暴れ回り、その光景を、火を放った張本人であるラインハルトがさも愉しげに見やった。

「これぞ、真正正銘の燃える展開ってヤツだ。今のお前なら、万人に喜んでもらえること請け合いさ」

見境なく身悶える黒騎士は無意識に後退っていき、広間の中央に設えた泉の外周に足を取られて水の中へと沈み込む。

垂直に高く跳ね上がった水柱が頂点まで昇り、細かい水飛沫が辺りに飛び散った。

…、余裕に見えていたラインハルトの表情が、少しずつ緊張の色を帯びていく。

「…さて、普通なら身動きできない重傷のはずだが…。いかに鎧が強固でも、中の人間が生身である以上、激痛だ、などという生易しい痛みじゃないはずだ」

静寂を取り戻した広間の不気味な静けさ。

まだ起き上がる気配のない敵が沈む泉を訝しげに見つめながら、ラインハルトは細心の注意を払って待機中の射手に追撃の矢の指示を出す。

猛烈な勢いで飛来する矢に、水中に没したままの黒騎士はまさしく格好の的である。

この泉の水深は、成人の膝ほどしかない。

ゆえにこの程度であれば、矢の威力をほとんど減衰させずに相手を威嚇することができたが、勿論、彼はこの射撃による直接的なダメージを最初から期待していない。

先の接近戦から、黒騎士の技量がある程度ながら把握することができたラインハルトは、まともに剣を受け合えば自分が圧倒的に不利であることを正しく理解している。

たとえ相手が水屑となつて姿を見せぬとしても、不用意に泉に近づくのは無謀を通り越した自殺行為であり、逆に屋上から動かない目標を視認できる弓兵たちの狙撃の方が、相手との間合いを保った

うえで動きを牽制することができた。

それよりも問題となるのは、あの業火の直撃を受けてもなお、黒騎士が活動できるのか否かにあった。

全身を隈なく覆い尽くした灼熱の規模と高温から推測するに、普通はそのまま死亡しているか、最低でも敵が負った熱傷深度は重度でなければ不自然である。

当時の医療技術では知る由もないことであつたが、水疱や発赤などから進行するショック状態は勿論のこと、皮膚の壊死や炭化もおかしくはないレベルによる脱水症状と大量の体液の喪失、さらには全身性炎症反応症候群と呼ばれる細菌感染をも引き起こす危険な可能性があるほどの重傷を覚悟しなければならぬ熱量が、油で引火したあの火焰にはあつたのだ。

また、高温の気体を思わず吸い込んでしまうことで気道にすら熱傷を負うことがあり、全身を絶えず襲う疼痛にも耐えなければならぬ。

六十秒。

泉に沈んで偶然にも消火できたとはいえ、それだけの時間を灼熱に襲われ続けていた黒騎士は、しかしそれでも立ち上がって見せるのか。

「さあ、正体を見せろ、化け物」

その言葉が言い終わるのとほぼ同時に、巨大な水柱が緩やかに飛沫を上げて隆起した。

泉から起き上がるように屹立した水塊は、重力に従って人型の黒い輪郭を残しながら水煙を上げる。

その奥に、漆黒を具現する邪悪な騎士の姿を見やり、ラインハルトは心からうんざりした様子で舌打ちをした。

「クソッ、無傷か。…矢も火もダメときたら、いったいその種は何だ…？」

「！」

悪態をつく彼の言葉を、猛獣の咆哮にも似た黒騎士の絶叫が広間に響き渡って掻き消した。

鬼の人面の、歪に模る口元が禍々しく裂けて無数の牙を上下に開かせ、そこに覗く粘着質の唾液を細めながら、もはや人とは思えぬ獣じみた低い声質が暴走して大気を轟かせる。

あまりにも奇怪な声であり、そして鎧であつた。

人面が動くことも奇怪であれば、あたかも人の言葉を忘れた亡霊の叫びのような咆哮に、ラインハルトは改めて、自分の目の前にいる相手が常軌を逸脱した存在であることを悟る。

「地獄のアケロンに溺れて幻想に酔ったか？　だとしたら勿体ないことをしたな。そんな極上の体験は、なかなか味わえないものだぞ」

急激に膨張する黒騎士の猛り狂う殺気は、離れた家屋で待機する射手たちでさえもが恐怖に身を凍らせるほどの凄まじいものであつ

た。

自分たちのいる狙撃地点が、悪魔を想起する容貌のおぞましい敵から相当に離れているにもかかわらず、油断すればすぐにでも眼前に迫り、その黒剣を閃かせるのではないか。

そんな、心の奥底に絶えず淀んでいる不安を無理やり揺さぶるような黒騎士の大音量に気圧され、最も精神力の弱かった射手は計らずも弦を引く矢を手放してしまい、唐突にも第二戦の幕を開ける。

「チツ、余計なことを…！」

だが時すでに遅し。

恐怖に緊張した一番手に続いて放たれた八本の矢は真っ直ぐに黒騎士へと降り注ぎ、しかしそのすべてがあまりに脆く弾かれる。

途端、天を仰いで叫ぶ黒騎士の口から誰もが戦慄する不気味な黒煙の塊が吐き出され、水槽の中で浮上を遂げようとする水泡のように舞い上がった。

それは、黒騎士に憑依する無数の怨念の一部であった。

醜悪に形を変え続ける黒煙は、時に人面を模っては時に獣面を模りながら歪に変形し続けて空高くに昇り、頂点で一時的に停止したかと思うと突然に爆発して、その勢いに加速する形で射手たちに襲いかかる。

黒煙から分裂したのは、射手と同数の黒犬だった。

赤々と輝く不吉な目、人間大の巨体に漆黒を纏い、鋭利な牙と爪が光の下で不気味に映える、忠実なる邪悪の尖兵。

「
」

八方から上がる悲鳴に部下の危難を感じとって顔を顰めるラインハルトだったが、振り返る間もなく爆発的な瞬発力で踏み込んでくる黒騎士の斬撃を防ぐのに全力を注がなければならなかった。

瞬時に間合いをゼロとした両者の睨み合い。

あからさまな憎悪を隠すことなく剥き出しにして呼吸を荒げる黒騎士の呪われた眼光を、ラインハルトは臆することなく見返した。

「人間をやめて辿り着いた結果がそれか。…お前の行為は理解できそうにないが、手段を選ばないというお前には共感してやるよ…！」

「
」

刹那、ラインハルトの剣を真っ向から弾き、邪悪を象徴する騎士は体勢の崩れた標的に向かって下段から黒剣を閃かせる。

「クツ、速い
！？」

弾かれた衝撃をそのまま利用して側面に転がり、黒騎士の剣を非常に危ういタイミングで躲す。

頬にはつくりと裂けた斬撃の傷痕から滴る血を舌で舐めとり、さらに接近する敵の剣に刃を合わせて間一髪、防ぐ。

「ぐ　　ッ!？」

しかし、先ほどまでの剣撃から更に威力を増した、途轍もない衝撃がラインハルトに襲いかかった。

剣を握る両手が今の衝撃で吹き飛んだのではないかとさえ錯覚するほど、両腕にはもう、この一撃だけで感覚がなくなってしまっていた。

しかし、戦慄する暇すら与えぬと襲いかかるは、もはや黒の閃光としか見えぬ速度の、しかし直角に軌道が変わる黒剣の不確定性斬撃。

ラインハルトは反撃しないのではなく、できないのだ。

たとえ黒騎士の剣撃が空を斬ったとしても、その速度を維持したまま跳ね上がる下段からの奇襲。

左右へと繰り返し流れてはいきなり上段下段へと切り替わり、その一瞬の隙を突く刃先を辛うじて躲すたびに、的確すぎる不意打ちに怖気が走る。

「こいつ…!　これじゃあ、まるで　　ッ!？」

そう。まるで、こちらの動きをすべて観察し終えたとしても言わんばかりに。

「く　　、うの…、ッ…!」

右腕に迫る横一閃を、剣を縦にして防ぐやいなや、すぐさま下段

へと刃先が滑り、ラインハルトは右脚へと狙いを変えていることに気付いて慌てて左に飛ぶ。

空を斬った黒剣は、しかし次の瞬間に一点突破の突きへと変貌し、これを鼻先で躲すも、そのまま空中で加速する最中に胴体部への斬撃へと鋭角に切り込んでくる。

ラインハルトは、徐々にはあつたが、しかし確実に押され始めていた。

元々が、双方の戦力差に大きな開きがあつたのだ。

一撃に秘められた相手の膂力に筋肉の疲労が蓄積し続け、その速度にも目が追いつかなくなりつつある。

完全には防ぎきれなかった黒剣の軌跡は、すでに無数の創傷となつて全身に浅く刻みつけられており、そしてそのどれもが、あと一步の踏み込みというわずかな差で、致命傷となりうる部位に命中していることを瞭然とさせた。

だが、下手に動けばラインハルト本人も気づかないような微細で致命的な隙を相手に与えてしまいそうで躊躇してしまい、それが結局は防戦一方の不利な状況に自分を追い詰めてしまったことを彼は悟る。

先の小手先のトリックでは打開しようもない、そもそもトリックを使うほどの余裕さえ、とうに失せているラインハルトにとって、少しずつ王都入口の壁際に後退し続けている現状は、まさしく死へのカウントダウンに他ならない。

額に流れる大粒の汗の感触が鬱陶しく、迎撃の動作によって激しく振り乱す髪の毛先が視界に入るたびに、仄かな怒りが込み上げる。

「！」

人外の叫びを上げる黒騎士の渾身が、閃かせた剣ごとラインハルトを後方に吹き飛ばした。

「ぐうあ、ッ、…！」

硬質の冷氣と、彼の背中とが激突する。

「ふッ…、…！」

端正な口元から一筋の紅が零れ落ち、重く響く鈍痛が背の筋肉を痛めて肋骨にヒビを入れたことを、ラインハルトは精確に分析した。

だが、それ以上に最小限の動作で節減してきたはずの体力の消耗も、同時に蓄積し続けてきた疲労感によってついに限界を迎えようとしていた。

呼吸さえも惜しむほどの連撃を繰り出す黒騎士の致命的な一撃一撃を防ぎ続ける、それ自体は危険を予測するラインハルトの動物学的嗅覚が並外れて優れている証であったが、しかしその張り詰めた神経で実行し続ける回避の連続と敏捷性は、彼の体力を急速に奪い続けてもいた。

勿論、体力の消耗度で言えば、繰り出す攻撃のすべてを防御されている黒騎士の方が遥かに激しいはずであったが、まるで無尽蔵の体力を有しているとも言わんばかりの佇まいは、息も乱れずに余

裕綽々とした風である。

圧倒的優勢に立つ黒騎士を恨めしい眼差しで見やるラインハルトは、ここが生死を分かť決定的な正念場であることを直感した。

悠然と歩を進める黒騎士が、死神そのもののような威圧感を携えて近づいてくる。

冷たい光を放ť黒剣が、視覚から脳髓を腐食させるかの如くに毒々しい。

判断を誤れば、直結する未来は死だ。

残り少ない体力を見積もつても、最後の反撃を飾るに相応しい終幕の場面である。

「…知ってるか？」

唐突に、ラインハルトは口を開く。

しかし、黒騎士は反応さえしない。

啞内は粘ťく鉄の味が充満し、呼吸するたびに心肺機能が荒くなるのを自覚しながら、それでも構わずに言葉を繋げる。

「ジイから教えてもらつてね、人生には三つの坂があるんだとよ。…一つは幸福の坂。もう一つは不幸の坂。…そして最後の一つは

—

両手で強く剣を握りしめ、ラインハルトが決然と前を見据えた。

「まさか」さ…ッ！」

最後の一言を言い終わると同時にラインハルトが大仰に剣を振りかぶったかと思うと、黒騎士はまたしても唐突に足を取られたように体勢を崩し、不可視の招き手に強く引きずり下ろされるが如くに背中を地面に激突させる。

しかし、視力が発達している者ならば、目を凝らせば見えるのかもしれない。

黒騎士の両足からラインハルトの剣柄に向かって、毛一筋ほどもない薄さをした極細の糸が伸びているのを。

それは黒騎士の両足に何重にも巻き付いており、ラインハルトが強引く張っても容易には千切れぬように完成されていることから、その見た目とは裏腹に意外な強靱性を備えていることが窺い知れる。

そしてこれが、ラインハルトの用いるトリックの正体であった。

ミステリーマジック 魔力を操って神秘や奇跡を自在に行使する魔導ではなく、道具と技術を駆使して人為的な錯覚と先入観を相手に植え付け、人間という高度に発達した頭脳をこそ欺くことで神秘的に“魅せる”技法。

目と耳の刺激に騙されやすい人間の肉体機能に着眼し、手先の器用さを究極にまで突き詰める訓練をもって技を磨き抜く努力と知恵の結晶。

それは、詩想と探究の歴史である。

古代エジプト当時から存在したと言われ、ほんの少しの好奇心から神秘に興味を持ち、それを万人が愉しめるように魔術士たちとはまた違った視点から、安全に奇跡を実現せしめる方法にこそ類い稀なる叡智をこの聖域に集約させた先人たちの血と汗が息づいている。

人々は、それを“奇術”と呼ぶ。

奇術は神秘でなければ意味がなく、隠匿すること自体が本質であるがゆえに、人々はその謎をこそ愉しむことができるのだ。

だからこそ、正体が明かされた奇術はもはや神秘ではなく技法となり、その謎を愉しむことができずに感動が薄くなる。

魔術士ではないラインハルトは、この奇術に目をつけた。

勝利を飾るために必要な演出。

超自然的な力である魔術ですらない不可思議な現象を操り、謎めいたまま圧倒してみせることで“こいつはただ者ではない”と相手に思い込ませる戦闘技法。

ラインハルトの剣は独自の奇術知識を利用した特別製に詭えてあり、その柄には後世で“インビジブルスレッドリール”と呼ばれる、限りなく不可視に近い極細の鋼糸を伸縮自在に巻き取るための細工が施されていたのである。

黒騎士が気づかなかったのも無理はない。

それは目を欺くための叡智が結集した最高峰の道具であり、ただ

でさえ視認困難であるこれを、激戦さながらの戦闘中に見抜くことは不可能に近いのだ。

ましてや全身を鎧で覆っているのなら、蜘蛛糸ほどの感触すら感じない鋼系の接触に気づくのは難しいだろう。

むしろ、あれほどの苦戦を強いられた状況下で、冷静に鋼糸を仕掛けたラインハルトの巧みな技術にこそ、舌を巻くべきであった。

姿勢を大きく崩した黒騎士の隙を突き、ラインハルトは敵の胴部に馬乗りするやいなや、反撃の思考も与えるものとすぐさま剣を走らせる。

「おおおおおおッッ！」

狙うはただ一点、あらゆる生命体の急所である心の臓。

全体重を乗せ、大地に剣を突き刺すように全力で黒騎士の胸を穿つ。

これを防ぐのは容易ではない。

たとえ黒騎士の方が身体能力に優れていようと、倒れた瞬間に迎撃行動を取るのには言うに易く行うに難し。

顔を上げた、その時には胸を貫こうと奔る殺気の刀身を、黒騎士は虚ろな眼差しで確かに捉えた。

必殺を確信する若き国王と、その命をこそ奪いに現れた漆黒の死神が、その刀身の行く末を刹那に見る。

異様に響く金属の激突。

ラインハルトが見たのは、ある意味では、自分の予想通りの結末であつた。

「くそッ……！」

剣の刀身が、黒鎧の前に敗れて碎けていた。

折れた切っ先、刀身には三分の二ほどの刃が残っていたが、あと数撃も振れば粉々に碎けてしまいそうなほどのヒビが入っている。

「こいつ……ッ！ 本当に硬い……ッ！」

途端、黒の閃光が迫る予感に従って全力で後退したその瞬間に、黒騎士の逆襲が始まつた。

前髪の毛先を切り裂いた黒剣を紙一重で躲しながら着地したラインハルトは、しかし剣が通じなかった動揺からか、それとも体力を消耗し尽くしてしまったのか、力の入らなくなつた膝が唐突に折れて体勢を崩してしまう。

「……………」

下段から閃く黒騎士の剣。

それを見事、傷だらけの剣で防御に間に合わせたかに見えたラインハルトの迎撃はしかし、本来なら彼の予測通りに辿るはずだった黒騎士の斬撃軌道が何の前触れもなく変化し、あたかも稲光の如き

不規則運動の軌跡を残す剣閃によって躲される。

「なッ！」

これには、さすがのラインハルトも瞠目した。

變幻自在にして縱横無尽。

それが、瞬間的な直感力をもって臨機応変に太刀筋を変化させる、黒騎士の“流剣”の本質。

事前に相手が迎撃するタイミングと返し手を予測し、多彩な攻撃を組み立てるのではなく。

相手が絶対の確信をもつて迎撃行動を実行した“後”にこそ、この細緻な剣技の真価が発揮される唯一無二の瞬間がある。

!

「クッ！」

吼える黒騎士が放つ、俯角からの黒雷。

もはや回避も防御も許されぬラインハルトは、その無防備な首を晒しながらも深淵より迫りくる死を淡々と見つめることしかできない。

しかし、それを未熟と俯瞰するのはあまりに酷だろう。

どのような超人でも、放つ剣の軌道は常に直線を描く。

蓄勢された強靱な脚力から前方に踏み出す躍動。

溜めた力を解放する腰の滑らかな旋回と加速の重心固定。

肩から肘へと伝達し、手首から指先へと加速する殺意の体重移動。

そして、血の滲むような鍛練を経て初めて体得できる、極限にまで洗練された斬撃動作。

そこにあらゆる例外は介在しない。

なぜなら、それらの“力の流れ”こそが、本人が生み出した最高にして最効率のパフォーマンスを発揮するために必要不可欠な反射神経であり、その結果、肉体に刻み付けた反復運動に他ならないからだ。

それは人間が剣技を修練するための絶対条件であり、だからこそ、その限界が覆されることはない。

だが、天賦の第六感覚を備える黒騎士は、ここに不可測の特異点を組み込むことで非常識な物理運動を完成させた。

あたかも鏡面に乱反射する閃光のように、本来であれば曲折するはずのない直線軌道が上下左右に何度も折れ曲がる、常識の壁を突破した無限の死角からの加速。

計算された偶発性から生み出される、圧倒的な理不尽をこそ実現するために容赦なく不変の法則を制圧し、その人体に許された極限の性能をもって不可能を可能にする。

ゆえに、その名を“流動する導き手の如く”（ライジング・ロー
ド）

物理法則の特異点を神憑った第六感覚によって把握し、そこから派生する無限の力の分流を利用して、斬撃の加速と軌道の千変万化を実行する剣技の突然変異。

想像を絶する角度とタイミングからの奇襲を可能とする、この黒騎士にしか持ち得ない固有能力である。

これに反応できる人間は絶無だ。

喻えるなら、直球だと思って振り抜いたバットを躲すスライダーが、途端に鋭角に切り込むシュートとなって打者に加速するようなもの。

ゆえに、最高の踏み込みをもって迎撃の剣を放っているラインハルトに、漆黒の化身が放つ死を躲す手段などあるはずもない。

それは、超人が生み出した必殺の王手である。

これに抗う術を、黒騎士と比べれば凡人でしかないラインハルトが持ち得るはずもなく。

その必殺に対抗できるのは、ウェールズにただ一人。

「そこまでだ」

漆黒の稲妻が、白銀の流星と激突する。

決定的な死をもたらすはずだった黒騎士と、絶望的な死を受け取るはずだったラインハルトの前に、それは忽然と姿を現した。

着地の微風にたなびく金色の髪。

陽の光を受けて輝く鎧は銀色で、あたかもそれ自体が淡く輝いているかの如くに煌めいている。

その、後ろ姿だけを見ても天性の麗質を備えていると分かる謎の騎士の思わぬ乱入に、ラインハルトは途端に肩の力が抜けると同時に安堵した。

「やれやれ、希望の星が空から降ってくるとはな。あんまりにタイミングが良すぎるんで、感動しそうになったぞ。アセルス」

目にただけで混乱を強制する毒素を撒き散らしているかのような黒騎士の狂気に満ちた空気は、彼女が現れただけで清浄に洗われていくかのようだった。

それは一種の清涼剤のように、アセルスと呼ばれた騎士の豊饒な精気が、あの黒騎士の邪悪な気配を中和しているに違いなかった。

「下手に手を出せば怒るだろうから、黒犬に襲われていた兵士たちを助けたあと、様子を窺っていただけだ」

黒騎士の剣を弾き返した聖騎士は、振り返ることなくラインハルトに言葉を返す。

「私としては、限界まで待ったつもりだったんだ。…だが、それも

もう難しそうだったからな。お前には悪いが、これ以上は傍観できなかった」

ラインハルトは肩を竦めた。

「いや、これ以上ないぐらいの絶妙なタイミングだったさ。どうか、イマイチな俺に力を貸してくれ」

からかい気味に言ったラインハルトの言葉には反応せず、アセルスは初見となる眼前の敵を警戒したまま、柔らかな声音で静かに呟いた。

「蠱毒か。これもまた随分と悪趣味な呪法だな」

その、初めて耳にする言葉に、ラインハルトは怪訝な表情を浮かべて問いかける。

「コドクだと？　なんだそれは？　それがこいつの正体なのか？」

「そうだ。生きた人間を餌に“無念”を寄せ集め、人為的に造り上げた不浄の超人が、この黒騎士だ。

この世には、憎悪や恠気、殺意や復讐という強い感情を現世への未練として、肉体が滅んだあとと輪廻の輪へと昇華することを拒む魂の欠片たちが存在する。そういった負の残留思念を蒐集して肉体という檻に閉じ込め、その媒体となる人間を膨大な呪詛で改造するんだ。

だから、ある意味では人造人間だとも言うべきなのかもしれない」

「じゃあ、中の人間はまだ生きてるのか？」

大型の肉食獣が危険を察知して威嚇するような唸り声を発する黒騎士を油断なく見据えたまま、アセルスは応えた。

「生命体としては生きている。だが、人間としてはとうに死んでいる。…言ってしまうえば、自分の頭の中に想像を絶する悪意に満ちた無数の“他人”がいると思えばいい。永遠の狂騒を頭の中で繰り返されれば、誰だって人格を捨て、楽になりたいと願うだろう」

「だったら、最初から死んでる人間を使えばいいじゃないか。わざわざ手間のかかる方法で生きてる人間を使うこともないだろうに」

じりじり、と黒騎士が後退する。

「アレに憑いているのは、俗に悪霊や怨念と呼ばれる魂の欠片だ。そして、その彼らがこの世界に留まっている理由は、生前に抱いた未練や復讐を源にした“生”への執着が、輪廻を拒むからに他ならない。

だから、すでに死んでいる肉体には無関心なんだ。現実には生きている人間に憑依し、自分が“生きて”目的を果たすことが、彼らの異常な思考を正常だと思い込む要因であるからな。

つまり、生きている人間を基にしなければ、この無念を術式に使う蠱毒は意味を成さず、黒騎士を造り出すこともできないというわけだ」

ラインハルトが鼻で笑う。

「まるで蟻塚だな。人間という棲処に有象無象の死霊どもを棲息させるなど、よほどの変態じゃなければ思いつかん」

しかし、ラインハルトは軽く眉を顰めて続けた。

「だが、こいつは油を使った炎にも耐えきって見せたぞ。いくら死霊どもが味方しているとはいえ、そこまで人間離れするものか？」

「ラインハルト王、お前の喻えには肝心な部分が抜けている。蟻塚を成立させているのは、その中心に女王蟻がいるからだ。二年前、ダヴェッド王国を滅ぼした時と同じように、寄生蟲を体内に埋め込んで肉体改造を施したんだろう」

「ああ、そういうことが」

それならば、あの業火の直撃を受けても無傷でいられた黒騎士の不可解な不死性にも説明がつく、とラインハルトは納得する。

黒騎士は、致命的な熱量を秘める灼熱に耐性があつたのではなく、持続する圧倒的な高温のダメージを上回る細胞の再生速度をもって、肉体の損傷と修復を同時に繰り返していたのだ。

だからこそその無傷。

ゆえに黒騎士を倒すためには、尋常ならざる防御力を持つ黒鎧を貫き、さらには恐るべき回復力を備えた身体に、即死を前提とした致命傷を与えなければならぬことを意味していた。

あるいは、体内の寄生蟲をこそ標的にした特殊な攻撃手段をもって黒騎士の不死性を無力化させ、要の中枢を失った無数の怨念を暴走させることで、内側から崩壊させることも可能性の一つとして考慮できる。

だが、そのどちらもが実現するにおぞましい難易度を誇る行為を要求された方法であるのだった。

依然として険しい表情を崩さないラインハルトが、聖騎士を見やる。

「それで、勝算はありそうか」

「私が奴の前に立つてから、すでに数分が経つ。それなのに、奴は一度も仕掛けてこない」

それが何だ、と言いかけて、ラインハルトは黒騎士の方へと視線を流した。

苦痛と怨嗟を全身から溢れさせる黒騎士は、新たな敵の出現に踏み込みを躊躇い、凶暴な妖気の中に動揺の揺らめきを隠しているように見える。

少しずつ王都の入口へと後退する黒騎士の様子に注意しながら、ラインハルトは応えた。

「なるほどな。形勢の不利を感じとったというわけか」

「私が王都に着いた時には、すでにルシアン殿が軍を率いて黒犬を掃討していた最中だった。時間から演繹しても、そろそろの頃合いだろう」

入口前まで後退した黒騎士に対し、二人は敢えて仕掛けない。

充分な距離まで離れた黒騎士は即座に踵を返し、王都から急速に

遠ざかっていったが、それでも二人は動かなかった。

剣を地に向けて構えを解いたアセルスが呟く。

「もつと言えば、王都そのものが魔人の仕掛けた巨大な罠だった。バルゼフォンの一年間の戦いを無駄にするような後退の背景には、その勝利の余韻に無防備となった軍の中心人物をこそ暗殺する狙いを隠すことにあつたからだ。」

黒犬によって王都内を攪乱させ、その混乱に乗じて奴が目的を遂げること、ウェールズの氣勢を削ぐという計画だったんだろう」

「だが、そこにお前が現れた。後一步のところで邪魔をされ、形勢不利になった変態は尻尾を巻いて逃げる。実に分かりやすい勝敗じゃないか。…尤も、男の尻など追いかける気にもならんがな」

それは即ち、充分な手勢を揃えていない現状のまま追撃戦を仕掛けたところで、この先に待ち構えているかもしれない敵の伏兵と遭遇すれば、まさしく相手の思う壺であるからだと言っているに等しかった。

「問題は、こうした魔人の意図に気付いていながら独断で軍を動かす、あまつさえ王都の入口で敵の奇襲をこそ待ち構えていた、お前にある」

言つて、アセルスは剣を鞘に納めて向き直った。

「なぜ軍を動かした？ 無論、自分の国の兵であるのだから非難を受ける謂れはないのだろうが、今回ばかりはあまりに危険すぎた。自分の命を粗末にするような行動は、一国の王として相応しくないぞ」

「アセルス。王は言葉で民を動かすのではなく、行動で動かすものだ。ポウイス奪還はレヴィン王の悲願であつたし、全ウエールズの民の総意でもある。…それに、今以上に王都を取り戻すタイミングはなかったはずだろう?」

言つてから、ラインハルトは唇の端を吊り上げる。

「魔人は東に向かい、剣聖は南にご執心だ。どこに王都を守る戦力がある? 敵側から見ればむしろ、多方面から侵攻され包囲され易いポウイスで防衛拠点を築くより、国境の防塁まで後退した方が遥かに守り易いさ。ならば…、と考えられる敵の策も大方が予想通りだつた。何も畏れることはない」

「相手が、あの黒騎士だつたことを除けばな。…本当に、あともう少しで死ぬところだつた。あまりルシアン殿を哀しませるような行動はしない方がいい」

「安心しろ。ジイは出撃する前から俺を引き止めてたが、きちんと腹を割つて話せばすぐに誤解は解けて快く引き受けてくれたよ。やはり人と人が理解し合うためには、対話というものが必要だな」

覗き込むようにして含みのある笑顔を見せるラインハルトに、アセルスはあきれたように息をついた。

「ならば、その姿勢を他国にも向けた方がいい。お前の意志がどうであれ、評議会を無視した独断行動に各国からの批判が集まっている。…特に、南からの圧力は激しい」

「ただの野次馬だ。カーディフ王国に追従している国が多いのはな

ぜか、お前なら分かってるだろう。都合のいい最高の避雷針が現れたおかげで、自分たちは悠々と内政に従事して“国策”に心血を注げるからだ。軍事方面での責任はすべて“希望の星”が被ってくれるからな。

…そうして、奴らは口先だけの指導で体制作りに専心し、何も気づかない無知どもは知らず知らず、効率的に金を上納し続けていくって寸法だ。その金が、賢者どもの贅沢な食い扶持になっているとは夢にも思わずにな」

「人間たちが自分たちの社会を変えていくのは、ごく自然的な流れだ。それがどのような未来に続くのかどうかは、他ならぬ人間たちの手で決めていく必要がある。

それに、私は政治に興味はない。この戦争の根源にいる魔人を倒したら、私はすぐにでもウェールズを去るつもりだ」

ラインハルトはうつすらと笑う。

「あの“掃き溜め”を見捨ててか？」

「勿論、見捨てはしない。あの村についてはカーマ王国に自立支援を頼むつもりだ。私がいなくても生きていけるように、彼らは自分たちの手で、自分たちの生活を支えていかなければならない。…そうしなければ、彼らを本当の意味で救うことはできなくなる」

「トーマス王か。元ダヴェッド王国の重鎮だった男だな。…確かに、あいつならお前に対する信望も厚く、村の面倒を見てくれるかもしれない」

しかし、ラインハルトは一拍の間を置いて言葉を繋ぐ。

「だが、一度でも依存することに慣れてしまった人間は、そう容易く抜け出すことはできないものだ。…曰く、人はそれを“魔力”と呼ぶ。特に聖騎士という光り輝く魔力は、誰もが憧れ敬う一種の信仰のようなもの。」

お前があゝの“掃き溜め”のために働けば働くほど、そこに住む人間たちはお前に依存する。…アセルスなら、きっと自分たちを幸せにしてくれるに違いない、とな」

「そうした、最も弱い社会的立場に彼らを突き落としたのはいったい誰だ」

アセルスは、鋭く細めた怜悯な眼差しでラインハルトを見返した。

「永い戦争で村を焼かれ、生きるためにやむを得ず住み慣れた土地から流浪せざるをえなかった彼らを冷たく追い払ったのは、いったい誰だ」

誰も共倒れを望まなかっただけさ、とラインハルトが言った。

「死に損ないを受け入れて国家という枠組みに亀裂を走らせるよりも、労働力にもならない難民を切り捨てて国庫を蓄えた方がいいのは当然の判断だ。この戦乱の時代、いつ国庫を解放しなければならぬいほどにまで財政が消耗するのは予測不可能だからな。」

…それとも、他国の国民のために、自国民の生活水準を下げるとでも言うつもりか？」

「一国だけで彼らを賄うのではなく、多くの国々で支援すれば、その負担を抑えながら彼らを助けることができたはずだ。一国に強いのではなく、皆で助け合えば、彼らを救うことはいつだってできたはずだ」

途端、ラインハルトの笑壺に入ったような哄笑が広間に響いた。

「それが自然とできるなら、最初から評議会なんて必要ないだろう。そもそも、なぜ評議会とやらがあるのか、お前ならとつくに理解しているはずだ。」

賢者どもにとって、最も大切なのは我が身の可愛さだ。誰だって自分の身体には傷をつけたくないと思ってる。…とりわけ、他人のために自分が傷つくのは、よっぽど人々から称賛されない限りバカらしくてやってられないってことだ」

ひどく哀しそうに視線をうつ伏せたアセルスの肩に手を回して、ラインハルトは続ける。

「気にするな。これは別にあなたのせいじゃない。賢者はあくまでも平和的かつ合法的に、国民から金を巻き上げようと一生懸命に努力しているだけさ。そしてこれは、どんな革命をもっても治らない。」

人間は不死じゃないんだ。やがて訪れる世代交代を繰り返せば、流動する時代に対応できない弱者から脱落し、上手く利用できた強者から生き残るのは当たり前だろう？　それが単に国家にも当て嵌まるだけのこと。人生“ルール”無視が賢い生き方なのさ」

「…ならばなぜ、彼らを敵に回してまでポウイスに侵攻した。他国からの不信を買ってまで、お前が自ら出撃する必要はなかったはずだ」

「それは簡単だ。単に、俺がお前に会いたかったからさ、アセルス。お前なら必ず、俺の危機に間に合わせてくれると信じていた」

今までとは打って変わって、子供じみた口調で破顔するラインハルトに、アセルスは辟易とした表情を浮かべる。

「冗談はよせ。私と会うために自分の身を最前線にさらす王がどこにいる。それに、私と会うのが目的なら呼び出すだけで都合がつくだろう」

「惚れた女が俺のために命をかけて戦う姿は、最高に美しいものだ。お前の愛を感じるためなら、俺は喜んで命を賭けるさ」

アセルスは溜息をついた。

「私には分からない。愛は他人を思いやる崇高な感情だ。それがなぜ、相手を困らせることに繋がるんだ？」

「心から愛してる女にはイジワルをしてみたいという、男の相反する心理が複雑に絡み合うものでね。これは覚えておいて損はないぞ。将来、俺の妻になった時には特に重宝する考えだろうからな」

そう言うってから笑うラインハルトに、アセルスは知らず知らず首を傾げていく。

「…お前が子供だということはよく分かった。信用はできないが、それでもウェールズのために動いてくれたことは事実だ。

ありがとう、ラインハルト王。きっとレヴィン王も喜ぶだろう。

お前には感謝する」

言って、アセルスが踵を返して立ち去ろうとするのを、ラインハルトが制した。

「おいおい、どこに行くつもりだ？　せつかくここまで来たんだ。もう少しくらい、ゆつくりしていてもバチは当たらないぜ？」

「すまないが、黒犬の巣穴を発見したとの報せを同時に受けていてな。危険因子は早めに切除しておくべきだ」

途端、ラインハルトが怪訝な表情を浮かべた。

「巣穴だと？　どこだ？」

「ここから南東にあるマンモス王国だ。どうやら洞窟の一部が巣穴に変わっているらしく、一部の村にもすでに被害が出ている。これ以上、被害が拡大する前に潰しておきたい」

ほんのわずか、アセルスが振り返る。

「それでは、私はこれで失礼する。：お前が死ねば、ルシアン殿が哀しむ。私などよりも、身内に愛を向けてやれ」

そう言って立ち去っていくアセルスと入れ替わるように、ルシアンが戻ってきた。

「若様、野犬の駆除はあらかた終わりました。：、どうか、なされましたか？」

家屋を曲がり、街路の奥へと消えていったアセルスの方角へと目を向けたまま、ラインハルトがそつと呟く。

「なあ、ジイ。俺はそんなに信用できない男か？」

いつもと違い、やや真面目な口調で問いかけられた王の言葉に、ルシアンは少し逡巡してから口を開いた。

「若様。本当に信頼していない人物とは、誰も口を利かないものです」

そんなルシアンの言葉に、ラインハルトは、そうか、とだけ呟くと、そのまま倒れるように崩れ落ちた。

「若様……？ 若様アツ……！」

薄れゆく意識の中で、ラインハルトは思う。

こんな無様な姿をアセルスにでも見られていたら、格好がつかなかったなと。

第十七話 く暴君vs黒騎士く（後書き）

次回投稿日は1月30日を予定しております。

そして、何と……！

皆様のおかげで、読者様は千人を越えました！

すごく……嬉しい……です……！

当初、オワタの作品なんて気づいてすらくれなйдらうなあと思っていたんですが、まさかここまでとは思いませんでした！

本当に！

本当にありがとうございます！

これからも頑張つて最終話を目指しますので、どうか最後までお付き合ひしていただければ光栄です。

ここまで読んでいただき、感謝の念が絶えません。

ありがとうございました。

それでは、また次回でお会いしましょう！

第十八話　「月」　前編（前書き）

ウフ、ウフフフ……。

友Y「お、おい……？　大丈夫か？」

ウフフ、いい感じに間に合わなくなってきたヨ……、期限が……。

友Y「そりゃあ、適当に決めてるからだろ。この無計画金メダリス
トめっ！」

昨日も朝の5時まで起きてました

友Y「はあ！？　お前あたまオカシイだろ！　仕事に響きまくりじ
ゃねえか、このバカっ！」

もつと……、もつと強く……！

友Y「お、オワタが¥（＾o＾）／」

友M「や、問題はこれだって」

あ、それは……！

友Y「ん？　なにそれ……？」

み、見ちゃらめええええ！

友Y「えーっと、なにに……。無料でできるオンラインRPG……

……」

ざわざわ……ざわざわ……。

友M「や、ここはジ ジョっぽく、ドドドドドで」

そ、そんな問題じゃないって！

友Y「オワタ……。ちょっと面ア貸してもらおうか」

！？

ち、違うんです！ ほんの出来心だったんです！

友Y「御託はいいから、ちょっとおいで」

……この物語を書き終えたら、次は学園モノを書くんだ……。

友M「では、オワタに代わりまして。……長くなりましたが、引き続き、本編をお楽しみください」

ギヤアアアアアアアア！？

第十八話　　“月”　　前編

は夢を見る。

誰よりも人を愛し、誰よりも自然を愛し、そして、誰よりも“生きていく”ということの素晴らしさを感謝していたからこそ、この世の誰もが幸福であってほしいと祈りを込めていた、ある日常の記憶として。

その村は当初、永い戦乱で故郷を失い、身寄りもなく彷徨っていた難民たちが寄り集まって、自分たちで生きていこうと始めた自給自足が発端となって成立した、言わば一時的な居住地に近い共同体のようなものだった。

まだ集落と呼べるコミュニティにさえ発展していなかった二百年前、森林の中にぽっかりと開いた空白地帯で狩猟採集を主とする生計を立てることに成功したその集団は、その起源を男女二十人程度の小さな集まりから子を生し、やがて少しずつ、その規模を発展させていく。

ただし、これを惨劇の元凶と言うには、あまりにも無慈悲すぎた。

ブリテン島南部、ウェセックス王国とドウムニア王国との国境付近に鬱蒼と広がる森林地帯は、両国を繋ぐ主要街道から大きく外れているために交通の便が悪く、双方から辺境と見なされて放置されてきたことが、その集団の発展を外界から邪魔されぬ要因として、偶然にも助力したのかもしれない。

彼らは予感に満たされていた。

愛に祝福された子供たちが成長し、自分が老いて臨終の床に臥した時、孫が心配そうに顔を覗く様を虚ろな目で見やると、その健やかな成長に後世の豊かな発展を確信して何の心残りもなく、そつと心配をかけまいと形作る精一杯の笑顔で安らかに瞳を閉じる。

愛は人を強くする。

死の哀しみが生命の尊さを子供たちに学ばせ、だからこそ助け合いを旨として生活することを“善”なる行為と、村に住むすべての人々が誇りを持ってそれを実行することができた。

そのせいか、村は一つの巨大な結界として、すべてを内世界で完結する。

森林を境界線として外界から孤立し、血縁的にも地縁的にも周囲の街や村との脈絡を持たず、部外者など訪れるはずのない土地で隔絶した“名もない村”は、自然の恵みのままに生活を成り立たせ、やがて誰もが迎える“死”を尊崇した。

死とは、肌が触れ合った数の分だけ、心を通じ合わせた時間の分だけ哀しみを伴う絶対的な別れであり、ゆえに人は死者のために祭具を作り、亡骸を埋葬して自然に還す儀式に祈りを込める。

そうして、惨劇の種は人知れず芽吹いた。

未熟児網膜症。

人間の眼球は母胎時の第七週目ごろに完成を迎え、外部の視覚情報を電気信号に変換する“網膜”もまた、この時期に形成されていく。

電気信号を脳中枢に伝達するのは視神経だ。

十二対ある脳神経の一つであり、文字通り視覚を司る視神経は百万ほどの神経繊維を持っているため、これが微弱な電位変化を円滑に伝達する役目を担っている。

この視神経と網膜とを繋ぐのが“視神経乳頭”と呼ばれる眼底周辺部の黄斑部であり、網膜を扶養する動脈と静脈も、この視神経乳頭から網膜の外側へと発達する。

それが約十六週目から三十六週目ほどまでの時間をかけて形成していくのだが、未熟児網膜症とは、この期間内において血管に異常が起きた場合に発症する病のことだ。

網膜血管が発達していない部分のことを“無血管帯”と言い、本来であれば自然に回復して眼底周辺部へと延ばしていく自己治癒能力が人間にはあるのだが、未熟児網膜症では、この修復過程において繊維血管と呼ばれる、酸素に非常に弱い新生血管が増殖し始め、やがてこれが瘢痕収縮すると、小さく萎んでいく血管に網膜が無理やり引っ張られていくために、最悪の場合は“網膜剥離”にまで重症化する。

この修復過程はゆっくり進行する場合もあれば、不規則に活動して急激に進行する場合もあり、特に後者の場合をラッシュ型と呼ぶ。

ラッシュ型の未熟児網膜症患者が特に失明しやすいとされる理由

は、その急激な修復活動によって脆弱な繊維血管が不完全のまま損傷してしまうために収縮を始め、結果として網膜剥離を起こしやすいからなのだ。

本人も、そして周囲の人間たちも気づくことができない“眼”の病　母胎の中で発症するからこそ病識を自覚することができない事実そのものが、この未熟児網膜症と呼ばれる病の真の恐ろしさであるとも言えるだろう。

人は、眼を通じて世界を確認する。

太陽が眩しいという証明も、空が青いという証明も、星屑の夜空に映える美しい月の形が丸いのだという証明も。

すべては視覚から脳へと記録し、その情報を保持して、記憶から再生することで現実と再認するからこそ、人はあらゆる情報を具体的に思い浮かべることでそれを忘却することなく、確固たる事実として正しい情報を保存する。

だが、未熟児網膜症によって牽引性網膜剥離を引き起こしていた彼女は、両目とも完全に失明した先天性視覚障害者として、愛する母の中で同じ時を過ごした弟とともにその産声を上げたのである。

しかし、当然のことだが、全盲のみならず弱視を患う視覚障害者たちは、それに由来する種々の困難を、成長する過程において克服しなければならなかった。

眼の障害は、生活する上で必要不可欠な行動を著しく制限するため、視空間認知の困難性から影響される行動制限が、身体の発達に大きな影響を及ぼす可能性がある。

動作の緩慢から姿勢の悪化、身体の免疫力の低下によって虚弱体質や鈍感になりやすく、社会的関心や日常態度、他人の助力に依存することへの強烈な劣等感、不安定な情緒からくる家居性や自閉症への傾向を生み出しかねない。

勿論、これらはいくまでも可能性の一つ一つではあったが、知識の重要な“窓”であり、外部情報の八割を“眼”から取り入れる人間にとって、視覚による知識と理解を失うということは即ち、明暗や色彩、距離感や物質の大きさという視空間認知を、独自にゼロから組み立てなければならぬことを意味するのである。

ただし、これは視覚障害の発生時期によって異なり、出生時から視力に障害を持つ先天性障害と、健康体から事故などで障害が発生した中途障害では、ほとんど違うと言ってもいい。

なぜなら、最初から物や色、そして風景などのイメージを具体的に思い浮かべることが困難な先天性障害者は、成長過程から独自の歩行訓練や知識の学習を身につけていくため、必然的に視覚以外の五感を活性化させることで想像力を養い、自分の世界地図を独自の視点から作り上げていくからだ。

だが、事故などで何の前触れもなく視覚を失った中途障害者は、その急激な生活環境の変化により、まず精神的に著しい負担を受ける。

どんな病でもそうだが、自分の障害を受け入れるということは容易ではない。

無論、一言に視覚障害と言っても“視力”“視野”“色覚”の三

種類に分けられるのだが、そのどれもが生活に劇的な変化を与えるため、その一つ一つを軽視することはできない。

特に彼女の場合、先天性視力障害に加えて身体が弱いという病弱児であったため、心肺機能が弱く、その体力は外出どころか、家中を往来するだけでも息切れするほどだった。

だが　それでも彼女は、その日々の思い出から身に余る幸福を感じていた。

彼女の傍には、いつも弟がいたからだ。

歩く時には弟が常に彼女の手を引いて誘導し、最初の食事でも物の位置や用途を克明に伝え、体調が良好である日には積極的に家の外に出て、村の地図を繰り返し頭の中に形作っていく。

小鳥の鳴き声に興味を覚えれば、弟はその小鳥を持ち帰り、可愛らしいさえずりを聞かせてくれる小さな生命を自分に触れさせてくれた。

たまに遠出する時には森の中を散策し、所々に点在する清楚な野の花を一つ一つ確かめるように触れながら、葉風の心地よい静けさに耳を澄ませて世界の優しさを体感する。

そして大地に根を張り、力強く天に伸びる樹木の幹に腰かけ、弟が不器用にも作ってくれた昼食を仲良く頬張ったことも一度や二度ではなかった。

隣家の老夫婦には自慢の青春話を恥ずかしくも誇らしげに聞かせてくれたこともあったし、近所の子供たちと一緒に言葉遊びをした

ことも、父と母の友人から二人の恋愛について意外な秘密を教えられ、つい苦笑したこともある。

楽しかった。

幸せだった。

温かった。

嬉しかった。

そして 何よりも愛しかった。

日常を過ごしていく中で彼女が思い描いていた世界地図は、その中心を弟にしてどんどんイメージ化されていったのである。

弟の導き手があれば、彼女は盲目の暗闇の中で何の躊躇いもなく一步を踏み出すことができた。

弟が隣にいただけで安心したし、弟が手を握ってくれるだけで幸せだったし、弟がこぼす微笑みの声だけで、彼女の人知れぬ哀しみを心から温かく癒してくれる。

姉は弟を心から愛していたし、弟もまた、姉を心から愛していた。

恐らく、二人はこの世界の誰よりも互いを愛し合っていたし、抑えようもなく惹かれ合う感情は、ある意味ではまさしく、恋と呼んでも差し支えなかっただろう。

幼い姉弟は、この時まだ四歳。

だが、弟がここまで姉に献身的であることには、ある一つの後ろめたい理由があったからだった。

彼は、姉の病をこう考えた。

姉が盲目なのは、母の中にいた頃に自分がその目を奪ったからではないか。

双子として生を受けた自分はその実、姉から奪った目を宿して今も五体満足に生活できているのではないか。

ならば、本当に目を失う定めにあったのは、他ならぬ自分なのではなかったのか。

勿論、それを口に出したことは一度もなかったが、しかし強烈に抱いた使命感にも似る一つの決意が、結果として少年の微弱な精神を深奥から鍛え上げ、優しくも姉想いの強い男へと成長させたのかもしれない。

誰よりも優しい心を共有する姉弟は、しかし誰よりも強く、この世界で互いを必要としていたのである。

やがて迎える、運命の惨劇の日まで、あと一年。

ゆえに もし、ここに不幸と呼ぶべき哀しみがあるのだとするならば。

村の誰一人として、その幼い姉弟に課せられた世界を左右する呪いに気づく者はいなかったし、彼女が病臥に伏す理由が病であるこ

とを疑う者もいなければ、盲目の原因を知る術さえも当時の医療技術では持ち得なかったということだろう。

なまじ、すべてが“村”という巨大な“善”の結界で完結するからこそその無知に類する不可抗力。

尤も、それに気づいたからといって改善する方法など、最初からなかった。

ただ、それを知ることと事前に、この二人に心構えができていたのなら。

あるいは、二人がまだ知らないからこそその幸福にある今のうちに、誰かがそれを実行していたのなら。

しかし、すべてはもう、遅かった。

この世にある“もしも”という過去は、ただ現実から逃避するためだけに捏造する夢物語だ。

非力に嘆こうとも、差し延べられた手が頼りなくても、涙を拭う指先に縋ろうとも、忌まわしく呪われた弟を救うことができるのは、この世界で独りぼっち、彼女しかないのだから。

あの優しかった故郷には、もう、戻れない。

二人は、あんなにも仲良く一緒だったのに。

あの優しかった姉弟には、もう、戻れない。

全てを知ってしまった、あの惨劇の日から。

、結末から言おう。

二人の愛は、その強さゆえに、途轍もない“悪”を産み落とすこととなる。

「救済のない運命を背負う覚悟はあるか？」

あの日、何の前触れもなく村に現れた人物は、たった一人の若い男だった。

『セランの森 名もない村』

高く茂る樹木の群れを、黒々とした闇が覆っていた。

人も獣も眠る丑三つ時、静まった深い森の胎内には、ごく僅かな虫たちの鳴き声と葉風の音が物哀しげに潜めき合いながら、やがて大気に溶けるように消えていく。

梢の隙間から見える空には、とてもじゃないが数え切れぬほどの星たちが漆黒の絨毯の上に散りばめられていて、清浄に映えた夜空を幻想的な円環の形に照り輝く月が彩っている。

樹海と樹上では、まるで異なる時間と空気が流れているようにグレッグには思えた。

この森に充満する濃密な暗黒に倣い、野生もかくやとする気配の消失。

息を殺し、己という存在をも脳裏から除外することで、視覚的に姿を晦ますのではなく、生物的感觉から姿を消す技術。

暗殺者としての必須技量である卓越した隠密性をもって茂みに身を隠すグレッグは、そこから自分たちと同じように闇に沈む村の外

観を、現実には顕現された悪夢を見るような眼差しで見渡していく。

広大に開かれた樹冠の穴から差し込む月光が、壊滅的な破壊の跡を今なお残すその村の恐るべき全貌を露わにしていた。

どれほどの勢力を誇る台風が直撃すればそのような歪な作りへと変貌するのか、木造の家屋は力付くで絞られた雑巾のように縦に細く折り曲がり、見事に引き裂かれた家がその中心を走る亀裂をもつて段差を作っているのは、そもその土台である地面が地層の断裂を想起させるほどに巨大な裂け目を刻んでいて、まるで未曾有の地殻変動が集中的に発生したかの如く隆起しているからだ。

小さく開墾された耕地は完全に焼失しており、その凄まじい火災が燃え移ったのか、本来なら火勢に強い耐性を持っているはずの丸太を用いた木造家屋の一区画には、とうに炭化して瓦解している家や、ぐずぐずに溶けて爛れるように原形を殺された家も見受けられた。

また、想像もできぬ速度で爆散したと思われる家屋の跡地には漆黒の焦げ跡を残したまま無数の木片を散逸させ、その一部は周囲の家屋や大地に深々と突き刺さっている。

しかし、何よりもグレッグが違和感を覚えたのは、これほどの破壊が堂々と村を闊歩していながら、その周辺の　　今、自分たちがいる茂みも含めて　　健やかな自然が少しも損なわれていないという不可解な事実そのものにあった。

「はあ……。いったい何をどうやったら、こんな風に物を壊せるんだ？」

溜息とともに零れ落ちたその呟きに同意せざるを得ないほど、それはあまりにも非現実的すぎる惨害だった。

しかし、これを人為的と見るには文字通りの圧倒的と言うべき次元違いの暴力による蹂躪であつたし、かといって自然現象と考えるには、この尋常ならざる天変地異の爪痕とは比較もできぬ、人工物のみに限定されているという不釣り合いなまでの小規模性である。

「なあ、ヴィクター。俺、何か悪い物でも食つたかな？」

特に卑屈な口振りには見えなかったが、いかに希代の魔術士イングラムの薫陶を受けた暗殺者グレッグといえども、この惨状を目の当たりにしては底知れぬ恐怖を抱いたようだった。

「ごめん。今日の夕食、口に合わなかった？」

そんな彼の問いかけに真面目に応えて、同じように茂みに身を隠す隣の少年が顔を振り向かせた。

グレッグはやんわりと微笑う。

「違う違う、お前の作ってくれた晩食はすごく旨かったさ。俺は豆スープとか、野鳥の丸焼きとかしか作れないからな。お前がいれば、とりあえず食事に不満を感じることはないだろうぜ」

「そう？　そう言ってくれるなら嬉しいな。今日のはね、隠し味に香草を使った、鶏肉と山菜の炒め物だったんだ。実はこれ、僕の得意な料理の一つなんだよ」

「へえ、ハーブも料理に使えるのか。俺はてっきり、薬効にしか使

えないと思つてたよ」

「勿論、暗殺する時には毒性の強いハーブを混ぜて使うと効果的だね。微調整が楽だからピンポイントで相手を狙えるし、そうじゃないくても兵士たちの食事に混ぜれば、下痢や嘔吐を併発させるだけで大多数を無力化できる」

「いや、暗殺といったらナイフだろ。誰にも知られずに無音かつ確実、闇から闇へと移動して目的を遂げる。これぞ、暗殺者としての腕の見せ所じゃないか。無関係の人間を巻き込むのは俺の流儀じゃないな」

ヴィクターは少し困つたふうに微笑する。

「まあ、手段や方法は人それぞれかな。僕はこだわりの戦術がないから、視界にあつて使える物は何でも使う。これは料理でも同じで、どんな素材も組み合わせ次第で繊細な味を引き立たせてくれるから、この発見が料理の醍醐味なのかもしれないね」

「俺にはさっぱり分からないなあ。だいたい、どんな料理も食べてしまえば同じじゃないか。…そりゃあ、旨いに越したことはないけどさ。何でも器用にこなそうとするのは、少し欲張りすぎなんじゃないか？」

「料理は、僕の夢なんだ。いつか、みんなに僕の料理を食べてもらいたくて。…だからかな、僕は自分の夢を裏切りたくないと思つてる。その時に出した僕の料理が手抜きだったら、食べてもらった相手には一生、顔向けできないと思うから」

ヴィクターがそう言うと、グレッグは思わず意地悪そうな笑みを

浮かべた。

「とか何とか言ってさ。本当に料理を食べてほしいのは大好きなお姉ちゃんだって素直に言えればいいのに」

「勿論、それもあるよ。そもそも、僕が料理を始めたのは姉さんに食べてもらいたかったからだしね」

へえ、と呟いて、グレッグは村の方へと軽く顎を動かした。

「じゃあ、アイツらにも自慢の料理を食べさせてやろうか。夜食の一つぐらい、喜んで食べてくれるだろうぜ」

グレッグが促した視線の先、ちょうど真正面に見える村の中心に設えられた池を隔てた向こう側に、仄かな灯火の明かりを溢す小さな家屋があった。

どの家屋も全壊している無残な有り様の中で唯一、不自然なほど当時の外観を維持し続けているそれは、今もなお利用する人の気配を横溢した生活感に満たされている。

まばらに点る明かりが外に漏れているせいか、茂みから何気なく見やったその家は、この穢れた無明の中にあつて一層の不吉な佇まいを臭わせた。

人間も家畜も作物も死に絶え、流れを堰き止められた時間が朽ち果てて塵になるまで凍結した呪われた村。

ならば、生き残りなどいるはずもないこの不毛の地に徘徊する者は、果たして夜の者か闇の者か、それとも死の者か。

その、いずれでもない二人が確信しているのには理由があった。

数百メートルは離れた闇夜のせいで、さすがに顔色までは判然と確かめることはできなかったが、それでも家の正面玄関を開けて池へと歩き、満足に用を足してから冷える夜風を避けるようにして足早に戻っていく複数の人影の存在は、どう都合よく考えたとしても村の生き残りであるとは思えない。

無論、それらが人外である気配もなかった。

まさか“死霊魔術”によって墓から起き上がった“屍鬼”^{ゲール}が生理行動を取るはずもなく、ましてや自然界最凶幻想種である“咒魂鬼”^{ヴォルクルス}の人型など聞いたこともない以上、彼らは間違いなく人間であり、しかも村とは無関係の集団であることが窺い知れる。

ゆえに、その正体は山賊であると、二人は茂みから観察した彼らの様子から、そう結論付けたのだった。

まさしく、ジツと息を潜めて獲物の隙を窺う狩人のような眼で、グレッグは言葉を繋げた。

「さ、どう料理してやろうかな。ここは専門家の意見も聞きたいね」
「まだ彼らが山賊だという証拠はないよ。僕の村を根城にして悪事を繰り返されるのは我慢ならないけど、もし彼らがたまたまここに行き着いた善良な人たちなら、むしろ僕たちが去るべきだと思う」

グレッグは苦笑する。

「相変わらずのお人好しだな。…けど、お前のそういう所、悪くないぜ」

「なんだかんだ言っても手伝ってくれるグレッグには負けるよ」

「お、言ったな？ …じゃあ、その素直な感謝の気持ちを、俺とルナちゃんの仲を取り持つということでチャラにしてやるよ」

「ごめん、それはムリ」

「…え、即答？」

グレッグは、ちよっぴり哀しくなった。

「だって、僕が取り持つまでもないよ。姉さんはグレッグのことを好意的に見てるし、僕もグレッグになら安心して姉さんを任せられるからね」

グレッグは、俄然やる気になった。

「よし。ここは未来の兄貴がビシッと決める所を義弟に見せてやるとするか！」

呵々と笑いながら言い放つグレッグに対し、ヴィクターは笑顔で応える。

「うん。すつごく不安」

「なんで!？」

ひょっとして俺は信用されてないのでわ、と少し不安になったグレッグであった。

なかなか寝付けない苛立ちを抑え切れぬ様子で、男は杯になみなみと注がれた酒を一口で流し込んだ。

静まり返った空気に、男が酒を嚥下する音が異様に響く。

その家の中には、生活感を匂わせる家具のほとんどが見当たらなかった。

十畳ほどの広さを持つ空間、仄か明るく照らす蠟燭は窓際に数本ほど飾られており、そこから肌を撫でる涼しげな夜気とともに虫の音が入り込んでくる。

つい先ほど日付が変わったばかりの深夜にあっても、彼らが寝静まるリビングルームは明るかったが、それには頭である男が身体を横にしなければ部屋の明かりを消してはならないという、絶対の暗黙を忠実に堅持しているがゆえであった。

もう一度、うんざりした表情ながら男は息を吐き、気怠げに酒を杯に注ぎ足して再び嚥下する。

古びたリビングの中を改めて見渡すと、目の前には床で転寝する男衆が七人、鼾をかく者もいれば何度も寝返りを打つ者もあり、その暑苦しさときたら、こうして見ているだけでも不思議と室内の気温が上がっていくかのようだ。

しかし、寝静まる彼らの横に置かれているのは、少しばかり痛んではいるが紛れもなく小剣であつた。

それはろくに油で手入れもされずに小汚い鞘に納められてはいるが、確かに過去に幾度となく通行人を襲つては斬り裂いてきた彼らの得物に相違ない。

最初の酒を飲んでからすでに二時間半、浴びるように飲み尽くしてきたその量は常人なら急性アルコール中毒でも引き起こしそうなほどであつたが、男は泥酔の残滓すら表情に出ぬまま一向に眠れる気配になかつた。

何の気紛れか、窓辺に目を向けると沁み入るように輝く星々と、凍りついたように冷たい輪郭を夜空に投げる青白い月が見て取れる。

そういえば、初めて人を殺した夜空もこんな満月をしていたな、と男は自らの過去を思い出す。

男は、その一生を野盗団に身を置いて生きてきた。

父はウェセックス王国に仕えてきた騎士であり、これまでも多くの騎士たちの指南役として若い逸材を育成してきた人物だったが、上昇志向に疎く、出世に無縁だったことが逆に災いした。

野心家だった好敵手から見れば、国王から絶大な信頼を寄せられている父の存在は、誰よりも不快極まるものだったのだろう。

好敵手の策略によって国の重鎮が死んだ捏造の証拠を検分され、国外追放の汚名を着せられた父はその流浪の旅路の中で病に倒れた母を失い、自らも無念のうちに、当時まだ四歳だった男を残して死んでいった。

独りで生きていくにはあまりに幼すぎた男はしかし、天涯孤独の身として戦乱の世に放り出され、その空腹と寒さから否が応にも弱肉強食の理を悟り、苛酷な世界を生き抜く術を、自分を拾い上げてくれた山賊から教わることで寝食を得たのである。

手数が多く、堅牢な守りを見せる集落や村には決して手を出さず、あくまでも無防備な旅人や護衛のいない小規模の商隊だけを奇襲する、他人からすれば非道で怯懦に見えるであろう山賊の略奪行為を繰り返すうちに、男の中の“愛”と呼ばれる感情が人々の悲鳴と恐怖で擦り切れていったのかは分からない。

健全な精神は、健全な環境によって造られる。

その人物が潜在的に優れた仁徳を有しているのだとしても、本人を取り巻く環境が病んでいれば、足をつける大地から侵食する毒に汚染されるように当人の精神も病んでいくのは必然である。

自分が生きるために他人から奪い続ける生活を数十年間、繰り返してきた男は、そうして数え切れないほどの人間を殺し続け、純粹で優しかった幼い日々の思い出さえも殺すことで、もはや拭い切れぬ猜疑心と他者への憎悪に満ちた山賊の頭として自らを完成させた。

殺すことに躊躇いはなかった。

そうしなければ飢えるのは自分たちであるのだし、そもそも自分たちを山賊に追いやったのは他ならぬ人間たちであるのだから、その酬いを受けるのは当然であるべきだと彼は考えている。

同時に、彼は理解する。

人間とは即ち、他の人間をいかに裏切り、そのすべてを奪うことに知恵を絞ることです。自らに幸福をもたらす、賤しい畜生と何ら変わらぬ怪物であることを。

信頼とは猜疑の予防線。

贈与とは略奪の前準備。

親愛とは憎悪の同義語。

そんな外道どもから物を奪って何が悪いのか。

むしろ、世界の理を正しく実行しているにすぎない自分たちを彼らが助けてくれたことが、今まで一度でもあっただろうか。

正しい行為をしてきたはずの父を助けることもしなければ、わずか四歳という年頃で世界に放り出された自分に手を差し延べてくれることもしなかった。

そんな男を助けてくれたのが、人間たちが卑劣と罵る山賊だというのなら、彼にとってはこの野盗団こそが命の恩人であり、そして正義というつもりはないが、少なくとも間違ったことはしていない

と自信を持って断言することができた。

この世に善良な人間などいない。

なぜなら、善良な人間は平等に弱者であり、そして弱者は弱者であるがゆえに自分たちの生活を維持するだけで精一杯なのだから、同じ弱者を助ける余裕は彼らにはないからである。

勿論、それを仕方がない、と彼らは言うだろう。

ならば、男もまた、こう言うのだ。

仕方ないだろう、生きるためなのだ、と。

「俺たちに行く場所なんて最初からない、か。…ふん。つくづく、俺たちは世界から嫌われているんだな」

ここ流離の地に辿り着いた時、一時はここで生活するのも悪くはないと考えていた。

だが、この村の非現実的な惨状は今もなお大地に根強く傷痕を残し、野生すら寄り付かぬ不毛の地と化して穢れてしまった光の下で育つ作物はなく、木の実を採集するだけでは満足な食事も得られない。

結局、自分たちはどこまでも、他者から略奪することで生きることが世界から義務付けられたようなものだ。

人の温もりなどとうに忘れ、鬼火のような月を見上げるたびに、男はこの世の地獄を生きていくことを改めて決意するのであった。

「だが、なぜだ？　なぜ俺たちをそこまで疎ましく遠ざける？　俺たちを否定する権利なんぞ、お前にはないはずだ。」

「それとも、俺たちにはこの世で生きていく権利すらないって言うのか？」

窓から見上げる星空は広大な夜に孤立し、漠然と見える過去を湛えてひたすら沈黙している。

男に対する応えなど、あろうはずもない。

凍てついた夜も、大量の酒を飲んで熱の込もる体温を下げることはできなかつたのか、肌寒い静寂のリビングで男だけが明けぬ蟠りを孕んだ熱気に包まれている。

心配するのは明日の食料だけだ。

最初から奪うしか能のないこの掌では、どんな善人の慈愛も男には届かない。

そして男たちが死ねば、彼らは地獄へ堕ちると積年の思いを存分に吐き尽くして歓喜するのだろう。

救い手など、この世に居る筈がない。

神など、この世に居る筈がないのだ。

なぜならば。

本当に助けてほしい弱者は、救い手の下にさえ、足を向けること

はできないのだから。

「だが、今に見ている。俺は必ず復讐を成し遂げる。理不尽な理由で親を殺された者たちの恨みを、必ず奴らに突き渡してやる……！」

山賊に身を置く男たちの原動力。

すべてを奪われ、失った彼らにとって、その悲願こそが“泥水”を啜りながら生き抜いてきたこの昏い穢れに満ちた人生を貫き通す、恐るべき意志の力であるのだった。

最後の一口を飲み干し、男は立ち上がる。

急に催してきた小水を取るために池の方へと歩くと、玄関に手をついたところで男に驚いたのか、虫たちの音が唐突に止んだ。

「……ふん。どうやら俺は、虫どもにさえ嫌われているらしい」

そう自嘲気味に吐き捨てながら、男はごく僅かに微笑う。

満天の星、雲の一つもない夜空は暗黒に覆われた洞窟からでも、この呪われた村の中から見上げても変わらぬ様子だった。

「まあ、そんなことはどうでもいいか。俺も随分と焼きが回っているようだ」

徹底された沈黙の夜を歩き、村の中心に設えられた池の前で立ち止まる。

ふと、わずかな違和感に振り返った。

辺りは静寂。

村の陰惨な様相は依然として変わらぬまま、憐憫の情さえ持てない死の包囲をもって外界を拒絶する。

何者かに見られているような不快感、背中越しに佇む何者かの気配にふと怯えてしまう背筋の悪寒。

「チツ…。疲れてるのか、俺は。…少し飲みすぎたか」

だがそれは、夜の世界にあつては誰もが体験する杞憂にすぎないことを男は知っている。

あまりに悪夢じみた破壊の有り様を当時のまま残している村の空気が敏感にさせるのか、そこに在りもしない何者かの存在を不意に嗅ぎ取る行為は、人間が死者の起き上がりを常に恐怖している何よりの証拠である。

どれほど人を斬ろうとも、こればかりは馴染めない。

湧き上がる亡者の幻影に振り返る自分にこそ辟易としながら、男はようやく一息ついて用を足そうとする。

「ふう…。俺は生き抜いてやるぞ。新時代などと夢を謳い、そのために虐げられた一方的な犠牲を無視する奴らに天罰を下す、その日までな」

最後の言葉を言い終えて下半身を露わにするのとはほぼ同時に、忍び寄る冷たい刃先が男の首筋に宛がわれた。

「そのために罪のない人たちを犠牲にするのは本末転倒です。…たとえ貴方がたの境遇に仮借の余地があっても、貴方がたがそれを放棄して人を殺し続ければ、僕は貴方がたを殺すしかない」

化石したが如く強張る表情に緊張感を跳ね上げ、男は振り返ることもできぬまま、背後の驚くほど子供じみた声の持ち主に問いかける。

「…お前は何者だ？」

しかし、背後の人間は応える気がないようだった。

「ここは僕の村です。…貴方がたの過去がどうであれ、思い出の土地を血塗られた行為の根城にされるのは許せません。…剣を捨て、大人しく投降してください。そして罪を償い、過去を反省してください」

鋭利な刃の凍気が触れて、首筋に全神経が集中する。

刺される方が痛いのか、斬り裂かれる方が痛いのか、文字通りに薄皮一枚を挟んで押し当てられた凶器は、男の脳裏に今まで殺してきた人間たちの死の間隙に見やつた何とも言えぬ表情を駆け巡らせた。

だが、男はまるで他人事のように刃先を見つめながら、思わず苦笑して見せる。

「こういう時、物語の主人公なら誰かが助けにきてくれるんだろうな。不自然なほど都合の良い奇跡とやらを起こして、逆転の切り札

に勝負を賭けるんだろう。最後まで希望を捨てないそのための、神様とやらが救済の手を差し延べるのかもしれない」

咎めるような口調のまま、男は続けた。

「だが、俺たちには最初から救済なんてなかった。何もしていないはずの俺たちに、世界は見て見ぬふりをして悪人どもを放置してきただ。

善人が俺たちのために一度でも助けにきてくれたのか？ 山賊たちの方が人情に溢れていて優しくったのはなぜだ？ …そうさ、俺たちに神はいない。救い手もない。なぜなら、俺たちは人殺しだからだ」

背中越しに、背後の人間が息を呑むのが男には分かった。

「俺たちだけが悪なのか？ 山賊は誰が見ても悪者で、国の中枢にいながら堂々と国民に嘘をつく人間たちを喜ばせれば善人なのか？ 俺たちが殺されれば大団円だとしても？ 地獄に堕ちると罵り、犠牲になった人間たちの冥福を祈りながら、俺たちの死体を見世物にでもするつもりか？」

「バカな…！ そんなことは誰もしません。貴方がたが死んでも、その遺体は丁重に埋葬するのが王国の掟です。

…貴方は国に絶望しすぎている。もう一度、人間を信じてください…！ そして、今度こそ新しい人生を踏み出すべきです…！」

「…飢えて死にたくなかったことが罪なのか？」

「…え、…？」

「俺たちだって人間だ。食べる物と寝る場所がなければ生きていけない。お前たちだって、無数の動植物を食べて生きてるんだろ。その相手が人間だったからといって、それを絶対悪だと罵倒するのは人間たちが勝手に決め付けたヘリクツじゃないか」

幽かな違和感を感じたのか、男に刃を突き付ける人間は応えようとはしない。

「自分たちが狙われないようにするために、法律という強迫観念で全面的に防御壁を張る。動植物は良くて人間はダメなのか？ お前たちは良くて俺たちはダメなのか？ …… だったら、その“生殺与奪”はいつたい誰が決めたんだ？」

「…少なくとも、それは貴方がたが決めることじゃない。それに、僕たちは必要以上に相手を殺さない…！ 貴方がたのように、罪のない人々を何の意味もなく手にかかるようなことも絶対にしない…！」

「人間の命を奪う行為と、花を摘む行為にどんな違いがあると言うんだ？ それに、俺たちだって必要以上に相手を襲うことはしない。今日一日分の食料が手に入れば、それだけで大収穫なんだ。…それに、今さら後戻りなどできるはずもない」

「誰にだって、生まれ変わるチャンスはあります。…人殺しだからこそ、僕たちは罪と罰をきちんと受け止めなければならぬ義務があるんです。…それが“人を殺す”という覚悟の代償なんですよ…！」

「…お前も、人殺しなのか？」

背後の人物は応えない。

だが、その声質から、少なくとも見積もっても十代半ばにある男だろうと推測することができた。

「返答はないか。…尤も、そうでなければ躊躇いもなく首に刃に突き付けて平然としていられる人種は、他にはいないだろうがな」

「…僕は、貴方とは違う」

「違うないさ。俺とお前は同じ人殺しだ。たとえお前が誰かの為にしていることなのだとしても、やっていることは俺と同じ人殺しにすぎない。…ああ、だからこそ俺には分かる。お前の末路は殺人鬼だ。そして、俺たちは互いを理解しているからこそ、互いのことが許せない哀れな咎人なんだ…ッ！」

最後の一言と同時に向き直った男の剥き出しの下半身からの小水を、背後にいた少年は驚愕に目を見開きながら飛び退くことで躲けてのける。

「くッ、貴方は　　ッ!？」

そして、男もまた瞠目した様子だった。

目の前にいる人間が、あろうことか本当に自分よりも遥かに年下に見える少年であることを確認し、腰の鞘から剣を抜き放ちながら不敵に微笑む。

「悪党には悪党なりの打開策があるというものだ。尤も、キレイに生きようとするお前には分からんだろうがな」

言って、下半身を収めた男は目を細めた。

「ふん、本当に小僧だったとはな。…名前くらいは聞いておこうか。これから死合う者同士、地獄に送る相手の名前くらいは覚えてやろうというのが人情だろう？」

相手の真意を計りかねている様子の少年は、男の動きを注意深く見つめながら口を開いた。

「…ヴィクター」

「ヴィクターか、良い名前だ。お前を生んだ両親も、これほど健康に育った姿を見てさぞかし歓喜しているんだろうな」

多分に含みを持たせて笑う男に、ヴィクターは苦々しく唇を噛み締める。

「まあ、俺の名前はどうでもいいな。最初から教えるつもりはないし、教えたところで結末は変わらん。お前は子供だから幻想に夢を見ていられる。」

「…言っていたな、ここはお前の故郷だと。ならば、そういう人種になった過程の悲劇は言われなくても多少の想像がつくというものだ」

そう言うってから、男は惨劇の村を見渡した。

「…なるほど、お前は確かに被害者なのだろう。そして、そのために世界を生き抜く方法が、そうした選択しかなかったとしても俺はお前を責めたりはしない」

だがそれだけだ、と男は続けた。

「俺たちは互いを共感できても、受け入れることはできない。一歩間違えれば俺たちの運命は逆転していたのかもしれないが、それは永遠にこない“もしも”の話だ。お前はもう一人の俺の姿であり、そして俺はもう一人のお前の姿だ。…それが分かってしまった以上、俺たちは互いを否定するしか自分の存在価値を見出せない」

「僕は…ッ！ 貴方とは違う…ッ！」

「どこが違うッ！」

唐突に、男が踏み込んで剣を振り下ろす。

剣聖やアセルスの踏み込みとは比較にもならぬ、あまりにも遅い速度から繰り出された一撃をヴィクターは容易く防いで見せたが、しかし男の言葉に気圧された心が反撃を躊躇っている様子だった。

「クッ …！」

「自分の怪物と向き合えッ！ 俺たちが神に愛されることはない！ 世界にも、人々からも愛されない忌むべき存在だ！」

矢継ぎ早に繰り出す男の連剣。

それらを全て防ぎ、反撃の隙を幾度も見つけていながらも、ヴィクターは今一歩、踏み込めない。

「俺たちは所詮、日陰者さ！ 目映い光の下では生きられない！」

白昼の下に晒されれば人々から断罪され、見せしめのために簡単に切り捨てられる“使い捨て”だ！ 利用するだけ利用して、用が済めば俺たちから何もかもを奪っていく！ …俺の親父のようになア！」

「貴方の…、お父さん…！？」

「そうだ！ 親父に罪はなかった！ だが、親父の存在を疎ましく思っていた人間が親父の罪を捏造し、国から追い出したんだ！ 母は病で死んだ！ 後を追うように親父も病に倒れた！ …その時、国も家族も失った四歳の子供に、いったい何ができると言った！」

鰐ぜり合いの拮抗に、二人が肉薄する。

「元凶はいつだって一方的にやってくる！ 幸福を理不尽に奪われた人間が復讐を遂げようとするのは当たり前前の心理だ！ それを否定すると言っのなら、まずはお前たちが家族を殺されてから言うて見せる！」

セカイ
日常が壊された絶望。

理由さえ知らされぬまま野に置き去りにされた人間^{ケタモノ}。

目に見えるすべての現実^{モノ}に正しい善悪^{かち}を見出だせないというのなら、目に見えるすべての孤独^{しかばね}にこそ等しく架空^{ココロ}を問いかける。

「それでも…！ ヒトとしての誇りを守っていくことはでき
！？」

背中まで貫こうとするほどの胸の痛み。

ヴィクターの横隔膜に男の拳が飛び込んだ。

「が、ふ　　ッ！」

惨劇の中心で二人、よろめく少年に男が追撃する。

「誇りでは空腹を満たすことはできないんだよッ！　お前はそんなにも大義名分が欲しいのか！」

左からの回し蹴り。

「くっ　　！」

しかし、ヴィクターはそれを難なく躲し、充分に間合いをとってナイフを構える。

剣術の扱いこそ低い水準にある男は、どうやら格闘術にこそ長けているらしかった。

「違う！　僕は、僕を必要としてくれる大切な人の期待に応えたいだけだ！」

「人殺しという行為に、自分の存在が“合法的”で在りたいと夢を見るのか！　そんな幻想^{モリ}、この世のどこにも在りはしないんだよッ！」

迫りくる剣と拳の猛攻。

だがそれは、あのサイクロプスと比べれば何と他愛のない子供だ

ましか。

「だからと言って、無関係の人から物を奪うことは許されない！
彼らの生活を壊すことは許されないッ！」

「他人の為に人を殺すお前が言えた台詞^{コト}かッ！」

二人は追撃の剣と防御のナイフを絡み合わせて、再び鬨ぎ合う。

「都合の悪い真実から目を背けるなッ！ “知ろうとしない”ことはそれだけで罪だ！ 真つ当な人間なら人を殺す前に自殺する！それをしない俺たちは異常者そのものだ！ 我が身が可愛いから自分を殺すことができず、他人を消すことで自分を納得させる臆病者だ！ それを否定するお前は、自分を否定していることと同じなんだよッ！」

「僕は、護りたい人を守るために戦っている！ 貴方とは違う！」

「過程が違っていても、結果が同じなら俺とお前は同類だ！ 毎日のように食べ続ける肉や魚のために、一度でも感謝を込めて祈りを捧げたことがあったか！ 俺たちは毎日しているさ！ 一日を生きるために食材を襲い、その血と肉に感謝して貪ることで生きてきた人生だ！ お前は人を殺して生きる！ 俺は人を食べて生きる！ 過程は違えど、どちらも同じ人殺しには違いがないッ！」

その瞬間、ヴィクターにかつてない戦慄が走った。

「貴方は……！？ 人を食べたのか！？」

「家畜も人間も同じ生命だ！ 牛や豚を解体してステーキにするの

と、人間を解体してカルビにするのとどこが違う！」

「バカな！？ 貴方は狂ってる！」

「狂っているのは社会の方だ！ 世界は常に弱肉強食を謳っている！ ならば、世界に反して自分勝手な“ルール”を作る人間たちが間違っているのは当然だろう！ 俺を否定するということは、この世すべての生命が生まれつき不平等だと言っているのと同じ事！ ならばこの世に神はいない！ 救い手など居る筈がない！ なぜならそれは、支配者を気取るお前たちが自分を守るために作り出した偉大な幻想だからだ！」

「違う！ 貴方は間違っている！」

「いいかげんお前の戯れ事は聞き飽きた！ 偽善を振りかざし、真実を受け入れない限り、俺たち山賊はいつの時代でも、名を変え姿を変えてお前たちの前に現れる！ 俺たちは社会に対する反対命題だ！ それをこそ違うというなら、お前たちが押し付けたこの世の地獄に生きる俺たち全員を救って見せる！」

鋭い前蹴りが腹部に突き刺さり、ヴィクターはよろめく。

「グ ツ！」

顔を上げた瞬間、男の飛び蹴りが顔面を貫いた。

助走から体重を乗せた強烈な威力。

爆ぜる視界。

頭骨内で乱舞する脳。

前庭神経の一時的な混乱による平衡感覚の崩壊。

男は完全は無防備となったヴィクターの背後へ回り込むと、本来なら生け捕り用に使用する縄を少年の首に回し、そのまま全力で締め上げる。

「ガ　　ッ、ハ…！」

首と縄との間に隙間を作ろうと両手を引っ掛け、ヴィクターは必死に抵抗する。

しかし男の力は弛まない。

左右に引かれていく縄はヴィクターの首をこそ引き千切らんと、更に強くぎちぎちと締め付ける。

気道が細り、海老反りに夜空を仰ぐヴィクターの耳元で、男が厳かに言い放った。

「ではしまい！　なぜなら俺たちは人殺しだからだ！　奪うことしかできない人種が人を救おうなどと思い上がりも甚だしい！　護るためにその手を血で穢し続けてきたお前が、いったい何を守る！？　いったい誰を守るというんだ！？

…守れはしない！　お前の朱い手では、誰一人として守れはしない！　それがなぜ分からん！」

頸動脈、頸静脈の圧迫。

知識のない人間でも容易く人間を殺すことができる、原始的でありながら最も手早く確実な方法。

だが、それでも閉塞できずに巡り続ける椎骨内の動脈が、ヴィクターの顔を徐々に朱に染めていく。

「それ、でも……！ 護りたい人が、いるから……！」

「ならば言つてやる！ お前は、その護りたい人間にこそ裏切られるとな！ 奴らはお前の利用価値がなくなれば、すぐに掌を返して全力で潰しにくるぞ！ 俺の親父と同じように、お前は尽くしてきた人間に絶望しながら死んでいくんだ！」

ヴィクターの瞳が朱くなる。

皮膚の薄い目蓋の裏側、その圧迫に耐えきれない毛細血管が破裂し始め、顔が鬱血していく。

音もなく近づいてくる死が、すぐそこまで来ていた。

「見る！ あの黒く冷たい空の彼方を！」

無理やり引つ張られたヴィクターの視線が、もはやぼんやりとしが見えない空に固定される。

「俺たちは世界から見放された存在孤児だ！ 誰からも認められず、何も無い場所に放り出された俺たちは、他人から奪うことでしか生きられなかった！ 狂わせたのは世界だ！ あの優しかった思い出は懐かしむだけにしておけ！ 俺たちには、もう二度と温かい家庭なんざ手に入らないんだからな！」

遠ざかる意識に、少年は唇を噛み締める。

朦朧とする痛みの中、泥濘るむ視界の奥に霞む月が、愛する姉の哀しむ顔と重なったような気がした。

「…誰も、戻りたいとは、言っていない…！」

「…なに…？」

もう、とうに意識が断ち切れてもおかしくないはずの時間を縛り上げている。

だが、この少年の常人ではありえぬ強い抵抗力に瞠目し、男は思わず聞き返していた。

しかし応えはない。

「おおおおああああああああッッ！」

少年が渾身の力を振り絞って吼える。

両手で掴む縄を、そのまま単純に、自らの膂力だけで引き裂いていく。

「バカな　　！？」

絶対の捕縛を目的とし、だからこそ容易には裂けぬはずの強靱性を備えている道具が、自分より十数年以上も年下の少年によって鈍い音を立てながら、しかし確かに引き千切られていくのを男は見た。

そして理解する。

血塗れになった少年のボロボロの爪、それは縄を必死に引っ掻くことで“切れ目”を刻んだ跡なのだということを。

…、しかしそんなことが…、そんなことがこの咄嗟の状況下で迷いなく実行してのけられるものなのか。

「なッ ！？」

何者だ、と呟く前に、男は後方に大きく吹き飛ばされてもんどりを打つ。

その一撃だけで、男の膝が笑い始めていた。

男の腹部に強烈な蹴りを入れたヴィクターはすでに死の顎から解放され、ようやく肺に酸素を取り入れるべく、息を乱しながら緩やかに立ち上がる。

「現実には負けることが、終わりじゃない…！ 現実に諦めることが、終わりなんだ…！ 貴方は、他人を憎悪するあまり、自分を見ていない…！ 貴方は、他の誰よりも早く、貴方自身を助けることができたはずだ！」

地面に吐血して息をつく男は対抗心を剥き出しに呼吸を荒げたまま、ほとんど気合いだけで立ち上がって見せた。

「何もかもを失った人間が最後を守ることができるのは、自分の命だけだ…！ お前のように“他人”を持ち出して人殺しの免罪符に

はしない…！ 卑怯者のお前は、そうやって本当に断罪すべき人間を見誤るんだ！」

息遣いの荒い二人が、五メートルの距離を置いて再び対峙する。

「人間には、生命よりも大切な“愛”^{アイ}がある！ それをさえ忘れてしまえば、僕たちはいったい何を受け継いでいくというんだ！」

「そんな物あるものかッ！ 人は皆、自分の生命^{よくばう}の為に生きていくだけだ！」

「それだけが、人の全てじゃない！」

「だからお前は“餓鬼”なんだよ！ 自分の存在を正当化する理由がなければ生きていけないくせに！ すぐに壊れる仮初めの信念を必死に守ろうとするお前は、その心にこそ縛られた人間の出来損ないだ！ そういう奴をなんて呼ぶか、お前は知ってるか！？」

吐き気を催すその言葉の一つ一つが、否定することしかできない少年の心を深く抉っていく。

「止める…！」

「そういう奴をなア

」

無理やり強くなるために力づくで閉じ込めてきたツギハギの信念を、容赦のない男が土足で暴いていく。

「止めるおおおッッ！」

ヴィクターが駆ける。

「にんぎょう盲目的” っていうんだよオツ！」

男が迎え討つ。

だが、暗殺者として完成されたヴィクターの弾けるような接近に、男の動体視力では残像さえ映らなかった。

両者の距離は五メートル。

それを、わずか一秒という時間の中で男の間合いに飛び込み、得物である剣を握る右手首を切断して再び間合いを取る、思わず見惚れるほど鮮やかな一閃。

「ぐうあアッ ！？」

男の右手、神経を駆け巡って脳髓に雪崩れ込む激痛。

粘るような残響を立てて地面に落ちた剣が、その切断面から溢れる鮮血に濡れて朱を纏う。

…、不気味なまでに沈黙する、二人。

ただの体力の消耗だけではない傷によって息を乱す少年と、圧倒的な実力の差をまざまざと見せ付けられた男の消沈する息遣いが、幽かなハーモニーを奏でる。

やがて、男の口から渴いた笑みが零れた。

「やはり、な…。俺たちに悪を押し付けるお前たち偽善者は結局、俺たちを殺すことでしか自分を正当化できない。…俺たちを平気な顔して谷底に突き落としていながら救おうともせず、犠牲を積み重ねてようやく這い上がってきてみれば全力で他人のフリだ。

…くく。お前たちは、本当にどこまでも救われない卑劣な生き物だよ…」

そう言って、男は左手で剣を拾う。

「バカな…！？ 降ふ」

「だが、タダでは死なん！」

男はそのまま自分の剣を、自分の腹部に突き刺した。

「何を　！？」

困惑し、目を見開くヴィクターを、男は狂気に憑かれた瞳で直視する。

「ヴィクターと言ったな！ お前の信じる心というヤツがどれほど簡単に人を裏切るか、その目でしっかりと焼き付けるがいい！ その時、お前が人間に絶望しながら墮落していく様を地獄の底から見届けてやるぞ！ お前が正しいか、俺が正しいか、厭でも痛感する現実にたつぷりと溺れながら理想と死ね！ 世界は、最初から最後まで俺たちに救済の手を差し伸べることはしないのだとなア！」

ごふつ、と致命的な量の血を吐血しながらも嗤う男は、そうしてヴィクターに最期の呪いを残して絶命した。

青褪めた顔、男を見つめる少年の眸は雑念のたゆたう闇色から純粹無比の病色へ、そこに壮大な渦を描く螺旋の腕が、事象の中心に穿孔する幻想の境界面で踊るように終焉を謳っている。

しかし、それは刹那に浮かび上がっては消えた、泡沫の投影にすぎない。

「…、僕はただ、姉さんを守りたい、ただだ…！」

男の屍を前に立ち尽くすヴィクターは、奇妙な威圧感と戦いながらも力任せに掻き乱された心を落ち着かせ、無意識のうちに呟いた遁辞に苦悩する。

それをこそ罪だと切り捨てた男。

それをこそ罰だと受け入れた少年。

大地に撒かれた男の血は月の光に触れて翳りを帯び、ヴィクターは慈悲も冒涇もなく目の前の死を凝視する。

「…グレッグ…。グレッグは、無事なのか…？」

何気なく振り向いた視線の先、明かりの消えた家には、濃厚な闇が巢を張っていた。

最後の一人もまた、くぐもる悲鳴に瞳孔を開かせたまま息絶えた。

嗚咽を噛み殺すような、そうと知れなければ聞き取ることもできぬほど、ごくごく幽かな“虫の息”。

それは天から伸びる蜘蛛の糸が細く解かれるように急速に弱まり、やがて空気ですえも凍結しそうな冷たい静寂に倣って沈黙する。

光の絶えた暗赤色の処刑場。

いつの間にか消えた蠟燭の光に代わって差し込む滑らかな月明かりが、ゾツとするほど薄暗い部屋にぼつりと佇む一人の輪郭を浮かび上がらせる。

「悪く思ふなよ。これも因果応報ってヤツだ」

不意に飛び込んでくるのは刃物のような音を奏でる風ばかり。

罪の色をした黒い人影はそうした風を避けるように深く面伏せていて、前のめりに腰を折る彼の前には、これもまた黒く長い人型の影が床に投げかけられている。

グレッグは喉に深々と沈み込ませたナイフを抜き、口を塞ぐ左手を離してから、べったりと刀身に付着した血糊を振り払う。

巖のように硬く凍る床、しかしそこにムツとするような熱気を錯覚してしまうのは、音もなく彼が屠った七つの亡骸が今もなお、喉元から断続的に真新しい鮮血を垂れ流しているからだ。

人の気配は、もう、とうにない。

背後から光を受けているせいか、その表情を容易には読み取らせぬ陰りを顔に張り付かせたまま徐に立ち上がるグレッグは、もう一度だけ部屋の中を見回して生存者の有無を確認すると、忍び込む前に吹き消した蠟燭に再び火を灯す。

幽かな陰影をつける頼りない炎を風に揺らめかせ、空疎な家の内部に凝り固まる闇を蠟燭の光が開いていく。

「…全滅、確認。…速やかに殺してやったんだ、起き上がらずにさっさと成仏しろよ。…でないと、万が一にも“咒魂鬼”に目をつけられたら、死ぬに死ねない煉獄に囚われちまうからな」

山賊は、もはや人との接点を持たぬ死に孤立している。

誰もが例外なく喉を切られ、脇にある小剣は鞘から抜かれることなく横たわり、あたかも墓標のように持ち主の傍に留まったままだ。

彼らの素性など知る由もないが、知ったところで彼らの死に対する感情など何も湧くことはない。

「…そう、俺たちの世界は覚悟の世界だ。殺す殺されるという関係に身を置く俺たちは、いつだって死を覚悟しなきゃならない。…それができない奴は、二度と俺たちの世界に戻ってくるな。せめて何もかもを忘れた来世で、今度は真面目に生きろよな」

わずかに眉を寄せて、今度は入口の方角へ目をやった。

外はやはり相も変わらず村を押し包む闇、その向こうには、少しばかり拓けた村の中央部へと繋がっている。

「ヴィクターも上手くやったかな。…ま、あいつのことだから、見当違いの優しさを見せて追い詰められてなきやいいけど」

闇の奥で男と対峙しているはずの親友の姿を殊更のように透かし見ようとするのは、その万が一を笑い飛ばせない自分を安心させたかったからなのかもしれない。

もし仮に、この村にいる山賊の討伐が暗殺者としての任務であったのなら、ヴィクターの能力を持つてすれば三分も必要とせずに全滅させることができるだろう。

この数を相手にただ殺すだけなら一分もいらず、捕縛を目的とするなら二分もあれば、ヴィクターのみならずグレッグも容易に山賊たちを無力化させることができた。

しかし今回、ヴィクターは任務としてではなく、あくまでも個人として山賊との対面を決意し、あるうことかその頭目に投降を促そうと後を追いかけたのである。

この差異が意味するものは詰まる所、任務と無関係の殺しには干渉しない、という二人の信念に裏打ちされた行動の格差であることを雄弁に物語っていた。

直属の上司たるイングラムの勅命が下ったなら、たとえ相手が善人であれ任務を遂行し、体得した用心深い隠密性を遺憾なく発揮することでその痕跡を残さない。

暗殺者の特徴とも言える独特の装備　全身を包み込む黒装束と、双眸だけを開かせて頭部に巻き付ける漆黒の布帯、そして光に

反射しないよう、柄と刀身までもを黒に塗り染められたナイフと手甲を武器として、二人を含めた暗殺者らは任務の障害となる対象をすべて殺し尽くすのだ。

ゆえに暗殺者とは即ち、他人の死を前提にして自分の生を維持させる罪深い存在に他ならない。

…、しかし当然ながら、こうした暗殺者のすべてが殺人に愉悦しているわけではなかった。

そもそも任務以外の行動で多くの人間を殺すということは、それはもう暗殺者として殺人を背負っているのではなく、個人の歪んだ価値観から殺人を容認している反社会的な殺戮者でしかない。

確かに、二人は養成所を経て殺人者となったが、だからと言って当たり前のように殺人を肯定するほど、人間の生命を軽視することはない。

むしろ、常に生死を左右する殺伐とした環境に身を置くことで、より生命の尊さを学び、たとえ相手が悪であろうとも殺人という行為で簡単に断罪することは間違っていると考えている。

幼少時に孤児となつて放浪していた過去、暗殺者として数多くの人間を殺し、そして自分も殺されるという立場にあるからこそ分かる、今を“生きている”という実感の素晴らしさ。

ならば、生命とは簡単に奪つてよいはずがなく、罪を犯したのなら誰もが裁断の場をもって、正しい罰を受け入れるべきであるのだと。

元々、そのために罪と罰を規定する法があり、そのために国家という枠組みの中で纏めているのではなかったか。

「…だが、それでもこいつらには、生かしてはおけない理由があった」

そう小さく呟いたグレッグは向き直り、奥の壁面で長方形に細く仕切る隠し扉に手を引っ掛け、そのまま左にずらした。

目を凝らしても判別がつかぬほど巧妙に隠されているその隠し扉の先、数々の修羅場を潜り抜けてきたグレッグでさえも最初は顔色を失いながら手で鼻を被うほどの瘴気を溢す、陰惨な惨殺空間が彼の目に飛び込んできた。

中は暗い。

外部から完全に密閉された四畳ほどの狭い空間、勝手口に立つグレッグの背から流れ込む蠟燭の幽かな明かりだけが、意図的に閉ざされたこの部屋の様相を露わにする。

恐らく、この部屋の本来の利用目的は食糧の保存だったのだろう、奥に置かれている木造の四段棚には、どれもよく似た形をしている壺が並んであるのがうつすらと見えた。

長らく空けていたせいも四方の壁は少し朽ちていて、手入れなどするはずのない山賊たちは、グレッグの足元から続く床に充満する埃をたつぷりと踏み荒らした、夥しい足跡を残している。

…だが、この足跡は、ある位置から完全に途絶えていた。

「お前たちは越えちゃいけない一線を踏み越えた。生きるための一度きりではなく、何度も何度も人を殺して血肉を食ってきたお前たちは、とっくに人間をやめて“鬼”になっちまってたんだよ…、バカ野郎…！」

天井から逆さ吊りにされている四つの人影、それは紛れもなく、死体だった。

血を汲むための桶から、わずか十センチばかり上にある頭部のない首を地面に向け、肉の剥がれた白骨の両腕が投げ出されている。

一系まとわぬ姿でこちらを向いていたが、それはとうに人が思い描く胸部ではなかった。

鎖骨から下腹部にかけて大きく無造作に切り開かれた胴体部には肋骨や筋肉もなければ、肺や心臓、胃や腸といったあらゆる臓器がすっぽりと抜け落ちていて、表面の皮の輪郭だけが申し訳程度にヒトガタを維持している。

、女、だった。

その恥部から天井に伸びる骨の浮き出た両腿、唯一にして無傷な膝頭を辿ったのも束の間、細い脛の大部分の肉もやはり削がれており、さらに上方の両足首は一つに纏めるようにして縄が巻かれている。

どうやら足先は逃亡を防ぐために潰されているらしく、その形状は指先を失って丸かった。

…だが、暗闇に慣れた目を凝らして奥を見据えたなら分かるだろ

う。

四段の棚に並べられた、闇に紛れて壺のような形に見えていた、肉質を失ったヒトの頭部だったモノを。

ゴトン。

誰も触れていない首が、ひとりでに落ちる。

目を失った眼窩と傷だらけの鼻、そして歯の抜けた口から零れるのは、どろりと流れる赤黒い　　ニイイ…。

危険だ！　と全力で駆け巡る本能の警告を忠実に受け取り、その光景を無防備にも直視していたグレッグは慌てて扉を閉めた。

極限まで低い霊圧、歪んだ怨念が小さな密室を結界として悪夢を閉ざし、異常な村の中でなお現実を咀嚼する異状を作り上げている。

あのまま首を直視していたなら、今頃は間違いなく怨念に憑かれ、生きながらにして亡者となっていたに違いない。

もはやここは単なる隠し部屋ではなくなっていたが、とはいえ“咒魂鬼”までには程遠い、異端の祠のような肌寒い存在感を封緘しているだけのようだった。

…、しかし、目にしただけでも込み上げてくる、吐き気。

喉の奥に迫り上がってくるモノを、グレッグは歯を食いしばって飲み干した。

「…俺は、どんな罪にでも情状酌量の余地があるとは思わない。…もし、俺が彼女らと同じ被害を受けて奇跡的に助けられたなら、きっと皆殺しにしても飽き足りないだろうから」

不遇な境遇から山賊に身を落とした男たちと、不幸な出会い頭から理不尽に食べられた女たち。

社会の人柱となつて捨てられた彼らは確かに運命に虐げられてきたのかもしれないが、だからといってそれが、この非道な屠殺場の言い訳になつていいはずがない。

もし、この四人のうち、誰かが友人だったなら。

もし、この四人のうち、誰かが仲間だったなら。

もし、この四人のうち、誰かが母親だったなら。

もし、この四人のうち、誰かがルナだったなら。

「…そう、これは生命の問題じゃない。感情の問題だ。お前らには何の感慨も浮かばないがな、さすがにこれは胸にくるものがある。…だからこれは制裁でも何でもなし。彼女らに対する、俺なりの自己満足な哀悼表現だ」

人間には、他の生命に対して様々な反応を示す“心”がある。

それは確然としたカタチこそないものだが、誰であれ感情は“病む”こともあれば“痛”むこともしばしばだ。

そしてそれは本人の成長過程における、内側からではなく外部か

らの環境刺激によって形成されていくものである。

何も見えない、何も触れられない、何も聞こえない世界では働こうにも働けない“心”のメカニズムは、まさに人の数ほど存在する多様にして複雑な迷宮に近い。

一つの問いに対して十の答えを導き出すことができる者、一つの答えを多角的な視点から観察することでさらに十の問いを発見することができる者。

それが、偉大にして傲慢たる“知恵”という名の呪いを遺伝し続ける、人類の原罪であるのかもしれない。

「ああ、そうだ。俺たちは殺人者だ。…だからこそ、俺たちにしかできない怨みの晴らし方というものがある」

ゆえに、グレッグはすでに覚悟している。

山賊に対する自分の行動に多くの賛否があろうとも、人間にはどうしても“必要悪”がいるのだとする、確信ある自らのエゴを貫き通す血塗られた人生を歩み抜くことを。

「感情と法律は本質的に違うもんだ。…俺は、俺を裏切りたくない。これだけは誰にも譲れない」

そして、だからこそ彼は今もなお苦悩する。

本当にそれで正しいのか。

自分の決断に嘘や偽りがないと正しく言い切れるのか。

お前はただ、人を殺すために被害者を免罪符に持ち出しただけじゃないのか。

…、あまりに多くの人間を殺し続けると、自分の価値観が不意に分からなくなることがある。

それが完全に崩壊した時、自分もまた、あの山賊と同じように人間をやめて“鬼”と化してしまうのだろうか。

キヤメロット城に近づくにつれて、彼の運命の決断も無情に迫る。

さあ、次はお前の番だ。

国のために親友を裏切るのか。

親友のために国を裏切るのか。

“善悪にはまるで無頓着な運命が嗤っている”

だが、強要しないのが、運命が残酷たる所以でもあるのだ。

選ぶのは、あくまでも本人の意志に委ねられている。

悩む時間はない。

しかし、考える猶予は、まだある。

最善の選択。

顔で笑い、心で泣く慟哭。

国のためには仲間をも犠牲にする、この世で最も偽善的な卑しい人種。

暗殺者は国のために、善悪に関係なく託された任務を完璧に遂行しなければならぬ。

しかしそれは皮肉にも、今を“生きている”ということの素晴らしさを知っている自分が、同時に冷酷な死をもたらす黒い招き手であるという矛盾を生み出す元凶そのものにもなっている。

ならば彼はとうに、“生命”を語る資格など持ち得ていないのかもしれない。

「…俺は救うぞ。あの二人を、必ず救ってみせる」

そのためには、ブリテン最高との呼び声高い王宮魔術士長イングラムの目を欺く詐術に加えて、ジュリア王女の協力も必要になる。

だが、いくらヴィクターに好意を持っているとはいえ、彼女が素直に手伝ってくれるとはどう都合よく考えたとしても難しく思えた。

すでに敵国の王女に戻ってしまった彼女の責任ある立場からすれば、むしろその敵対国から派遣された暗殺者の言葉を鵜呑みにするわけがなく、そもそも彼女に会えるかどうかすら分からない。

しかし、賽はすでに投げられている。

ならばグレッグは、あの時の王女の言葉をこそ信じたいと思って

いた。

“ さようなら ”

あの時のジュリアの目は、ひどく哀しそうで。

“ せっかく王都で人質を用意してあげていたのに、貴方たちが裏切ったせいで無駄になったわ ”

あの時のジュリアの唇は、ひどく震えていた。

二人にしか分からない、秘密通信。

ジュリアがどういった経緯でルナを連れ去ったのかは不明だが、それでもグレッグは、この言葉の意味を理解した瞬間から彼女を信じると決めた。

「 グレッグ…？ 」

そうでなければ、あの時に不自然にも都合よく巨漢の騎士の剣を止め、ルナの所在を暗々裏に教えるような言葉を残すはずがない。

それは少なくとも、ルナに対するジュリアの友情だけは本物だったと信じることができた。

「 レッグ…！ 」

だが問題は、協力してくれるか否かにある。

ヴィクターをルナの確保に向かわせ、自分は王女の説得に当たれ

ばいいのだろうが、聖騎士スレインの率いる騎士団の戦況と城内の状況によって、それは刻一刻と悪化する危うい均衡の上にあるものだ。

ゆえに、これはグレッグの人生を賭けた一世一代の大博打。

こんな畜生の命一つで二人の命が助かるというのなら、代価として遠慮なく運命とやりに受け取ってほしかった。

だが、悔るなかれ。

「グレッグ！」

不意に背後から呼びかけられた親友の声に瞠目し、ひとり思案していたグレッグは心臓の悪い思いをしながら振り返る。

「なんだ、ヴィクターか。…まったく、脅かすなよ」

入口に立つヴィクターは少しぼかんとして、ややの間を考えて、
ごめんと小さく頭を下げる。

…、心なしが顔色が悪いようにも見えたが、それはこの夜陰に乗じる室内の仄明るい蠟燭のせいにも思えた。

「こっちは…、もう制圧したみたいだね」

「ああ。こいつらはもう、山賊ですらなくなつてやがった。…このまま放置すれば、こいつらはずっと人間を喰らい続ける悪食に走つてたはずだ。…だったら、最後ぐらいはヒトとして殺してやった方が、こいつらの為ってもんだ」

グレッグの言葉には、生返事が返ってきた。

「…どうした？ お前、さっきから顔色が悪いように見えるけど…、どこかやられたか？」

ヴィクターは首を振る。

「ううん、大丈夫。…ごめん。ちょっと、風に当たってきててもいいかな？」

「ああ、お前ん家で休もうと考えてたけど、さすがにコレじやあ休めないよな。…いいぜ。あと、ついでに代わりの寢床を探しってきてくれよ。この辺りなら、お前の方がよく知ってるからな」

分かった、と応えたヴィクターは少し考え込むように面伏せて、しばしの逡巡のあと顔を上げた。

「ねえ、グレッグ…。僕たちは親友、だよな…？ これから先、何があっても…、ずっと僕の親友でいてくれるよね…？」

縋りつく手をこそ暗中模索するような、どこかひどく思い詰めた哀しい眼の色をグレッグは見た。

きつと、任務以外で殺さざるをえなかった相手のことを思っているのだろう、弱音を見せまいと意地を張る子供の表情に、それは似ているのかもしれない。

「あ、当たり前じゃないか。…なんでそんな事を聞くんだよ、お前。何があったのか知らないけど、少しセンチになりすぎてやしないか…？」

だが、もしかすると自分でも気づかないうちに心中を吐露していたのかもしれないと不安になり、グレッグはそうとは知れぬ程度にカマをかけてみる。

「…うん、そうかもしれない…」

「そうだって。確かにドウムニアとの国境線も目の前だけだよ、あんまり気負いしすぎるのも良くないぜ？」

どうやら秘計のそれを不安視している按配ではなさそうだったが、さりとして本心からの言葉でも、ヴィクターの沈鬱な表情を晴らすことはできなかったようだった。

ただ、それが彼の内の何かを決意させたのか、もう一度グレッグを見やる瞳には危険な不幸の光があった。

「グレッグ。君に一つ、頼みたいことがあるんだ」

その言葉を聞く前に、グレッグには不穏な予兆めいた違和感をヴィクターから感じ取っていた。

だが、それが具体的に何を意味するのかが分からず、畢竟、脳裏に絡まる漠然とした不安を振り払うように親友に背を向ける。

「な、何だよ改まって。…やめろよな、そんな今生の別れみたいなコト言っの」

まさしく、油断ならない“夜”の眼差しを向けるヴィクターに気圧され、グレッグは胡乱ながらも話を逸らそうと無駄な足掻きをし

てみる。

惜しむらくは、彼がこれから何を言わんとするのが、何となく気配で察せられてしまったから。

「自分を安心させたいんだ。…僕がまだ“者”^{ヒト}であるうちに、君だけにしか頼めないことがある」

「やめろよ、そっぴいの…」

言葉に含ませた苛立ちの余韻を知ってか知らずか、ヴィクターは洒落気のない真面目な顔つきで言葉を繋げようとする。

「もし僕が死んだら、姉さんを」

「やめろ！」

もう我慢できずに一喝したグレッグの怒気に、ヴィクターはようやく我に返ったかのように狼狽した声を上げて言葉を止めた。

胸の中に咲く紅蓮の花、床を睨んだまま拳を強く握り締め、グレッグはそれこそ祈るような口調で紡ぐ。

「そんな…、そんな縁起でもない台詞は絶対に口にするな！…なに、大丈夫さ！たとえ何があっても、俺が必ずお前たちを救ってみせる！そのためなら俺は人間をやめたって構わない！…だから、俺の前で“死ぬ”だなんて言葉を軽々しく使うのは止めてくれ…！」

今にも泣きそうな、震えた声が響く。

「グレッグ…」

今にも泣きそうに、震える瞳を見た。

「生きて帰る！　それが俺たちの任務だ！　ルナちゃんを助けて、皆で生きて帰るんだ！　俺を信じろ！　そして戦争が終わったら、また二人でルナちゃんを笑わせてやろうぜ！」

そう言いながら、ヴィクターの傍に歩いてやれない自分が、ひどく哀しかった。

今こうして話している間にも、イングラムと親友とを天秤にかけて葛藤している自分が情けなく、これが本当に最善の選択なのかと絶えず自問自答していることに恥じている。

結局は、自信がないのだ。

イングラムを裏切つてまで二人を守り抜く覚悟はあっても、いざ明確に裏切りの言葉を連ねようとすると、まるで唐突に悪夢から目覚めたかのように汗ばむ冷静さを取り戻してしまう。

それはちょうど、死ぬ覚悟と、死ぬということの違いに似ている。

裏切り者には死の追っ手が待つばかり。

たとえ今だけでも無事に脱出できたとしても、ルナを連れただままでの逃走には限界がある。

「…ごめん、グレッグ…。僕は、本当にどうかしてたみたいだ…」

いつそ、親友に打ち明けてみるべきなのか。

だが、打ち明けたところでどうする。

ルナのことは自分に任せて、国のために死んでくれと言うのか。

それとも、ルナを危険に晒しながらも、逃げ続けろと言うのか。

それは、どちらが正しくてどちらが間違っているのか分からない
答えを親友の判断に委ねて、思考を放棄することで楽になろうと
しているだけじゃないのか。

どちらも正しいのか。

どちらも間違っているのか。

分からない。

なぜ、暗殺者とはこうも卑しい人種なのだろう。

なぜ、ヴィクターと出会ってしまったのだろう。

出会わなければ、こんなにも苦しい決断を選ばずに済んだはずな
のに…！

「そうだよな。やる前から悲観するのは間違ってるよね。…うん、
ありがとうグレッグ…。僕は…、僕にできることをするだけだよな」

違う…！

違うんだ、ヴィクター！

俺が本当に言いたいことは、そんなことじゃないんだ…！

俺が本当に言いたいのは…！

「…ああ、そうさ。…ほら、元気になったら早く寢床を探してくれよ。このままじゃ夜風に冷えちまう」

「うん、分かった。…それじゃあ、行ってくる」

ヴィクターは幾分ながら晴れた顔で、足早に去っていく。

…結局、彼は最後まで上手く笑えなかった。

笑い方を忘れてしまったのだろうか。

それとも自分には、最初からソナモノなどなかったのだろうか。

…ああ、それすらも分からなくなってしまったほど、彼はどうしようもない愚か者にまで墮落してしまったのだろうか。

「…誰か、助けてくれ…」

心から救いを求める声であっても、都合のいい応えなどあるはずもない。

「…クソ…。俺は、どうすればいいんだ…！」

沈鬱な面持ちのまま顔を上げた、その瞬間。

ドクン。

それを、見てしまった。

運命は、逃げ道のある選択肢など用意しない。

ドクン。

見つけてしまったのだ。

世界が周到に仕組んだ罠は、真実無慈悲。

ドクン。

床に流れる血痕の切れ目。

知らなければ良かったか？

ドクン。

ある地点から不自然にも途切れた、流血の痕跡。

だがお前はそれを知ってしまった。

ドクン。

「あれは…、地下室、か…？」

知るということは即ち、覚悟するということ。

ドクン。

まさか、他にも誰かが隠れているというのか。

そしてそれが、この物語の終わりの始まり。

ドクン。

グレッグはナイフを床に突き立て、梃子の要領で持ち上げる。

積み上げられた“善”があるならば、それに相応しい必要“悪”がいると言ったのはお前の方。

ドクン。

扉を開けた先にはやはり、狭い階段が地下に向かって伸びている。

だがもちろん強制はしない。

ドクン。

その底は暗く、どこまで続いているのか判然としなかった。

選ぶ権利は、あくまでもお前にある。

ドクン。

蠟燭を片手に底を照らそうとしたが、どうやら少しばかり下りな

ければ光は届かないようだった。

行くか、退くか、誰にでもできる簡単な二者択一だ。

ドクン。

「いったい、何があるんだ……？」

用心深くナイフを構えて、ヴィクターから知らされていない地下に漂う瘴気を見やる。

“ 救済のない運命を背負う覚悟はあるか？ ”

ドクン…！

グレッグは、その闇に向かって一歩を踏み出した。

第十八話　く　“月”　前編く（後書き）

次回の投稿予定日は、2月23日を予定しております。

ご愛読していただき、本当にありがとうございました。

では、また次話でお会いしましょう。

ありがとうございました。

第十九話　「月」　後編（前書き）

はい。

目が痛い、頭が痛い、心が痛いとの呼び声も高い¥（＾　＾）ノ式です。

このまま物語が進んでしまえば、終盤で18禁要素がログインしそうな調子なんですが……。

やっぱダメですかねー。

それなんて　ログ？　なんて言われそうで怖いのですが、まあ、その時は某社長さん風に「ふうん」と睥睨してやってください。

きっと、オワタは喜んで尻尾を振りますから（笑）

まさに病人ってヤツですね、わかります（。　。）

あとですね、今話から一ページの文字量が倍に増えましたので、単純にページ数が半分近くに減りました。

オワタはいつも携帯のメモを使って書いているのですが、実はメモ二枚分で一ページと思っていたのが、四枚分で一ページだと言うことが分かりまして……。

あと、他にも携帯小説用に読みやすくできるよう、オワタなりに試行錯誤しながら頑張りたいと思っています。

ただ、ルビは基本的に当字でない限りは付けませんので、どうしても読めない漢字がありましたらググって下さい。

こんなオワタでもよろしければ、ふつつか者ではありますが末永くお付き合いしてくださいませ。

それでは、長くなりましたが、引き続き本編をお楽しみください。

第十九話　　“月”　後編

芳ばしく焼けたパンの香りが、家庭的な日常にある和やかな雰囲気
を部屋の中に満たしていく。

抜きん出た天井を誇る高さを際立たせるのは円柱、清潔に保たれ
た壁は一面が白に染められており、その一部は平均的な等身大を遥
かに上回る窓のために大きく切り開かれている。

その王室を贅沢に飾るのは、これもまた豪華に装飾されたインテ
リアの数々だ。

木葉型に彫り込まれた天板のテーブル、その周囲を、安定感を重
視した美麗な輪郭を持つ椅子が取り囲み、仄かな安息を卓上に添え
る華奢な花器がそつと置かれていた。

「おついしいおついしいあっさごーはん　　いっぱーい食べつ
てげーんきーだそー」

しかし本来、この王室にあるはずの天蓋付き寝台の代わりに設え
てるのは、思わず目を疑いたくなるのも頷ける簡易型の調理場で
あった。

そしてそこで、陽気な声の持ち主が即興の歌を交えながら、当た
り前のように朝食を作っている。

まず目を引くのは、カーネリアン紅玉髓の如く鮮やかな朱を彩る川瀬のような、
微風に靡いただけでも幻想的な音を奏でて万人を魅了しそうな髪だ

った。

なだらかな長身の背に沿って真っ直ぐに流れ落ちるそれは、後頭部の高い位置で無造作に纏められているにも拘わらず、毛先の一本一本までもを精確に見て取れるほど整合している。

そこから僅かに見える項は、まるで不香の花のように白く肌理細かい素肌を露出し、見る者を無秩序に誘惑して蠱惑的だ。

「あーそんーで食ーべて、げーんきーにはーしゃぐ　そーれっがこーどもーのしーごとーだぞー」

だが、これらは彼女が具える美貌の、ほんの一部分でしかない。

絹の柔らかさに映える髪に向こう側、あたかも朝日を受けて輝いて見えるのは雪肌の顔容、細長い影を曳く睫毛の下には蒼海の瞳を描く花脛があり、さらに下へと目をやれば、理想の稜線を辿る鼻筋と、整然と並ぶ皓齒を隠した瑞々しい桜色の唇が調和する。

恐らくは、男と呼ばれたる異性に生まれた人間たちの凡てが目にした瞬間に情欲を抱くであろう、あまりにも完璧すぎる完成度をもってこの世に生を受けた絶世の美女がそこにいた。

小刻みに、規則的な拍子で左右に動かす身体に合わせて即興の歌を導くその声帯も、船乗りたちの怪談に現れる“魔鳥の半人”（セイレーン）に類するほど、別格の調べを宿す魔的な魅力を秘めている。

「サーラッダ、サーラッダおーいしーなー　エービっのかーらっ

とワータ取って、しーおをかりけれーば放置する」

そうして水分を取る間に、クリスティー又は微塵切りにした香草にレモンとオリーブと塩を混ぜ合わせたソースを作る。

「さーてさーておー次ーはあつたまーがパーン　焼ーいーてやーわらーかあつたまーがパーン」

衝撃的な歌詞はそのままにして、次に砂糖と牛乳、そして卵を混ぜた物に予め一晚ほど浸して寝かせていたパンを、牛酪バターとともに火にかけて両面を焼き上げる。

その片手間に果実を搾ってオレンジジュースを作り、デザート代わりに少量の砂糖を塗した苺を皿の上に盛りつけていく。

他にも、手作りに焼き上げたパンの隣には、完熟した苺にレモンや砂糖、そして少量の蒸留酒を配分し、適度に苺の粒を残した浅い煮詰めのだんごを添えていた。

「よつしよつしすーいぶーん取ーれったぞつと。あーとーはグーリルーで焼ーいちゃーうぞー」

約十分ほど経った頃、焼いたパンと入れ替える形で、先ほどの水分を程よく取り除いたエビを火で焼き上げ、取り出したパンはそのまま皿に盛りつける。

…、確かにこれだけを見たならば、ごく一般的な家庭と何ら変わらぬ按配に思えるが、そこに異常があると見抜いた者ならば、この光景の中におよそ有り得べかざる現象が含まれていることを戦慄とともに知るだろう。

なぜならば、この調理場は真実、道具のみが揃っているばかりであり、肝心の水回りや火入れなどは瞬時に手に入れようもない按配であるからだ。

元々、王女の部屋に誰にも知られることなく調理場を設えるなど、その度量と実行力そのものに違和感を覚えるどころか、そもそも普通の侍女では考えることも愚かしいはずの行為を彼女は平然とやっている。

しかしそこに悪意はないようであつたし、ただ純粹に調理するためだけに準備したこの調理場で、歌いながら朝食を整えていく彼女は心から愉しそうな様子であつた。

「　、あ」

順調に海老を焼きながら不意に、脳裏によぎつた疑問に手を止める。

「そういえば、あの子の苦手な食べ物、聞いてなかったな…」

そう呟きながら眉を寄せて目を細め、その繊細な掌を唇に当てながら、クリスティーヌは思案する。

「うーん。…まさか、この中に苦手な物があつたりとか、しないわよね…？」

そのまま横目にして少し考えてみたものの、結局のところ作り直すのもまた面倒に思い、ふと肩を竦めた。

「ま、その時はその時か。今更だし、苦手な物があつたら私が食べちゃえば済む話だしね。あー、もしかしたらこれが過保護ってヤツなのかも」

ならば、もし自分に子供ができたなら、きっとこんな日常の中で幸福を見出していたのだろうと思う。

そしてそれが、永遠に実現しない幻想であることも。

人の夢が儚いものなのだとするならば、人外が見る夢には果たして応えがあるものなのだろうか。

まあ、なければ創ればいいだけの話なんだけど、とクリスティー又は明解に切り捨てる。

人外には慈悲も寵愛もなく、信仰する神も理想もなければ、他人からの敬愛も、秩序との規律でさえも彼らの在り方を前に立ちはだかることはできない。

人外の本質とは即ち、世界との造反、調和との逸脱。

人々から得られる親愛の捧呈に振り返ることなく、周囲から注がれる肯定の期待に阿諛することもなく、ただひたすら黄昏からの解放を求めた先に辿り着いた、その存在そのものが全能の限界を証明せしめる背徳の異端者。

ゆえに魔人　人類という枠組みを超え、根本から人間を已めた者たちが織り成す奇蹟の御業にひれ伏した、世界に反逆する流刑の契約者である。

「おっとー、危ない危ない。もう少しで焦がす所だった」

程よく焼き上げた海老を、事前に盛りつけていたサラダ野菜の上に載せ、そこに香草ソースを和えて全体の見栄えを調整する。

テーブルの上にはクリスティーヌの空腹を痛いほど刺激する朝食がずらりと並んでおり、その中から一口だけ試食すると、その仕上がり具合に満足して独り頷いた。

「よし、これで完璧でしょ。後はあの子が目を覚ますだけ」

そこで唐突に溜息をつき、呆れたように言葉を繋げる。

「なんだからさ。それ以上、奥に進もうとしたら問答無用で殺すわよ?」

王室の一角、壁に飾られた爽やかな風景画へと目を向けるクリスティーヌの視線の先には、真実だれ一人として存在していない。

ならば当然の如く、室内は再び沈黙に停滞する。

だが不思議なことに、その水面下では息詰まるような重苦しさを滲ませ、何か絶対的に不穏な気配が実体化していくような、そんな予兆めいた空気が辺りに充満していくようであった。

「ああ、やはり見抜かれていましたか。さすがは怪傑盗賊。トリックスター姿を見せる前に私の存在に気づいたのは、貴女が初めてですよ」

それは、喻えではなかった。

何もない宙から現れた靄のような黒煙群が急速に絵画の前へと集まり、徐々に人型の輪郭を造りながら鮮明な色彩を浮かび上がらせていく。

若い男、金の絹糸を思わせる髪と、限りなく漆黒に近い紫紺の瞳、そして他者を見下した嘲笑を絶えず浮かべる唇を併せ持つ、人外の美貌。

「久しぶりね。元気してた？」

その名はヴェンツェル　かの剣聖バルゼフォンをして迂闊には手の出せぬ、ブリテンが生んだ希代の魔人である。

魔性の青年は、微笑みながらクリスティーヌを見返した。

「ええ、とても。まだ事の重大さに気づいていない無能たちが私の掌で滑稽に踊ってくれる様は、見ていて飽きないですからね。まあ、それなりに愉しませてもらっていますよ」

ヴェンツェルの視線に、彼女は素っ気なく肩を竦める。

「こんな悪趣味なイタズラ、よく思いついたわね。これも全部あの娘の為なのかしら？　それとも貴方自身の為なのかな？」

「私を望んだのは彼らの方です。なら、今度は私の望みを訊いてくれてもいいでしょう？」

なるほどね、とクリスティーヌは納得する。

「これは復讐も兼ねてるってわけなんだ。じゃあ、貴方の最終目的

はあくまでも“王”なわけね」

魔人は苦笑する。

「すでに歴史が証明してくれてもいますがね。しかし、やはり自分を納得させるためには名実ともに王として君臨しなければ。いつまでもあんな小娘を王にしているようでは、私の名前に傷が付いてしまうでしょう？」

「どっちでもいいわよ、そんなコト。私は貴方の因縁に興味ないけど、一つだけ。女の子はすぐデリケートな生き物なの。一方的な感情も、行き過ぎると知らないうちに破滅するわよ」

「フフ、私の愛は不滅です。　そう、この物語は最初から最後まで復讐^{アイ}の物語。貴女もその出演者の一人なら、正しい演出をしないと摘み出されてしまいますよ？」

そこでクリスティー又は呆氣に取られたように目を丸めて、次の瞬間には妙に愛嬌のある顔で笑った。

「ああ、そっかそっか、そういうことね。…なーんだ。私はてつきり、貴方ぐらいは知ってるものだと思ってたけど、とんだ見込み違いだったってわけなんだ」

恠えるような彼女の含み笑いを見やり、ヴェンツェルは、いったい何が可笑しいのかと問いかけた。

「だって、貴方がとても大きな勘違いをしてるんだもの。幸か不幸か、私はこの物語の役者には含まれていないの。私の役目は終始“見届ける”ことだけ。それ以上の干渉は無意味に終わるだけなのに、

貴方はいつか、私が貴方の前に立ちはだかると思ってる」

ここに至って、彼はその言葉の真意を理解し、同時に強く眉を顰めてクリスティーヌに目を留める。

「つまり、貴女はこの戦争には一切、拘わらないと言うのですか」

ええ、その通り、と断言する彼女を見て、ヴェンツェルはまるで理解できぬとばかりに手を上げ、首を振る。

「ご冗談を。それでは私と対等に渡り合える者がいなくなってしまうのではないですか。今このブリテンで私に対抗し得る者は、湖の異界から出られない間抜けな魔女と、この王国の破滅を招いた元凶である貴女だけだというのに」

「貴方と私が同等？ それはひょっとして洒落ジョークで言ってるのかな？
…もし違うと言ふのなら」

魔人の視界には、確かにクリスティーヌの姿があるというのに。

「貴方は本当に、私が手を下すまでもないわ」

吐息が耳を撫でるほどの近くから囁かれた、女の言葉。

「ッ!？」

気配すら感じさせぬまま瞬時に背後へと回り込んだ彼女に対し、ヴェンツェルは即座に身を翻すも、後ろには奇妙に誰一人として姿はなかった。

それが何を意味するのか、驚愕と戦慄に身体を緊張させながら知った魔人が、再びゆっくりと振り返る。

仄かな香りを漂わせる朝食を並べたテーブル、その手前に、やはり一歩も動いていないクリスティーヌの姿があった。

それを認めた瞬間、王室の空気が、あたかも氷河期に舞い戻ったかのように凍結する。

尋常ならざる加速、油断から生まれた意表を衝く跳躍、などと呼ぶべき生易しい現象では有り得ない、恐ろしく精確な空間転移でもなければ不可能な次元に値する移動を、何食わぬ顔で自分を見やる目の前の女が涼しげに実行したのだとヴェンツェルは悟る。

しかし、それはまさしく奇蹟たる魔法の領域であり、そして今現在、魔導師は世界でたった二人だけしかないはず。

「…これは、いったい何の真似です…？」

気づけば深海の底で透明の箱に閉じ込められている、そんな感覚に近い恐怖を無尽蔵の憤怒で抑えつけながら、若い魔人は、自分が引き攣った顔でいることを自覚しつつもそう問いかけずにはいられなかったことを齒噛みする。

得体の知れない侍女が、クスリと微笑った。

「幕は必ず引かれるものよ。貴方が本当に向かい合うべき相手は他にいる。けれど、頼みの綱の剣聖は秘術の反動で青息吐息。重い腰を上げた魔女の切り札も西の内外に山積する問題に手間取って枷だらけ。唯一の反抗勢力もまるで実が伴わずに右往左往するばかり。

そうね、今はまだ貴方の時代。だから有頂天に浸るのは可愛いわ」

ヴェンツェルの怪訝な表情を受け止めながら、彼女はたつぷりと間を置いて、心中を読み切ったように言葉を繋げる。

「真っ直ぐな瞳。どんな思想にも興味がなく、あらゆる欲望を嘲笑いながら、ただ惚れた幼い感情を満たすために人間を已めた貴方だけの瞳。その成就のためなら世界を敵に回すことも厭わない。けれど、本当は何が始まりだったのかしらね」

意味深長なクリスティーヌの言葉に、魔人は無意識のうちに反応する。

「何が、だつて…?」

「貴方をこれほどまで一色に染めた感情の、本当の始まりのコト。全てを夜のせいにしたり闇のせいにしたりするのは簡単だけど、人の心に落ちる黄昏にはもっと単純な原点がある。…そしてそれは、誰にでも分かるからこそ、誰もが気づかない盲点なのかもしれない」

魔人が密かに息を詰める。

不安と寂漠、正体を言い当てられることに恐怖する、強い拒絶に満ちた忌々しげな眼差しがクリスティーヌに注がれる。

「…私には、貴女が何を言っているのかがまるで分からない。意味不明な言葉の羅列で私を混乱させようとしても、徒労に終わるだけだ。貴女は無駄な努力をしている」

掌を上にして、ヴェンツェルは片手を前に突き出す。

「力の解放。何もかもを蹂躪する暴力の前では、言葉など塵にも等しい無力にすぎない。私は不和をもたらず者。ほんの少しの気紛れで、世界は容易く崩壊する」

クリスティー又は軽やかに微笑う。

「気に喰わないから駄々を捏ねるだなんて、随分と可愛い所があるじゃない。最初からそんな風に甘えていれば彼女は受け止めてくれていたのかもしれないのに、貴方にはそれができなかった。私が知りたいのはその原点。貴方が耐えられなかったのは、その瞳で何を見たからなのかしら？」

その瞬間、不吉が音を立てて部屋を駆け抜けた。

大気の震動、空間そのものが戦慄するが如くに揺れ、室内のインテリアが恐怖に怯えるように微細な悲鳴を上げている。

恐ろしい何かが撓められ、今にも解き放つ瞬間を切望しているかのような、無差別に周囲を焼き尽くす殺意の波紋がヴェンツェルから迸っているのだ。

その、圧倒的な殺戮の気配に水没する王室で、しかしクリスティー又は肩を竦めるだけに留めている。

「そんなに怯えなくてもいいじゃない。一度きりの命で私たちの前を通り過ぎていく人間たちは、それでも今は私たちと同じ時代を生きてるの。彼らのことを思い出そうとするように、貴方は今、自分の原点を見つめ直す最初で最後のチャンスに立っているのよ」

そう言つて窓の方に歩み寄り、彼女は地平線の彼方から昇る朝日を見つめて、新鮮な空気を味わうように深く呼吸する。

窓から差し込むは爽やかな光、そして、どこからともなく聞こえてくる小鳥の鳴き声と、少しずつ起き上がろうとしている日常の健やかな喧騒の兆し。

空は快晴。

そんな、毎日のように訪れる当たり前の朝の光景をこそ慈しむように見下ろしながら、クリスティーヌは言葉を繋げた。

「哀しみは絶えないから、せめて身近な幸せだけでも気付いてあげないとね。自分のことも、相手のことも大切にしていけるの」

言つて、彼女は振り返る。

「あの時の貴方の願いは切実だった。だから、私は貴方の願いを叶えてあげた。今もそのことに後悔はしてないわ。貴方の言う通り、あのまま“刻の腑喰”を迎えていれば、彼女はいつか必ず気が狂っていたでしょうから。そう。あの件では、貴方は確かに彼女を救っていたのよ」

そして、確かに見た。

拳大の球体をした獄炎がヴェンツェルの掌の上で、あたたかもクリスティーヌを値踏みするかのように蠢いているのを。

「…、そんなことはもう、私には関係のないことだ。この世でただ

一人、世界を破壊してもいいという権利を与えられたなら、それに応えてやるのが王としての務めだろう？　だから私は全てを破壊する。そして新たに生まれ変わった世界で、私は今度こそ王として君臨し続けるのさ」

その神秘を自ら握り潰し、唐突に魔人の姿が黒煙に分離したかと思うと、文字通りに雲散霧消する。

「今日は貴女の顔に免じて見逃してあげましょう。また、会いに行きますと伝えておいてください。また、ね……。クククク……。アツハハハハハハハ！」

空から叩きつけるような笑い声を残して、ブリテンに破滅をもたらす魔人の気配が完全に消失した。

夜の世界に泳ぐ魚が急速に遠ざかり、朝の世界にひとり佇むクリスティー又は静かに瞑目する。

「不幸だったのは、誰のせいでもないということ。選択の余地がなかった運命が複雑に絡み合つて、一つの悲劇を創り上げる」

そこで彼女は言葉を止め、軽く息を吐いて手を叩くことで意識を切り替える。

「あー、ヤメヤメ。こんな重い空気なんて朝から吸ってられないわよ。…、まったく」

言って、クリステイヤー又は王室の入口へと目を向けた。

「たしそういうコトだから、貴方も今日は引きなさい。…だいたい、本わ

業を前にそんな子供だましで隠れた気になられたら、相当の自信家が無能のすることよ。…それに、仮にも女の子の部屋に“お忍び”で侵入しようとするなんて、紳士としてのマナーが足りない証拠ね」

少しお仕置きが必要かな、と続けられたその言葉に危険を感じ取ったのか、室内に潜伏していたもう一つの気配が逃げるように退いていく。

「…ホント、あの子も私も男運に恵まれてないな…。…あ、それはちよつと違うか。あの子にはずっと王子様が隣にいたんだから、私よりは遥かに男運がいいわね」

部屋の中には真実、自分しかないことを確かめてから、クリスティー又は幽かに微笑う。

頬に当たる風は仄かに冷たく、彼女の髪を撫でて朝の目覚めを祝福するように心地いい。

「さて、と。じゃあ、そろそろ眠れるお姫様を迎えに行きましょうか。冷めた朝食はあんまりおいしくないしね」

クリスティー又は飾られた絵画の方へと歩み寄り、その額縁に手を引っ掛けて裏の仕掛けを押す。

途端、白壁は余裕を保った面積を維持しつつ左右に切り開かれ、その奥に隠された扉の外観を露わにした。

その扉を開けた先に、空間の間取りこそ窮屈とまではいかないまでも、先刻の王室と比べればあまりに飾り気のない無機質な部屋がある。

窓どころか、最低限の明かり取りさえもなく外界との接触を遮断するその中は、頼りない蝋燭の光だけが仄き部屋を照らし、その輪郭をぼんやりと浮かび上がらせている按配。

頑丈そうには見えぬ造り、申し訳程度に補強された木製の板壁は粗末な有り様の、密やかな隠し部屋。

そして、どのように移動させたのか、王女の部屋にあるはずの天蓋付き寝台の上で、一人の少女が身を起こして目を伏せている。

歳は十代の半ばか、髪を失った頭部には外部の衝撃から身を守るために帽子を被っており、その複雑な表情を形作る肌は、永く光から遠ざけられてきた彼女の人の知れぬ哀史を代弁するかの如くに白い。

腹部に当てる手もまた抜けるような白い素肌を覗かせていたが、その絶美はむしろ、端正というよりも繊細というべき脆弱さに浮遊する断崖の花のようであった。

少女は部屋に足を進めたクリスティーヌにも気付いた気配はなく、切迫した様子こそなかったものの、些細な異変に戸惑い、不安の色を滲ませて表情を曇らせている。

そんな、独りで背負うことに慣れてしまった彼女の痩せ我慢を不憫に思い、クリスティーヌは敢えて晴れた声音で言った。

「ルナちゃん、おはよ。…調子はどう？」

声をかけられて初めて彼女の存在に気付いた様子で、ルナは首を巡らせてわずかに驚いた表情を見せた。

「あ、クリスティーヌ、さん……。おはよう、ございます……」

顔色に変化はないが、気分が優れないのだろう、また顔を俯かせて自分の腹部に盲目の視線を投げかけている。

やがて、意を決したように口を開いた。

「動いたんです。……こんなこと、今まで、一度もなかったのに……」

ピクリ、とクリスティーヌの眉が動いた。

「安心して。貴女の力は正常に働いているわ」

そう言って唇に手を当てながら、脳裏の思案をそのまま口にする。

「……となると、根源の方から宿主に接触してきたのか……。それとも宿主の方から根源を受け入れようとしたのか……。まあ、どちらにしても貴女が力を止めない以上、“種”が臨月を迎えることは永遠にないわ」

その言葉には、ただ静謐だけが返ってきた。

穏やかに破滅の到来を待つ少女の表情は、果たして母の覚悟か、それとも女の意地か。

「……変、ですよ。……」

恐怖も悲傷も塗り潰す、海のような諦念から注がれた感情の振幅。

「私は、弟を救いたい、と思っているのに…。それなのに、私は、弟を守りたい、って、思っているんです…」

健康に育っていたなら、とうに男たちに持て囃されていたであろう発展途上の美貌の片鱗も、二度と開くことのない瞳と不自由な身体を強いられ、大切な人の胸に飛び込むこともできないなら、何の意味もない。

「こんな私は…、やっぱり、オカシイ、ですよね…」

不幸なことに、彼女はあまりに聡明すぎたのだ。

自分の役目を悲観することなく、明かされた真実をそのまま受け止めたばかりか、その上で最善の未来を自らの意志で選び取るうと努力しているのだから。

たとえそれが、自らの幸福をすべて投げ棄てることになるうとも。

「それはどちらも正しい選択肢なの。だから、どちらも間違ってるって見方ができてしまう。…結局は、自分で選んだ選択肢が一番、正しいんだと思うわ」

「…どちらを、選んでも…、私は、地獄へと、堕ちることに、なるのでしょうか…?」

その時、クリスティーヌは意外にも言葉を躊躇ったが、ややの逡巡を経て単刀直入に言った。

「真面目な話と気休めの言葉、どっちが欲しい?」

だが、彼女はルナがどちらを選ぶのかを解っている。

「…、真実を、お願いします…」

この少女は、あまりにも聡明ふしつすぎるのだから。

そう、と答えたクリスティーヌは、平常通りの口調で彼女の信頼に応えることにした。

「結論から言えば、人間が死んでも、その魂は天国にも地獄にも行かないの。そもそも人間あなたたちが定義する死と世界が定義する死は全くの別物でね、それは恐ろしくも哀しいまでに乖離しているわ」

例えば、ある一人の人間が息絶えたとする。

人間からの視点では、その人物は確かに生命活動を停止しており、肉体が崩壊を始めた時点で本来の生体機能が失われているのだから、その現象を“死”という絶対的な事実として認識することができる。

しかし、世界から見れば、その人物が保有する靈魂が肉体から分離しない限り“死”と認識することはなく、そして魂が肉体に宿り続けている限り、その生命体はあらゆる致命傷を乗り越えうる可能性“早すぎた埋葬”（デッド・オア・アライブ）を秘めているものなのだ。

ゆえに、本来の意味を持つ“死”とは肉体の崩壊ではなく、その生命体に宿る魂の消失を指す言葉なのである。

人はそれを信じたからこそ、その故人の偉大なる書物たりうる

墳墓を作ること、で人生の終着点を物質化し、自らの記憶とともに亡骸を弔うのだらう。

ただ、魂と呼ばれる不可視の存在を、いまだ確認する術を持たないだけで。

「肉体から解放される魂の昇華　これを、私たちは“星幽体の起源奉送”（アストラル・プロジェクション）って呼んでるんだけどね。」

貴女たち人間が死んだ場合、その器である脳から魂が分離して幽体になるんだけど、その時には自動的に、この世界とは全くの別次元にある“無源流の大領域”（アタラクシア・ウロボロス）に回歸していくの。魔導の世界じゃあ、いまだに“無意識の集合体”だなんて呼んでるみたいだけど…。まあ、あながち的外れってわけでもないし、組織的な魔導組合でも設立されれば、この概念も一般化されるでしょうね」

「…なんだから…、新しい言葉が、いっぱいですね…」

呆氣に取られたようなルナの表情を見て、クリスティーヌは微笑する。

「じゃあ、ここで止めとく？　今ならまだ、知らないままでいられるけど」

少しだけ、敢えて突き放したように告げた彼女の問いかけに、ルナはそれでも意志を曲げなかった。

「いえ…、怖い、ですけど…。それでも、もう、中途半端の、ままでは…、いられません、から…」

その決意の言葉に、どこか哀しげに目を伏せてクリスティーヌは頷いた。

「…そうね。貴女は、その道を選んだものね。この“無源流の大領域”の本質はね、浄化と循環にあるの。昇華した無数の魂が“無源流の大領域”に回帰する時、その魂に記録されてる個人情報をも全て消去するんだけど、これは不純物を取り除くことで、より純粹な靈的エネルギーに凝縮させるための行為なの。

ここまでの過程を、さつきも話した“星幽体の起源奉送”って言うんだけど、つまりは世界が認識する生命の“死”そのもの、魂の浄化だと考えるだけでもいいわ」

ルナは説明が進むにつれて首を傾げていたが、それでもクリスティーヌの言葉を必死に理解しようとして、真摯に耳を傾けている様子だった。

「…そして、その次に、循環があるんですね…？」

「その通り。一つ一つの魂がこの源流に回帰する事象を“死”と呼ぶのなら、その逆である“生”もまた、同じ過程を辿るのが自然だからね。魂という“個”から源流という“全”へと昇華した後は、そのままゆつくりと“無源流の大領域”をたゆたいながら、次に生まれ変わる魂の鑄型“生命の雛型”（アリストテレス）を通して個体としてのカタチを得、再び世界のあらゆる生命体の中の一個体として転生するの。

こうして魂が更正する一連の道程を、私たちは“輪廻転生”（リインカーネーション）って呼んでるわ。…まあ、単純に生まれ変わるってことだけで考えるのが早いんだけどね」

それは、世界そのものが自己を維持するために創設した絶対不変のシステムの一つであり、全世界から蒐集する魂の全てを管理すること、再び世界へと転生させるために運営する独立した霊的機能。ナチュラルチャネル

本能は父と母から受け継がれる遺伝子によって肉体に刻まれ、意志は誕生した土地の環境と出会う人間との関係によって精神に溶け込むものだが、これらを動かすエネルギーたる自我は人類固有の専有物ではなく、無限に存在する生命体が保有する、あくまでも世界を構成する純正要素の一つ。

成長する精神の思想を洗い流す、到達不可能な大元。

遺伝する肉体の欲望を切除する、測定不可能な質量。

だが、そこに“悪魔”の陥穽がある。

「理解するのは、難しい、ですけど…。お話を、聞く限り…。善悪の価値が、ないように、思えるのですが…」

「その答えについては二種類あるんだけど…。まあ順を追って話すわね。まず、その前提として重要なのは何をもって善悪に分けるのかというコト。」

そもそも“無源流の大領域”は全霊の集合体。パラレルワールド 平行世界を含めて蒐集される全時空の魂をすべて管理運営する、統一法則なの。特に、大きな影響を及ぼす世界の異物“人類”に対しては、その“星幽体の起源奉送”の扱いも特別シビアだね。源流に回帰する人間の魂は、その手前で同じ神性の秤に掛けられてしまうのよ」

「はか、り…?」

「そう。その秤の名前は“ヤマラージャ雙世審判”って呼ぶの。善惡の秤とも言
うんだけど、その秤の基準がそのまま世界のワガママを顕著に表す
特徴だね。実は元々、人間が一般的に定義する善惡と、世界が基本
的に定義する善惡とは、大きな隔たりがあるのよ。

例えば、遙か昔、人々の生活に大きく貢献した一人の英雄がいた
んだけどね。その英雄は、どんな手段を使っても人の死を絶対的に
減らすのが最善の方法だと考えた。そして死ぬまでそれを実行し、
村や町を救う代わりに、人間に害を為す他の生き物を絶滅に追い込
み、多くの樹木を伐採して資源にし、森を砂漠に変えたの。

確かに、人々から見た彼は、自分たちの生活を豊かにしてくれた
英雄に間違いないんだけど、世界から見た彼は、自己を構成する生
命の一つである星の環境に大きな悪影響を与えたことになる。

結果、彼は人々から英雄と称されて伝説に語り継がれていったん
だけど、その昇華した魂はこの“雙世審判”によって悪と見なされ
るから、次にカタチを迎える“生命の雛型”が得られるまでは、こ
の“無源流の大領域”の中で永遠にたゆたい続けるってわけ。

勿論、次に転生する生命体は必ずしも人間とは限らないし、前世
の個人情報だつて引き継がれることは有り得ないままにね」

これが、世界が定める“輪廻転生”の全貌である。

生前の善惡の基準は人間に対する影響の善し悪しではなく、あく
までも世界を構成する星の環境に与えた影響に類する行為の積み重
ねに着眼されるもの。

「でも、別にこれだつてそんなに悪い仕組みでもないわ。また人間
に転生したければ、頑張つて環境に良いことをすればいいんだし。
一つ木を切れば、二つ木を植える。ただそれだけのことだもの。

本当だつたらね」

「え…？」

さすがに理解の範疇を超えてきた説明に首を傾げながらも、唐突に口籠もったクリスティヌの様子に気付き、ルナは顔を上げる。

「言っただでしょ、答えは二つあるって。今のはね、あくまでも世界が定めた基本的な善悪の基準。本当なら、これが貴女の質問に対する正しい答えになるはずだったんだけど、ここで世界も度肝を抜かれた、完全に予定外のアクシデントが起きちゃったのよ」

全宇宙に在る生命体の根源。

「その昔、まだ人類という存在もなかったこの星には、ある超自然的な支配者たちがいたの。彼らは同族勢力を成して敵対勢力と戦いを繰り広げていたんだけど、ある日、突如として両勢力の前に現れた“魔王”の介入によって彼らは全滅した。その時に殺された支配者たちの中でただ一人、あろうことか自分たちがいなくなった後で繁栄していった無数の生命を呪うために、この“無源流の大領域”に目をつけた者がいたのよ」

全ての魂の原初にして終末。

「こいつの呪いはすごく強力だね。浄化能力が桁外れに高いはずの“無源流の大領域”に力技で介入したんだから、もうお手上げ。善悪を区別する“雙世審判”の判断もお構いなしに、昇華してくる魂のすべてを平等に、あらゆる“生命の雛型”に注ぎ込んで循環させるの。だからこれは、世界に自存する“悪魔”の呪いなものよ」

世界の絶対システムに致命的な欠陥を仕掛けるため、自らの存在そのものを無限の呪詛に変質させることで得た、その超常的な改竄

能力をもって世界の目を完璧に欺いた魔神。

「その呪いの名前は“最も公平なる悪意”（ウボ・サスラ）
ヒトガタを真似てしか顕現しないような悪魔の仕業ではなく、最も
位の高い“魔神”を冠する、それ自体が干渉不可能な神格の呪詛な
のよ」

そんな…、と口の中で呻くルナの表情は、完全に血の気が引けて
青褪めていた。

想像を遙かに上回る悪夢のような現実、世にもおぞましく呪われ
た真実を受け止めることができず、ほとんど放心したように困惑を
極めている様子である。

「…そうね。だから、この話は人間が知らなくてもいい話なの。社
会を纏めるにはどうしても規律が必要不可欠だけど、その為にはま
ず、万人に受け入れられ易い明確な善悪の方が都合がいいのは自明
の理。そうじゃないと、子供たちの教育に悪影響を与えるだけだし
ね」

「…これが、真実だなんて、あるはずがありません…。こんなの…、
あまりにも、無慈悲すぎます…。…善悪に価値がない、だなんて…、
そんなことが…」

そこまで言って、ルナは本当に、この呪いが悪魔だと思った。

この真実を知り、無価値な善悪を守ろうとする人間がいなくなっ
た時、人間が人間を統治する世界は驚くほど簡単に崩壊してしまう
だろう。

理由のない救命が善でなくなる世界。

目的のない殺人が悪でなくなる世界。

それはまさしく、人間ひとりひとりの善性が試される悪魔の誘惑
否、呪いであるのだ。

「その呪いを、解くことは、できない、のですか…？」

「まず無理ね。そもそも“無源流の大領域”そのものが到達不可能な次元にあるし、仮に辿り着いたとしても、その瞬間に強力な浄化作用が働いて個人情報が消されてしまうから、人間程度の魂じゃあ抵抗できないし、精霊レベルの魂でも自我を保つことは赦されない。

最低でも、高次元存在級の星幽体を維持できないと源流には逆らえないわ。残念だけど、私の力でも辿り着くまでが精一杯。さらにその上、呪いを解くだなんて大それたコトは、あまりに力不足が過ぎて笑い話にもならないのよ」

「…、そうですね…」

救済も断罪もない世界。

それは、ある意味では無法の地獄と呼ぶべきだろう。

暴力が蔓延り、他人を信じることができず、裏切りに長けた知恵者だけが生き残る残酷な世紀末。

ああ、人の善性とは、あまりにも油断できない。

「この世には、…天国も、地獄も、ないのですね…」

「それが、在るには在るんだけどね。向こうから招待されない限りは絶対に辿り着けないみたい。私も何度か試してみたんだけど、その手前にある“神霊の七宝印”（ゲート・オブ・メギド）をどうしても突破できなくて…。多分あの門を独力で通過できるのは、世界中を捜しても魔王ぐらいしか思い付かないわね」

もう、言葉を返す気力も、過酷な現実には削ぎ落とされた様子だった。

部屋に漂う、重い沈黙。

暗い表情で俯くルナだったが、クリスティーヌの話の半分も理解しているのかと問われれば、応えることは難しいだろう。

それは、どう足掻いても絶望しかない、人類が知覚もできぬ別次元の幻想であるからだ。

彼女の話はあまりに理解の範疇を超えていて、ほとんど置き去りにされたような孤立を実感せずにはいられなかったが、それでもいよいよもって正体不明に底知れぬこの女性が、少なくとも嘘を話してはいないということだけは受け止めることができた。

少し時間を起き、ようやく顔を上げたルナは、まだ釈然としない様子ながらも少しずつ頭を整理して消化していこうと決意を固めたふうだった。

「すみません…。…ありがとうございました」

無理に微笑み返そうとする少女に幾ばくかの後ろめたさを覚えな

がら、クリスティー又は肩を竦めた。

「喜ばせるような話じゃなくて、ごめんね」

そう言つて、思い出したように言葉を繋いだ。

「でも、気が滅入るような話ばかりじゃないわ。実は、貴女の王子様がもうすぐここにやってくるの」

「私、の…？ …あ」

ルナがすぐに思い至つたのを見て取り、クリスティー又は微笑んだ。

「でも、どうして…？」

「大切な人の為なら、たとえ敵地の中心にでも駆けつける
それが愛の力ってヤツよ」

言つて、クリスティー又はうつとりするような眼差しを虚空に向ける。

「恋はね、ロマンチックすごく詩的な冒険なの。私はそういう健気な青春を応援するのが好きでね。だから今だけは、特別サービスってことで私がここにいてってわけ」

「あ、あの…、えつと…」

顔に朱が注し、初心に狼狽えるルナの仕種を可愛く思い、クリスティー又は満面の笑みを浮かべた。

「まあ、細かいことは気にしないの。とりあえず貴女の王子様が現れるまでは、小煩い狼どもを追い払ってあげるから。…さてと、話が長くなっちゃったわね。もう朝食も冷めちゃってるだろうし、ちよつと温め直してくるわ」

「え、…？」

「ついさつき、向こうの部屋で朝ご飯の準備を整えておいたのよ。それに、こんな薄暗い部屋の中で食べるよりも、よっぽど健康的だと思わない？」

「あ、でも…。向こうは、ジュリアさんの、お部屋ですから…」

「それなら本人に了解を得てるから大丈夫。だから、ちよつとだけ待っててね。口に合うかどうかは分からないけど、味はそんなに变じゃないはずだから」

虚を突かれたような表情をして暫く、ルナはここで初めて、今日一番の晴れた顔を見せた。

「はい。ぜひ、頂きます」

「良かった。じゃあ、ここで少し待っててね。…ふっふっふ、期待してていいわよ」

そう言い残して遠ざかっていく足音が途絶えて間もなく、クリスマスティーヌの絶叫がルナの鼓膜に轟いた。

「こ、このバカ猫ッ！ 私たちの朝食を…！ …こ、こら！ また

食べようとするなつてば！ シッシ！ …… まったく、いったいどこから あ、私が開けた窓か…！ …… ああ、やつちやった…。…
つて、また来た！ しかも家族連れつてどゆコト…！？ ち、ちよ、ダメよ！ ダメったらダメなんだからねッ！ 私だつて腹ぺコなんだから…！ う、…… そ、そんな円らな瞳で私を籠絡しようだなんて…！」

「だ、大丈夫、かな…」

結局。

ルナが思わぬ家族連れの闖入者とともに新しく作られた朝食を頂いたのは、それから一時間後のことだった。

『キヤメロット城 玉座の間』

玉座の間とは、その国の最高峰を具現するために名誉と権力とを背景にした、壮大な威光に輝く謁見の場である。

そこでは様々な趣向が凝らされ、衝撃的な吹き抜けの空間に敷き

詰められた豪華な装飾を惜し気もなく、その細部に至るまで油断なく計算することで、思わず天井を見上げずにはいられない開放感のある贅沢な至福を完成させている。

半円筒形の空間、二階と三階を吹き抜けにして広く保たせた空間を清潔に維持する玉座の間において、獅子將軍ゼノンはただひたすら頭を垂れて跪いていた。

かつて、ここにはブリテンが誇る伝説の騎士王が玉座に座り、その周囲を十二人の騎士が代表して上席に名を連ねたと聞く。

歴史に名高く、世にも誉れ高いこの場所に招聘されることは、伝説を知るドウムニアの騎士ならば誰もが憧れる、一種の名誉^{ステータス}であった。

だが、今のゼノンには、あまりにも罪深い痕跡を残すがための罪悪感を噛み締める、懺悔の場そのものに思えてならなかった。

現ドウムニア国王が座する玉座の前に、反アングロ・サクソン人を掲げる抗戦派の面々がずらりと立ち並んでいる。

その誰もが、鶴の一声をもって国政に大きな影響力を及ぼす大貴族の重鎮たちであったが、やはり国家存亡を賭けた重大な危機を前にしては、さすがにその重い腰を上げずにはいられなかったようだった。

白亜の壁に立て掛けられた、ドウムニア王国を象徴する紋章
一匹の竜を中心に二本の剣が交差する“緋竜の誓剣”を背景に、
国の畏敬を具現化する玉座の王が口を開いた。

「この早朝にあつて皆に集まつてもらつたのは他でもない。先の戦争でマールシアを退けたウエセックスが、ついに聖騎士を主軸とする部隊を準備しているらしい。…そうだな？　ゼノン將軍」

短く応えて、ゼノンは鏡面のように磨き抜かれた床に視線を伏せたまま、報告事項を簡単に述べた。

「数時間ほど前、王都ウィンチエスターに潜らせた間者より報告がありました。敵の数は不明ですが、出撃予定の部隊の中には確かに、聖騎士スレインの姿を確認しているとのことです。…恐らくは、一週間以内に王都に到着するものと思われます」

列席する抗戦派の歴々が一瞬ざわめき、次いで、動揺の波が怒りの津波にへと変貌した。

「ふん。聖騎士だか何だか知らんが、侵略者の分際で我らが王国を脅かそうなどとは言語道断。神をも恐れぬ大罪よ」

「前大戦での屈辱。今こそ晴らすべき。ブリテンは、我らが御手の下にあつてこそ初めて栄光に満ちるものだということを、奴らはまるで分かつておらん」

「そうとも。我らの手に再び真の自由を取り戻すため、アングロ・サクソン人どもの支配には決して屈してはならぬ。アーサー王のご遺志を受け継ぐ我らに立ちはだかる者どもは、すべて斬り伏せるべし」

「所詮は自分の故郷も捨てた蛮族にすぎぬ者の末裔よ。保身に終始する奴らに、誇り高き我らが意志を打ち砕くことなど誰にもできぬわ」

「その通り。ゆえに我らは最後の一兵となっても剣を手に取り戦い抜こうぞ。ブリテンの平和を脅かす者とは、他ならぬアングロ・サクソン人どもだ」

「うむ、まさしく奴らがこの島に無用な侵略戦争を持ち込んできおったのだ。そして自分勝手に支配者を名乗り、あまつさえ三百年という時代を経てもなお戦いを繰り返す蛮行は、もはや山賊どもと何ら変わらぬ畜生である」

「陛下、ここは徹底抗戦しかありませんまい。幸い、全国民が陛下の言葉に応えて剣を手に取り、王国のために獅子奮迅の働きをもつて勝利をもたらすことを約束してくれました。今や軍の士気も高く、我らが底力の前には聖騎士とやらもひれ伏すに違いないでしょう」

確かに、民兵を取り入れたドウムニア王国の兵力は五万近くにも膨れ上がり、これを作戦に投入すれば豊富な戦略を練ることができた。

だが、民兵ひとりひとりの熟練度は騎士のそれとは比べるべくもなく低水準、言ってしまうえば、付け焼き刃でしかない最低限度の武器取扱を教わって戦場の最前線に立たされる、およそ最悪に類する徴兵である。

彼らの死はそのまま国益に直撃し、民兵の命が一つ失われるたびに、国の寿命も少しずつ縮んでいく。

ゆえにこれは背水の陣でさえもなく、その勝利と敗北の先には断崖絶壁の未来しかない自殺行為でしかないのだ。

しかし当初、五万という部隊編成を見た時、ゼノンは愚かにも、この戦力ならばウェセックスを倒すことも決して不可能ではないと思わず歓喜してしまっていた。

“民を巻き込む戦争に未来はない”

王女のこの言葉がなければ、自分はどのような贖罪をもってしても償いきれぬ大罪を犯すところだったと、ゼノンは改めて王女に感謝の念を抱きながら眉間に深い皺を作った。

今はまだ懺悔の時間。

巨漢の騎士はただただ口を閉ざし、来たるべき決意の時間の訪れを瞳を閉じて待っている。

「皆の激励を嬉しく思う。やはり聖騎士であろうとも、清明たる我らの志を理解することはできなかったのだ。湖の乙女ヴィヴィアの目は曇っている。魔人などに構っている前に、まずはブリテンを混乱させる元凶のアングロ・サクソン人を追い出すことが急務であることがなぜ分かったのだ」

家臣は一様に頷いた。

「ごもつともでございます、陛下。所詮、あのような風の噂でしか姿を見せぬ物の怪に、我らがブリトン人の崇高なる悲願を理解することはできぬのです」

「アーサー王も、あの者に魔導師マーリン殿を殺されなければ、聖剣の力を損なうことなく命を落とすこともなかったはずでございますからね」

「あれは、関わる者に一時の幸福と永遠の不幸をもたらす諸刃の剣。その狡猾な知能で契約者を利用し、嵐のような気紛れで簡単に責務を投げ出す人外が存在です。信頼に値する者では初めからなく、我々の未来はやはり、我々の手で勝ち取ることが重要でありましょう」

「そのためには、あの聖騎士をいかに打ち破るかが目下の最優先課題。前大戦にて煮え湯を吞まされた彼奴を相手にすれば、苦戦は必至。奴に前線の騎士団を壊滅させられんなら、ヴァイキングが撤退しようとも我らはまだ戦えたものを」

「数でも勝っていた剣聖バルゼフォンの智略をもってして、ついには耐え抜いた奴らだ。よもや我らが敗北するとは思わんが、後方にはイングラムも控えておる。ここは慎重を期して迎撃した方が無難かと」

「しかし、民を味方につけた我らの優勢に揺るぎはない。ここは聖騎士の試練にて彼奴の技量を間近で見てきたゼノン將軍の計を拝聴したいと思いますが、皆様いかがでございますよう」

皆が寸分違わずに、異議なし、と口を揃えた。

ジロリと威圧する無言の静粛、玉座の前に跪く騎士を取り囲むように左右に列する六人の重鎮の目が、突き刺さるように一斉にゼノンへと注がれる。

先だってウエセックスに宣戦布告を突きつけた以上、自国を守るために戦わなければならないことは理解できる。

マーシアの計に肖ったとはいえ、簡単に反逆を許してしまったウ

エセックスが生半可な和平案を提示したところで単純に呑むはずがなく、恐らくは無条件降伏しか選択肢はないだろう。

だがそれはドウムニア王国の滅亡を招く畏れがあり、全国民がウエセックスの奴隷として働かされる可能性が高すぎた。

“ウエセックスを含めた七王国の社会制度は、大抵が三つないしは四つの身分に区分された階級社会だ”

ならば、ゼノンに求められている策は、ただ一つ。

「ゼノン將軍、お前の作戦を聞かせてくれ。いったいどのような策を用いて、聖騎士を破るつもりなのかを」

王の言葉に応え、決意の騎士は緩やかに顔を上げる。

「その前に、国王陛下と皆様方に、折り入ってぜひ、お耳に入れたき話がございます」

思い描いた脚本にはない予想外の進言に、重鎮たちは一様に不振の色を隠せずに眉を顰めた。

「何事だ、ゼノン將軍。今がいかなる緊急を要する大事の時か、解っているか」

「予断を許さぬ現状に無駄な時間は割けぬ。それが分からぬ貴公ではあるまい」

「それともまさか、ご乱心なされたジュリア様と同じく、今この期に及んでもウエセックスと和平を結ぼうなどと語るつもりではある

まいな」

「おお、何と愚に墮ちるつもりか。それは国を売ると同意ぞ。民を奴隷に貶めるぐらいなら、我らは誇り高き死を選ぼうではないか」

「勝利こそが王国を救う唯一の手段である。これが成れば、貴公は円卓の騎士に勝るとも劣らぬ英雄として歴史に名を残すであろう。その時こそ、我らは高らかにそなたの名を謳おうではないか。そしてそなたは王国の象徴となるのだ」

「さあ、我らが英雄よ。何も恥じることはない。声を大にして戦略を開示したまえ。貴公は王国の繁栄と未来を指し示す道標。今こそ王国を守る騎士として、英霊の一人へと昇華するための決断の時」

進言をあつさりと切り捨て、強い語調で反論の芽を摘み取るやいなや、すぐさま相手を持ち上げて逃げ道を用意する。

その臨機応変な家臣たちの連携に、ゼノンは誰にも悟られぬように小さく溜息をついた。

会議の進行具合は王が決めるものではなく、その多くは取り巻きの賢者が言葉巧みに操船し、事前に組み立てた決定事項に向かって、ただひたすらグレー論を並べ立てるだけだ。

隠晦曲折にのりくらりと論点を量かし、重要案件をさも検討したように見せかけることもあれば、国民の利益と生りて貴族の損失をもたらす議論を、その巧妙な口裏合わせで画餅に帰すことも少ない。

どのような画期的案件も、貴族を敵に回せば開陳したところで意

志決定は引き延ばされ、その本質的な問題を空中分解させられたまま徒花へと終わる。

彼らは自らの危険に対する嗅覚が非常に優れており、自己を守るためならば別派とも手を組んで、害を為すモノを徹底的に排除しようとする仕事に驚くほど早いのだ。

これが、あの遠すぎる理想を単なる夢物語と割り切ることのしなかった、ジュリア王女の選んだ戦場である。

貴族は出世競争の世界で生きているが、その実態は家督を譲られた相続の末裔が権威を連立させているにすぎない。

その時に過激派が権力を握るのか、それとも保守派が威光を笠に着るのかで、その国の社会システムが大きく左右されると言っても過言ではないだろう。

「私は、この国を愛しております」

ゼノンは、玉座の背後に大きく飾られた“緋竜の誓剣”を視界の隅に捉えながら言った。

「ローマ帝国の支配を受けて幾世紀を経てもなお変わらぬ誇り、真の自由を手に入れるために皆が一丸となって戦い抜いた乱世にも、優しい思い出は数多く眠っていることでしょう。私はそれを、信念、と呼んでおります」

人が国を想うのは、その故郷に根付く大切な過去の実在を確かに感じ取ることができるからだ。

生まれ変わった家族との絆、ともに喜び涙した友との語らい、心から守りたいと誇れる愛との遭遇、そして、世代とともに継承されていく子孫との物語。

人の心は、目には見えぬからこそ国境も時代も超えて受け継がれ、その積み重ねこそが社会の大いなる発展へと繋がっていくのだ。

たとえ、それが善きにつけ悪しきにつけ。

「私は愚か者でした。なぜなら“力”こそが正義だと信じていた時代が確かにあったからです。強者であることを義務付けられ、多くの敵をこの手で屠って参りました。…そうしてヴィヴィアン殿に候補者として選ばれることは必然、ゆえに聖騎士を戴くのも当然ながら私に間違いないのだと、あの時はそう信じて疑いもしていませんでした」

この世はゼノンが誕生する遙かに前より戦乱、群雄割拠の血塗られた時代。

実力がなければ自分の身さえ守ることができないこの世界で、剣よりも大切なモノがあるはずもないのだと。

少なくとも、ゼノンはそう教えられて生きてきた。

「しかし、私はついに聖騎士になれなかった。何故、と問うたところでヴィヴィアン殿は応えて下らない。私は理不尽だと思い、湧き上がる不満を怒りと嫉妬に変えたまま帰国したのです」

それは言うなれば、ゼノンの信念が誤りであるのだと告げられたに等しい結果であった。

時代の趨勢に従って苦心惨憺と鍛練を積み重ね、ようやく一族の歴代でも最高峰の名誉となる“聖騎士”まで後一步というところ、彼の目の前に開けた断崖の眺望という現実。

「それは、あの魔性が判断を誤っただけのことだ。そなたには何の落ち度もなかったのだ」

「私は、七年前の王妃様の一件以来、その信念を確固たるものとしたはずでした。ジュリア様は部屋に閉じこもり、その涙を拭うこともできない私は、剣で応えることに何の疑問も抱くことはなかったのです」

隠り世に棲まう閉鎖的な魔女ヴィヴィアン。

その魔力は師マーリンに匹敵すると言われ、ほとんど女には縁のないゼノンから見ても無差別に男を虜にしそうな、油断も隙もない美貌の持ち主。

そして真実、圧倒的な実力。

彼女の下で受けた試練の数々は身を灼き、心を凍てつかせて魂を引き裂く過酷なもの。

四人の候補者の中でもとりわけ群を抜く体力を有していたゼノンでさえも、三年前の試練を夢に思い出すたびに汗水漬くの身体を自覚しながら目を覚ますほどだ。

だから、彼は致命的な思い違いをしていたのかもしれない。

「忌まわしい山賊どもを処刑し、王妃様を救い出した貴公の功績や見事。然らばその力を」

しかし、と言葉を繋げる男は、迷いを払拭して福々しく微笑んでいる。

「全ては私の浅はかな思慮による誤解でございました。それに気づくのに三年もの時をかけてしまい、…ああ。今から思えば、やはり私は聖騎士という器量に相応しい人間ではなかったのだということを改めて」

「ええい、止めいッッ！」

ゼノンの左右に列する重鎮たちの顔は皆、強張っていた。

その中で沸々と煮える憤怒を我慢できない数人は厭うように眉を顰め、険しい眼光を射抜くように突きつけている。

「ゼノン將軍、それ以上は控えたまえ…！」

凍った表情の重鎮もまた、不審そうに言葉を紡ぐ。

「言を慎まねば、取り返しのつかぬ失態を晒すぞ！」

しかしゼノンは止まらない。

「私の知っている英雄は…！」

悠然と、誇らしげに胸を張って騎士が立ち上がる。

「皆が墓の下に眠っておられます…！ その英雄方と私如きを同じ位に並べるなど、とても恐れ多き光栄…！ …今ならば理解できる。なぜ私が聖騎士に選ばれなかったのかを。 そう、私は愚か者なのです。ならば、愚か者にはそれに相応しい破滅こそが似合うもの」

將軍が誇る巨体の背中、長さ二メートル余りの、ゼノンの並外れた体格に勝るとも劣らぬ精悍とした刀身が、彼の滑らかな動作によって引き抜かれた。

一見すると、その大剣は無骨なまでの力強さのみを強調しているように見える。

常人では持ち上げるだけでも一苦労するであろう、ある種の凄みすら感じさせる圧倒的な迫力と存在感を横溢した、硬派な完成度。

しかしそこには、僅かな装飾さえも女々しいと断ずる、徹底的なまでに無駄を削ぎ落とした“破壊”という設計思想に妥協しない意匠の、途轍もない潔さに裏打ちされた愚直なまでの原点回帰を窺い知ることができる。

一目で相手を打ちのめす強烈な個性、そして文字通りの衝撃的な質量を宿すそれはまさしく、ゼノンの家系に代々より受け継がれてきた宝具に相違ない。

その剣を、あろうことか王の御前で抜き放つという前代未聞の行為を前に、その意図を瞬時に理解した重鎮の一人が途端に狼狽した声を上げる。

「バカな！？ 貴様、血迷ッ

！？」

しかし、その言葉は最後まで発することができなかった。

ゼノンの左側にいた重鎮たちは、己が右腕から腋の下を通って胴体を、そして左腕に閃いた横一文の剣に反応することもできず、背骨さえ綺麗に切断された屍となって絶命する。

上下に分離する胴体、その切断面からやや遅れて、思い出したように噴出する血飛沫に滑りながら、上半身が無機質な音を立てて床に落ちた。

「う、うわああッツ!？」

突然の仲間の死に気が動転した重鎮たちが、一斉にざわめいて後退る。

それは、今から始まる惨劇の調べ。

その中心に、大罪を覚悟する鋼の騎士が決然と前を見据えて言い放つ。

「貴方がたの舵取りでは、この国の未来を鎖すばかりだ。民を巻き込む戦争など愚の骨頂。なればこそ、我らは同じ愚か者。ともに地獄へと参りましょうぞ」

険しく眉を顰める賢者たちは互いに顔を見合わせると、憤怒に皺を寄せながら殺意の目をゼノンに向けた。

「笑止……！ お前の裏切りを見透かせぬ我らだと思つたか！ やはり貴様はブリトン人としての誇りを捨てた反逆者よ！ 誇り高き我

らが王国の品位を穢す大罪人……！ 慈悲深く名誉挽回の機会を与えてやろうという我らの恩情を踏みにじる愚か者め……ッ！ ならば貴様の言う通り、それに相応しい死に様を晒させてやるわ！」

連続した金属の不協和音が、慌ただしい無数の足音となって入口に押し寄せているのをゼノンは察した。

男の言葉とほぼ同時に、弾けるような開扉の音が玉座の間に響き渡り、次いで、床を叩きつけるが如く踏み鳴らす騎士たちが続々と飛び込んでくる。

手には剣と楯、そして全身を鎧に固める完全武装の騎士団それはまさしくゼノンを長とする国王直属の近衛騎士団であり、不動の信頼を源にした一系乱れぬ連携をもつて不敗を誇る、前大戦から唯一、今日まで生存しているドウムニア王国最後の騎士たちの姿であった。

その騎士がおよそ百名、扉を開けて瞬く間にゼノンたちがいる玉座の前にある階段までを制圧し、その退路を完全に遮断する白銀の壁と化して整列する。

「フハハハハハ！ 貴様は昔の仲間の手によって殺されるのだ！裏切り者には少しばかり優しすぎる極刑だが、これまでの貴様の武勲と名誉を考慮してやったのだ！ 我らが慈悲に感謝するのだな！」

もはや仔細を語るまでもない、と言わんばかりの口調はなるほど、彼ら重鎮たちが予め騎士たちにゼノンの裏切りを予見し、その予防線として玉座の間の入口に待機させておいたのだらうということを明確に代弁していた。

その騎士たちの表情は、顔面保護のための面甲を兜から下ろしているために窺い知ることはできなかったが、しかし確かに目視しているはずのゼノンの裏切りを前にしても言葉を発しようとしないうことから、その心中はすでに心得ているといった様子である。

「さあ、騎士たちよ！ この裏切り者を」

有無を言わせぬゼノンの一閃が、男の首を鮮やかにも軽々しく刎ね飛ばした。

そこから縦に細長く噴き出す大量の血に、ヒイイと悲鳴を上げて後退る両隣の男たちは尻餅をつき、滑稽にも恐怖に顔を歪めて腰を抜かし、立ち上がれぬ按配。

「ば、バカな ！？」

「お、おい、貴様ら！ 何をしている！ 早くこの裏切り者を斬れ！ 早く ！」

そして、彼らは見上げた。

並外れた総量を誇る筋肉、もはやそれ自体が天然の鎧とも見紛うほど理想的に引き絞られた、贅肉の一切を淘汰する圧倒的な巨躯の持ち主。

誰もが幼き日に実感する“父”の威厳を今もなお体現しているかの如く、その背丈に宿す怪物めいた肉の隆々たる姿勢には、これもまた獰猛な気配を発散する大剣が鮮血を滴らせて堂々と男の右手に沈黙している。

その、闘気に滾る男の怜悯な眼光が、恐怖に竦む二人を見下ろした。

「何と不甲斐ない無様。臀部を打ったなら、早々に立ち上がらねば死が待つのみ。…貴方がたからは、もはや拭いきれぬ悪臭が芬々と臭いますぞ…！」

「や、やめ ツ!？」

追撃の剣は無慈悲に振り抜かれ、前頭骨から正中線を辿り、背骨に沿うように真っ直ぐ骨盤までを両断された男は即死した。

左右に分かたれた半身、辺りに撒き散らされた臓物を視界に映さぬよう、最後の一人となった重鎮が引き攣った顔で国王の足に縋りつき、救いの声を荒げる。

「へ、陛下！ こ、こやつは王国を脅かす裏切り者でございます！ど、どうか、この低俗な私欲に溺れる男に裁きの鉄槌を ！」

「貴方がたの尊き犠牲は、後世の栄光に連なる礎となるのです。

先に地獄で待っていてください。私も、後からすぐに参りますから」

敵かに心臓を貫く大剣の切っ先。

身体が硬直し、満足に呼吸もできぬ途切れ途切れの息が少しずつ弱まるにつれて、男の瞳から無抵抗のまま光が消えていく。

口から噴き出した吐血がそのまま顎に細い紅の一筋を残し、やがて膝の折れた身体は崩れ落ちるように床に沈んでいった。

最後の一人の絶命を確認し、ゼノンはその屍から剣を抜いた後、王へと向き直り跪く。

「陛下、誠に申し訳ありません。…私が至らぬばかりに、この道を歩み抜くことでしか、ジュリア様を守れぬ愚か者と成り果てました。…今はただ、落涙することもできぬ凶人の道に、この身を落としていくばかりでございます」

ゼノンの言葉を受け止めた王はしかし、わずかに眉を寄せて口を閉ざしたまま視線を床に落とす。

侮蔑に怒鳴ることもしなければ、立ち騒いで取り乱すような気配もない。

ただ哀切に満ちた瞳が眇められ、静かに己の運命を受け入れている、そんな様子にゼノンには見えた。

やがて、ぽつりと言葉を落とすように王が呟いた。

「…あれから、もう十七年になるのか…」

その突然の独白に、ゼノンは一瞬だけ躊躇する様子を見せてから頷いた。

「はい。…ジュリア様は日々、美しく成長しておられます」

王は幽かに微笑んだ。

「あの子は母親似だった。実を言えば、私は男が欲しかったのだが

な。…しかしそれも、あの子が産まれてからはどこかに吹き飛んでしまったよ」

「そうでしたか。…しかし私は、あの無鉄砲な性格に、昔の陛下の面影を重ねておりました」

「くく。そういえばお前は、よくあの子に引きずり回されていたな。…いまい出ししたが、私もお前の父をよく引き回していたそうだな。…ああ、なるほど。そう思えば、血は争えんのかもしれぬな」

言って、王は含み笑いを零した。

「しかし言うておくが、私たちも大変だったのだぞ？ 夜泣きが始まれば夜通し抱いてやったが、あまりに煩い日はもう、むしろ思いつきり泣けと開き直っていたよ。…あの頃は、わずかな睡眠時間が宝石よりも貴重に感じた、唯一の瞬間だった」

家族以外には知りようもない背景に、ゼノンは目を丸くして口元を微笑ませた。

「ジュリア様の元気な泣き声が、今でも聞こえてきます」

「おいおい、私の軽いトラウマを引き出さないでくれよ」

顔を見合わせた二人は、同時に破顔した。

しかし暫くしてから、王はピタリと笑顔を止め、同時に真摯な眼差しを向けるゼノンに目をやった。

「…あの子の様子は、どうだった？」

「多少、地下の毒気に参っておられる様子でございました。しかし、あの方は私が思う以上に強く成長しておられます。そうでなければ、言葉で戦い抜こうとする優しい覚悟を貫くことはできません」

「その通りだ。あの子の選んだ道は確かに非現実的ではあるが、しかし確かに理想的な選択でもある。…だが、私にはその道を選び取る勇気がなかった。妻が変貌したあの日から、私は復讐の道しか目に映らなかったのだ」

ゼノンは首を振る。

「それを責めることは誰にもできません。陛下が選ばれた道は、男として正しい選択だったと思います」

「ああ、男としては正しい選択だったのかもしれない。一人の夫として、私は妻を嬲り者にした奴らが許せなかった。そして奴らがアングロ・サクソン人だと分かった時、私の中の共存は理想とともに失墜したのだ」

「今、王妃様は…？」

内心を読んだようにゼノンが言って、王は苦笑する。

「先に部屋で眠っている。…もうこれ以上、悪夢を見ることもないだろう。…久しぶりに、ゆっくりと寝入っているよ」

それだけで、ゼノンはもう察したようだった。

しかし、同時にかける言葉が見つからず、詫びるような面持ちの

まま喉から言葉が出てこない。

その苦衷を見て取り、王は心持ち微笑みながら言った。

「そんな顔をするな。部下も見ておる。お前は、最後まで強く戦い抜かねばならん。…そうでなければ聖騎士のみならず、かのウエセックスに対しても我々の本気が伝わらぬであろう?」

何もかもを受け入れた者だけが持ち得る穏やかな口調には、ゼノンを責めるような按配は微塵もない。

ただ、その多くを語らぬ朴訥とした笑みに、ゼノンはほんの少しだけ救われたような気がした。

「すべては、ジュリア様をお救いするために、ですね」

王は、優しく微笑んだ。

「…あの日、私は実の娘を地下牢に閉じ込めた。…感情に任せてあの子を罵り、気がついた時にはもう、目の前からあの子の姿を消してしまっていたんだ。…その時にふと思ったんだよ。今まで私が注いできたあの子に対する愛情は、決して今日のような日の為にあるのではなかったはずだ、とな」

そこに残ったのは、言い知れぬ空虚^{ガランドウ}だけだった。

あの優しかった妻を失い、怒りに身を任せて反アングロ・サクソン人の派閥を束ねて、今日までを復讐という決意に生きてきたこの人生には、確かに悔いはない。

それはいい。

だが、その為に娘の人生を犠牲にして、果たしてそれで本当に、妻の仇を討つことに繋がるのだろうか。

心から恋しいと思える伴侶に出逢えた。

心から愛しいと思える子供に恵まれた。

どんな時も二人を忘れたことなどなかったが、しかしあの時、彼は確かに、二人が自分から遠ざかるうとしているのを感じてしまったのだ。

何かが、決定的に分かれようとしている。

何かが、決定的に失われようとしている。

待て。

一番、大切なことは、いったい、何だった…？

「私は、その時に思い知ったんだ。ウエセックスを滅ぼしたところで、本当にジュリアを守ることはできないのだと。相手を愛し続けるということの難しさは、身近なところにあるからこそ気付けない青い鳥のようなものだ。…私は危うく、妻が残してくれた私の最後の愛情をも、この手で殺そうとするところだったのだ」

「陛下…」

「お前と同じだよ、ゼノン將軍。…お前がヴィヴィアンの最後の課

題に気付いたのと同じように、私は、私自身の問題にようやく答えを導き出すことができたんだ。そう、私もやはり愚か者だった。あの子にそれを気付かされ、私は助けられたんだ」

王は、そう言つて軽やかに微笑んだ。

「あの子の笑顔を見なくなつて、もう何年になるだろう。私が欲しかったのは、このような未来ではなかった。遠く離れていくあの子の背中に、私は手を伸ばそうとすらしなかった。…言葉で伝えなければならなかったことを、私はまだ、あの子に伝えていなかったというのに…」

「陛下、あの方は分かつておられます。ジュリア様は紛れもなく、お優しい陛下の次代を担う後継者。あの方が存命であれば、このブリテンに生きるブリトン人たちは決して希望を捨てることはないでしょう。…あの方が作る未来をこの目で見られないのが最後の心残りではございますが、私は確信しております。ジュリア様こそ、雨に打たれて嘆く全ての人間に手を差し伸べることができる、唯一の指導者であるのだと」

そこで、ゼノンは気付いた。

王の目尻に、ほんのりと光る大粒の涙が見える。

「ゼノン。お前がジュリアの騎士であつてくれて本当に良かったと、いま心から神に感謝している。お前があの子の傍にいないければ、私は今もなお自分の過ちに気付かなかつただろう」

王は緩やかに立ち上がると、跪くゼノンに対して、深く、深く頭を下げた。

「陛下　　！？」

「ありがとう。　最後に、お前に何もかもを押し付けてしまったこの私を、どうか許してほしい」

言つて、王はゼノンを見据えた。

「さあ、ゼノン。お前の手で悲劇に終焉を、そして私を妻の下へと送ってほしい。…あれは淋しがり屋だからな、私が傍にいないと不安で堪らないらしいのだ」

ゼノンの表情が、激しく歪んだ。

「陛下…！」

「幕は下ろされるために開演する。…願わくば、お前の剣が最善の未来を掴むことを信じて…！」

涙、泣こうとして、泣くまいとして、泣いてはならぬとして、ゆつくりと瞳を閉じる王の一点の曇りもない表情がただ、　ただ、哀しかった。

「うおおおおおおおおおおおおおおお！」

真実も、嘘もなく、行き場をなくした愛が哀しいままに溢れ出す。

その瞬間、刃風が“緋竜の誓剣”を煽った。

「ゼノン様…！」

巨漢の騎士に駆け寄る近衛騎士たちが、崇拜する將軍の足元で息絶える国王の姿を認めた瞬間、ゼノンが振り返ることもなく口を開く。

「たった今より、騎士団は解散とする。…お前たちは自分が守るべき大切な者の傍へと戻れ。そして全てが終わった後、艱難の道を歩くジュリア様を支えてほしい」

「し、しかし！ 我々はゼノン様とともに ！」

「バカを言うな！」

暴風のような叫びが、悲痛な音を奏でて騎士たちの声を堰き止める。

「お前たちがドウムニアの未来を守る剣なのだ。そしてジュリア様こそがドウムニアの未来そのもの。私と王は、その軌跡のためにお前たちに夢を託すのだ」

ゆっくりと、その一步一步を慎重に踏み締めるようにゼノンが振り返った。

揃って口を噤む騎士たちは狼狽し、その巨軀に相応する烈々たる闘志に気圧されて、次々に道を開けていく。

「 それに、私にはまだ、やらねばならぬ使命がある」

鋼の騎士は、その道をこそ悠然と進んで玉座の間を後にした。

『セランの森 名もない村』

短く息を吐いて、ヴィクターは目が覚めた。

四畳ほどの開いた空間、無慈悲に壊された村の中では辛うじて雨風を凌げる程度に維持された壁を備える奇跡の部屋で、彼は横臥していた身体をゆっくりと起こして壁に背凭れる。

久しぶりに深い眠りを得られたようだった。

ウェールズに赴いてからというものの、恐ろしい巨体をした“^{サイク}単眼巨人”との遭遇や剣聖との戦闘、そして山賊の頭との対面で消耗した体力も順調に回復している。

倦怠感を吐き出すように背伸びをして、深く呼吸する。

目の前には一夜が明けて火の消えた薪があっただが、それがヴィクター自身が焼けた時の固め方と同じである様子から、少なくとも不意に眠りに落ちた時から今までの間には誰も、この部屋に訪れていないことを告げていた。

「…グレッグ…」

改めて部屋の中を見回してみたが、やはり自分以外に人の姿はなく、寝起き特有の靄がかった思考を少しずつ整理しながら空を見上げる。

自分の家から三軒ほど左隣にある潰れた家の一階、屋根が吹き飛び、四方の壁に風穴を開け貫く木材も朽ち果てていたが、恐らくはこの家屋の持ち主の寝室だと思われる部屋は、偶然の設計で幾らか頑丈にできていたのだろう。

あるいは、村を襲った大破壊の影響が偶然にも最小限であった地形に建てられていたのか、一夜限りの野宿場としては申し分ない空間である。

空は健やかに映えた青が広がっていて、千切れ雲を静かに運んでいる按配。

暖かい陽射しが、起床したばかりの瞳には眩しすぎた。

「姉さん…、待っててね。必ず助けに行くから…」

落ちた月に代わって空に昇る太陽に、彼は決意を口にする。

いったい何の目的で姉を連れ去ったのかは不明だが、病に蝕まれて不自由な生活を強いられている彼女を利用しようとするのは非人道的だ。

それを暗殺者たる自分が言うのも可笑しな話かもしれないが、もし姉に何かがあれば、どんな理由があるにせよ、ドウムニアという

国に対する感慨は微塵もない。

「…王女、ジュリア…。あの人も、あそこに戻っているのか…？」

以前、ヴィクターは王女を連れて、王都ウィンチエスターへと護送したことがある。

あの時は不意に名前を聞かれ、その真意を計りかねて偽名を口走ってしまったが、もし王女と遭遇することになれば、事と次第によって、その後の潜入工作が極めて不利になるだろう。

潜入するうえで留意しなければならない城内での危険人物は、この王女と、そして獅子將軍と称されるゼノン將軍の二人だけだ。

グレッグの戦闘経験から推測されるゼノン將軍の戦闘能力は、やはり聖騎士の試練に招かれた元候補者の一人だけあって並外れた技量であるらしく、その膂力から繰り出す剛剣を得意としているようだ。

しかもその剣速はグレッグの反応速度を凌駕するほどであり、真面目からでは万に一つも勝ち目がないことは火を見るよりも明らかである。

尤も、二人がかりで奇襲を仕掛ければ勝算もそれなりに上がるのだろうが、自分たちに命じられた任務はあくまでもルナの救出であつたし、その後における脱出も退路を確保したうえで慎重に行わなければならない。

万全を期した潜入は、後続の本隊を率いる聖騎士スレインを迎撃するために敵部隊が王都から離れた時だが、それ以上に姉が隔離さ

れている場所を突き止めなければ作戦の本懐も遂げることはできないのだから、前提として重要視しなければならないことは、ルナの拉致に関係する人物をいかに早く発見するかだ。

そうになると、姉の居場所を最も確実に知っているのは王女ジュリアなのだろうが、王族が住まう場所は決まって城内の最奥である以上、その潜入行動には注意深く当たる必要がある。

つまり、王城に潜入する際の行動では、將軍ゼノンに遭遇することなく王女ジュリアから姉の居場所を聞き出し、その安全を確保したうえで速やかに王都から脱出する、この一点に絞られることとなるのだが。

なぜ、こんなことになってしまったんだろう。

ヴィクターは握りしめる拳を見つめて、そのまま虚空へと視線を流した。

「…どうして僕たちがこんな目に会わなきゃいけないんだ…？ 僕たちはただ、穏やかに暮らしたいだけなのに…。…僕たちには、平穏に生きる価値さえもないって言うのか…？ ……いつたい、僕たちが何をしたって言うんだ…？」

こんなにも晴れた空が、なぜかあまりにも眩しすぎるように感じてしまうのは、きっと自分の心に迷いがあるからだとヴィクターは思う。

あの日の惨劇、神に見放され、運命に嘲笑われ続けた弟が心から願うのは、姉を蝕む病の一日も早い快方と、そして彼女が安らかに笑える日常の訪れだけ。

その為なら自分の掌が他人の血で染まろうと躊躇いはなく、この悲願を遮る相手が他ならぬ神や運命そのものだと言うのなら、全力で抗うまで。

「…いや、考えすぎだ。神は僕たちを見捨ててはいない。…そんなこと、あるもんか…」

半ば祈るような呟きは、人目を憚るかの如くにか細く空に解けていく。

今となってはもう、天災か人災かも分からなくなってしまったこの村の惨劇から二人が生き延びたのは、他の隣人たちの分も幸福を掴むための奇跡だ。

彷徨っていた自分たちを助けてくれたイングラム卿との出会いも、病弱の姉を心から愛してくれたグレッグとの出会いも、すべては神の救済の手によるもの。

「…そういえば、グレッグは…？ グレッグは、どこに行っただ…？」

この部屋にいないのだとしたら、彼は他の場所で夜を明かしたことになる。

しかし、村を一周して探し当てた適当な寝床といえは此処しかなく、他に夜風を凌ぐ場所はないはずだった。

「まずは探そう。…話はそれからだ」

軽く膝を打って身体を起こし、もう一度だけ深呼吸をしてから目を開ける。

崩れ落ちた外観の入口を降りた先、目の前の豁然と開けた広間の中心に設えてある池の方へと歩いていくと、少しした所で、池の前に焚火を入れて坐っている親友の姿が見えた。

だが、火を消さぬように何か作業的に焚付を入れている様子と、考え深げにぼんやりと火を眺めているその姿は、どこか凄惨な神託を告げられた預言者の罪深い背中を連想させた。

「グレッグ、ここにいたんだ。…心配したんだよ、なかなかこっちに戻ってこないから」

敢えて晴れた調子で言ったヴィクターに対するグレッグの反応は、驚くほど鈍かった。

少しずつ、ほんの少しずつ視線を上げて左にずらし、ようやくヴィクターの姿を見つけると改めて顔を向ける。

その、表情にこそ、ヴィクターは瞠目した。

「グレッグ…、泣いてる、の…?」

「え、…?」

グレッグはゆっくりと指先を目元にもっていき、そこに拭い取った熱の込める水気の付着を見て、そこで初めて、自分が、自分でも気付かないほど、いつの間にか涙していることに気付く。

「…あ、…。ああ、泣いてたんだ、俺…。もう、涙なんて流せないものだと思ってた…」

そう自嘲気味に苦笑する親友の孤独があまりに痛々しくて、ヴィクターはどうしても声をかけずにはいられなかった。

「グレッグ、どうしたの…？ 何か、あった…？」

グレッグは、やはり眩しそうに目を眇めながら空を見上げた。

「俺は、生きることが素晴らしいものだって、ずっとそう思ってた。俺たちは確かに人を殺して生きてきたけど、その死を蔑ろにしたことは一度もなかった。それだけが俺の誇りだったからだ。…だけど、今はその誇りが俺の信念に異論を唱え始めてる」

遠い目をして、誰に聞かせるともなく言葉を落とすグレッグは、そのまま息をつく。

「平和ってさ、結局は誰かの死の犠牲の上に成り立つモノなんだよな。新しい時代がきたフリをして、その実、本質的な開化は何も変わらない。いつの時代でも貧しい人はいて、孤児がいて、背中の夜に怯えるんだ。ほら、世界は時代を経ても変わり映えしない。ほんの少し献金しても、世界が変わらないようにさ」

ヴィクターは、グレッグが何を言いたいのか分からなかった。

「どうしたのさ、グレッグ。いつもの君らしくないよ。…少し、落ち着いた方がいい」

「俺が、落ち着く…？」

そう言って、グレッグは苦笑した。

「俺はとつくに落ち着いてるさ。美名を背負って死んでいける奴は幸せだ。俺たちのように誰にも覚えてもらえないわけじゃない。…俺は新しい時代に夢を見すぎてた。運命のイタズラってのは、いつだって死神のように音もなく目の前にやってくる」

ヴィクターは眉を顰める。

「グレッグ。それ以上、自分を追い詰めるのは止めよう。諦めたら、そこで何もかもが終わってしまうんだ」

グレッグは嘲笑うかのように短く息をついた。

「終われないんだよ、ヴィクター。俺が諦めても世界は終わらない。
なあ、ヴィクター」

唐突に、力なく顔を向き直したグレッグが問いかける。

「お前は、世界を救うために、一人を殺せるか？」

それは、誰しもが一度は考える、究極の選択。

「…い、いきなりどうしたんだよ、グレッグ…。本当に、何があつたのさ…？」

グレッグは、深い溜息を落とした。

「…いや、ちょっと哲学に浸ってただけさ。誰だって一度は考える

だろ、こういうの。…俺だって、たまには頭ぐらい使っさ」

そう言って首を振り、らしくなかったよな、と呟いてグレッグは立ち上がる。

「いい、天気だな。ルナちゃんも無事にこの天気を眺めて　　っ
て、そりゃ無理か。…ハハッ。…俺は何を言っただ…」

何か良くないモノに憑かれたような、ひどく憔悴しきった面持ちで一人ぐちるグレッグの様子に、ヴィクターはただ困惑するだけで言葉をかけることができなかった。

そんな彼の心中が顔に出ていたのだろう、グレッグはヴィクターの心配そうに自分を見つめる視線に気付き、わずかに微笑んだ。

「そんなに心配するなって。…俺はもう迷ったりはしない。…俺はもう、迷わないさ」

怪訝に顔を顰めるヴィクターの隣を、グレッグが足早に通り過ぎていく。

「さ、行こうぜ。　　王城まで、あともう少しだ」

「　　グレッグ！」

すぐにヴィクターが振り返る。

だが、グレッグの背中はずいぶん遠ざかっていく。

「まずはルナちゃんを助けてからだ。…そうだろ、ヴィクター」

「…グレッジ…」

素っ気ない親友の口調に返す言葉が見つからず、結局ヴィクターはそのまま村を後にする。

道中、どれほど問い質してみてもグレッジがその言葉の真意を言うことはなかったが、しかしそれでも彼が何か、ひどく辛い決意を固めたのだということは何となく気配で察せられた。

それは、満足に覚悟もできない憑の夜。

胎動する悪夢に呑み込まれた、鮮やかな不吉の産声。
。

第十九話　く　“月”　後編く（後書き）

次回は3月23日を予定しております。

〇〇〇將軍のカリスマタイムが……げふんげふん。

それでは皆さん、また次話でお会いしましょう。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0785f/>

～ 美喰紳士 ～

2010年10月15日20時07分発行